SHIZUOKA
静岡県文化プログラム

静岡県文化プログラム

2019年度 地域密着プログラムを対象とした試行的評価

2021 年 3 月

静岡県文化プログラム推進委員会

はじめに

オリンピック憲章には、「オリンピズムは、スポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するもの」と謳われ、開催都市が「文化プログラム」を開催するよう定められており、東京 2020 オリンピック・パラリンピックについても、2014 年秋の全国知事会議で川勝知事が提言し、日本全国で「文化プログラム」を展開する方針が採択されました。

こうした機運を受け、2016 年 5 月に設置した静岡県文化プログラム推進委員会では、東京 2020 オリンピック・パラリンピックを目標に『地域とアートが共鳴する』をテーマとして、本県が世界に誇る舞台芸術の担い手ＳＰＡＣによる「全国的プログラム」、推進委員会と県内の文化・芸術団体が連携して開催する「県域プログラム」、市町や団体等による「地域密着プログラム」の三つのカテゴリーで、併せて 1,000 以上の文化プログラムを認証し、展開しています。

この評価報告書は、2019 年度事業として推進委員会が採択した地域密着プログラム 19 事業と、その支援制度（プログラム・コーディネーターによる支援と財政的支援）を対象に、実験的に行なった評価をまとめたものです。

アーティストなどの文化の担い手が、まちづくり、福祉、教育、産業など社会の様々な分野の担い手と協働し、地域に根ざして活動することは、交流人口の拡大や社会課題の解決等の様々な成果を生み出す可能性を秘めています。

今回の評価を通じ、本プログラムの目的や価値をより多くの人々と共有するためのコミュニケーション手段として、また事業内容をより良くしていくための手段として、評価の果たす役割が大きいことが確認されました。この評価の試行により培った手法を 2021 年 1 月に設置されたアーツカウンシルしずおかへ継承し、さらに発展させたいと考えております。

報告書の構成は、Ⅰから Ⅴまでは 2019 年度採択 19 事業と支援制度を対象とした評価、Ⅵは 19 事業の概要紹介、Ⅶは 19 事業のうち 3 事業を対象に行った詳細評価となっています。新たな活動に対する評価の試みとして御一読いただければ幸いです。

2021 年 3 月
静岡県文化プログラム推進委員会
委員長　鈴木壽美子

— 目次 —

Ⅰ 評価の目的 5
Ⅱ 評価の対象 6
Ⅲ 評価実施体制 9
Ⅳ 評価の設計 9
1.評価の実施方針 9
2.評価の構成 9
Ⅴ 評価の手法及び結果 11
1.個別事業の簡易評価（淡い評価） 11
（1）評価の手法 11
（2）評価の結果 12
2.個別事業の詳細評価（濃い評価） 14
（1）評価の手法 14
（2）評価の結果 14
3.全体評価 16
（1）評価の手法 16
ア．セオリーオブチェンジの設定 16
イ．初期アウトカムの評価基準とルーブリックの設定 17
ウ．アンケート調査とヒアリング調査の実施 18
（2）評価の結果：評価項目１　プログラムの成果 18
ア．評価基準 1.1、2.1、3.1 の達成状況 18
イ．評価基準 1.2、2.2、3.2 の定性的検証 20
ウ．評価項目１：プログラムの成果の評価結果のまとめ 21
（3）評価の結果：評価項目２　手段の妥当性 21
ア．価値１：創造的な課題解決手段の提供 22
イ．価値２：社会関係資本の蓄積の促進 22
ウ．価値３：地域社会における変化の促進 23
エ．評価項目２：手段の妥当性の評価結果のまとめ 24
（4）評価の結果：評価項目３　支援制度の検証 25
ア．地域密着プログラムの特徴 25
イ．地域密着プログラムの課題と今後の方向性 26
（5）全体評価の結果のまとめ 29
（6）アーツカウンシルに向けて 30
Ⅵ 2019 年度地域密着プログラムのふりかえり 36
Ⅶ 個別事業の詳細評価（濃い評価）
・Scale Laboratory 76
・UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川 2020 114
・認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ　表現未満、プロジェクト 146

Ⅰ 評価の目的

文化・芸術分野の事業を対象とする評価は、事業の効果・成果の発現が一概に予期できない、生み出している価値が見えづらい特性があり、定量的な指標設定が難しいといわれている。

本評価は、2017 年度から実施してきた「静岡県文化プログラム」の「地域密着プログラム」を対象とし、困難な評価を試みた本県では初めての試行的な取組である。

評価の目的は、文化・芸術を通じた地域活性化等を目指す地域密着プログラムの成果を可視化し、同プログラムの四つの目的の達成や、取組に向けた三つのポイントを軸に、さらには、静岡県の文化･芸術の振興や地域の活性化等に貢献したかを検証し、その結果を基に、2021 年度から本格稼動するアーツカウンシルにおける効果的な支援制度の設計・運用に活用することである。

なお、本評価では事業を推進する中で新たな評価手法を模索するとともに、今後の文化・芸術分野の活動を対象とした評価方法についての提案をも試みたものである。

Ⅱ 評価の対象

静岡県では、東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムを実施するため、2015 年度に準備委員会を設け、「オリンピック文化プログラムに向けた文化資源調査」を実施した。2016 年度に静岡県文化プログラム推進委員会を設置して以降、全国的プログラム、県域プログラム、地域密着プログラムの 3 つのカテゴリーで文化プログラムを展開している。プログラムの具体的な目的として以下の 4 点を、取組のポイントとしてさらに 3 点を掲げている。

目的	◆ 県内の潜在的な文化資源、地域資源、人的資源などを目に見える形で示します ◆ 他者との違いに価値を見出し認め合う環境を育みます ◆ すべての人々が持つ創造性に基づく多様な生き方の可能性を提起します ◆ 文化・芸術を、地域的・社会的課題への対応に生かします

取組	◆ 多様性：地域、社会、時代、分野、国籍等における多様性を活かした展開 ◆ 多極性：県内各地の潜在的文化資源を生かした多極的な展開 ◆ 持続性：一過性でなく、2020 年以降を視野に入れた持続的な展開

【地域密着プログラム】

本評価の直接の対象は、2019 年度に支援を行った地域密着プログラム 19 事業とそれら事業を対象とした支援制度である。

地域密着プログラムは、2017 年度から 2019 年度の間、静岡県内の 25 の団体に対し延べ 44 事業の支援を行った。公募の際に、オリンピック・パラリンピックに向けた祝祭性の高い「文化芸術振興事業」と文化の力を地域や社会課題の対応に活用する「地域・社会課題対応型事業」の二つの枠を設け、案件の特徴に合わせて支援を行っている。

地域密着プログラムの特徴の一つは、単年度の支援プログラムでありながら、オリンピック年である 2020 年を一つの目途に、開始当初から複数年度にまたぐ支援を想定していたところにある。その背景には、文化・芸術事業においては、地域で「芽」が出るまでそれなりに時間がかかるということを前提に、先駆性の高い事業でなおかつポテンシャルが高ければ息長く支えていこうという意図がある。支援を申請する団体に対しては、申請年度の事業目標に限らず数年後までの事業ビジョンの記述を依頼し、審査に当たっても中長期的な観点から事業の継続性・発展性、波及効果等を検討した上で採択している。

【2019 年度採択　19 事業】

2019 年度の採択事業は下表のとおりである。

なお、2020 年 3 月に開催を予定していたプログラムについては、新型コロナウイルスの感染予防の観点から縮小又は中止したため、準備等に要した経費を精査した上で負担金を拠出した。

《 A　祝祭プログラム：７事業 》

実施団体	主な拠点	プログラムの名称	プログラムの概要	支援期間	2019 助成額（単位:千円）
特定非営利活動法人ＡＣＴ.ＪＴ静岡支部	伊東市	ふじのくに大田楽－ODORIKO プロジェクト 2020－【中止】	伊豆地域の伝統芸能団体が「大田楽」を披露するとともに、自転車競技を盛り上げるための自転車パレードを創作	2017～	1,420 千円
熱海未来音楽祭	熱海市	熱海未来音楽祭	熱海出身・在住のアーティストが中心となり、熱海の街を舞台にコンサートやパフォーマンス、ワークショップ等を実施	2019～	700 千円
一般社団法人熱海怪獣映画祭	熱海市	第二回熱海怪獣映画祭	怪獣映画とゆかりのある熱海で開催している映画祭。「怪獣の聖地熱海」のブランド化に向け二回目を開催	2019～	2,057 千円
しゃぎりフェスティバル実行委員会	三島市	第３回しゃぎりフェスティバル	三島の伝統芸能「しゃぎり」の永続的発展に向け、フェスティバルを中心とした各種活動を実施	2019～	916 千円
静岡市文化・クリエイティブ産業振興センター	静岡市	七間町ハプニング４【中止】	静岡市の七間町を舞台としたパフォーミングアーツ・フェスティバルの開催	2019～	1,604 千円
特定非営利活動法人クロスメディア しまだ	島田市川根本町	UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川 2020【縮小】	大井川鉄道の無人駅を核に、アーティストと住民との交流を密にしながら作品を制作・発表する地域芸術祭	2017～	5,000 千円
かけがわ茶エンナーレ実行委員会	掛川市	かけがわ茶エンナーレ 2020	３年に１度開催する「茶」と「アート」を融合させた芸術祭。地域資源の可能性を広げ価値を高めることで、観光・産業・シティプロモーションにつなぐ	2017～	5,000 千円

《 B　文化の力活用プログラム：12 事業 》

実施団体	主な拠点	プログラムの名称	プログラムの概要	支援期間	2019 助成額 (単位:千円)
松崎町のうたを育てる会	松崎町	FULL-SATO プロジェクト－松崎町と歌を育てる－	町と包括協定を結ぶ常葉大学教員と音楽家を中心に展開。完成した「うた」を活用してコミュニティを活性化	2019～	1,505 千円
Meets by Arts @ATAMI 実行委員会	熱海市	アーツ・プロジェクトスクール for ATAMI ART FAIR	地域に根付いた文化事業を実施する人材を育成するためのアートスクールを開催	2018～	1,483 千円
Scale Laboratory	函南町	となりのアーティストプロジェクト	気軽に芸術文化に親しみアーティストと関わる環境づくりを目的に、特定の拠点を持たず様々な団体と連携し、パフォーミングアーツ中心の事業を展開	2017～	1,988 千円
御殿場市東山旧岸邸	御殿場市	文化継承プロジェクト～伝統芸能と食文化～	旧岸邸の指定管理者が「伝統芸能講座」に食文化を連動させ、領域を横断した文化継承を考える機会を提供	2019	523 千円
富士の山ビエンナーレ実行委員会	富士市 富士宮市 静岡市	するがのくにの芸術祭　富士の山ビエンナーレ【縮小】	富士市、静岡市、富士宮市の 3 市を跨ぐ地域芸術祭。2020 年の本番年を前に、2019 年度はマイクロレジデンス事業等を実施	2017～	2,000 千円
企業組合くれば	島田市	WABISA VILLAGE SASAMA	2019 年 11 月に開催する第 5 回ささま国際陶芸祭とコラボし、廃校をスウェーデンパビリオンとして活用	2019～	800 千円
川根本町伝統文化保存会	川根本町	伝統文化交流会	「伝統文化伝承館」建設を契機に、町内の伝統文化団体が保存会を結成し、後継者育成や観光資源化に取り組む	2019～	1,463 千円
一般社団法人ふじのくに文教創造ネットワーク	掛川市	地域部活・掛川未来創造部 Palette【縮小】	複数の中学校の生徒が集まり、音楽、演劇、ダンスを中心に、アーティストを講師に迎え行う文化系部活動	2017～	1,750 千円
原泉アートプロジェクト	掛川市	原泉アートデイズ！2019 ～泉とともに～	掛川市最北部の中山間地に位置する原泉地区で地域住民の協力を得て実施するアーティストインレジデンス、現代アート展	2019～	1,200 千円
ふじのくにラボ	森町	ふじのくにラボ	舞楽祭事の食事を調査し再現することにより、若者や留学する学生等に地域の食文化を周知し、現代風アレンジなどを通じ継承に貢献	2019～	1,500 千円
社会福祉法人ひかりの園（浜松市根洗学園）	浜松市	わが家流子育てのすすめ	保育現場の技に焦点を当てた映像制作や、柔軟な子育て環境を各家庭につくることを目的としたワークショップ等を実施	2017～	1,591 千円
認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ	浜松市	表現未満、プロジェクト	ソーシャルインクルージョンを目指し、中心市街地を舞台とした文化祭や、市民を対象とした学びの場を提供	2017～	2,000 千円

Ⅲ 評価実施体制

今回の評価は、地域密着プログラム及び将来設置予定のアーツカウンシルの助成事業における自己評価手法を確立するための試行であり、評価手法自体を検討しながら、評価を行うという作業となった。

このため、プログラム評価の手法に関して研究実績のある一般財団法人ＣＳＯネットワーク（以下、「評価チーム」）に評価調査業務を委託し、プログラム・コーディネーター及び文化プログラム推進委員会事務局（以下、「事務局」）と常に協議を行いながら実施した。本報告書は、評価チームが作成した評価報告書をもとに、文化プログラム推進委員会事務局と評価チームが改めて公開用としてとりまとめたものである。

Ⅳ 評価の設計

1.評価の実施方針

（1）創造性と柔軟性の尊重

標準化された評価手法が確立されておらず、転用できる手段や指標が少ない文化・芸術分野における評価では、評価基準や指標づくりに十分時間を割き、実践で使っては修正をするという反復プロセスを通じて、その精度を上げていく過程が必要となる。そのため、評価の過程で、常に新たな手法を考えつつ、試行錯誤を繰り返すという、創造性・柔軟性を尊重する姿勢を重視した。

（2）対話・協働による発展的評価[1]

今回の評価は、発展的評価のアプローチを実施プロセスに導入し、従来の外部評価のように評価者が評価対象の事業者から独立して評価を行うのではなく、評価者が事業者に伴走しながら、評価の各工程において、意思形成をサポートし、ファシリテーターとしての役割を担う形を取った。具体的には、評価チームがプログラム・コーディネーター及び事務局と各局面において理念や方針について議論を重ね、協働して取り組むことにより、評価の精度と実現可能性を高める作業を進めた。

2.評価の構成

地域密着プログラムを以下３つの構成要素を通じてそれぞれの切り口から分析し、相互補完的に評価結果を抽出した。３つの構成要素とそれぞれの対象範囲を「図１：評価の全体像」で示す。

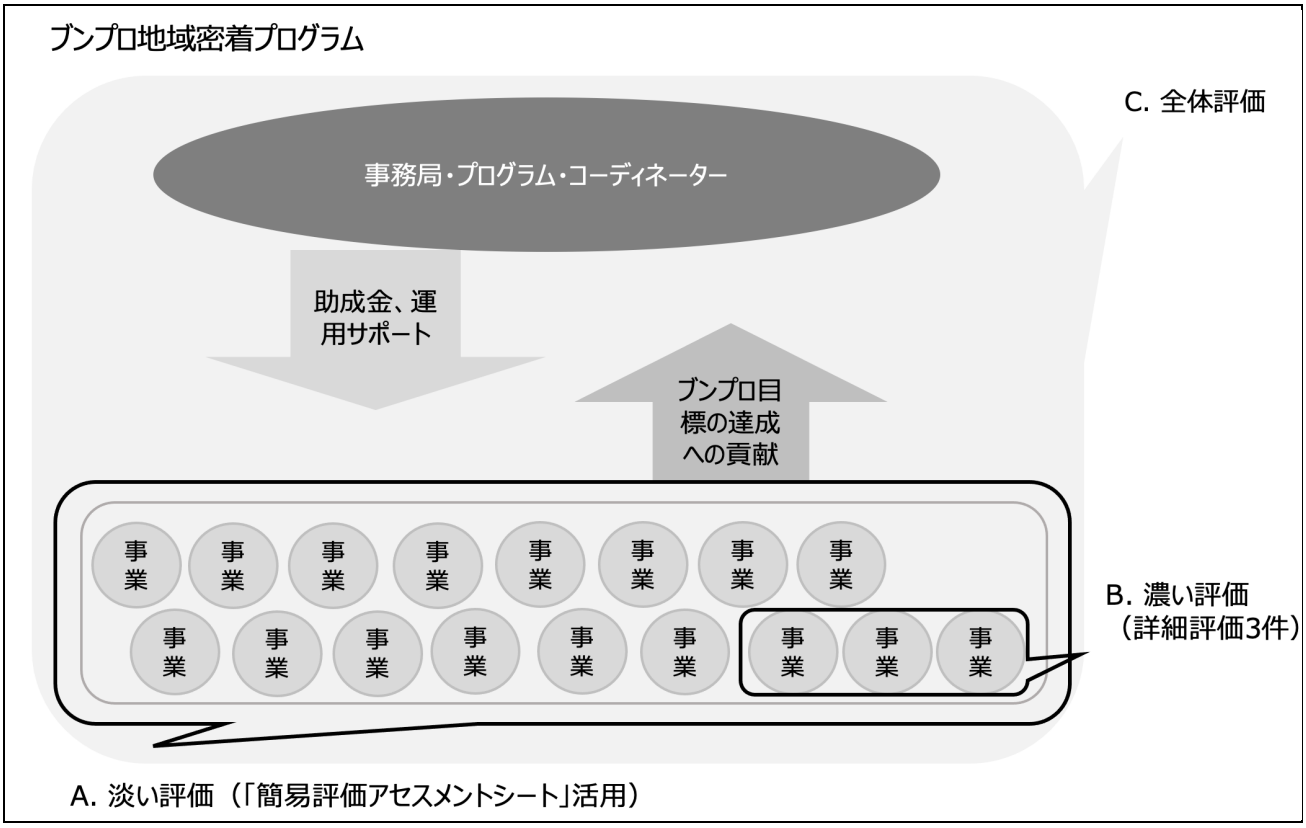
---

1 発展的評価（Developmental Evaluation）とは「実用重視の評価」を初めて唱え、評価関連著書も多数執筆しているマイケル・クィン・パットン（Michael Quinn Patton）が 1994 年より提唱してきた評価のアプローチであり、事業（や事象）が発展・変遷・様変わり（development）しているときにふさわしく、主に発展・変革を志向する評価といわれている。

＜評価の３つの構成要素＞

評価の構成要素	概　要	ねらい	主な評価者
1.個別事業の簡易評価（淡い評価）	「簡易評価アセスメントシート」を用いた個別評価（採択 19 事業）	団体が自らの事業を客観視し、事業価値の見極めや見直しを図る機会とする。	実施団体と担当プログラム・コーディネーターによる合同評価
2.個別事業の詳細評価（濃い評価）	詳細な事業効果の検証・評価（採択 19 事業中、３事業を抽出）	団体のみならず、事業に関わった人達が見出している事業の価値を明らかにする。	評価チーム
3.全体評価	上記１、２の評価結果に基づく地域密着プログラム全体の包括的評価	他の支援制度に対する地域密着プログラムの比較優位性や課題等を抽出し、支援制度の改善を図る。	評価チーム

図 1：評価の全体像



Ⅴ 評価の手法及び結果

1.個別事業の簡易評価（淡い評価）

（1）評価の手法

19 事業に対して、後述の「簡易評価アセスメントシート」を用いて評価を行った。
まず、採択団体が事業実施前に自己評価を行い（事前自己評価)、事業実施後に改めて自己評価(事後自己評価)を行うとともに、プログラム・コーディネーター（ＰＣ）が事後評価（事後ＰＣ評価）を実施した。

※「簡易評価アセスメントシート」
教育分野において、学習達成度など、単なる数値による評価が難しい事象に対して、複数の観点（項目）と尺度（達成度合いを測る基準）によるマトリクス表を設定し、達成度合いを評価する「ルーブリック」が用いられている。近年は、教育分野以外の評価においても、数値による指標化が難しい事象に対して、定性的な情報を使いながら、ルーブリックを構築し、事業の達成度合いを表す評価が注目されている。
今回の評価では、このルーブリックの手法を活用し、文化プログラムの目的・取組のポイント等に留意しつつ、下記の 6 つの評価基準による「簡易評価アセスメントシート」を作成し、個別事業の成果達成度を評価するともに、「全体評価」にも活用した。（添付資料 1 参照）

＜６つの評価基準＞

評価基準	評価基準の定義
①地域資源・社会課題への対応	事業が、文化芸術分野を超えて、文化活動を通じて地域資源や社会課題を顕在化し、地域の魅力・可能性や社会課題のとらえ方を発見/再発見/再定義したり、地域活性化の糸口を見つけるきっかけを提供したりしていること
②多様性と包摂性	全ての人が潜在的に表現者や文化の担い手であるということを前提に、対象事業に、関係する様々な人達の可能性を引き出す工夫・仕組みがみられること
③事業の波及効果	一過性のイベントに留まらず、2020 年以降を視野に入れた持続的な展開が期待されるような事業であること。事業の対象地域あるいは対象としているグループ以外での展開が期待できる事業であること
④革新性と適応性	既存の文化芸術活動や地域の社会課題のとらえ方などにおいて「現状」への疑問を掲げ、より良いアプローチを常に模索しながら変化していること。また、自団体の活動においても、現状維持に甘んじることなく、社会情勢を鑑み、客観視して改善・変化を生み出す姿勢が事業に反映されていること
⑤伝える力	団体がどのようなきっかけをもとに思いをもって、いかなる事業を目指しているのかを積極的に発信していること
⑥自立発展性	団体が、経済的、人材的、企画運営面などで自立している状態で事業を実施できているかを確認することにより、助成期間後の事業の自立発展性があること （ａ：財政面、ｂ：人材面、ｃ：企画運営面の３項目で評価）

（2）評価の結果

６つの評価基準ごとに 4 段階の達成度と照合して、それぞれ到達している団体数を下表のとおりとりまとめた。なお、表中の「事前評価」は、事業計画時に行なった団体と担当プログラム・コーディネーター（PC）による合同評価の結果を表し、「事後評価」は、団体と担当 PC が、年度末にそれぞれ行った評価の結果を併記している。

評価基準ごとの簡易評価（淡い評価）の結果からは、文化プログラムの目的である①地域資源の顕在化・社会課題への対応、②多様性と包摂性や、その広がりを表す③事業の波及効果、また、それぞれのプログラムの力とも言える④革新性と適応性や⑤伝える力については比較的多くの団体が高めの達成度合いを報告している一方、プログラムの取組ポイントの一つである持続的展開のための⑥自立発展性の項目において、概ね達成度合いが低く、事業の継続を図るためには助成金などを引き続き活用するなど、今後、アーツカウンシルにおいて課題解決の方策が必要であることが確認できた。

＜評価基準ごとの淡い評価の結果＞

評価基準	達成度合い	評価の分布		
		事前評価	事後自己評価	事後ＰＣ評価
① 地域資源・社会課題への対応	４：達成できている	4 団体	4 団体	2 団体
	３：ほぼ達成できている	7 団体	9 団体	10 団体
	２：ある程度達成できている	8 団体	4 団体	7 団体
	１：達成できていない	0 団体	2 団体	0 団体
	平均点	2.6	2.7	2.6
② 多様性と包摂性	４：達成できている	1 団体	5 団体	5 団体
	３：ほぼ達成できている	9 団体	6 団体	7 団体
	２：ある程度達成できている	7 団体	5 団体	5 団体
	１：達成できていない	2 団体	3 団体	2 団体
	平均点	2.3	2.6	2.6
③ 事業の波及効果	４：達成できている	3 団体	4 団体	3 団体
	３：ほぼ達成できている	4 団体	6 団体	7 団体
	２：ある程度達成できている	9 団体	7 団体	7 団体
	１：達成できていない	3 団体	2 団体	2 団体
	平均点	2.2	2.5	2.4
④ 革新性と適応性	４：達成できている	2 団体	4 団体	4 団体
	３：ほぼ達成できている	7 団体	9 団体	8 団体
	２：ある程度達成できている	10 団体	5 団体	6 団体
	１：達成できていない	0 団体	1 団体	1 団体
	平均点	2.5	2.7	2.6
⑤ 伝える力	４：達成できている	1 団体	3 団体	4 団体
	３：ほぼ達成できている	9 団体	9 団体	8 団体
	２：ある程度達成できている	7 団体	6 団体	6 団体
	１：達成できていない	2 団体	1 団体	1 団体
	平均点	2.2	2.7	2.6
⑥ 自立発展性	４：達成できている	2 団体	3 団体	2 団体
	３：ほぼ達成できている	3 団体	4 団体	5 団体
	２：ある程度達成できている	10 団体	11 団体	10 団体
	１：達成できていない	2 団体	1 団体	2 団体
	平均点	2.2	2.4	2.2
a 財政面	４：達成できている	1 団体	2 団体	1 団体
	３：ほぼ達成できている	4 団体	3 団体	4 団体
	２：ある程度達成できている	9 団体	9 団体	9 団体
	１：達成できていない	5 団体	5 団体	5 団体
	平均点	2.0	2.1	2.0
b 人材面	４：達成できている	2 団体	3 団体	3 団体
	３：ほぼ達成できている	7 団体	6 団体	6 団体
	２：ある程度達成できている	7 団体	8 団体	7 団体
	１：達成できていない	3 団体	2 団体	3 団体
	平均点	2.2	2.4	2.4
c 企画運営面	４：達成できている	2 団体	7 団体	6 団体
	３：ほぼ達成できている	9 団体	5 団体	5 団体
	２：ある程度達成できている	6 団体	5 団体	7 団体
	１：達成できていない	2 団体	2 団体	1 団体
	平均点	2.5	2.7	2.7

※ 評価に小数点以下の数値がある場合は、四捨五入により配分した

2.個別事業の詳細評価（濃い評価）

（1）評価の手法

2019 年度採択事業のうち、前年度から継続して支援を行ってきた 3 団体の事業を抽出し、それぞれが、地域においてどのような価値を生み出し、どのような事業効果が見られるかを、セオリーオブチェンジ、ルーブリックの作成、団体へのヒアリングなどを踏まえ、より詳細に検証した。

（2）評価の結果

濃い評価結果の詳細は本報告書 VII 以降に後述するが、対象事業がそれぞれの社会的課題に対し、文化・芸術的アプローチを生かしてどのような活動を行い、どのような成果を挙げているのかについて、以下概要をとりまとめた。

採択団体	Scale Laboratory（スケラボ）
社会課題	地域の魅力の低下、アートを体験する機会の減少
活動の概要	沼津市等県東部を中心に公演やワークショップ等、様々な形でアートを楽しむ機会を提供している。提供する機会は「観る」ことから「創る」ことまで幅広く、使われなくなった商業施設の一角やストリート、保育園や学校等、多様な場でアートを繰り広げている。
成果の概要	スケラボが最も多くの活動を行う沼津市は、県東部の拠点都市として発展し、かつては沼津駅前に百貨店が並び、文化の発信地にもなっていたが、近年は人口減少が続き、2014 年には駅前の全ての百貨店が閉店した。アーティストの育成を行ったり、地域に本格的なアートを頻繁に提供したりするアートセンターに類するような拠点は無いのが現状である。 このように多様なアートに触れる機会が限られている地域において、ジャンルにとらわれず、常に新しい表現を創り出すスケラボの活動は、子どもから本格的なアートを求める大人まで幅広い年代の観客を惹きつけている。 また、ワークショップやアウトリーチは参加者がアーティストと近い距離で、自ら主体的にアートにかかわり、参加者はアーティストのサポートのもと、自由な発想や表現を伸び伸びと表すことができるようになり、これにより自己効力感や生活の質を向上させることにつながっている。 さらに、商店街やショッピングモールなどで、パフォーマンスを展開することにより、賑わいがあり、幸せを感じる場所づくりを目指す事業者の想いの実現に寄与している。 スケラボが良質なアートを地域に提供していることに加えて、アーティストの活躍の場や商業施設などの文化・芸術資源の開発、ネットワークづくり等に貢献していることが明らかになった。

採択団体	クロスメディアしまだ
社会課題	地域の魅力の低下、地域資源の埋没
活動の概要	地域の重要なライフラインである大井川鐵道が産業の変化や人口減少といった要因から、利用者が減り、いくつかの駅が無人駅化していった状況に逆転の発想で目を向け、大井川鐵道の無人駅とういう「場」を支える地域住民の存在に魅力を見出し、地域内外に発信する「UNMANNED　無人駅の芸術祭」を実施している。
成果の概要	参加したアーティストは、地域住民を第一に考えて彼らの目線で作品を仕上げており、開催期間中は外からの芸術祭参加者よりも地域の人の鑑賞や利用が多かった作品も少なくなかった。また地域住民たちが自分たちで身にまとうことで完成する作品もあった。 アーティストの高い感性と、入念なリサーチ、または地域住民との信頼関係やコミュニケーションを積み重ねることにより作品が生まれており、それが住民に新しく地域を見る視点を提示している様子が多く見受けられた。 アートだからこそできる視点の提示が住民に対して多く提供され、アーティストたちが様々なアプローチで地域の魅力を発掘しているということが分かった。 このようなアートの仕掛けや観点によって、大井川鐵道沿線地域の魅力・価値の再発見につながっていると考えられる。

採択団体	クリエイティブサポート レッツ
社会課題	ソーシャル・インクルージョン（社会包摂）
活動の概要	障害福祉施設でありながら地域の文化創造発信拠点となることを目指し、浜松市の中心市街地に「たけし文化センター連尺町」を構える。 レッツが見出したコンセプト「表現未満､」は、特別な力のある人がつくる特別な行為ではなく、誰もが持っている「自分を表す方法としての表現」を大切にしていく文化を育てることを目的としている。 「表現未満､」プロジェクトでは、外部の人が気軽に福祉施設を訪れ、自由に滞在してもらう「観光」等、普段、障害のある人との交わりを持たない人達に、文化・芸術的アプローチを通じた多様な関わり方を用意している。
成果の概要	社会包摂を実現するためには、一人ひとりが違いを受け入れ、他者のありのままの存在を肯定するという価値観そのものを広めていく必要がある。 単に関わるだけでなく、障害のある人にはありのままでいることを保障し、訪問者には自由な過ごし方を保障することで、訪問者自らが障害のある人との関わり方を探求し、発見していく過程が垣間見えた。 もう一方で、レッツとつながりをもった福祉施設や小学校運営者へインタビューからは、レッツから、障害のある人への多様なアプローチを知り、その後、自身の施設で独自の企画を立ち上げたり、学校で既存の取り組みを発展させるなど、社会包摂の実践の場の裾野が広がっている様子がみられた。 一人ひとりがフラットに交わる機会を生み、自己と他者の間にある垣根に変化がみられたと同時に、地域での社会包摂の深みがみられた。

3.全体評価

全体評価においては、以下の３つの評価項目と評価設問を設定し、評価を実施した。

評価項目	評価設問
（1）プログラムの成果	目指す成果（アウトカム）はどの程度達成されたか？個々の団体は具体的にどのような地域課題の解決、あるいは、地域資源の再認識による新たな価値の創造を目指し、どのような変化を地域で引き起こしているか？
（2）手段の妥当性	文化・芸術を活用するアプローチには、どのような価値が認められるか？文化・芸術手法の活用がなくても同じような効果は見込めるか？
（3）支援制度の検証	地域密着プログラムの支援制度としての特徴（強みと弱み）は何か？その特徴（強みと弱み）は、どのようにプログラムの効果を促進・阻害したか？

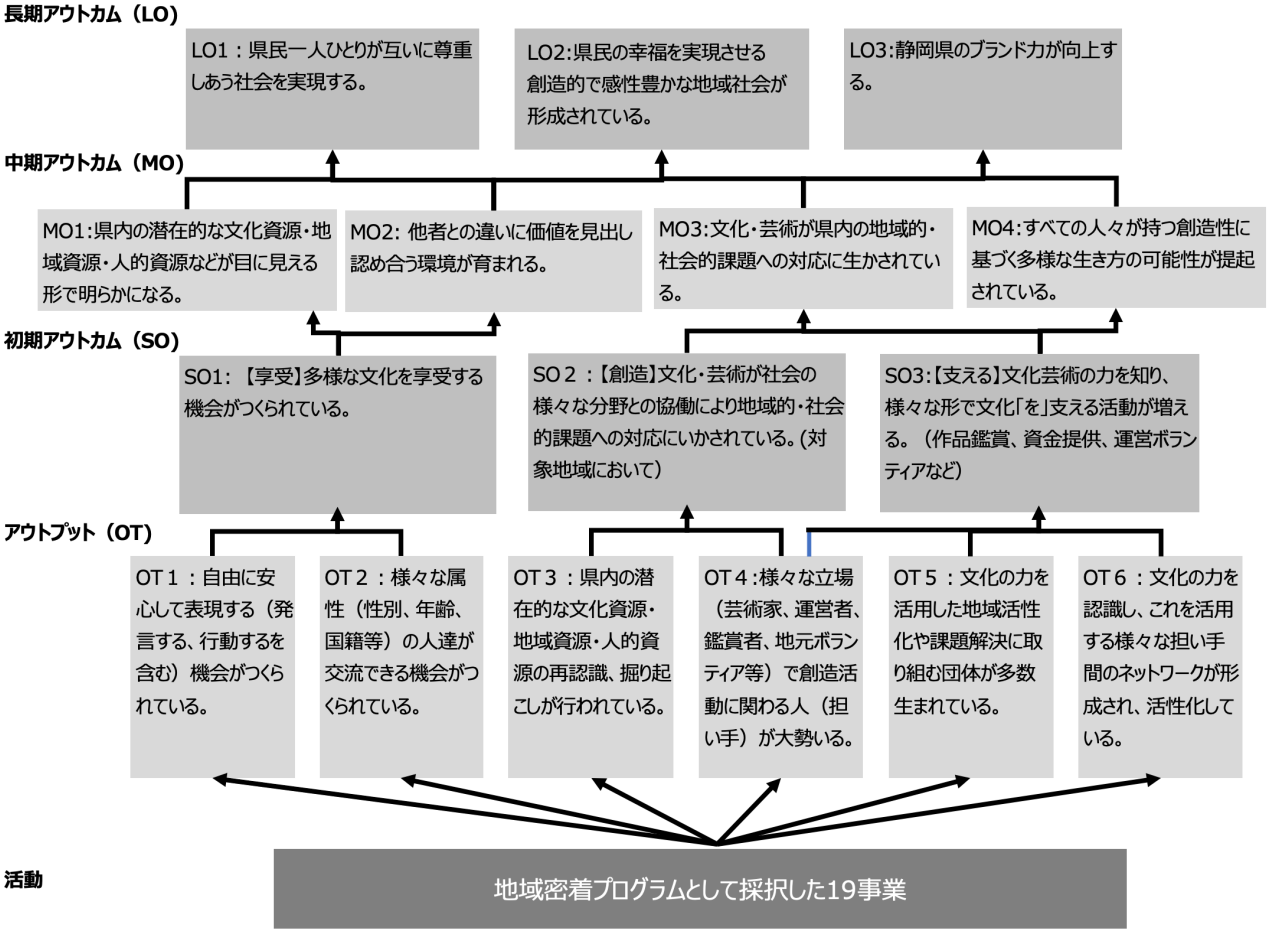
（1）評価の手法

ア. セオリーオブチェンジの設定

評価対象となるプログラムが何を目指し、そのためにどのような道筋をたどり、どのような成果（アウトカム）を発現させようとしているのかという意図（プログラム理論）を確認し、活動のアウトプット、初期アウトカム、中期アウトカム、長期アウトカムを、「成果発現までの地図」・「変化の道筋」（セオリーオブチェンジ）として明らかにすることにより、その成果を具体的に検証することとした。

下記図２は、プログラム・コーディネーターと事務局との間でワークショップを重ね整理した、地域密着プログラム全体のセオリーオブチェンジである。文化プログラムの４つの目標を中期アウトカムと設定し、そのうち特に地域密着プログラムの目指す具体的成果を初期アウトカムとして設定した。

図 2：地域密着プログラムのセオリーオブチェン



イ. 初期アウトカムの評価基準とルーブリックの設定

図２のセオリーオブチェンジのうち、今回は、特に３つの初期アウトカム（SO1、 SO2、SO3）の達成度合いに焦点を当て、達成度の判断を行う上で以下のような評価基準を設けた。また、その達成度の測定のために、評価基準 1.1、1.2、1.3 においては、(2) アのとおり初期アウトカムのルーブリックを設定し、客観的に価値判断を行えるようにした。

初期アウトカム	初期アウトカムごとの評価基準
1.多様な文化を享受する機会がつくられている	評価基準 1.1 各事業の鑑賞者数：事業計画時の見込みと実績値の比較
	評価基準 1.2 より多くの人が「多様な文化を享受する機会」に参加しやすい工夫の事例の有無
2.文化･芸術が社会の様々な分野との協働により地域的･社会的課題への対応に生かされている	評価基準 2.1 簡易評価（淡い評価）評価基準①「地域資源・社会課題への対応」の達成度
	評価基準 2.2 文化・芸術が社会の様々な分野との協働により地域的・社会的課題への対応に生かされている事例の有無
3.文化・芸術の力を知り、様々な形で文化を支える活動が増える（作品鑑賞、資金提供、運営ボランティア等）	評価基準 3.1 各事業を支える関係者数：事業計画時の見込みと実績値の比較
	評価基準 3.2 「様々な形で文化を支える活動」が広がっている事例の有無

ウ．アンケート調査とヒアリング調査の実施

ルーブリックによる評価判断を補完するために、団体の成果の発現や地域密着プログラムの支援制度についての強み・弱みについての情報を収集するために、採択団体を対象としたアンケート調査(有効回答数 19 件)と複数年度継続して採択された団体を中心にヒアリング調査(6 件)を実施した。

（2）評価の結果：評価項目１　プログラムの成果

ア．評価基準 1.1、2.1、3.1 の達成状況

① ルーブリックによる成果の達成度の検証

評価基準のうち、定量的データを入手できる評価基準 1.1、2.1、3.1 については、ルーブリック（評価基準と尺度によるマトリクス表）を設定し、地域密着プログラムとしての成果の達成度合いの判断を行った。

＜初期アウトカムのルーブリック＞

初期アウトカム	評価基準	①達成できていない状態	②ある程度達成できている状態	③ほぼ達成できている状態	④成功している状態（達成できている状態）
1.多様な文化を享受する機会がつくられている	**評価基準 1.1：各事業の鑑賞者数：事業計画時の見込みと実績値の比較**	事業計画時と比較して、鑑賞者数が増えた団体数が30%未満	事業計画時と比較して、鑑賞者数が増えた団体数が30%以上	事業計画時と比較して、鑑賞者数が増えた団体数が60%以上	事業計画時と比較して、鑑賞者数が増えた団体数が80%以上
2.文化・芸術が社会の様々な分野との協働により地域的・社会的課題への対応に生かされている	**評価基準 2.1：簡易評価（淡い評価）評価基準①「地域資源・社会課題への対応」の達成度**	簡易アセスメントシートの評価点「３」以上の団体が30% 未満	簡易アセスメントシートの評価点「３」以上の団体が30%以上	簡易アセスメントシートの評価点「３」以上の団体が60%以上	簡易アセスメントシートの評価点「３」以上の団体が80%以上
3.文化・芸術の力を知り、様々な形で文化を支える活動が増える	**評価基準 3.1：各事業を支える関係者数：事業計画時の見込みと実績値の比較**	事業計画時と比較して、関係者数が増えた団体数が30%未満	事業計画時と比較して、関係者数が増えた団体数が30%以上	事業計画時と比較して、関係者数が増えた団体数が60%以上	事業計画時と比較して、関係者数が増えた団体数が80%以上

＜初期アウトカム評価基準の達成度合い＞

初期アウトカム	2019 年度の状況	達成度の評価
1.多様な文化を享受する機会がつくられている	全 19 事業による年間鑑賞者数の推計は、延べ４万６千人であり、前年度と比較して鑑賞者数が増加した事業は 14 団体（74%）であった。	③ほぼ達成できている状態
2.文化・芸術が社会の様々な分野との協働により地域的・社会的課題への対応に生かされている	全 19 事業の簡易アセスメントシートによる個別評価（淡い評価）において、「３」以上の水準を達成している事業は、9 事業（47%）であった。	②ある程度達成できている状態
3.文化・芸術の力を知り、様々な形で文化を支える活動が増える	全 19 事業の年間関係者数の推計は、延べ 4,600 人で、事前評価時と比較して関係者数が増えた事業は 14 団体（74%）であった。	③ほぼ達成できている状態

② アンケート調査によるアウトプットの達成度の検証

上記ルーブリックに加え、３つの初期アウトカムの達成度を補完的に検証するために、それを導く図 2 セオリーオブチェンジのアウトプットの達成度を全 19 団体へのアンケート調査の結果から検証する試みを行った。

アンケート調査では、「各アウトプットに団体の活動がどの程度貢献したか」を設問として、５段階（「大変貢献した」「かなり貢献した」「ある程度貢献した」「あまり貢献していない」「全く貢献し

ていない」「わからない」）で自己評価をしてもらっている。そのうち、「大変貢献した」「かなり貢献した」の割合でアウトプットの達成度を検証した。

図 3：セオリーオブチェンジの各アウトプットと団体へのアンケート結果（n=19）

初期アウトカム	アウトプット	■5. 大変貢献した ■4. かなり貢献した ■3. ある程度貢献した ■2. あまり貢献してない ■1. 全く貢献してない ■6. わからない	＊「大変貢献した」「かなり貢献した」と回答した団体数 計
1.多様な文化を享受する機会がつくられている 1	1.自由に安心して表現する（発言する、行動するを含む）機会がつくられている	5 8 3 3 0	13 （68.4%）
	2.様々な属性（性別、年齢、国籍等）の人達が交流できる機会がつくられている	6 6 4 2 0 1	12 （63.1%）
2.文化・芸術が社会の様々な分野との協働により地域的・社会的課題への対応に生かされている	3.県内の潜在的な文化資源・地域資源・人的資源の再認識、掘り起こしが行われている	5 8 5 1 0	13 （68.4%）
	4.様々な立場（芸術家、運営者、鑑賞者、地元ボランティア等）で創造活動に関わる人（担い手）が大勢いる	3 7 6 3 0	10 （52.6%）
3.文化・芸術の力を知り、様々な形で文化を支える活動が増える（作品鑑賞、資金提供、運営ボランティア等）	5.文化の力を活用した地域活性化や課題解決に取り組む団体が多数生まれている	3 9 4 3 0	12 （63.1%）
	6.文化の力を認識し、これを活用する様々な担い手間のネットワークが形成され、活性化している	1 7 7 4 0 0 10 20	8 （42.1%）

上記図 3 からも、アウトプット 6 以外の全てのアウトプットにおいては「大変貢献した」「かなり貢献した」と回答した団体の割合は半数を越え、逆に「あまり貢献していない」「全く貢献していない」と回答した団体数は最小限にとどまっている。

イ. 評価基準 1.2、2.2、3.2 の定性的検証

評価基準 1.2、2.2、3.2 については、３事業を抽出し行った詳細評価（濃い評価）や各団体に対するヒアリング調査において、以下のような初期アウトカムごとの成果の達成度について定性的な事例が確認できた。

初期アウトカム	評価基準	定性的な事例
1 多様な文化を享受する機会がつくられている	**評価基準 1.2：より多くの人が「多様な文化を享受する機会に」に参加しやすい工夫の事例の有無**	・「根洗学園」では、普段アートと接する機会の少ない療育プログラムに通う乳幼児とその家族、福祉施設職員にアーティストと触れ合う機会を創出した ・「クリエイティブサポートレッツ」では、問題行動と呼ばれる行為も「自分を表す方法としての表現」として「表現未満、」のアートと捉えている
2 文化・芸術が社会の様々な分野との協働により地域的・社会的課題への対応に生かされている	**評価基準 2.2:濃い評価等を通じて得た「文化・芸術が社会の様々な分野との協働により地域的・社会的課題への対応にいかされている」事例の有無**	・「クリエイティブサポートレッツ」では、社会課題「ソーシャルインクルージョン」に対して、普段障害のある人と交わりを持たない人に、文化・芸術的アプローチを通じて多様な関わり方を発見する機会を用意するなど、社会包摂の実践の場の裾野が広がっている様子がみられた ・「スケラボ」では、商店街やショッピングモールなど、普段は生活の場、モノとお金が交換される場にスケラボがパフォーマンスを展開することで、賑わいのある場所、幸せを感じる場所にしたいという事業者の想いを実現する一助になった
3 文化・芸術の力を知り、様々な形で文化を支える活動が増える（作品鑑賞、資金提供、運営ボランティア等）	**評価基準 3.2:より多くの人が「様々な形で文化『を』支える活動」が広がっている事例の有無**	・「クロスメディアしまだ」では、主催者がアーティストと地域住民が交流し、関係を深められるような工夫を行うことによって、“妖精たち”と呼ばれる地域の住民約 20 名が、芸術祭の運営に欠かせない地域のサポーターとなり、アーティストへの支援や作品制作への協力などを行っている。 ・「ふじのくに文教創造ネットワーク」では、教育委員会のサポートが徐々に厚くなっており、新入生の新部員募集の際に「地域部活パレット」を加えるよう学校現場に伝達するなど、部員候補の増加に貢献している。

ウ. 評価項目１：プログラムの成果の評価結果のまとめ

初期アウトカムのルーブリックを活用した評価（評価基準 1.1、2.1、3.1）では、設定された３つの初期アウトカムに対して、２つが「③ほぼ達成している状態」、１つが「②ある程度達成している状態」であり、そのアウトプットに関する団体の自己評価や３つのプログラムの詳細評価による定性的な実績（評価基準 1.2、2.2、3.2）においても、それを裏付ける評価が得られた。

これらの結果から、設定された３つの初期アウトカムに対して、総じて「ほぼ達成できている状態」であり、全体として、地域密着プログラムとして目指した状態に近づきつつあると評価できる。

（3）評価の結果：評価項目２　手段の妥当性

「地域密着プログラム」では、静岡県文化プログラムのテーマである「地域とアートが共鳴する」のとおり、文化・芸術の社会的役割に着眼している。文化・芸術そのものの振興を目的に実施される文化プログラムも多い中で、そこにとどまらず、支援する文化・芸術事業が他分野（観光、ものづくり、産業、福祉、医療、教育、子育て、ソーシャル・インクルージョン、地域振興・まちづくり、防

災・災害復興等）との協働を通じて、いかに地域あるいは社会の課題解決や地域資源の活用において新たな価値を創造できるかを重要視している。
このような背景を踏まえ、地域密着プログラムの文脈においての手段の妥当性、即ち地域的・社会的課題解決や地域資源の活用のために事業を支援するというアプローチの価値は何だったのか改めて検証した。以下、３つの価値が浮き彫りとなった。

ア. 価値１：創造的な課題解決手段の提供

まず、１点目として、文化・芸術事業は、既存の課題解決手段が存在しない、あるいは手詰まりな状況の下で、以下のとおり、新たな創造的な視点を提供していることが認められる。

・「かけがわ茶エンナーレ」においては、観光を含めた地域振興・お茶産業の振興の方法において次の手が見えなかったときに、芸術祭としての茶エンナーレを開催し始めてから、地域の観光地やお茶文化の価値がアーティストを介することによって再発見され、市民全般の文化への関心度も高まっていった。
・「熱海ふれあい作業所」※や「クリエイティブサポートレッツ」においては、障がい福祉制度の中の障がい者就労施設という役割を担いながら、福祉の制度内ではかなえられない利用者の個々の表現や、個人の夢を支えることを、文化・芸術事業で補完することで実現させた。
・「ふじのくに文教創造ネットワーク」の地域部活事業においては、公立中学校での文化系部活の選択肢が限定的であるという教育制度内の課題に対し、地域レベルで部活動を展開するという解決策を実現させ、全国に先駆けて新たな文化系部活動の在り方を提示している。
・松崎町「絲」コンセプト※は、町内の人口減少と少子高齢化の流れを食い止め、産業振興や観光業を推進するための好循環をつくるための「キッカケ」も見えないことが地域課題であった。分かりやすい解決策が見えない中、地域に存在する様々な資源を文化・芸術的視点から発掘していくことによって新たな魅力を地域住民が発見していく過程を事業化した。
・根洗学園では療育の現場を知ってもらうための試みとして、俳優達に学園の日常を演じてもらい映像を制作。俳優たちの演技を通じ、保育士等の技術の高さが可視化され、現場の誇りの醸成にもつながった。

※2019 年度以前の採択団体による事業であるが、特に創造性の高い課題解決手段を提案していたのでここで例示した。

イ. 価値２：社会関係資本の蓄積の促進

２点目として、文化・芸術事業が、「信頼」や「ネットワーク」といった社会関係資本の蓄積を促進させていることが挙げられる。
文化・芸術的活動には、アートを基点にして、多様な属性の人々を同じ「体験」でつなぎ、対話を促進させる触媒となる点が認められる。また、アーティストによる「創造的な視点」を導入することによって、それを鑑賞する側の視野が広がり、他者への寛容性が高まるということも期待される。

具体的な成果は、以下のとおりである。

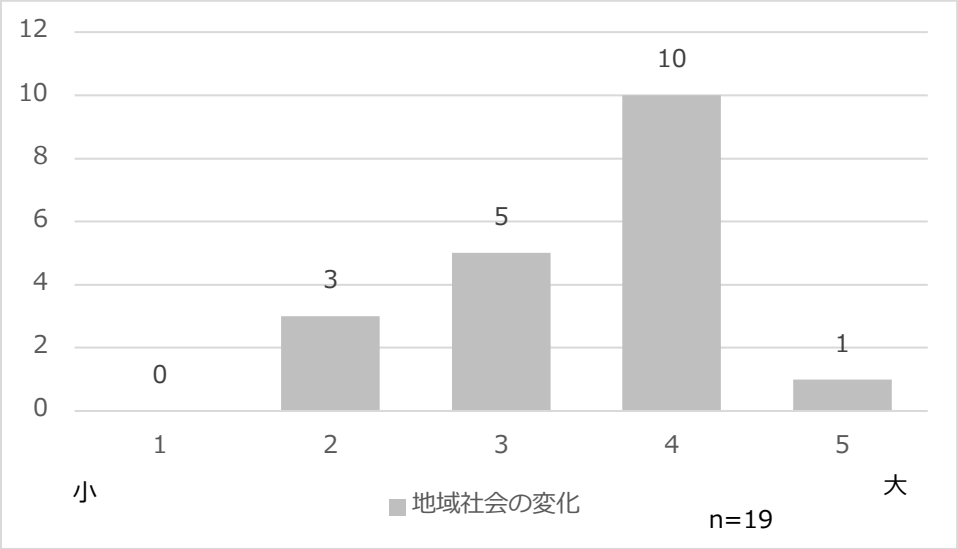
・「クリエイティブサポートレッツ」においては、福祉の世界にとどまらず、文化・芸術的アプローチを取ったことによって、広く門戸を開け、地域内外の様々な領域の関係者と強いネットワークを構築し、社会包摂に向けての具体的な一手として提示することができた。
・「富士の山ビエンナーレ」においては、平成の合併で分断されてしまったエリアを中心に活動しており、地縁や住民間の関係性を保つことを目指し、現代アートによる芸術祭を開催することにより、地域間の連携強化や地域資源（歴史建造物や観光地）の再活用に成功した。
・「Scale Laboratory（スケラボ）」においては、この活動がなければ出会う事のなかった人たちがつながることで、地域に、アーティストやアートに関心の高い人たちのコミュニティが形成され、さらにその周辺の人にもつながりが拡大している。スケラボが創造する価値観が、企画への参加や協力を通じて多様な人たちにも共有されている。

ウ. 価値３：地域社会における変化の促進

最後に、文化・芸術事業は全ての人に均一に変化をもたらすことはできないが、そこに本質的価値を感じた人への影響は大きく、変化をもたらしやすい点がある。

「地域密着プログラム」の採択団体に、活動する地域社会で事業実施をきっかけに変化が起きたかという質問でアンケート調査をしたところ、多くの団体がそれぞれの地域である程度の変化が起きたと回答した。

図４：アンケート結果からみえる地域社会における変化（ｎ=19）



上記図４のような地域社会の変化の具体的な変化の内容についての定性分析を行ったところ以下のような内容が挙げられた。

① 住民の創造活動への参加度が増えた

プログラムへの参加者の輪が広がった、人材が入れ替わりながら違う層の参加者が増えた　など

② 住民間の新しいコミュニティの形成が見られた

活動拠点ごとに閉じていた活動が横に広がった、活動を重ねることで事業に関係ないところで住民同士のつながりが生まれた　など

③ 新たな地域のステークホルダーの参画が生まれた

今まで関係性が薄かった行政や地元企業、有力者が団体の活動に関心と理解を持って協力をしてくれるようになった　など

もう少し詳しく地域での変化の起こり方をみるために、クロスメディアしまだの UNMANNED 無人駅の芸術祭の事例を濃い評価結果をもとに表す。

クロスメディアしまだ：UNMANNED　無人駅の芸術祭を通じての地域の変化

2019 年度で無人駅芸術祭の 3 回目の開催となる。2017 年度のこの事業が始まる前は、地域の人たちの中で文化・芸術に関わりを持っていなかった人々が大多数だった。その中で、特に地域での変化の中核となったのが、“妖精”と呼ばれている芸術祭の運営サポート全般を行う地域の人々だった。彼らの意識や価値観の変化は大きく、3 年たった現在、“妖精”たちが自らのアート論を語るようになる例も多くあったという。またアーティストの制作活動をサポートしたりして、「地域住民の協力なしでは作品制作や作品の着想を得ることすら出来なかった」と語るアーティストもいた。このような地域の変化を推進している“妖精”たちは 3 年目に 20 名まで増えた。この数は地域の全人口に対しても影響力のある人数であり、彼らの口コミにより地域内で更に影響を受ける人たち（家族やご近所など）も多い。また“妖精”たちの人数も口コミなどで年々増えており、さらに地域の中には“妖精”の予備軍も多くいるという。 “妖精”のような人たちが出てくるエリアも増えたという。

もう一つの地域の変化として、地域住民がおもてなしの心を持って外部者とコミュニケーションが取るようになった。特に主催者からの報告によると、芸術祭の参加者に対して地域住民は、お茶をもてなしたり、無人駅にお客さんが電車で到着すると旗を持って出迎えたり、進んで自分の敷地の駐車場を貸し出す住民が現れたり、地域住民が芸術祭とは関係のないお地蔵さんを勝手に設置したり、本数の少ない電車での移動が不便だからといって率先して車で送迎する住民まで現れたという。地域住民によるおもてなしの方法は様々であるが、芸術祭に対し「自分事」として主体性が高まっている現れであり、芸術祭そのものが地域に支えられながら継続できる基盤が整ってきた。

エ.評価項目２：手段の妥当性の評価結果のまとめ

以上、創造的な課題解決手段の提供、社会関係資本の充実、地域社会での変化の推進の 3 つの観点（価値）から、「地域密着プログラム」における文化・芸術の力を活用するアプローチは、手段としての有効性が高いことが確認できた。

（4）評価の結果：評価項目３　支援制度の検証

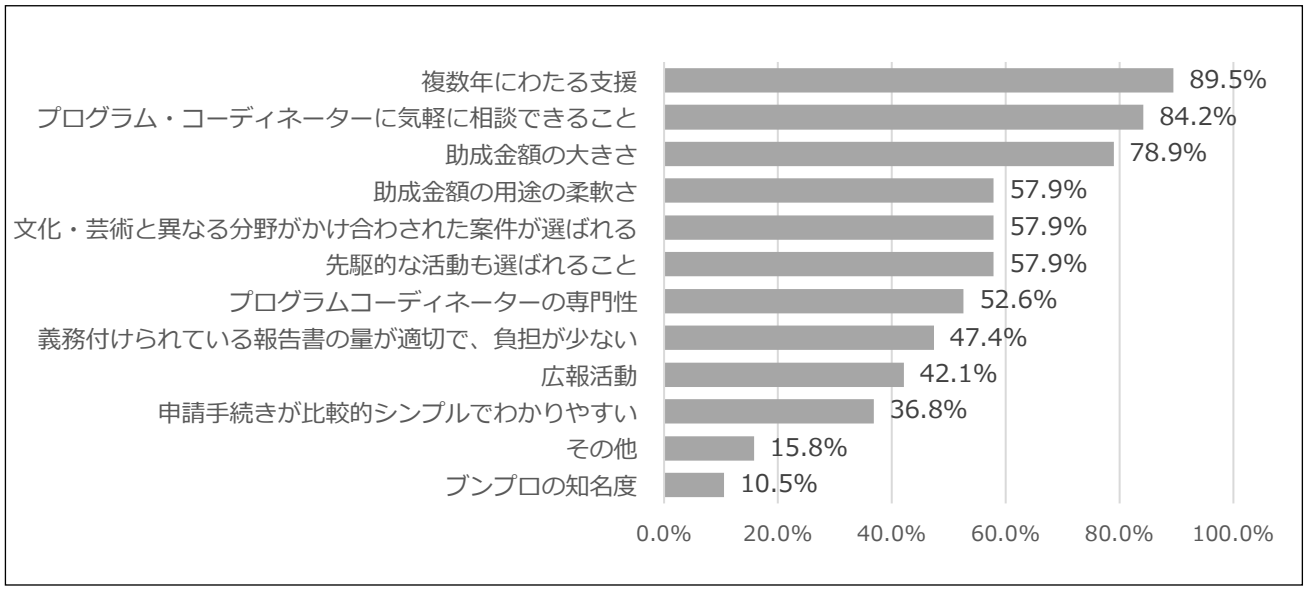
ア. 地域密着プログラムの特徴

「地域密着プログラム」の支援制度としての特徴は、事業継続を前提とした助成制度とプログラム・コーディネーター等による伴走支援である。

（1）ウで述べた 19 団体へのアンケート調査において、各団体の成果達成度合いに対して、地域密着プログラムによる支援がどの程度有用だったか質問した。
結果は、「助成金の支給」に対して 18 団体（94.7%）が、「プログラム・コーディネーターによる事業に関する提案やサポート」に対して 15 団体（78.9%）が「大変役に立った」「ある程度役に立った」と回答している。
地域密着プログラムの主たる手段が、成果実現に役立ったと高く評価されていることが判明した。

更に、具体的な強みについて、同アンケート調査で、他の助成プログラムとの比較のもとに、地域密着プログラムの比較優位性を採択団体に質問したところ、以下の結果となった。

図 5：地域密着プログラムの比較優位性（複数回答、n=19）



i. 「複数年にわたる支援」（89.5%）
ii. 「プログラム・コーディネーターに気軽に相談できること」（84.2%）
iii.「助成金額の大きさ」（78.9%）

これらの要素は、地域密着プログラムを特徴付けるものでもあり、プログラム・コーディネーターによる伴走支援、事業継続を前提とした助成制度など、意図的に支援制度に盛り込んだ指針が、採択団体においてもきちんと価値が見出され、高く評価されていることが分かった。団体側のニーズを鑑みて、地域密着プログラムの支援制度の適切性は高いと結論づけられる。

前述のアンケートの結果を踏まえ、地域密着プログラムの強みを少し俯瞰して探ると以下、２点が強みとして浮き彫りとなった。

① プログラム・コーディネーターの役割

地域密着プログラムは、社会の様々な分野の担い手が実施する取組を支援する制度であり、担い手である団体側にアートの専門性を求めていない。むしろ、事業のきっかけとなったアイデアや視点の「先駆性」、文化･芸術の力を生かした「創造性」などを大切にしており[2]、特に審査時において案件を採択する上での重要な視点である。もう一方で、これは文化・芸術分野に限らないが、先駆的あるいは創造的な試みは、事業内容や安定した実施体制を構築するのが難しいという矛盾も抱えている。既存の枠組みにとらわれない先駆的で創造的な活動であればあるほど、その価値の言語化・具体化が困難であったり、実践に試行錯誤が伴ったり、関係者の理解や協力が進まなかったり、実際の効果発現まで時間がかかるうえ、いつ発現するかの予測さえ立てにくいからである。即ち「事業の有効性」と支援制度の価値観の中心にある「創造性」や「先駆性」を両立させることは容易ではない。しかしこの両立を実現させることこそが事業の社会的価値を高め、ひいては地域密着プログラムのアウトカムの達成を促進させることとなり、この実現に向けて支援していくのが、プログラム・コーディネーターの大切な役割である。

② 複数年度支援を想定した制度設計

地域密着プログラムのもう一つの強みとして挙げられるのは、複数年度の支援を想定した支援制度の設計にある。毎年の募集要項のプログラムのねらいにも掲げているとおり、「これまでは実現が難しかったプログラムに、長期的な視野をもって取り組む機会」としてとらえられるよう応募団体にアピールしている。このような姿勢の背景には、先駆性・創造性が高いプログラムは、事業としての芽が出て実際成果が可視化されるところこまでいくのには長期的な取組が必要という認識と、そのような事業を支援することに価値をおいている設計側の意図が感じられる。団体としても、単年度ごとにまとまった活動群ではなく、年度を越えた中長期的展望に基づく事業計画を立てることで、新しいことを試したり、実施手段を工夫したり、仲間を集ったりする余力も生まれ事業効果を促進させる可能性が高まる。

イ. 地域密着プログラムの課題と今後の方向性

地域密着プログラムの評価調査の一環として、アーツカウンシル設置に向けた支援制度の改善点を把握するために、(1) ウのアンケート調査・ヒアリング調査から採択団体の期待・ニーズを抽出し、課題の整理を実施した。

また、評価調査においては補足的になるが、それら課題を解決するための方向性について、プログラム・コーディネーターの意見などを集約してまとめを行なった。今後の方向性の取りまとめは、評価チームは介在せず、事務局が主導して、適宜コーディネーターの意見を聞きながらまとめを行なった。

---

2 募集要項には「既存事業ではなく新たな取組みであること（2017 年度、2018 年度）」と明記し、「先進性」「独創性」を選考の視点として挙げている。

支援制度における課題を団体からの期待・ニーズの観点から、以下のようにまとめた。

支援制度の課題 （団体からの期待・ニーズ）	助成先団体からの意見の例
（1）応募団体の事業ステージにあわせた支援メニューの拡張	・自己資金のない団体は応募しにくく、実績のある団体と比較審査されることに不安を感じる。スタートアップを支えるような支援枠があると良い。 ・単年度内に募集・採択から実施までが行なわれる場合、事業実施期間は実質９ヶ月程度に限られてしまう。事業計画は、本番の半年から１年前には立て、関係者とのスケジュール調整を行なうことから、複数年の助成制度もあると有難い。
（2）団体同士のネットワーキング機能の充実	・採択されたことにより団体間の横のつながりができたため、団体内で閉鎖的にならず、他の団体から情報やアドバイスをしてもらったり、相乗効果でより良いものを目指すことが出来た。 ・採択されたことで社会的信用が高まり、関係者への協力が得られやすくなった。 ・地域を巻き込み、地域に根付いた事業とすることは一団体だけでは達成が難しく、市町の協力が必要である。
（3）プログラム・コーディネーターによる専門的な支援	・各団体のレベルに合わせたアドバイスをしてもらえるため、団体の企画・実施能力の向上につながり大変心強い。 ・活動と並走してくれるコーディネーターや他の採択団体との交流により活動の視点をより高く持つことができた。 ・コーディネーターの存在は、静岡県文化プログラムの特徴でもあり、効果も大きいと思う。 ・担当する団体に関わらず専門分野を活かした支援もしてもらえると良い。
（4）広報・情報発信に関する支援	・活動を推進しながら情報発信をすることに困難さを感じている。 ・広報で成功した団体の事例等を紹介するなどの支援があると良い。 ・先進事例となり得るプログラムについては、支援の取組による貢献度が高いことを内外に発信してほしい。
（5）長期的な成果を生み出すための支援制度の充実	・採択されたプログラムが、５年、10 年、20 年後にどのように地域の中に根付き、文化の力で地域が抱える諸課題に寄与しているかを継続的に観察し、必要に応じた支援などをしてほしい。 ・試行錯誤をしながらも継続していける環境づくりと試行錯誤に付き合える場・セクションを設置してほしい。 ・支援制度をより良いものにするため、団体の率直な意見を伝える仕組みがあると良い。

団体からの期待・ニーズに対して、それに応えるための課題を、以下のように整理した。

支援制度の課題 （団体からの期待・ニーズ）	課題の解決のための新たな方向性
（1）応募団体の事業ステージに合わせた支援メニューの充実	県内の団体ニーズに合わせた柔軟な支援メニューの設計と運用を行うこと
（2）団体同士のネットワーキング機能の充実	情報共有やそれによる活動の相乗効果を生み出すためのコーディネートを行うこと
（3）プログラム・コーディネーターによる専門的な支援	プログラム・コーディネーターによる伴走支援を行い、団体の活動状況のモニタリングや、団体の知見を補うこと
（4）広報・情報発信に関する支援	団体に対して、広報に関する体系的な知見の提供やサポートを行うこと
（5）長期的な成果を生み出すための支援制度の充実	長期的な成果を定義して、地域課題の把握や相談対応のための環境整備を行うこと

上記で整理した課題の解決のための方向性をまとめると、以下のようになる。

① 県内の団体ニーズに合わせた柔軟な支援メニューの設計と運用

応募団体の事業ステージにあわせた支援メニューの充実が求められており、例えば事業のスタートアップを支援する少額の助成制度の設計等を工夫していく必要があると考える。2020 年度の地域密着プログラムからは、前年度内に募集・採択が行なわれるようなプロセスの改善を図り、４月から翌年３月までの事業実施が可能となった。今後も、団体ニーズに合わせた柔軟で効果的な助成制度を検討する必要がある。

同時に、19 事業を対象とした簡易評価から読み取れることは、資金面や人材面の自立化を促進するための、運営や人材育成についての支援の必要性である。

② 情報共有やそれによる活動の相乗効果を生み出すためのコーディネートを行うこと

広報や資金調達など、各団体に共通する課題について情報交換を行ったり、知見を共有することは団体にとって非常に大切であるため、団体間交流を促進する機会をできる限り設ける必要がある。また、支援制度は、まちづくり、福祉、教育、観光、産業など、社会の様々な分野の担い手による文化・芸術の力を活用した創造的な取組を促進し、地域の活性化を目指すものであるから、行政においても文化行政所管課のみならず、関係課の理解や協力が求められる。アーツカウンシルにおいても、市町や企業等との接点を設け、連携の輪を広げていくことが必要である。

③ プログラム・コーディネーターによる伴走支援を行い、団体の活動状況のモニタリングや、団体の知見を補うこと

これまでは年度当初に団体ごとに担当コーディネーターを決めて、１年間通して伴走支援を行なってきたが、団体により支援内容のニーズ等が異なることがわかってきたため、団体の実情に応じ、チーム制を導入するなど柔軟な支援方法を検討する必要がある。

またコーディネーターの個人的スキルに頼ることによる弊害が生じないよう、コーディネーター同士が連携して各団体の支援方針を立て、進捗状況等を随時確認・共有することが重要である。

支援制度の目的やコーディネーターの役割などについて、これまで以上に団体に対して丁寧な説明を行う機会を設けるとともに、採択に関わらない第三者の協力を得るなどして団体が意見を述べやすい仕組みを検討することが求められる。

④ 団体に対して、広報に関する体系的な知見の提供やサポートを行うこと

団体が地域での活動を効果的に実施する上で重要な広報活動を支援するため、より体系的な知見の提供やサポート行う。例えば、団体向けの「広報戦略の立て方」等の勉強会の実施や、アートプロジェクトを介した地域づくり等の観点で発信力のある講師の招聘など、広報に資するネットワークの充実を図ることが求められる。

イベント等の告知については、報道機関への情報提供やホームページ、SNS での発信等を中心に側面支援しており、コーディネーターや事務局への早めの情報提供を団体に周知する必要がある。

事業の価値を知ってもらうための広報は、事業や支援制度の意義を説明し、支援の輪を広げていくことにもつながるため、アーツカウンシルとしても積極的に行なっていく必要がある。そのためにはプログラムの鑑賞者数や関係者数などの基礎的なデータを収集し、分析の精度を高める必要があり、採択団体の理解と協力が不可欠である。

⑤ 長期的な成果を定義して、地域課題の把握や相談対応のための環境整備を行うこと

アーツカウンシルを設置した際には、採択団体に限らず、文化・芸術の力を活かした取組を地域で行なおうとする人々等が気軽に相談できる環境づくりが求められる。

また、地域密着プログラムとして採択した事業のその後の状況など、地域が抱える課題や文化芸術の状況を常に把握し、その事業のインパクトを継続して高めていくためにも必要な施策や支援制度を柔軟に講じることが必要である。

地域密着プログラムは、イベント本番だけでなく団体の日々の試行錯誤を大切にし、日常の中での創造活動を可視化することを目指してきた。こうした姿勢をアーツカウンシルに継承し発展させていくことが長期的成果を発現させるためにも重要であると考える。

（5）全体評価の結果のまとめ

本評価を通じて地域密着プログラムは、設定された３つの初期アウトカムにおいては、総じて「概ね達成している状態」であることが確認できたため、プログラムとして目指した状態に近づきつつある状況にある。また、詳細評価（濃い評価）の結果からも採択された事業が、地域において多岐にわたる価値を生み出し、事業効果をあげていることが確認された。

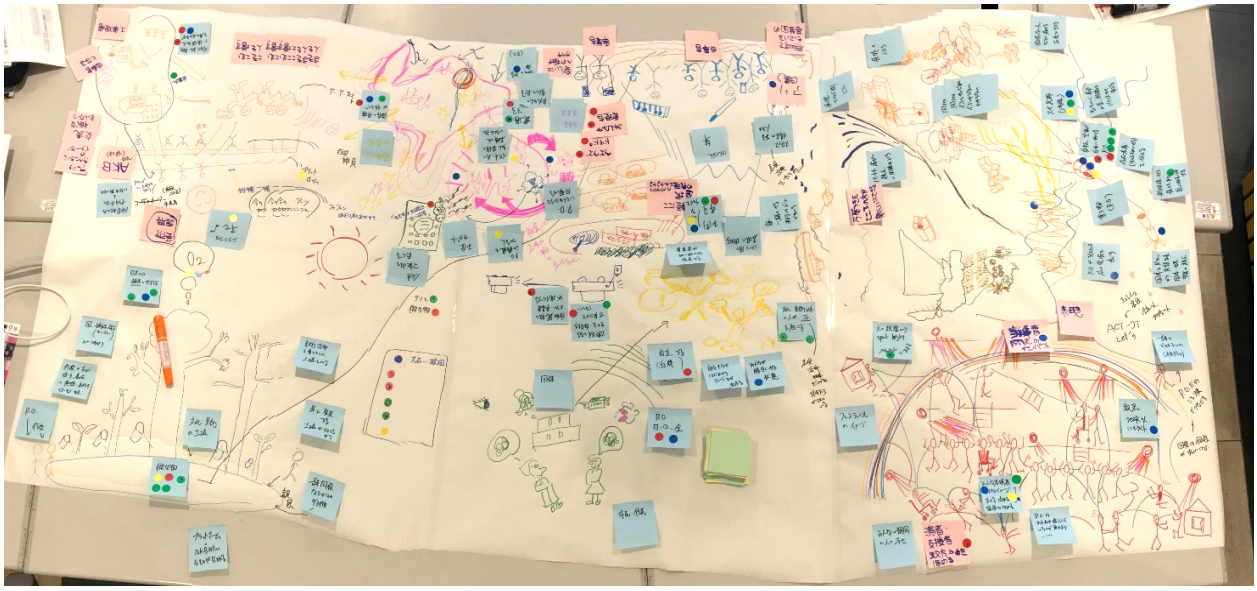
創造的な課題解決手段の提供、社会関係資本の促進、地域社会での変化の推進の 3 つの観点から、文化・芸術の力を活用したアプローチは、様々な地域的あるいは社会的課題解決や地域資源の活用を進める上での手段としての妥当性は高く、文化・芸術的アプローチだからこそ達成できたという成果が多く確認できた。
地域密着プログラムの支援制度としての強みは、事業の「先駆性」「創造性」そして「有効性」を担保し、アウトカム発現に貢献しようと努めているプログラム・コーディネーターの存在が挙げられる。また、複数年度の支援を想定した制度設計も強みの一つとして挙げられる。もう一方で支援団体からの期待やニーズから浮き彫りとなった課題も今回の評価を機に整理され、2020 年度以降のアーツカウンシル設置に向けての支援制度の改善点も把握した。

（6）アーツカウンシルに向けて

今回の評価は、評価が困難とされている文化・芸術分野の活動を対象とした評価手法の実践を試みたものである。評価結果から読み取れることは、文化・芸術的アプローチが、地域社会の課題解決に十分に資するものであること、支援の仕組みが有効であったことなどがある。一方、課題としては、長期的にプログラムが継続していくための運営や人材育成に対する支援が挙げられる。これを起点にアーツカウンシルに移行しても、日々進化する評価の実践を通じ、地域のより豊かな創造活動に寄与していくことが望まれる。

添付資料１　評価ツールの紹介：簡易評価アセスメントシート（淡い評価）

地域密着プログラムにおいて評価を導入する際一番の難題が、文化・芸術×地域の視点で実施されている多彩なプログラムを、いかに横断的に評価するか、評価基準をいかに設置するか、数値等で表しづらい事業成果の発現程度を、何をもってよしと判断できるのか、という点であった。この難題に取り組むため、評価チームは評価のものさしづくりをプログラム・コーディネーターと事務局とともに、2018 年度から取組み、2019 年度においては、新しい評価ツールとして簡易評価アセスメントシートを活用した評価を試行し、本評価にもその結果を適用した。
簡易評価アセスメントシート作成の起点となったのが、事務局とプログラム・コーディネーター対象に行ったサクセス・ビジョン・ワークショップ（2018 年 11 月）の結果である。ここでは、地域密着プログラムとしてのサクセス（成功している姿）を描いてもらい、ブンプロ固有の価値観やプログラムの実施において大切にしてきたことを顕在化し、それをもとに評価基準を作成するという手順を踏んだ。



2018 年度に作成した評価基準を基に下記に示す簡易評価アセスメントシートを作成し、2019 年度の採択団体に対し、年度当初と年度末の計 2 回評価を実施した。1 回目は、採択団体とプログラム・コーディネーターとの合同評価、2 回目は、採択団体の自己評価とプログラム・コーディネーターの評価それぞれ行なった。以下、本評価に際し、活用した簡易評価アセスメントシートと、2020 年度用に改訂したものを示す。

簡易評価アセスメントシート（2019 年度版）

No.	評価基準	評価基準の定義	①全く達成できていない状態	②少し達成できている状態	③概ね達成できている状態	④成功している状態（達成できている状態）
1	多様性と包摂性	全ての人が潜在的に表現者や文化の担い手あるということを前提に、対象事業に、多様な人たちの可能性を引き出す工夫・仕組みがみられるかということ。	助成先団体が多様性への関心がない。事業実施者や対象者が画一的である。	事業を実施する中で、より多くの人、または多様な人を巻き込むことに団体が関心をもっている。事業には、多様な人が表現者や文化の担い手として参加・表現できるよう配慮されている状態。	「誰でも潜在的な表現者・文化の担い手」との認識から、より多くの人、または多様な人を巻き込むことに団体が価値を感じている。事業の中で、より多くの人、または多様な人が表現者や文化の担い手として事業に参加・表現できる工夫・仕組みが数多く設けられている状態。	「誰でも潜在的な表現者・文化の担い手」にすることが団体のミッションであり、事業者、事業における主人公（出演者、取り上げる人材やその家族、支援者）と参加者（観客、鑑賞者、地域住民など）全てに多様性がある。実際にやっている人だけでなく、支援者や観客（事業に触れた人）も表現者や文化の担い手として輝いている状態。
2	革新性と適応性	事業を実施する前提に、既存の文化芸術活動や地域や社会課題のとらえ方などにおける「現状」へ疑問を掲げ、より良いアプローチを常に模索しながら変化していること。また、自団体の活動においても、現状維持に甘んじることなく、社会情勢を鑑み、客観視して改善・変化を生みだしている姿勢が事業に反映されていること。	事業が、自団体の活動を含む既存の文化芸術活動や地域や社会課題のとらえ方などにおける「現状」に疑問をもたず、また社会的状況への配慮や、探究心がない。自分たちがやっていることを対象化/客観視できていない。	事業が、自団体の活動を含む既存の文化芸術活動の固定概念において、あるいは地域や社会課題の既存のとらえ方などにおいて、「現状」に疑問を投げかけ、新たなアプローチを模索している状態。	事業が、自団体の活動を含む既存の文化芸術活動の固定概念において、あるいは地域や社会課題の既存のとらえ方などにおいて、「現状」を打開するため、新たなアプローチを試行錯誤しながら、実績が蓄積されている状態。	事業は常に社会状況などについて研究する探究心があり、その状況についての分析や把握ができている。また、文化芸術活動の刷新や地域や社会の課題の新たなとらえ方において明確なビジョンを掲げながらも、批判的思考を怠らず、絶えず変化を遂げながら、成果を挙げている状態。
3	自立発展性 **注 1**	団体が、経済面、人材面、企画運営面などで自立している状況で事業を実施できている状態を確認することによって、助成期間後の事業の自立発展性をみること。	思いがあるけど、思いを遂げる方法がわからない/ない（人、お金、手段等）。遂げたいことの思想すら周囲の関係者に届いていない、あるいは認められていない状態。	団体が、財政面、人材面、企画運営面のいずれかの一つの基盤は強いが、他の二つにおいては、まだ脆弱な状態。	団体が、財政面、人材面、企画運営面の３方面においてある程度基盤が安定しているが、新たな資源（人、資金、手段等）の獲得には苦戦している状態。	経済的にも、人材的にも、企画運営するにあたっても自分たちでできている状態。)。もっと進化してもいい（思想の進化、唯一無二、そういうことがキチンと言えて、周囲が聞いてくれるようになる状態、その養分を自分たちで見つけられる、自分で変化できる状態。
3a	財政面の自立発展性	団体が、財政面で自立し多様な状態で事業を実施できていること。	財政的には、静岡文化プログラムの助成金を含む二つ以上の財源をもっているが、まだ財政基盤がぜい弱な状態。	財政的には、文化プログラムの助成金以外の収入がない状態。	財政的には、一つの財源に依存することなく、各団体の最適な収入ポートフォリオに到達しつつあるが、次年度以降については（助成期間後については）収入の見通しがたっていない状態。	財政的には、一つの財源に依存することなく、各団体の最適な収入ポートフォリオが組めていて、今後とも持続できる見通しがある状態。
3b	人材面の自立発展性	団体が、人材面で自立した状態で事業を実施できていること。	事業を率いるリーダーはいるが、リーダー以外の人員が確保できていない状態。	事業を率いるリーダーおよび中核となるスタッフが数名いるが、ビジョンが内部で共有されておらず、必要な人員が量的にも質的にも確保できていないため、事業を狭窄している状態。	事業を率いるリーダーおよび中核となるスタッフが数名おり、ビジョンが広く共有されている。また人材が不足している場合は、その時々に外部から必要な人材を獲得したり、賛同者からの支援を集めたりすることができる状態。	ビジョンをもっているリーダーおよびそのビジョンを共有した中核となるスタッフが数名いる。事業が円滑に実施するだけの人材が人数的にも質的にも確保されている状態。
3c	企画運営面の自立発展性	団体が、企画運営面で自立した状態で事業を実施できていること。	自分たちの思いややりたいことを「事業」という形に企画し、かつ運営できない状態。	事業の企画は描けるが、いざ実施段階で運用のキャパシティが不足している状態、あるいは、事業の運用はできるが、それを事前に計画という形でまとめられない状態。	自分たちの思いややりたいことを、「事業」という計画におとし、かつ事業の運用もできている状態。	自分たちの思いややりたいことを、「事業」という計画におとし、かつ事業の運用もできて、更に自分たちの事業の成果を根拠をもって把握し、事業の改善に反映したり、関係者に対して広く発信できる状態。
4	地域資源・社会課題への対応 **注 2**	事業が、文化芸術分野を超えて、文化活動を通じて地域資源や社会課題を顕在化し、地域の魅力・可能性や社会課題のとらえ方を発見／再発見／再定義したり、地域活性化の糸口をみつけるきっかけを提供していること。	事業が対応する地域の、潜在的な地域資源や社会課題を見つけ出すことができず、活動がただ活動のために行われている状態。	事業が対応する地域の、潜在的な地域資源の発掘や社会課題の顕在化に貢献しようとしているが、そのとらえ方や実施手段において試行錯誤している状態。	事業が、潜在的な地域資源の発掘や社会課題を顕在化することに成功しつつあるが、事業の成果が一部の関係者にしか把握されていない。	事業が、潜在的な地域資源の発掘や社会課題を顕在化することにおいて成功しつつあり、様々な関係者を多角的に巻き込みながら、事業効果の拡大を図っている。
5	伝える力	団体がどのようなきっかけをもとに思いをもって、いかなる事業を目指しているのか、一貫性をもって伝えられていること。	事業内容が、団体の提示している問題意識や目指すところと乖離しており、身内の関係者以外が誰も理解できていない状態	事業の内容が、団体の提示している問題意識や目指すところとある程度一貫性がみられるが、事業の設計や目指す成果が戦略的に整理されていないため、身内の関係者以外が把握しづらい状態。	事業の内容が、団体の提示している問題意識や目指すところとの一貫性がみられ、事業の設計や目指す成果は戦略的に整理されつつあるが、あまりそのことが外部へと発信されていない状態。	事業の内容が、団体の提示している問題意識や目指すところとの一貫性がみられ、事業の設計や目指す成果は戦略的に整理されており、外部へも積極的に発信している状態。
6	事業の波及効果 **注 3**	一過性のイベントに頼らず、2020 年以降を視野に入れた持続的な展開が期待されるような事業であること。事業の対象地域、あるいは対象としているグループ以外での展開が期待できる事業であること。	事業が一過性の活動にしかならず、そこから他への触発がされていない状態。あるいは、波及の道筋がみられない状態。	事業からの波及効果は複数みられたが、他者への触発や飛び火が実際に進んだか確認できない状態。	事業からの波及効果はあらゆる面で確認でき、かつ他者への触発や飛び火が進んでいるが、その根拠となる材料があまり把握できない状態。	事業からの波及効果はあらゆる面で確認でき、かつ他者への触発や飛び火が多方面でみられる。またその根拠となる材料が体系的に集まっている状態。

注１　自立性の基準は 3、事業が、提案プログラムの助成期間が完了したあとでも、自立して発展していく可能性を、団体運営基盤の 3 つの側面から推測しようという視点である。基準 3 は 3a, 3b, 3c の 3 つの側面がそれぞれ合わさって、複合指標を構成している。運用方法としては、3a, 3b, 3c の結果を最初にまとめたあと、複合指標としての基準 3 で総合判断をする運びとなる。

注２　基準４の「潜在的な地域資源の発掘や社会課題を顕在化することに成功しつつある」こととは、団体のその年度内に行った活動を計画どおり実施できたか否かという判断というよりは、より長期的な目標（アウトカム）達成に対しての進捗レベルについての判断であるべきである。

注３　基準 4 と基準 6 の違いは、特に事業が予測した効果においての時間軸の違いである。基準 4 は事業実施期間中に発現される効果に着眼しているのに対し、基準 6 はより長期的な課題解決や関係者の変化にどの程度貢献しているか、見通しをたてながら検証する基準である。もう一つの違いは、基準 4 が事業の計画の範囲である受益者や担い手側の参加者に焦点をしぼって変化(事業の責任の範囲）をみるのに対し、基準 6 は計画に関係なく事業の影響をうける立場にいる関係者全員がその対象となる。配慮すべき点として、特に芸術・文化分野の事業の波及効果の広がり方を予測するのは難しく、他の事業や社会要因の影響も差別化できない。この困難な状況をうけとめつつ、柔軟でかつ時間軸にしばられない方法で、基準 6 のためのデータ集めのための活動を事業の中に組み込むことも一案である。

簡易評価アセスメントシート＜2020 年度版＞

No.	評価基準	評価基準の定義	②全く達成できていない状態	②少し達成できている状態	③概ね達成できている状態	④成功している状態（達成できている状態）
1	**事業に関わる人の多様性**	**事業の実施者および関係者や参加者の間に多様性がみられる状態。（事業が目指すべき「多様性」の定義については、実施団体と PC が相談のうえ一緒に決定する。）**	多様性に関心がない、または画一的である。	多様性に関心を持っているが、まだ実現できていない。	価値を感じており、ある程度多様性がみられる。	事業の実施者、事業における主人公（出演者、取り上げる人材やその家族、支援者）、参加者（観客、鑑賞者、地域住民など）の顔ぶれに多様性を持たせることに価値を見出しており、その状態をつくりだすことに成功している。
2	**包摂的な仕組み・包摂に向けた工夫**	**「誰もが表現者・文化の担い手」との認識から、創造活動に関心のない人、関わる機会が少ない人、関わりたいけれど手段がない人にも、参加できるきっかけ、仕組み、工夫が事業に取り入れられている状態。**	創造活動に参加できる仕組みや工夫に配慮がない。	仕組みや工夫に配慮はしているが、あまり結果につながっていない。	さまざまな人が参加できる仕組みや工夫が事業に取り入れられ、結果につながっている。	「誰もが表現者・文化の担い手」との認識から、事業の中で、より多様な人が表現者・文化の担い手として事業に参加・表現できる仕組み、工夫が積極的に数多く設けられていて、みんながそれぞれ輝いてる。
3	**事業をめぐる新陳代謝**	**団体が、既存の文化・芸術活動、あるいはテーマとする地域や社会課題の「現状」へ疑問を投げかけ、その発展に寄与しようとしている。また、自団体の活動においても現状維持に甘んじることなく、客観的な視点を持ち、社会情勢や環境に対応しながら、常に事業を改善させることができている状態。**	「現状」に疑問をもたない。社会情勢についても関心がない。自分たちがやっていることを対象化/客観視できず、改善の必要性を感じていない。	新たなアプローチを模索している。事業改善点を模索している。	新たなアプローチを試行しながら、改善などの結果が実績として蓄積され始めている。	社会状況の客観的な分析と把握ができている。また、文化・芸術活動の発展、地域や社会課題の将来に向けて、明確なビジョンを掲げながらも、批評的思考を怠らず、絶えず試行錯誤をしながら最善のアプローチを選択できている。
4	**自立発展性**	**団体が、経済面、人材面、企画運営面などで自立している状況で事業を実施できている状態を確認することによって、助成期間後も事業の自立発展性をみることができる状態。**	思いがあるけど、思いを遂げる方法がわからない/ない（人、お金、手段等）。遂げたいことの思想すら周囲の関係者に届いていない、あるいは認められていない。	団体が、財政面、人材面、企画運営面のいずれかの一つの基盤は強いが、他の二つにおいては、まだ脆弱である。	団体が、財政面、人材面、企画運営面の全てにおいてある程度基盤が安定しているが、新たな資源（人、お金、手段等）の獲得には苦戦している。	財政面、人材面、企画運営面において自分たちで全てできている。事業の思想や、事業が唯一無二であることについて語ることができ、周囲が聞いてくれるようになる状態。養分を自分たちで見つけられる、自分たちで変化することができる。
5	**事業の地域資源・社会課題への対応度合い**	**創造活動を通して、地域資源や社会課題を顕在化していたり、地域の魅力の可能性や社会課題を見つけるきっかけの提供がなされており、それらを含む団体のビジョン・ミッション・価値が周囲に伝えられ、理解されている状態。**	活動実施自体が目的となっており、地域との連動が見られない。	試行錯誤している。事業の価値が外からの賛同を十分に得られていない。	限定的であるが効果をあげている。事業の価値が伝わり始めている。	潜在的な地域資源の発掘や、社会課題の顕在化を進める過程で、事業の存在が確実に効果につながっている。また、事業の価値を広く多角的に発信できており、事業における主人公（出演者、取り上げる人材やその家族、支援者）、参加者（観客、鑑賞者、地域住民など）から賛同を得られている。
6	**事業の波及効果**	**A）事業の効果が対象地域（もしくは分野）に浸透し、一時の盛り上がり等ではなく、そこに根付いて様々な変化につながっている状態。B）事業の影響が、対象地域やグループ以外へも広がり（触発・飛び火）、様々な自発的な展開や変化につながっている状態。**	A）、B）を期待することができない。	A）の兆候は見えるが、B）は確認できない。	A）の変化を起こしつつあり、B）についてもいくつかの事例が確認できる。	事業効果が地域に深く浸透していて、地域で革新的な変化を起こしている。また他地域、他グループへの影響も大きく、その影響力が全国的に確認でき、その分野における先進事例、モデルケースとして認識されている。

添付資料２．支援実績　（文化・芸術領域×地域・社会課題）

地域密着プログラムの一つの特徴として、文化・芸術活動を通じて社会課題に対して創造的な解決策を探る案件が「地域・社会課題対応型事業」の枠で採用されているところにある。この枠において、2016 年度まで遡って各案件がどのような文化・芸術領域と地域・社会課題の掛け合わせが多かったのかを以下のようなヒートマップで表す。

図 5　文化･芸術領域×地域･社会課題のヒートマップ

	観光	ものづくり	産業	福祉	医療	教育	子育て	ソーシャル・インクルージョン	地域振興・まちづくり	防災・災害復興	富士山静岡空港	スポーツ	その他
音楽				1		5	1	3	4	1			
美術	3	1		1		3		1	7	2			
演劇						3	1		1				
舞踏						2		1	4				
映像									1				
建築							1		1				
デザイン													
メディアアート									1				
文芸													
伝統芸能		1	1			1		1	3				
生活文化	2	1	1	2		1	1	3	5				2
その他		1		3		3			3				
	5	4	2	7	0	18	4	9	30	3	0	0	2

一番多かった組み合わせが一番濃い色でハイライトされている美術×地域振興・まちづくりだった。その次に生活文化×地域振興・まちづくりと音楽×教育のものが挙げられる。
なお全般的に社会課題領域としては「地域振興・まちづくり」を目標としているものが一番多かった。豊かな地域づくりに向けて多岐多様な創造活動が展開されたことが確認された。

Ⅵ 2019 年度地域密着プログラムのふりかえり

— 目次 —

1.特定非営利活動 ACT.JT 静岡支部
「ふじのくに大田楽 －ODORIKO プロジェクト 2020－」 38
2.熱海未来音楽祭「熱海未来音楽祭」 40
3.一般社団法人 熱海怪獣映画祭「『熱海を怪獣の聖地へ』第２回熱海怪獣映画祭」 42
4.しゃぎりフェスティバル実行委員会「第３回しゃぎりフェスティバル」 44
5.静岡市文化・クリエイティブ産業振興センター「七間町ハプニング４」 46
6.NPO 法人クロスメディアしまだ「ＵＮＭＡＮＮＥＤ 無人駅の芸術祭／大井川 2020」 48
7.かけがわ茶エンナーレ実行委員会「かけがわ茶エンナーレ２０２０」 50
8.松崎町のうたを育てる会「FULL-SATO プロジェクト －松崎町と歌を育てる－」 52
9.MeetsbyArts@ATAMI 実行委員会
「Meets by Arts：アートプロジェクトの『始め方』と『続け方』の学校」 54
10.Scale Laboratory
「となりのアーティストプロジェクト ～地域を拓き、可能性の扉を開く～」 56
11.御殿場市東山旧岸邸「伝統芸能と食文化～伝統文化の継承を考える～」 58
12.富士の山ビエンナーレ実行委員会「レジデンス事業 Fujinoyama ART HUB」 60
13.企業組合くれば「WABISAVILLAGE SASAMA」 62
14.川根本町伝統文化保存会「伝統文化交流会」 64
15.一般社団法人ふじのくに文教創造ネットワーク
「新時代の『課外活動』への挑戦！ ～地域部活・掛川未来創造部 Palette～」 66
16.原泉アートプロジェクト「原泉アートデイズ！2019～泉とともに」 68
17.ふじのくにラボ「遠州森町の舞楽・舞楽食 ～食文化～次世代に繋ぐ～」 70
18.浜松市根洗学園（社会福祉法人ひかりの園）
「わが家流子育てのすすめ ～アート×療育×コミュニケーション～」 72
19.特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ「表現未満、プロジェクト」 74

1.特定非営利活動 ACT.JT 静岡支部
「ふじのくに大田楽 －ODORIKO プロジェクト 2020－」

■団体概要

日本の伝統的な文化芸術の活性化と振興を図り、街づくりや地域経済の活性化を目指すことを目的として設立された特定非営利活動法人ＡＣＴ.ＪＴ（野村萬理事長）の静岡県における拠点として活動。慰問や各地でのイベント出演を通じ、老若男女が共に集い、地域のコミュニティづくりにもつなげている。

■2019 年度事業内容

●「ODORIKO 隊」による祝祭プレイベントの実施

2020 年オリンピック･パラリンピック自転車競技開催を祝い、伊豆地域の郷土芸能と市民参加で編成した「ODORIKO 隊」による祝祭プレイベントを実施。市民参加「ODORIKO 隊」の練習は、2019 年 12 月 12 日から 2020 年 2 月 23 日まで 8 日間行なった。

市民参加：番楽 30 名、子獅子 10 名、稚児舞 10 名、二輪車・三輪車 10 名、一輪車 20 名、車椅子 10 名、宝撒き 10 名

日　時：2020 年 3 月 21 日（金）※新型コロナウイルス感染症の影響により中止

会　場：長泉町ウエルピアながいずみ

●その他、各地のイベントに出演し、PR 活動を実施

2019 年 9 月 28 日（土）ラグビーW 杯パブリックビューイングイベントにて披露

2019 年 10 月 5 日（土）長泉知徳高校峰望祭にて披露

2019 年 11 月 24 日（日）長泉町産業祭にて披露

■担当コーディネーターのふりかえり

2017 年度からスタートしたこの事業は「大田楽」をモチーフとしながらも、伊豆地方の様々な地域、伝統芸能が一堂に集う、出演者にとっても観客にとっても貴重な場として育っている。2017 年、2018 年には「伊豆地域郷土芸能現状調査」を行ったことで、「少子化」や「地域の変化」などによる地域郷土芸能への参加者の減少が浮き彫りとなった。様々な課題を持つ各地の団体にとって、他の団体との交流の場ができたことは、現状を改革するための重要な機会となっている。

特に、2019 年度は若手への伝承を課題にし、「長泉知徳高校」とのコラボレーションが実現した。「大田楽」を通じて、次世代へ「地域郷土芸能」を理解してもらうだけでなく、地元資源への興味を持つきっかけとなった。最終の公演を通じて実際に大田楽を体感する機会がなくなってしまったことは非常に残念であるが、新聞で取材されるなど、学生たちには刺激のある事業となったと感じている。

（門脇 幸）

2.熱海未来音楽祭「熱海未来音楽祭」

■団体概要

熱海市出身・在住の著名アーティストが中心となり立ち上げた。

■2019 年度事業内容

ジャンルに当てはまらない、どこの国のものかわからない、でもなにか魅力を感じる、心に残ってしまう、まさに未来を拓く力を持つ音楽祭を、日本を代表する歴史ある温泉観光地である熱海で開催。

即興を中心とした、世界的に活動する音楽家が集い、温泉の町・熱海のざわめきを演奏に取り込み、踊る身体に染み込ませ、未来の音楽、未来の表現をテーマに、観光で訪れた人と熱海に暮す人々が出会い、交流する場を創出する。現代と過去の入り交じる異空間・熱海の風景や、温かく懐の深い熱海の人々の魅力も、公演を通じて発見し、味わってもらう。国境を越え、皮膚を越え、耳を越えて、世界と日本、静岡へとつながっていく、広がりのある音楽祭。

●「熱海の国のアリス」になろうワークショップ
日　時：2019 年 8 月 24 日（土）・31 日（土）
講　師：長峰麻貴
参加人数：27 名

●ストリートパフォーマンス、ライブ『詩そして電子音』『水際立つ響き』
アートパレード『熱海の国のアリス』
日　時：2019 年 9 月 20 日（金）・21 日（土）
会　場：起雲閣、熱海仲見世商店街、熱海銀座、サンビーチ、など
出　演：大熊ワタル、こぐれみわぞう、巻上公 一、佐藤正治、伊藤千枝子、 町田康、
Anna Lerchbaumer 、Andreas Zibler、Jim O’Rouke、石橋英子
参加者数・来場者数：387 名

■担当コーディネーターのふりかえり

世界中で活躍するヴォイスパフォーマーの巻上公一氏が、拠点である熱海市で実施する「熱海未来音楽祭」。巻上氏が熱海で音楽祭を開催するのは、2019 年度が初めての取り組みとなる。音楽ライブのみではなく、造形作家を招聘し帽子作りのワークショップを行うなど、地域住民の音楽祭参加を促すなどの工夫を凝らした。

本番当日は、ワークショップ参加者とミュージシャンとが一緒に、熱海駅前でのパフォーマンス、商店街のパレード、海岸でのパフォーマンスなどを行い、熱海のランドスケープを最大限に活かしながら、音楽、ダンスで街の彩りや賑わいを演出。

起雲閣を会場にしたライブパフォーマンスでは、電子音楽、即興音楽、朗読などなど、巻上氏のキャリアとネットワークを生かした内容の公演となった。国内はもとより海外でも活躍しているアーティストによる確かな音楽に、会場が一体となって聴き込む姿が印象的であった。

今回の音楽祭を行ったことで、熱海市在住アーティストが企画に積極的に参加する意思を表明するなど、今後の展開にも期待を持てることとなった。

また、巻上氏が静岡にも縁のある「大岡信賞」を受賞するなど、ますます静岡での活躍に注目を集めている。

（北本 麻理）

3.一般社団法人 熱海怪獣映画祭「『熱海を怪獣の聖地へ』第２回熱海怪獣映画祭」

■団体概要

熱海は「キングコング対ゴジラ」（1962）の最終決戦の場になり、「大巨獣ガッパ」（1967）が上陸した場として描かれている。「平成ガメラ 3 部作」の脚本を執筆した伊藤和典氏も熱海に在住しており、怪獣とは所縁の深い土地である。

その熱海の地で、2017 年に地元の有志が集まり企画されたのが「熱海怪獣映画祭」である。伊藤氏も中心として参加しながら、地域内外のクリエイターが集まり、2018 年に第 1 回を実施した。今後継続的に映画祭を行っていくために組織を一般社団法人化した。

■2019 年度事業内容

往年の怪獣映画や新作の怪獣映画を上映、熱海に怪獣ファンを集客し「怪獣の聖地 熱海」をアピールするとともに、怪獣映画制作の人材の交流の場としての役割も担う。怪獣映画に関連したライブも実施するなど怪獣ファンのみならず地域住民にも楽しめるイベントとし、地元事業者とも協業して地域振興につなげていく。

日　時：2019 年 11 月 22 日（金）～24 日（日）
会　場：国際観光専門学校熱海校、芸妓見番歌舞練場、起雲閣 音楽サロン　など
内　容：上映会、シンポジウム、ライブ、お絵かきコンクール、怪獣まち歩き
　　飲食店と連携した「怪獣映画祭コラボメニュー」　など

■担当コーディネーターのふりかえり

近年、熱海には多くの観光客が訪れ、移住者と地元の人たちが渾然と交じり合いながら、様々なアイディアを次々と具現化させていく、街としての懐の深さが活性化に結びついている。そのような意味で「地域再生」において模範的とすら感じる街である。一歩路地に入れば、昭和の薫りが色濃く残り、そうしたギャップも想像力を掻き立てる。本プロジェクトはこの街に魅かれて移住してき

た芸術関係者と、もともと地元に長く住む人たちが、偶然酒の席で盛り上がった話が現実化したプロジェクト、というなんとも愉快なエピソードを持つ。
実は熱海市には映画館がない。それまで残っていた唯一の映画館は現在観光専門学校の校舎に変わったが、本映画祭はその専門学校をハブとして、熱海とゆかりが深い「怪獣」をテーマに、映画上映にとどまらない、誰もが楽しめる方法を模索してきた。例えば怪獣映画「音楽」ライヴ、子どものお絵かきコンクール、商店街とのタイアップによる「怪獣」メニューの開発、地元企業を中心とした協賛、商店街の中にある宿泊施設での怪獣ファンとの交流会、地元や県外からのボランティア、地元の人たちを対象とした月 1 回の説明会の実施など、怪獣映画ファンだけでなく、地道に、あくまで地元から支援される映画祭としての姿を追求してきた。そうした姿勢も相まって、地元の人たち、移住者、外の人たちを、「怪獣映画」という、ある程度の年齢には郷愁を誘い、若い層には逆に新しさを感じるコンテンツでフラットにつないでいったのである。これがまだ 2 回目なのに怪獣映画ファンだけでなく、地元からの多くの来場者と熱烈な支持に結びついたのだ、と言えよう。
「熱海を怪獣の聖地へ」に向けて着実に歩み始めている。

（佐野直哉）

4.しゃぎりフェスティバル実行委員会「第３回しゃぎりフェスティバル」

■団体概要

三島市で 450 年続く伝統芸能「しゃぎり」を永続的に発展させるため、各町内のしゃぎり保存会が会員となり、①周囲の理解、②自己研鑽、③後継者育成の三要素を柱とした事業を行う団体。
鉦（かね）、太鼓、笛を使った祭囃子である「しゃぎり」を祭りから切り離し、「しゃぎり」だけに特化させたフェスティバル「しゃぎりフェスティバル」の開催が活動の中心を占める。

■2019 年度事業内容

参加各町による演奏に加え、しゃぎりの衣装である浴衣のファッションショーや、しゃぎりの理解を深める講座コーナー、会場参加型で盛り上げる演出も取り入れた。開催に向けて、日本語、英語のチラシを三島駅周縁のホテルに配し観光客の取り込みにも一定以上の手ごたえがあった。当日の受付やアンケートも英語対応し、事前に準備した魅力伝達の道筋が成果をあげた。

日　時：2019 年 9 月 15 日（日）13:00～20:30
会　場：三島市文化会館大ホール
参加者：766 名

■担当コーディネーターのふりかえり

どれだけ見栄えのするお祭りだとしても、参加する楽しみは観客のそれとはまったく別物であろう。「しゃぎりフェスティバル実行委員会」のみなさんを見ていると、そのことを痛感させられる。とにかく本人たちが楽しそう。
残すこと、次世代につなぐこと、伝統芸能に関わる時、そうした使命感にかられることはよくある。その地域に長く伝わるもの、それはそれだけで大事なことである。しかし一方で、つなぐ人たちも社会生活を営む人間であり、いろいろなことを投げ打ってできることにも限りがある。
それを残したいのは、長く続いているからなのか、先代たちもそうしてきたからなのか、自分もいいと思うからなのか、楽しいからなのか、折に触れて頭をよぎらせていいことだと思う。少なくと

も、頭ごなしに「そういうものだから」と言っていては、文化はつながっていかない。人の生活とともにあるものだから。
「楽しい」の体現に加えて、自分たちの大事にしているしゃぎりの要素をしっかりと分析し、無理のない企画に落とし込む。しかし毎回挑戦の要素も加え、さらに楽しむ。しゃぎりフェスティバルでは、文化を継続するための楽しむ姿勢が垣間見える。

（鈴木一郎太）

5.静岡市文化・クリエイティブ産業振興センター「七間町ハプニング４」

■団体概要

静岡市が設置するクリエーターの育成、コンテンツ産業の振興を推進する拠点施設で、愛称はCCC。クリエイティブやデザインという視点で、静岡市の産業や街の活性化・発展を目指している。CCC 内にあるギャラリーでは、国内外のクリエーターや、アーティストの展覧会、地域の産業の展覧会の開催や、デザイン・クリエイティブをキーワードとしたセミナーやワークショップを開催している。さらに、クリエーターのネットワークを構築し、地域の産業とのマッチング機能やビジネス相談なども行っている。

■2019 年度事業内容

七間町ハプニングは市街地回遊型パフォーミングアーツ・フェスティバルである。2019 年度で 4 回目を迎え、静岡市中心市街地（通称おまち）の七間町人宿町界隈で開催している。
1950 年代後半にアメリカで興ったアートムーブメント「ハプニング」は市街地などで行われ、非再現的なその場限りのパフォーマンスを指す。この身体性の伴った表現行為は、演劇や音楽を取り込みながら多様な広がりを見せた。パフォーマーと観客の境を曖昧にし、パフォーマンスに参加させることが特徴のひとつである。一回性、コラボレーション、参加というワードを参照しながら、「七間町ハプニング」は、観客にダンスや演劇、大道芸などのパフォーミングアーツと突然の出会い（ハプニング）をもたらす機会を仕掛ける。だからこそカフェや路上など劇場以外の会　場も重要な公演会　場となる。今回は「市民参加」を進め、ジャンルを横断した創造的身体表現をプロとアマ、出演者と観客の垣根を超えてエリア全体で繰り広げる。
七間町は明治時代には演芸の街として、大正時代は活動写真、昭和になると映画といったようにおおよそ 150 年に渡り舞台芸術やエンターテイメントを通して、人々に日々の活力を与えてきた。そして今、現代的で多様な身体表現「パフォーミングアーツ」がこの街のレガシーを受け継いでいく。

日　時：2020 年 3 月 14 日（土）・15 日（日）※新型コロナウイルス感染症の影響により中止
会　場：コミュニティホール七間町、札の辻クロスホール　など

■担当コーディネーターのふりかえり

本年度はコロナ禍の中、残念ながら開催中止という判断を取らざるをえなかった。いくつかの市民協働プロジェクトは開催に向けて市民、プロのアーティストや企画者、そして七間町の人たちの間に多様な交わりとコミュニケーションのグラデュエーションを見せながら盛り上がりを見せていたところであった。

七間町ハプニング 4 は最後の大事な「観客」という存在のピースが欠けた結果となってしまったが、それは私たちにとって重要な問いも同時に残した。

最後の「発表の場」が失われることで、観客と「創造と協働のプロセスを共有すること」の機会が奪われるがままになっていいのだろうか？本当に最後の「発表の場」だけが発表の場なのだろうか？街を舞台にハプニング的におこなわれるからこそ、普段から街でそうした創造の共有の可能性はないのだろうか？中止の判断の渦中に主催者に生まれた問いは、新たな思考と実験として次の七間町ハプニング 5 に必ずや活かされるであろう。

（佐野直哉）

6.NPO 法人クロスメディアしまだ「ＵＮＭＡＮＮＥＤ 無人駅の芸術祭／大井川 2020」

■団体概要

『スキだらけのマチづくり』をテーマに、島田市周辺で活動を行うまちづくり事業型 NPO 団体（2011 年設立）。2017 年 3 月に初開催された「無人駅アートルネッサンス～ARTCONNECTSHIMADA～」を始まりとして、第二回から「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」へ改称。大井川鐵道の無人駅およびその周辺エリアを舞台に、地域内外のアーティストと地域住民の人々の共同作業から「新しい風景」をつくりだす。

■2019 年度事業内容

4 回目（UNMANNED としては 3 回目）を迎えた芸術祭は、引き続き「無人駅が開けば地域が開く」をテーマに、無人駅 6 駅（代官町駅、神尾駅、福用駅、抜里駅、塩郷駅、駿河徳山駅）と 3 つの集落（福用エリア、抜里エリア、塩郷・久野脇エリア）を舞台に、計 17 日間開催した。
国内外で活躍する 13 組のアーティストが参加し、無人駅とそこから広がる集落の資源に焦点をあてた作品や、地域の人々と一体となった体験型の作品を展開したほか、高校生や大学生との協働プロジェクトなど多様な展開に取り組んだ。

●「集落」や「人」を見つめ、表れたアート作品
アーティストが地域の資源として、「人」を発見し、表現の軸に据えた作品が多くあった。芸術祭を中心に、アーティストや地域住民、来訪者のコミュニケーションが図られる要素となった地域意識の変革や、来訪者による地域発見につながっている。

●島田市、川根本町の 2 市町にまたがるエリアを対象とした芸術祭のあり方の検討
今年度から 2 市町の行政担当者、大井川鐵道、地元自治会やコミュニティ、静岡県による推進会議を計 4 回実施した。準備や進捗状況の共有とともに広報や来訪者管理など運営面での協議を実施した。

●ボランティアサポーターの活動
芸術祭を支える地域住民によるサポートの体制やボランティアサポーター「あんまん部」は、複数年の取組を通じ理解と期待の高まりが感じられる。地域住民によるアーティストの滞在支援、作品の制作へのサポート体制、日　時中の経路やアクセス案内や、作品の説明、自然発生的に行われる来訪者へのおもてなしなど、主体的に関わる姿勢が生まれており、地域の活性化や再生につながる取組が根付いてきている。

日　時：2020 年 3 月 6 日（金）～22 日（日）／17 日間
会　場：大井川鐵道無人駅周辺（静岡県島田市・川根本町）
参加アーティスト：関口恒男、江頭誠、さとうりさ、木村健世、北川貴好、栗原亜也子、
ニシダヒデミ、夏池篤、中村昌司、形狩り衆、クロダユキ、カトウマキ、常葉大学造形学部（計 13 組）

■担当コーディネーターのふりかえり
「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川」は、「無人」という言葉がもつネガティブさによって見過ごされがちな集落の魅力を掘り起こし、地域内外に伝えていく芸術祭であり、この「価値転換」こそが文化芸術やアートにできることなのだと再認識させてくれる。
今回は、新型コロナウイルス感染症拡大による影響で、イベントはすべて中止とする異例の事態となったが、対策を万全にした上でアーティストの制作活動は予定通り行った。まちづくりに取り組む主催者が最も大事にしている「集落の人々の営み」を、参加アーティストも各に感じ取り、表現活動の糧にしている。
住民からは「アーティストという生き方を支えることができる地域を、自分たちでつくってきたということ。これまで自分たちがやってきたことは間違っていなかったと感じることができて嬉しい」との声があり、本事業が人々の地域に対する誇りにつながっていることを感じた。
このように、芸術祭を支える人々さらには来場者が、アーティストや作品のその先に、自らの地域を見つめ直すとき、「UNMANNED」としての価値が最大限開花するのだと思う。

（立石沙織）

7.かけがわ茶エンナーレ実行委員会「かけがわ茶エンナーレ２０２０」

■団体概要

地域資源である「茶・茶産地」と「アート」を融合させ、地域の魅力を再発見することを目的に 3 年に 1 度、地域芸術祭を開催。 2 回目となる「茶エンナーレ 2020」に向け、みんなの思いを形にするまちづくり芸術祭を目指し、文化振興だけでなく観光、商業、茶産業など、多岐にわたる分野が参画した実行委員会。

■2019 年度事業内容

2015 年度から 2017 年度にかけて 3 年間（千日）をかけて推進された茶文化創造千日プロジェクトとして、2017 年に第 1 回を開催。山口裕美氏を総合プロデューサーとし、総勢約 90 名のアーティストが参加した。

2019 年度は、翌年に控えた第二回の本展開催に向けて、基本方針や企画内容の検討・調整を行うとともに、市民の茶エンナーレに対する理解促進と機運醸成を目的としたプログラムやプロモーション活動等に力を入れて取り組んだ。

●キックオフイベント：オチャノキプロジェクト 「オチャノハ」贈呈式 ＆緑茶で乾杯
日　時：2019 年 4 月 23 日（金）11:00～11:30
会　場：掛川市役所前広場
内　容：茶樹作品の寄贈、テープカット、掛川茶で乾杯

●令和記念イベント ：オチャノキプロジェクト
「茶縁結び企画 vol.1 オチャノキに『純愛』の花を咲かせよう！」
日　時：2019 年 5 月 1 日（水・祝）9:00～16:00
会　場：掛川市役所前広場
内　容：お茶の花カードに思いを書いて結ぶ 写真撮影・プレゼント

●市民プログラム 2019
2017 年から継続的に取り組んでいる市民プログラムは、応募数が年々増加しているほか、市民とアーティストの協働の機会も生まれている。
公募期間：2019 年 5 月 17 日（土）～21 日（火）
実施期間：2019 年 9～12 月
実施数：11 プログラム

●ラグビーワールドカップ 2019 ：静岡大会 「茶文化」でおもてなしイベント
日　時：2019 年 9 月 28 日（土）10:00～16:00
会　場：掛川城公園三の丸広場
内　容：市民プログラム 2019 など 14 事業を実施

●天浜線「茶エンナーレ号」出発式
日　時：2019 年 11 月 28 日（木）10:00～10:30
会　場：天竜浜名湖鉄道掛川駅
内　容：テープカット ラッピング列車 「茶エンナーレ号」の毎日運行

●「掛川おべんとう画用紙」説明会＆プレ展示
日　時：2020 年 2 月 14 日（金）～28 日（金）
会　場：掛川市役所 3 階テラス
内　容：根洗学園松本園長による趣旨説明と展示会

■担当コーディネーターのふりかえり
3 年に 1 回のトリエンナーレ形式で開催している「かけがわ茶エンナーレ」。第 1 回（2017 年度）の目的と成果である《文化の起爆・覚醒、「茶縁の種まき・芽生え」》を踏まえ、第 2 回（2020 年度）の目的を《市民の思いを形にする、「茶縁を育み広げる」》とし、活動している。
2019 年度は、各分野を代表する市民で組織する実行委員会によって、産業（茶産業含む）、観光、教育、福祉など、市内の現状を多面的にとらえながら、計画策定を進めてきた。また、市民プログラムの団体に対して企画内容や収支がステップアップできるよう事務局が細やかなサポートを行なうなど、市民と文化芸術の距離が少しでも近づくような取り組みに注力していることが茶エンナーレの特徴の一つである。
茶エンナーレのゴールは芸術祭を開催することではない。茶エンナーレで培ったネットワークを同芸術祭の開催以後にどうつなげていくかということを常に意識しながら市内全体で本展を盛り上げていくことに期待している。

（立石沙織）

8.松崎町のうたを育てる会「FULL-SATO プロジェクト －松崎町と歌を育てる－」

■団体概要

声楽家や音楽家、大学教員らからなる外部団体との活動に触発され、地元有志で立ち上げた団体。外部団体と共に実施するプロジェクトの地元の受け皿となる一方、プロジェクト成果を地元に浸透させていくための周知・調整・盛り立て・拡散を自発的に行い、将来の展望を開いていく。

■2019 年度事業内容

●コンサート「松崎町のうた ～町民が紡ぐ歌語り～」開催

町内で活動する音楽団体、活動団体、FULL-SATO プロジェクトの音楽家たちが出演するコンサートが開催された。観客も、出演者もそのほとんどが松崎町の住民だったが、その数は人口の 1 割となる 660 名を数えた。その数もさることながら、それぞれに作詞した歌の歌唱には誇りや気持ちが表れており、歌い手・聞き手の区別なく心動かされた空気感が感じられた。

日　時：2019 年 12 月 15 日（日）14:00～15:35（13:30 開場）
会　場：松崎町農村環境改善センター 文化ホール
参加者：660 名（観客：470 名、町民出演者：190 名）

●周知活動

町内のさまざまな場面に出掛けていき、幅広い層に向けた周知活動と、作詞のワークショップを実施。それぞれの町に対する思いをつづった歌詞が 100 篇ほどできあがった。

A. ミニコンサート　全 4 回　のべ 131 名
B. 歌唱練習会・作詞ワークショップ　全 13 回　のべ 540 名
C. 各地の敬老会に赴いての歌唱披露　全 7 地区 16 会場のべ 285 名
D. 地域の学校での演奏会・歌唱指導　小、中、特別支援学校　のべ 402 名
E. 町内のイベントへ出演　全 4 回　のべ 460 名
F. コンサート映像鑑賞会　47 名

●プロモーションビデオ制作ワークショップ
松崎高校美術部と町民有志　のべ 60 名

■担当コーディネーターのふりかえり

外部から立ち上げられたプロジェクトに刺激を受け、地元から生まれた「松崎町のうたを育てる会」。「こうして立ち上げられたものを町に根付かせるのは自分たちの責任だし、自分たちしかできないだろう」とメンバーの方が言っていたのが印象に残っている。外からの働きかけをきっかけに、自分たちの強みを見つけ、誇りを持って団体を立ち上げ運営していく姿にはいつも感激する。コンサート会場には全町民の 10 分の 1 にあたる 600 名を越える人たちが集まっていた。こうした文化活動は外への発信や、外部からの来訪者数、どんな波及効果があったかなどに注目が集まりがちだが、しかし、町の中で町民がやっていることに町民たちがのっかって楽しむ、土地ならではの文化を語る時には、これがまず何より大切なことだと感じさせてくれる。

（鈴木一郎太）

9.MeetsbyArts@ATAMI 実行委員会
「Meets by Arts：アートプロジェクトの『始め方』と『続け方』の学校」

■団体概要

2018 年度に開催した「アーツプロジェクトスクール@ATAMI ART FAIR」の受講生と現地コーディネーターが結成した団体。
熱海市のまちを舞台に、アートプロジェクトの企画立案を学ぶ短期集中型のスクールを実施。アートの意義を「異なる価値観や視点を持った表現に出会う機会の創出」であると捉え、熱海がアートのある多様で寛容なまちとなることを目指す。

■2019 年度事業内容

アートプロジェクトを手がける際に重要な「始め方＝地域のリサーチ」と「続け方＝企画の振り返り」に特化した独自のカリキュラムを立て、計 3 回の合宿（企画立案の演習）を行った。より具体的な事例で実践的に学ぶ工夫として、熱海で実際に行われているアートプロジェクトや受講生による持ち込み企画をテーマに設定した。現場の第一線で活躍している熊谷薫氏と平井宏典氏をメンターとし、事務局とともに伴走支援を行うことで、充実したサポート体制を組んだ。受講生による 3 企画は、2 月に最終発表会＆シンポジウムにてプレゼンテーションが行われた。

日　時：
合宿①　2019 年 12 月 14 日（土）～15 日（日）
オリエンテーション、持ち込み企画の提案、レクチャー、懇親会、ほか
合宿②　2019 年 12 月 16 日～2020 年 1 月 31 日（チームごとに 1～2 日間で設定）
リサーチ
合宿③　2020 年 2 月 1 日（土）～2 日（日）
グループワーク、中間発表、最終プレゼン、シンポジウム

メンター：
熊谷薫 氏（事業評価コーディネーター/アートマネージャー）
平井宏典 氏（和光大学 経済経営学部経営学科 准教授 / 真鶴まちなーれ総合ディレクター）
レクチャー・講師（12 月 15 日）
永田雅之氏（一般社団法人 熱海怪獣映画祭代表理事／映像ディレクター）
シンポジウム・ゲスト（2 月 2 日）
芹沢高志氏（都市・地域計画家 / アートディレクター / P3 art and environment 統括ディレクター）
加藤種男氏（静岡県文化プログラム チーフ・オペレーティング・ディレクター）

参加者数　スクール受講者数：12 名
シンポジウム参加者数：38 名

■担当コーディネーターのふりかえり

Meets by Arts が考えるアートの役割とは、「異なる価値観や視点と出会う機会を創出すること」。アートが地域に根付くことによって、観光だけに頼らない新しい地域資源を発掘する可能性を持っているという考えが根底にある。
他のプログラムに比べて参加者は小規模ながら、地域内外から集まった 12 名の受講生がチームごとに熱海やアートについて喧々諤々議論する中には、地域の人々は見過ごしているかもしれない熱海の魅力がたくさん詰まっていると感じる。
人材育成事業は長期的な視点が不可欠である。ここで生まれた「種」がどのように受講生個々人の中で「発芽」するかは、スクール事業自体がはじまったばかりの今は、まだあまり見えていないかもしれない。しかしながら、本スクールがコツコツと継続されていくことで、ここ熱海を自身の活動フィールドとして捉えられる人を一人でも多く生み出し、熱海に関わる人とプロジェクトが多様化していく可能性に期待している。

（立石沙織）

10.Scale Laboratory
「となりのアーティストプロジェクト ～地域を拓き、可能性の扉を開く～」

■団体概要

県東部在住の創造産業に関わるプロフェッショナルを中心メンバーとする団体。伊豆半島各地の空き店舗等の遊休施設を「劇場」として活用する舞台公演等を通じて鑑賞機会を創出するとともに、地域の新しい風景として定着させ、発信力、誘引力を強める。さらに、文化・芸術活動に従事する人材の育成、ネットワーク化を図り、プロの人材が活躍できる環境の実現を目指す。

■2019 年度事業内容

●スケラボ アートサーカス

観る人によっては初めての体験となるような作品を毎年発表することにより県東部地域住民の「少し足りない刺激」を提供しつつ、観客の感じたこともトークや歓談でキャッチし、アートの楽しさや魅力を「一緒に」作り上げるスタイルに年々地域からの理解や協力が蓄積され成果をあげている。

2019 年度は、赤ちゃんから大人まで楽しめるパフォーミングアーツイベント「空中音楽会」を実施。音楽家が企画した「for Babies」「for Kids」は、おとぎの国のような空間で子どもの反応に奏者と保護者がコミュニケーションを取りながら、一体感を持って「音」の魅力を味わう機会となった。「for Adults」は、民俗音楽をベースにしたダンスミュージックに最後は盆踊り状態になるなど、電子音楽と映像で空間全体をクールな夜に演出。パフォーマンスに関わるスタイルに始めは戸惑い気味だった観客も、好奇心が刺激され最後は充実した時間に満足した様子。

日　時：2019 年 12 月 20 日（金）～22 日（日）

会　場：沼津ラクーン　来場者数 120 名

出　演：SUN DRUM、松岡大、林文彦、飯田将茂、鈴木彩、原順子、サノユカシ（映像）

●スケラボ アートキャラバン
地域の方々との連携を密にしたアウトリーチ活動は、アートによる人づくり、地域づくりの良いモデルとなっていると同時に、スケラボ の新たな看板メニューともなってきている。
2019 年度は、子どもたちに広い視野を持ち、ユニークな体験をして欲しいという保育園のリクエストに応じ、巻上氏を講師に「へんてこ音楽会」を実施。障がい児童放課後デイサービスには「色んな人と接して欲しい」という希望から、スケラボメンバーやゲストアーティストによる、映像、カフェ、造形などのワークショップを実施。高校演劇部では、コンテンポラリーダンスワークショップを実施。普段から演技レッスンを重ねている生徒たちも、身体全体を使った表現にのびのびと参加し和やかで活発なワークとなった。
会　場：ぽんぽん保育園、エシカファーム、県立静岡城北高校演劇部、県立伊東高校演劇部　等
講　師：磯村拓也、AKICHI コーヒー、中村一平、長井江里奈、巻上公一
参加者：141 名

■担当コーディネーターのふりかえり
ブンプロのスタートとほぼ同時に活動を開始した「ScaleLaboratory（スケラボ)」。共に歩んできたコーディネーターとして、この機にこれまでの活動を振り返ってみたい。
ブンプロの軸となるテーマ「地域（社会）課題との対応」とは、少々上滑り気味に見られていたスケラボのプロジェクト。沼津市、三島市を中心とした県東部での活動を続けて行く中で、見事に「課題」に対応したプログラムを運営する団体へと変わっていった。
実は課題であったのは、「アートが足りない」地域であったことであり、「足りない」ことを顕在化させたのが、スケラボの活動による成果である。この逆順的な課題との関わり合いは、アートが持つ力として期待されている「可能性」や「効果」を、活動を続けることで示してこられたと考えている。
アートは課題を直接解決する術ではない。課題を顕在化させ、その課題に向き合い、思考を重ねるきっかけ作りとして、アートが有効な手段の一つだと考えている。スケラボは手法として「対話と演出」を取り入れ、巡り巡って地域の方々と課題に向き合うスタイルを築き上げた。
このスタイルに共感した方々が、スケラボのスタッフとして加わったり、運営のサポーターとなったり、プロジェクトを依頼したりと、共感の波紋が広がっている。スケラボの活動を通して、身近にアートを体験できる環境となった東部地域では、「足りない」から「魅力ある」へと変化し、心が満たされた人が増えてきていると聞いている。　今後も、逆順的にアートの可能性を追求して行くであろうスケラボの活動に、注目していただきたいと思う。

（北本麻理）

11.御殿場市東山旧岸邸「伝統芸能と食文化～伝統文化の継承を考える～」

■団体概要

東山旧岸邸は、首相を務めた岸信介の自邸として 1969 年に建てられた。その後、30 年程の時を経て、2003 年に御殿場市に寄贈されたあと、一般公開された。2009 年からは、和菓子の虎屋のグループ会社である株式会社虎玄が指定管理者として管理運営を行なっている。建築家・吉田五十八の晩年の作品である邸宅は、施主・岸信介の生活に配慮しつつ、伝統的な数寄屋建築の美と、現代的な住まいとしての機能の両立を目指して設計された。

■2019 年度事業内容

2019 年度の伝統芸能講座は「伝統芸能と食文化」と題して開催した。とらや工房では茶懐石「温石」店主・杉山氏がつくる静岡の食材を活かした点心を提供し、東山旧岸邸では改元を祝して、元宮内庁式部職楽部首席楽長による解説とともに、慶事に演奏される雅楽を披露した。
分野や様式が違っていても共通する「こころ」や「かたち」に触れ、日本の伝統文化について考えるひと時となった。

日　時：2019 年 10 月 8 日（火）昼の部 12:00～15:00／夜の部 18:00～21:00
会　場：点心席 とらや工房 ／ 雅楽演奏会 東山旧岸邸
定　員：各回 60 名　事前予約制　※先着順
参加費：昼の部 6,500 円（税込）満席／夜の部 7,000 円（税込）満席

■担当コーディネーターのふりかえり

地域に残る重要な文化資源を保存しながら、いかに活用していくか。伝統芸能がこれまで脈々と受け継がれてきている一つの理由は、文化芸術に宿る大切な価値を守りながら、時代性に合わせて柔軟に変化し、社会と上手く付き合う「したたかさ」と「強さ」である。そのような意味で、東山旧岸邸の取り組みは今後の文化施設運営と指定管理者の在り方を考える良いきっかけとなったプロジ

ェクトである。指定管理者として、これまで受け継がれてきた地元の文化資源を調査・研究しつつ、地域の声や社会の文脈を取り入れ、「今を生きる文化施設」として意欲的に数々の企画を発信し続けている。
本企画「伝統芸能と食文化～伝統文化の継承を考える～」では、地元の茶懐石「温石」店主・杉山氏が作る静岡県の食材を活かした点心に、敷地内にある「とらや工房」の創作和菓子を組み合わせて、令和の始まりに相応しい雅楽の演奏と解説と共に提供した。さらに杉山氏、とらや工房の職人・高田氏ら本企画関係者による「伝統文化の継承」を考えるトークも実施した。本イベントは食材の現場視察や地元生産者との密接なコミュニケーションを通して、協働で作り上げていくプロセスを丁寧に踏んだ上での実施であった。そうした交流によって、食文化における地域資源の発掘に結びついたことが成果である。本イベントをきっかけに、一過性のイベントで終わらない伝統芸能と地域の接続の形や、「文化継承」を今度は参加者や地域の人たちと共に考えていく場の設定など、今後の持続的な企画と発展が期待される。

（佐野直哉）

12.富士の山ビエンナーレ実行委員会「レジデンス事業 Fujinoyama ART HUB」

■団体概要

富士市、富士宮市、静岡市の地元有志が立ち上げた団体で、2014 年から隔年で「富士の山ビエンナーレ」を開催している。他地域でのアートロプロジェクトによる成果や効果に触発され、富士市を中心とした地域に、芸術を取り入れた創造産業振興や人材育成を目的としたビエンナーレを実施し、地域資源の再開発と他地域とのネットワーキングを企て、富士地域から新しい価値を掘り出し、発信することを狙う。

■2019 年度事業内容

2020 年のビエンナーレ開催に向け事業体制を構築するとともに、富士本町商店街にあるイケダビルを利用して行われるマイクロレジデンスプログラムで、2019 年は 3 名のアーティストが富士本町商店街を舞台にアート活動を行なった。

アニメーションを使った作品を発表する Kawo a.k.a. Sushijojo 氏は、イケダビルの 3 階で作品を発表。滞在中は、富士本町商店街を中心に富士市民へのリサーチやワークショップを行い、参加者の詩作が作品でも用いられた。

インスタレーションを発表した吉野祥太郎氏は、富士市の地形や自然にも関心を示し、市街地以外でもリサーチを展開。作品はイケダビルの一室に、富士山のシルエットが浮かびあがる幻想的な空間を作り上げた。

音を用いた作品を発表している西原尚氏は、共同プロジェクトとして市民参加のパフォーマンスを発表。数回のレクチャーを行い、現代音楽の歴史や手法を学ぶ機会を設けた。パレードでは各参加者の背負ったスピーカーから、音の重なりと響きが商店街を往来する非日常の空間を作り上げた。

会　場：イケダビル
滞在アーティスト：吉野祥太郎、Kawo a.k.a. Sushijojo、西原尚
参加者数：377 名

■担当コーディネーターのふりかえり

隔年で「富士の山ビエンナーレ」を実施している富士の山ビエンナーレ実行委員会は、地域で繰り広げる現代美術の芸術祭の振興と、芸術への理解促進、地域住民との交流を目的に「Fujinoyama ART HUB」を 2019 年度に実施した。

公募で選ばれたレジデンスアーティストは、富士市を中心に滞在しながらリサーチと作品制作と作品の発表を行った。アニメーション、造形美術、音楽と、アーツジャンルは多岐に渡り、制作スタイルも各作家の個性が垣間見える方法で行われた。どの作品にも地域住民のアイデアや感性が取り込まれ、生き生きとした富士エリアの営みが、作品を通して伝わってくるように感じ取ることができた。

レジデンスとなった富士駅前の「イケダビル」は、商店街の中にあるビルで現在は空き店舗となっている。作品制作と発表を行うアーティストが商店街や地域の活性化の媒介となることを願い、実行委員会が試行錯誤のもと手作り感覚で実施されたレジデンス事業。

作家とのコミュニケーションや地域でのネットワーキングなど、これからの運営に向け取り組むべき課題はまだまだ残されているが、「地域で作り上げる芸術祭」への再構築にむけ、新たな第一歩を踏み出すこととなった。

（北本麻理）

13.企業組合くれば「WABISAVILLAGE SASAMA」

■団体概要

旧笹間小学校を活用した宿泊体験施設「島田市山村都市交流センター」の指定管理者。過疎の村にある様々なものを、視点を変えることで、地域資源として活用し、日本古来の「わび、さび」のように質素で静かなものの中に美しさを見出していく。2011 年から 2 年に一度開催している「ささま国際陶芸祭」の企画を中心にし、海外からの訪問者を迎えつつ、地域の良さを再発見していく。

■2019 年度事業内容

●「WABISAVILLAGE SASAMA ―暮らしの中のアート展－」の開催

暮らしとアートがどのように交わることが出来るのかをテーマに、３つのグループに分かれ展示を行った。展示会　場には 2007 年に廃校となった旧笹間中学校を利用し、「廃校」という負の遺産の活用法への提言の一つとなることを目指した。

・スウェーデン人陶芸家グループ KAOLIN より 12 名の陶芸家が、地域の基幹産業の茶業で使用する茶箱を利用した展示

・6 名の日本人アーティストが、イケアジャパンより寄贈された家具を活用して装飾した空間への作品展示

・スウェーデンと長年交流がある北海道・当別町へのヒアリング等を元にした紹介展示

日　時：2019 年 11 月 3 日（日）・4 日（月）

会　場：旧笹間中学校館内

参加者：鑑賞者 2,800 人

●シンポジウム「ラゴムに学ぶ、ちょうどいいライフ+アート」の開催

ゲストパネリストに陶芸家道川省三氏、ピアニスト牧村英里子氏を、ファシリテーターに国立大学法人静岡大学人文社会科学部客員教授平野雅彦氏を迎え、過疎地域でも実践できる幸福的な暮らし方を考えるシンポジウムを開催した。

日　時：2019 年 12 月 7 日（土）

会　場：静岡大学 静岡キャンパス大学会館

参加者：45 人

●WABISAVILLAGE SASAMA　コンセプトブック制作
笹間の日常をテーマに、WABISAVILLAGE SASAMA のプロジェクトで目指すものを写真・文章にて発信することを目指して、コンセプトブックを作成した。

日　時：2020 年 3 月末
ページ数：48 ページ
印刷部数：700 部

■担当コーディネーターのふりかえり
この企画の最大の良さは、笹間に移住してきた方々が中心となっている事だ。笹間の地域資源をひとつひとつ丁寧に見つけ、特に地域の年長者の皆さんの「日常」がどんなに「素敵」なのか、長年地域に暮らしている住民へ伝えている。暮らしの中のアート展は「第五回ささま国際陶芸祭」のなかで行ったことで、日本に止まらず海外からのお客様にも大勢来場いただいた。地元のお母さんたちによる手作りの食事は笹間の魅力をより一層引き立ててくれた。
また、WABISAVILLAGESASAMA コンセプトブックは「笹間」を国内外に発信するツールとして大活躍してくれるだろう。「小さな集落」ではあるが、「大きな可能性」を感じる事業であった。

（門脇幸）

14.川根本町伝統文化保存会「伝統文化交流会」

■団体概要

赤石太鼓保存会を中心とした町内の伝統文化団体により結成された組織。2019 年 3 月に建設された伝統文化伝承館「時愛（ときあ）」の活用の創出を行うため、同年結成。「時愛」を情報発信拠点として活用し、交流会、ワークショップを開催し、後継者不足解消や失われつつある文化の再興、隆起を目指していく。新たな時代に向けての伝統文化を伝承するとともに芸術の域に高めるよう、文化意識の向上を図るための活動を行なっていく。

■2019 年度事業内容

●ワークショップ

町内の伝統文化芸能団体の問題点をワークショップ形式により明確化した。

日　時：2019 年 7 月 13 日（土）

会　場：伝統文化伝承館～時愛～

参加者：

梅津神楽保存会 2 人、田代神楽保存会 1 人、徳山古典芸能保存会 3 人、赤石太鼓保存会 2 人、川根本町文化協会 3 人、千年の学校 9 人、一般参加者 2 人

●「伝統文化交流会」公演会及び交流会の開催

町内外の伝統文化団体を一同に介し発表公演を行った。

日　時：2019 年 9 月 7 日（土）

会　場：伝統文化伝承館～時愛～

参加団体：

はいばら太鼓、井川神楽、徳山神楽、金谷大井川川越太鼓、赤石太鼓、笹間神楽、徳山の盆踊り、梅津神楽

参加者：約 600 人（鑑賞者、出演者含む）

■担当コーディネーターのふりかえり

太鼓や神楽、盆踊りなど川根本町では多数の伝統芸能があるなか、団体の存続については、他の地域と同様に少子化や人口減少によって厳しい状況である。では一体どうすれば良いのかについて考えるためのワークショップは、漠然としていた問題点を明確にすることができたのではないだろうか。

それぞれの団体の悩みを共有することで、地域での伝統芸能の必要性を参加者が改めて感じ、考える貴重な時間となった。伝統芸能をしている人だけでなく、次世代の若者へ芸能の歴史的背景なども含めて「伝える」ことは、地域を理解し地域の「資源」を再認識できるツールになり得るのだ。

団体だけの問題ではなく広く地域住民と共に「伝統芸能」を守っていくというスタート地点に立った１年となった。

（門脇幸）

15.一般社団法人ふじのくに文教創造ネットワーク
「新時代の『課外活動』への挑戦！ ～地域部活・掛川未来創造部 Palette～」

■団体概要

静岡県を拠点に、音楽芸術を中心とした文化教育事業の創造・発信を通して、生涯学習環境の創造を目指し、2010 年に設置した地域ネットワーク。（2020 年に解散し、新 NPO 法人を設立予定）
家庭の経済状況に関わらず子どもが多様な文化・芸術体験を積むことできるようにするため、継続的、分野横断的な課外活動として中高校生を対象とする総合文化系「地域部活」を創設。産業界による支援や、成長した体験者の運営参画等による長期的な運営モデルの確立を目指す。

１．文化部活動の選択肢の拡大
２．豊かな感性、寛容な心、人間力を重視した子どもたちの学びの場の提供
３．地域文化活動の担い手の輩出

■2019 年度事業内容

●部活動の開催：100 回
音楽、演劇、ダンスをはじめとする部活動を実施し、それらを通して学んだことを生かしながら、部員自らがイベントなどの企画、運営、制作を行った。部活動には講師として専門家が入ることもあり、表現方法を伝えること、また鑑賞プログラムや移動教室なども取り入れた。2020 年 2 月から一か所に集まっての活動ができなくなったが、ZOOM を使用した「テレ部活」をスタートし、より幅広い活動方法を部員全員でチャレンジした。

部員数：掛川市内 5 中学校より 20 名が入部
主な活動場所：掛川市美感ホール
※2020 年 2 月末～3 月末迄の計 12 回の活動は、学校の臨時休業に伴い部活動も休止

●イベントへの出演
掛川周辺で行われる外部イベントへの出演を積極的に参加した。表現をするパフォーマンスだけでなく、脚本、演出、なども部員が行い、またプロも含むステージに一緒に立つ貴重な経験をした。
・ふじのくにユニバーサルミュージックフェスティバル in Kakegawa2019
　日　時：2019 年 7 月 14 日（日）
　会　場：掛川市美感ホール
・ラグビーワールドカップ 静岡県文化プログラム スペシャルコラボステージ 出演
　日　時：2019 年 9 月 28 日（土）
　会　場：エコパ周辺おもてなしエリア（JR 愛野駅前）

●主催事業（主なもの）
・創作劇「遠州報徳と我が故郷」上演
　日　時：2019 年 10 月 27 日（日）14:00 開演
　会　場：大日本報徳社　大講堂前広場（野外上演）
・小学校 6 年生対象 部活体験＆説明会（計 3 回）
　日　時：2020 年 2 月
　会　場：掛川市美感ホール

鑑賞者数（公演などの観客、お客様）：1,367 名　※主催行事のみ
関係者数（部員およびスタッフ出席者数）：2,000 名　※計 100 回の延べ人数、実数 各 20 名

■担当コーディネーターのふりかえり
スタートした 2018 年度は、主に各分野の講師が入って活動していたが、2019 年度は本来の部活動の姿である、生徒主体の体制が整った 1 年であった。特に 1 年生が入ったことで、 2 年生の責任感のめばえや、それぞれが得意な分野で力を発揮することで、部活動としての連帯感も強くなった。10 月に行われた創作劇「遠州報徳と我が故郷」上演では、生徒が脚本を書き、出演しての芝居、音響、その他を分担して屋外で披露した。地元の資産である「報徳」と掛川を題材にした演劇は、詰めかけた多くの地元の大人達の心を打ち、涙する人たちでいっぱいとなった。生徒にとっても、改めて自身の住んでいる掛川を見つめ直す機会となり、普段接する機会のない方々との貴重な時間の共有となったことで、部活動の方向性が改めて明確になった瞬間となったと感じた。地域の方々にとっても文化系地域部活がどのような活動なのかを理解してもらうこととなった。

（門脇幸）

16.原泉アートプロジェクト「原泉アートデイズ！2019～泉とともに」

■団体概要

掛川市北部の中山間地域である原泉地区にアトリエを構え制作活動をする作家とともに、現代アートを軸にした地域づくりを進める任意団体。

「原泉アートデイズ！」は、原泉地区でアーティスト・イン・レジデンスを開き、滞在したアーティストたちの制作のプロセスから展示作品の発表までを総称した、様々なアーティストによる「作品展示とパフォーマンス」、作品や各種グッズを販売する「アートストア」、アーティストと触れ合い学ぶ「イベント＆ワークショップ」からなる複合的な現代アートイベントである。

■2019 年度事業内容

2019 年度は 10 月に開催したメインイベントの他に、9 月にプレイベントとして「使われなくなった茶工場で観る NIGHT THEATER」や、毎月 1 回の食堂イベントなど、年間を通じて活動することで、地域のプロジェクトへの理解促進に力を入れた。

メインイベントでは国内外のアーティスト 10 組が参加し、原泉地区での滞在制作をベースに、絵画、彫刻、インスタレーション、映像、演劇、パフォーマンスなど多様な作品を発表した。展示にあたっては、旧茶工場、旧 JA、旧駄菓子屋など地区内の空き施設や空き家を地域資源の一つとして捉え、積極的に活用することで地域振興にもつなげている。

日　時：2019 年 10 月 24 日（木）～11 月 10 日（日）10:00～16:00（火・水休業）
会　場：掛川市原泉地区全域
観覧料：自由（投げ銭式）

■担当コーディネーターのふりかえり

「原泉アートデイス！」はアーティスト・イン・レジデンスをベースとし、アーティストが一定期間原泉地区に滞在することで、ディレクターや運営メンバーとの議論を重ねながら作品制作したり、地域の人や自然と関わり合ったりすることを徹底して行なっている。これにより、参加するアーティストには、自身が地域とどのように関係していくかについて深い意識が生まれ、作品としての強度も上がっているのだと感じる。その成果として、ここで制作された作品が現代アートのコンペティションで大賞を受賞した。

また、空き施設を活用した成果として同団体以外の活用が始まったり、建物の持ち主を通じて若年層のサポーターが生まれたりするなど、会　場の変化だけでなくその会　場にまつわる人の変化も見ることができた。本プロジェクトの面白みが着実に地域の人々に浸透してきているからこそではないか。

本プロジェクトの最大の特徴として、自らの手で持続可能なプロジェクトを作り出そうとする姿があげられる。助成金等の既存制度を活かしつつも、自分たちの最適な運営のあり方を見出すため、ドネーション（投げ銭）とアートストア運営に力を入れ、原泉地区の魅力を感じた人がプロジェクトのファンとして関わることができる、関係人口の創出を目指している。

（立石沙織）

17.ふじのくにラボ「遠州森町の舞楽・舞楽食　～食文化～次世代に繋ぐ～」

■団体概要

地域に紐づいた和食文化を次世代へ継承することを目的とし、伝統芸能及び土地の風習・風俗に付随する食文化の調査・再現・アレンジなどを実施する料理人３人で構成する団体。

■2019 年度事業内容

舞楽奉納の際に食べられていた食事を「舞楽食」と名付け、遠州森町を対象に、文献や地元住民、有識者への取材を行い、舞楽食の再現を試みた。再現した舞楽食を披露するとともに、今後の継承について考えるワークショップを開催した。

●第１部　知ってみよう森町の舞楽の世界　小國神社舞楽「色香」の舞　解説・実演
田鍬智志氏（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授）
北島恵介氏（森町教育委員会社会教育課技監）
白幡富幸氏（遠江国一宮小國神社古式舞楽保存会）

●第２部　時代を経て遠州森町の舞楽食
・寛政年間の舞楽食再現・舞楽食試食・座談会
・講演　食文化～次世代に繋ぐ～　高島知佐子氏（静岡文化芸術大学准教授）

日　時：2019 年 11 月 18 日（月）18:00～20:40
会　場：静岡文化芸術大学 食堂
参加者：100 名

■担当コーディネーターのふりかえり

「舞楽食」は団体によってつくられた造語である。

しかし改めて考えてみたら、かなりの時間をかけて舞を奉納するのだからお腹も空く。そしてその食事は神様の前で食べるものになるわけだし、そこになんらかの考えやしきたりや特徴があってもおかしくない。輸送手段が限られていた頃では、その地で手に入る物で調理するわけで、誰が何も言わずとも地産地消となるし、毎年定期開催されることで子ども達にとっては、旬を知ることにもつながることかも知れない。

まだスタートしたばかりであるが、料理人たちがそこに目を向け、ただの調査ではなく、現代の状況やニーズに合わせた形をつくりだすスタンスに期待している。

（鈴木一郎太）

18.浜松市根洗学園（社会福祉法人ひかりの園）
「わが家流子育てのすすめ　～アート×療育×コミュニケーション～」

■団体概要

発達にゆっくりさがみられる幼児期の子どもの療育施設で、アーティストとのプログラムを通じて、施設職員の創造的取組、家族との関わりの活性化を図りながら、療育の場へのアートの導入効果を考察し、他の施設でも適用可能な手引書を作成する。具体的には、「おべんとう画用紙プロジェクト」「ワークショップシリーズ」「アーティストインレジデンス」等を通して施設での経験を外部に発信し、共有を図る。

■2019 年度事業内容

アーティストの持つまなざしや技術と、療育現場の相性のよさに着目しプログラムを展開。2019 年度は、プログラム毎の対象をはっきりとすることで、それぞれのプログラムを今後先鋭化させる糸口をつくろうというねらいを設定。

●アーティスト・イン・レジデンス

療育現場内での滞在から着想を得て、現場の人たちと共に作品を作り上げるプログラム。演劇家の柏木陽さんを迎え、2 パターンの映像作品をつくった。

ひとつは、現場の先生達が日頃の子ども達とのやりとりの中で何げなく使っている技に着目した映像集だ。療育のみならず保育の現場との親和性も高い内容であり、過酷さが取り上げられることの多い保育現場に向けてエールを送るような意味合いも読み取れる。外部に公開できるよう、ドキュメンタリー形式ではなく、俳優を用いて撮影をした。

もうひとつは、滞在期間を通じて一人の子を追い続け、その子の変化、周囲の関わりなどをまとめたドキュメンタリー的な長編映像だ。こちらはプライバシーの関係で公開ができないことを前提に、映像の位置づけを学園内でのコミュニケーションツールとしての使用を想定していた。

●子育て中のおかあさん向けワークショップ「ゆるゆるしてみる２」
コミュニケーションの幅広さを楽しく体感するシリーズ。母親達が少しだけ日常を離れ心や体をリラックスさせながら、日頃様々な方法で感情を表す子どもたちとやりとりする時の幅を広げるヒントをつかむことをねらいとしている。
川口淳一（作業療法士、勇輝病院リハビリテーション部作業療法科科長）参加／7 名　託児参加／5 名
柏木陽（NPO 法人演劇百貨店代表、演劇家）参加／8 名　託児参加／5 名
砂連尾理（振付家、ダンサー）参加／8 名　託児参加／5 名
片岡祐介（音楽家）参加／8 名　託児参加／5 名

●親子音楽ワークショップ
音を介したコミュニケーションや、その中で起こる様々な気付きを促す親子対象の音楽ワークショップ。複数家族が同時に参加し楽しむ「みんなで」と、ひと家族ごとに音楽家とセッションする「しっぽり」の 2 パターンをそれぞれ 3 回ずつ実施。ワークショップへの参加はしり込みする家族のためにコンサートも開催した。

講師：片岡祐介（音楽家）
ワークショップ参加者：のべ 31 家族
コンサート参加者：43 名

■担当コーディネーターのふりかえり
発達がゆっくりな子どもに寄り添い、発達を促す支援をするのが療育施設の仕事である。子どもはそれぞれに違いがあり、親や家族の状態もそれぞれに違う。こうした状況を支えるために福祉制度の整備と専門性に富んだ実践が行われている。そのように整えられた専門性に対して、少し素朴で根源的なアプローチをしようとしているのが根洗学園の取組ではないかと思っている。
ダンス、音楽、演劇の専門性を取り入れ、そこから療育・保育現場との親和性や共通項を見つけ出し、福祉の専門性をより効果的に活かせる状況をつくろうとしていると感じる。福祉の業界には身体機能の専門家として作業療法士・理学療法士がいるが、ダンサーも身体の専門家である。身体を使って表現すること、そのために身体に意識を向けること、周囲の空間と身体の関係性を考えること、それらは日頃の生活の中で無意識にしていることでもあるが、意識的にしてみることで発見することがあるのではないか、というのが根洗学園の問いかけだ。
文化芸術は人間の営みの中にある様々な物事を駆使して表現をつくりだす。丁寧に探れば、それらと社会のいろいろな分野や場面との接点や親和性が見つかるはず。そこで見つかるアプローチは普段それぞれの所でやられていることとは別角度のアプローチかもしれないが、だからこその発見や気付きにつながるはずである。最近では対象をしぼった取り組みが目立つ根洗学園の事業であるが、今後も注目していきたいと思う。

（鈴木一郎太）

19.特定非営利活動法人クリエイティブサポートレッツ「表現未満、プロジェクト」

■団体概要

2000 年に設立された認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ（以下、「レッツ」）は、現在、静岡県浜松市の中心市街地に「たけし文化センター連尺町」として拠点を構える。障がい福祉施設でありながら、地域の文化創造発信拠点となることを目指し、「障がいや国籍、性差、年齢などあらゆる「ちがい」を乗り越えて、人間が本来もっている「生きる力」「自分を表現する力」を見つめていく場を提供し、全ての人々か互いに理解し、分かち合い、共生することのできる社会つくりをおこなう団体である。

■2019 年度事業内容

レッツは、「表現未満、プロジェクト」の一環として、「雑多な音楽の祭典～スタ☆タン！！」を実施している。

2019 年度は、「表現未満、」文化祭のオープニングを飾るイベントとして、「たけし文化センター連尺町」にて 3 回目を開催し、 1 階から 3 階まで建物全体を使い、 6 時間に及ぶステージを繰り広げた。出演者だけでなく審査員も公募し、芸術家や音楽家、福祉施設職員などの 7 人が審査を行なった。

障がい者施設でもある建物を会場とすることにより、「表現未満、」の意味と、人の持つ表現の可能性と多様性を示す試みであった。

日　時：2019 年 11 月 3 日（日）13:00～19:00
会　場：たけし文化センター連尺町
参加者：250 名、全国映像配信視聴者数 1,500 名

■担当コーディネーターのふりかえり

2000 年の設立から一貫してソーシャルインクルージョンを目指して活動しているクリエイティブサポートレッツは、お互いに尊重していこうとする文化活動「表現未満、プロジェクト」をブンプロと共に 2016 年から育ててきた。その活動は平成 29 年度芸術選奨文部科学大臣新人賞を代表の久保田翠さんが受賞するまでに注目を集め、アートが社会福祉、地域包括、社会包摂などの分野の構造を変えられることを世の中に示すまでになった。2019 年度は「表現未満、プロジェクト」の中から、「表現未満、」な音楽パフォーマンスを全国から公募形式で集めた「雑多な音楽の祭典～スタ☆タン３～」をブンプロではサポートした。

通常、福祉施設への訪問者は限定的だが、障がい者施設で文化事業を行うことで、多様な他者との出会いを生み出している。それは「知らない」ことによる差別を防ぐのみならず、訪問者に他者を通じて自己を見つめる機会や、ありのままの存在を肯定する「場づくり」を提供している。「表現未満、は利用者に宿る創造性を文化として肯定する試み」である。それは同時に訪問者自身にとっての創造性や主体性を生み出す装置にもなっているのである。

（佐野直哉）

静岡県文化プログラム推進委員会委託事業

Ⅶ 個別事業の詳細評価（濃い評価）

Scale Laboratory

— 目次 —

評価概要（エグゼクティブ・サマリー）.....78
1.団体概要　Scale Laboratory（スケイル・ラボラトリィ）.....78
2.評価目的.....78
3.評価設問.....78
4.評価概要.....78
1.概要.....81
1-1. Scale Laboratory.....81
1-2.評価結果.....82
2. Scale Laboratory の活動.....83
2-1.経緯.....83
2-2.特徴.....84
2-3.実施体制.....84
2-4.活動地域.....85
2-5.活動の背景と課題意識.....86
2-6.セオリーオブチェンジ.....88
3.活動の軌跡（2015 年 12 月～2020 年 3 月）.....89
4.評価結果.....91
4-1.評価目的.....91
4-2.アートのニーズ.....91
4-3.スケラボの活動によって生まれた価値.....92
5. 価値を生み出した貢献要素.....110
6.今後に向けて.....112
付録.評価実施概要.....113

本評価について

・本評価は Scale Laboratory の活動によってもたらされた変化が、地域や個人に対してどのような価値を創出しているのかを明らかにするものである。

・Scale Laboratory の作品の芸術性を評価するものではない。

評価概要（エグゼクティブ・サマリー）

1.団体概要　Scale Laboratory　（スケイル・ラボラトリィ）

主な活動内容	2016 年 2 月に生まれた Scale Laboratory は、静岡県東部を中心に公演やワークショップ等、様々な形でアートを楽しむ機会を提供するグループである。提供する機会は「観る」ことから「創る」ことまで幅広く、使われなくなった建物の一角やストリート、保育園や学校等、多様な場でアートを繰り広げる。 11 人の中心メンバーのうち 8 人が静岡県東部在住、1 名が静岡県出身海外在住、2 名が静岡県外在住であり　(2020 年 4 月現在)、本業は舞台監督、パーカッショニスト、デザイナー兼アートマネージャー、イラストレーター、印章店経営、NPO 職員兼映像作家、舞踏家、お笑い芸人兼美術講師、設計士等様々である。スケラボの活動は中心メンバーに加えて、公演に出演・協力する静岡内外のアーティスト、広報や運営等様々な支援をする地元の人々によって支えられている。
主な活動領域	静岡県東部（沼津市、三島市等）

2.評価目的

本評価はスケラボにかかわる多様なステークホルダーから評価情報を得て、スケラボの活動によって生まれた変化と創出された価値につい見える化すること、及び価値の創出に対する貢献要因を抽出することを目的とする。評価結果は、今後のスケラボが活動方針を検討する際の参考情報として、またスケラボの活動の価値を静岡県文化プログラムやその他スケラボをサポートする関係者への発信に活用されることが期待される。

3.評価設問

（1）スケラボが地域の人たちに提供しているものは何か？

（2）地域のアート人材の共創を促進する「仕組み」と「特徴」は何か？

4.評価概要

（1）スケラボが地域の人たちに提供しているものは何か？

スケラボの中心メンバー及び関係者へのインタビュー、公演の観客へのアンケート、スケラボの発行する文書を通じて得られた評価情報から、スケラボが良質なアートを地域に提供していることに加えて、地域の文化芸術資源の開発、アートに関わるつながりの社会関係資本の構築、地域の魅力化等、多様な価値を創出していることが明らかになった。

①スケラボの特徴的な活動方法により、地域のアーティストやアートに関心の高い人たちの間の共創が促進されている

■スケラボは「音楽」「舞踏」のような決まったジャンルにとらわれず、実験的な企画を展開しているため、様々な分野のアーティストやアートに関心を持つ人を幅広く惹きつけている。また毎回の企画の発案をしたメンバーがすべてを決めることはなく、中心メンバーやその他の人とコン

セプトを共有し、相談しながら具体化していくことが多いため、多様な人たちがそれぞれの力を発揮できる役割を担ってきた。

■スケラボの中心メンバーや協力者が自分の表現方法やスキル、関心分野を持ちよりながら協働することで今までなかったアートの企画を実現している。

②良質なアート体験の機会を提供している

■スケラボの企画には代表の川上氏をはじめとして国内外で活躍するアーティストが係わっている。静岡県東部で多様なアートに触れる機会が限られているなか、ジャンルにとらわれず、常に新しい表現を創り出すスケラボの活動は、こどもから本格的なアートを求めるおとなまで幅広い年代の参加者を惹きつけている。25 歳以下の公演チケット代が安価に設定されているため、若者が地元で負担なくアートに触れられる貴重な機会を提供している。

■スケラボの企画は一言で説明しにくいものが多いが、その魅力を知った参加者の口コミを介した広報により、参加者の層を広げてきた。また、ストリートやショッピングモールで公演し、そこで観客も参加できるしかけを用意することで必ずしもアートに強い関心を持っていない層も本格的なアートに触れるきっかけを作ってきた。

■ワークショップやアウトリーチは参加者がアーティストと近い距離で、主体的にアートにかかわる場となっている。参加者はアーティストのサポートを得て自由な発想や表現を伸び伸びとアウトプットすることができ、これにより自己効力感や生活の質を向上させることにつながっている。

③人々の思いと力を引きだすエンパワメントの装置になっている

■中心メンバーは多様なアーティストがジャンルを超えて協働する中で新たな表現を創りだしたり、新しい仕事にチャレンジしたりすることにより、アーティストやアートを支える人としての力を高めている。また、スケラボで培ったスキルや人脈はスケラボ内だけにとどまることはなく、個々の仕事でも役立てられている。

■若者がスケラボの活動を近くで観たり、スケラボメンバーと話したりすることで、社会を見る視点が大きく広がり、アートが存在する地域の魅力を見出している。

■公開プレゼンテーションの企画により、地域にアートを広げたい人、よりよい地域をつくっていくためにアートの力を必要といている人たちが、想いを口にし、その想いに対してスケラボや他の参加者も一緒に考えていくことで、構想が実現し、地域づくりに寄与している。

（2）地域のアート人材の共創を促進する「仕組み」と「特徴」は何か？

スケラボの評価情報を分析していくなかで、スケラボが地域に変化をもたらし価値を生み出した理由がステークホルダーのインタビューで触れられていた。スケラボの価値創造を可能にした貢献要素を以下の通り抽出する。

■アートを楽しむことを何よりも大切にする姿勢

スケラボはアートで地域の人が楽しむことを何より大切にしている。小さな子どもを対象にするイ

ベントを開催することが決まれば、その対象のことをアーティストたちが深く考えてオーダーメイドの企画を練る、商店街の公演であれば、その空間を利用したパフォーミングアーツを展開する。このように、その対象、その場に合った新しいアートの企画を徹底的に考える、良質なアートを体験する機会を提供することにより、結果として観客による公演自体の高い評価につながる。また参加者が手を動かすワークショップでは、技術を高めたり、画一的な成果物を作ったりすることを目的とせず、参加者が作品を作る過程を楽しむことを重視し、講師はその過程をサポートする。何かの手段としてアートを「活用」するのではなく、専門性の高いアーティストたちが、純粋に地域にアートを提供することを追求していくことで、参加者は普段の生活の質を上げ、また、地域の価値を発見するなど、様々な価値創出に寄与した。

■「アートを提供する側」「される側」の境目を無くす試み

スケラボは「アートを提供する側」「される側」の境目を無くし、そこにいる人たちが主体的に関与することを目指している。ショッピングモールの公演では、買い物客が踊りだし、チェコ共和国のアートフェスティバルでは国籍や年齢を超えた観客数百人が一体となって踊り、最後お互いがハイタッチをするような場を創りだしてきた。

スケラボの公演でも演者と観客の物理的な境を感じさせない空間利用が行われ、演者や制作側と観客と語らう行うアフタートークも公演の一部として双方が楽しむほか、スケラボの中心メンバー自身、出会った人たちの想いを聞き、対話をすることを大切にしてきた。

こうした姿勢により人同士の距離狭まり、観客として訪れた人のなかから、イベントの手伝いをしたり、広報に協力したり、中には中心メンバーになったり、というように、豊かな社会関係資本が築かれていった。

■共創を促進するリーダーシップと中心メンバーが共有する価値観

長年舞台監督を仕事としてきた川上氏は、チームで作品を創り上げてきた。良いものをつくっていくために言われたことだけをするのではなく、ひとりひとりができることを考えることが重要であると同時に、チームメンバーが本音を言える環境をつくるリーダーシップが必要と考えてきた。スケラボでも各企画は中心メンバーがプロデュースを務めることも多く、どう企画を発展させていくかは各々に任されている。一方で、良質なアートを届けるために、各中心メンバーがマネジメントや渉外、広報、記録等、それぞれの役割を合わせて力を合わせている。

また、スケラボのビジョンやミッションや明文化されてはいないものの、中心メンバー及び山崎氏のようにスケラボの活動を近くで支える人たちの間でスケラボが大事にしてきた想いやアートや地域に向き合う姿勢が共有されていることがインタビューから伺えた。それぞれの力を引きだすリーダーシップと、共有する価値観が多様な人たちの協働を可能にしていると考えられる。

■地域の人脈の豊富さ

スケラボの中心メンバーの多くは静岡東部在住または出身であり、スケラボと出会う前から地元の人たちとのつながりを持っている。例えば中心メンバーの一人、住氏は三島市の佐野美術館の学芸員を務めた後に、三島市の委託を受けて地域のアートを紹介する仕事をしたり、フリーランスのア

ーティストの集まりに参加したりしてアートにかかわるひととのつながりを構築していた。さらに、出産後、平日日中に地域で過ごす時間が長くなったことで、異業種でありながら自由な発想で地域で取り組みを行っている人との人脈を築いていた。
アーティストに限らず、地域で様々な取り組みをしている人、またしたいと思っている人を招いて行った公開プレゼンは、住氏をはじめとするメンバーの豊富な地元の人脈と積極的な声がけによって実現した。
地域のつながりを通じて、様々な取り組みとアートを融合させていく活動は、外部から一時的の地域を訪問する団体にはできない。スケラボだからこそ、地域の人たちとの協働による企画を生み出し、また公演会場を飛び出して保育園や学童保育、学校など地域の中に出向いて活動することができているといえる。

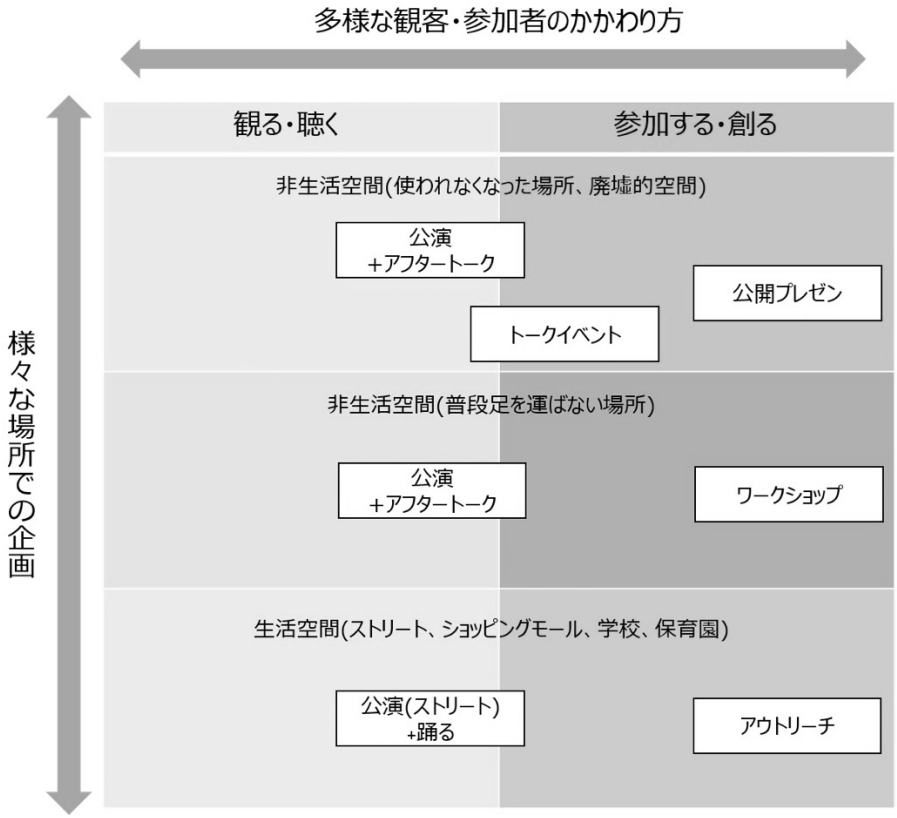
1.概要

1-1.Scale Laboratory

幅広いアートの機会を創出

2016 年 2 月に生まれた Scale Laboratory（以下「スケラボ」）は、静岡県東部を中心に公演やワークショップ等、様々な形でアートを楽しむ機会を提供するグループである。提供する機会は「観る」ことから「創る」ことまで幅広く、使われなくなった建物の一角やストリート、保育園や学校等、多様な場でアートを繰り広げる。（図 1）。

図 1：多様な活動の展開



地元のメンバーが支える活動

スケラボは発足以来、発起人とその友人や家族の人脈を起点に、地域のアーティストやアートに関心の高い人々が様々なイベント企画に参加者やサポーターとして関わり、そのなかで中心となるメンバーが固定されてきた。11 人の中心メンバーのうち 8 人が静岡県東部在住、1 名が静岡県出身海外在住、2 名が静岡県外在住であり　(2020 年 4 月現在)、本業は舞台監督、パーカッショニスト、デザイナー兼アートマネージャー、イラストレーター、印章店経営、NPO 職員兼映像作家、舞踏家、お笑い芸人兼美術講師、設計士等様々である。スケラボの活動は中心メンバーに加えて、公演に出演・協力する静岡内外のアーティスト、広報や運営等様々な支援をする地元の人々によって支えられている。

1-2.評価結果

スケラボの中心メンバー及び関係者へのインタビュー、公演の観客へのアンケート、スケラボの発行する文書を通じて得られた評価情報から、スケラボが良質なアートを地域に提供していることに加えて、地域の文化芸術資源の開発、アートに関わるつながりの社会関係資本の構築、地域の魅力化等、多様な価値を創出していることが明らかになった。

1. スケラボの特徴的な活動方法により、地域のアーティストやアートに関心の高い人たちの間の共創が促進されている

■スケラボは「音楽」「舞踏」のような決まったジャンルにとらわれず、実験的な企画を展開しているため、様々な分野のアーティストやアートに関心を持つ人を幅広く惹きつけている。また毎回の企画の発案をしたメンバーがすべてを決めることはなく、中心メンバーやその他の人とコンセプトを共有し、相談しながら具体化していくことが多いため、多様な人たちがそれぞれの力を発揮できる役割を担ってきた。

■スケラボの中心メンバーや協力者が自分の表現方法やスキル、関心分野を持ちよりながら協働することで今までなかったアートの企画を実現している。

2. 良質なアート体験の機会を提供している

■スケラボの企画には代表の川上氏をはじめとして国内外で活躍するアーティストが係わっている。静岡県東部で多様なアートに触れる機会が限られているなか、ジャンルにとらわれず、常に新しい表現を創り出すスケラボの活動は、こどもから本格的なアートを求めるおとなまで幅広い年代の参加者を惹きつけている。25 歳以下の公演チケット代が安価に設定されているため、若者が地元で負担なくアートに触れられる貴重な機会を提供している。

■スケラボの企画は一言で説明しにくいものが多いが、その魅力を知った参加者の口コミを介した広報により、参加者の層を広げてきた。また、ストリートやショッピングモールで公演し、そこで観客も参加できるしかけを用意することで必ずしもアートに強い関心を持っていない層も本格的なアートに触れるきっかけを作ってきた。

■ワークショップやアウトリーチは参加者がアーティストと近い距離で、主体的にアートにかかわる場となっている。参加者はアーティストのサポートを得て自由な発想や表現を伸び伸びとアウ

トプットすることができ、これにより自己効力感や生活の質を向上させることにつながっている。

3. 人々の思いと力を引きだすエンパワメントの装置になっている

■中心メンバーは多様なアーティストがジャンルを超えて協働する中で新たな表現を創りだしたり、新しい仕事にチャレンジしたりすることにより、アーティストやアートを支える人としての力を高めている。また、スケラボで培ったスキルや人脈はスケラボ内だけにとどまることはなく、個々の仕事でも役立てられている。

■若者がスケラボの活動を近くで観たり、スケラボメンバーと話したりすることで、社会を見る視点が大きく広がり、アートが存在する地域の魅力を見出している。

■公開プレゼンテーションの企画により、地域にアートを広げたい人、よりよい地域をつくっていくためにアートの力を必要といている人たちが、想いを口にし、その想いに対してスケラボや他の参加者も一緒に考えていくことで、構想が実現し、地域づくりに寄与している。

2.Scale Laboratory の活動

2-1.経緯

発足のきっかけは 2015 年 12 月、現在スケラボの代表を務める川上大二郎氏が静岡県函南町の自宅に友人を招いて開催した小さなデッサン会だった。デッサンにモデルとして東京から参画していた舞踏家のパフォーマンスを見たいという声があがり、同日夜、デッサン会の参加者やその友人・家族が集まる中、静岡県三島市のレストランカフェでライブパフォーマンスが繰り広げられた。2016 年 2 月には川上氏は自由にアートを楽しむこうした取り組みを Scale（測り・尺度）、Laboratory（実験室）を組み合わせた「Scale Laboratory」と名付け、友人や地域の仲間とともに、公演やワークショップ、アートトーク等を沼津市や三島市等静岡県東部を中心に多様なアート活動を展開していく。最初の活動から 2020 年 3 月に至るまで、スケラボは静岡県内で 102 回、チェコ共和国で 4 回、真鶴町で 1 回の計 107 回のイベントを手掛けた。

川上氏の本業は舞台監督で、公益財団法人静岡県舞台芸術センター（Shizuoka Performing Arts Center : SPAC）を含め、国内外の様々な舞台を手掛けている。東日本大震災後に東京からの移住先を探していた際に自身の家族にゆかりがあり、幼少期によく訪れていた静岡県に居を移していた。スケラボ始動のきっかけとなった良質なアートを生で楽しむ機会を地域の人と分かち合いたいという想いと、その想いに共感したひとたちから広がるつながり、そこで得た仲間とにジャンルにとらわれない唯一無二のアートを共創していく試みは発足当時から現在まで変わらずスケラボの個性の根幹を成している。

当初は中心メンバーの手弁当で行っていた活動だったが、2016 年 10 月に静岡県文化プログラムの採択が決まり、その後連続して助成を受けたことにより、活動の幅が厚みを増してきた。

2-2.特徴

スケラボの活動の幅が広がる中で、発足当初から現在に至るまで団体の特徴、あるいは「姿勢」といえるものが形作られてきた。これらの中には発足当初からあるもの、活動の中で加わったもの、意図したもの、意図せずに形作られたもの等様々である。

■自由：ジャンルにとらわれない
舞台美術、音楽、舞踏、写真等ジャンルにとらわれず、またしばしばジャンルを掛け合わせた良質なアートを地域で地元の人たちと楽しむ。
■双方向：人のコミュニケーションから生まれる化学反応を大切にする
アーティスト同士の対話から生まれたアイデア、参加者や観客との言語・非言語のコミュニケーション、地域の人たちの想いをすくって、次の企画や作品作りに反映させる。
■冒険心：唯一無二のアートの機会を創る
街の中心にありながら使われていなかったスペース、アート以外の目的で使われている場所を「地域の文化芸術資源」として見出し、そこでしかできないアートを生み出す。訪れた人が初めて体験するようなアートの機会創造に取り組んでいる。

2-3.実施体制

中心メンバーに加え、ゲスト・アーティスト、地元のサポーターや協働者によってスケラボの活動が展開されている。

■中心メンバー
発足以来、中心メンバーの多少の入れ替わりはあるが、2020 年 4 月時点で 11 が中心メンバーとして活動している。「概要」で述べた通り、8 人が静岡県東部在住、1 名が静岡県出身海外在住、2 名は静岡県外在住で、多くは創造産業やそれに近い本業を持ちながらスケラボの活動に携わっている。
■地元のサポーター
スケラボの活動に欠かせないのが地域の支援者の存在である。アートへの関心が高くスケラボの活動を応援したい、もっと多くの人に良質のアートを体験してほしいという思いからイベントの告知、当日の運営手伝い等様々な場面で力を貸しており、未成年も含まれる。三島市のレストランカフェ「dilettante cafe （ディレッタント カフェ）」やスケラボが公演で活用する沼津市の駅ビル「沼津 RAKUUN」のように、会場提供で協力するサポーターいる。サポーターはスケラボの手伝いをしながら観客や参加者としてスケラボのアートを楽しむ最もコアなファンでもある。サポーターとして最初はかかわり、その後声をかけられて中心メンバーになった人もいる。
■協働者
障がい児のデイケア施設や保育園、ショッピングモールの運営者等、アートの力を信じ、それぞれが持つビジョン実現のためにスケラボの力を必要とする人たちともに、こうした協働者が運営する施設内におけるアート企画を実現してきた。これによりスケラボも新しいアート表現や地域とのかかわり方を見出し、協働者とスケラボ、双方がかかわることの相乗効果が生み出されている。

■ゲスト・アーティスト

中心メンバー自らがパフォーマンスをしたり、ワークショップの講師を務めたりすることは多いが、メンバーの人脈を通じて県外からアーティストを招聘することもある。公演でのパフォーマンス、公演衣装の制作、ワークショップの講師等、スケラボの活動に欠かせない役割を担っている。

2-4.活動地域

スケラボは主に静岡県東部で活動を重ねてきた。2016 年 2 月の発足から 2020 年 3 月までの約 4 年間の活動地域は以下の通りである。

図 2：Scale Laboratory の活動地域（2016 年 2 月～2020 年 3 月）

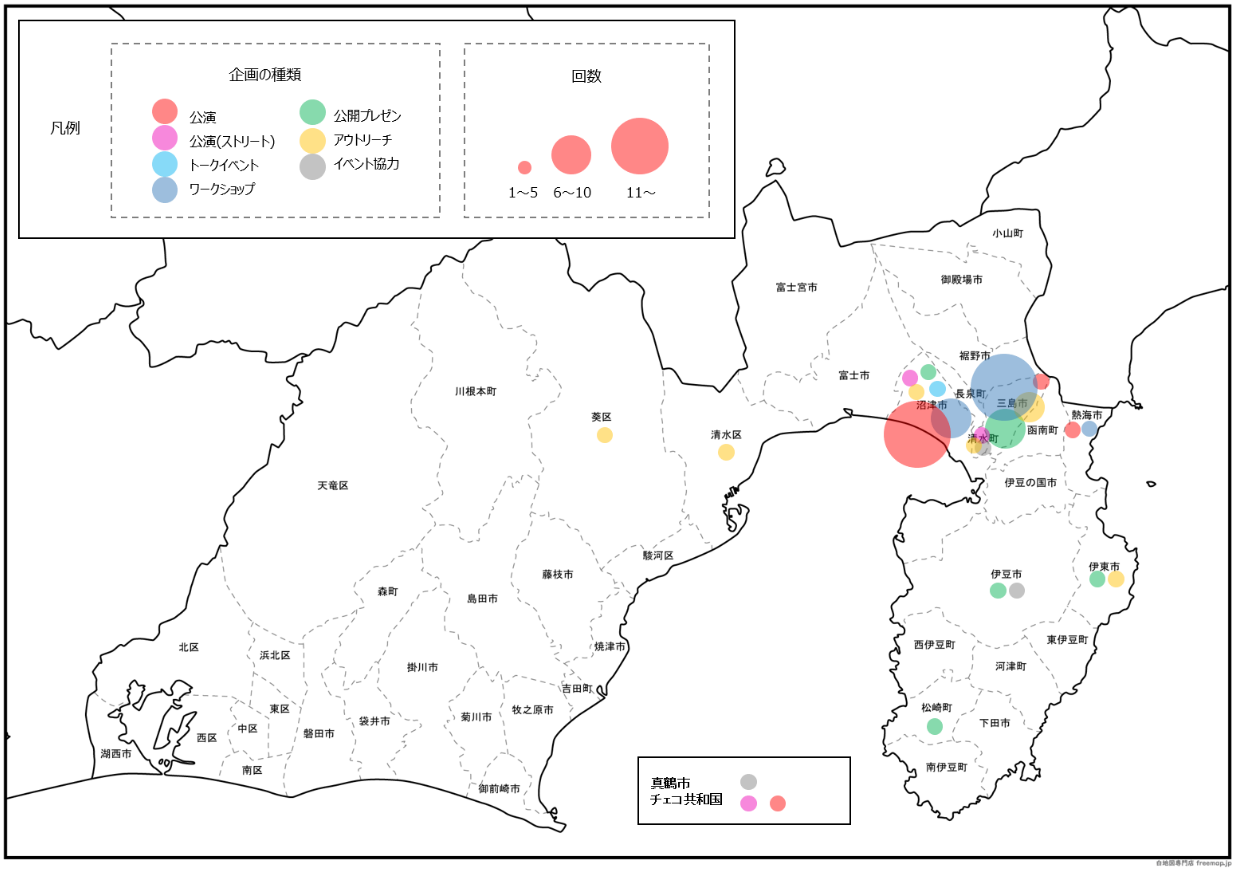


表 1：Scale Laboratory の活動地域 （詳細）

	アウトリーチ	トークイベント	ワークショップ	協力	公演	公演(ストリート)	公開プレゼン	**総計**
沼津市	3	4	14		23	3	3	**50**
三島市	5		11		1		6	**23**
熱海市　三島市			7					**7**
熱海市					5		1	**6**
伊東市	1						2	**3**
清水町	2			2		1		**5**
静岡市	4			1				**5**
伊豆市				1			1	**2**
松崎町							1	**1**
真鶴町					1			**1**
チェコ共和国					2	2		**4**
総計	**15**	**4**	**32**	**4**	**32**	**6**	**14**	**107**

2-5.活動の背景と課題意識

スケラボは「社会課題」を解決するための手段としてのアートではなく、生きることの一部としてのアートを追求してきた。そして、活動を重ねていくなかで、スケラボの中心メンバーの中で、アートが地域にとっても必要不可欠なものとして意味付けされてきた。中心メンバーへのインタビュー及びスケラボの発信物（WEB サイト、活動記録集）で示されたアートの役割や意味をスケラボのメンバーや文書のことばと併せて以下に示す。

■希望の持てる社会へ

アートは衣食住を彩り、衣食住だけでは満たすことのできない心の部分に作用する。アートがあることで人は希望を持てるし、何気ない日常から人生を豊かにする楽しみを見出すことができる。衣食住とともに、アートも人生に不可欠なものである。

> 「希望が持てる社会にするにはアートが必要。アートにはネガティブなことをポジティブに転化する力がある。人には体だけでなく、心もある。深い悲しみは、お腹いっぱい食べても満たされないが、アートはそれを満たすことができる。」（川上氏のインタビューより）
> 「アートによっていろいろな見方ができ、心の尺度を変えられる。すごく不幸な出来事を引いてみるとささいなことに思えたり、いろいろな発見をして幸せを見出したりすることができる。」（同上）
> 「普段と違うものを添えることで『こんな方法あるんですね』『自分でもできそう』と発想が変わる。いつもと同じことがちょっと面白くみえたら良い。落ち込んでいる人がいたとして、和らげるために僕には何ができるのか。ひょっとしたらそれって演出じゃないか。まちとして笑いが多くなって、ニコニコしている人が増えることこそが、ぼくの人生的演出ではないかと思う。」（同上）

■アートを通じてひとりひとりの個性が尊重される、自由でいられる

それぞれの個性のままにアートを通じて表現し、自由でいられることができる。それが新しいことにチャレンジする力になる。

「私たちは一人一人、別の個性を持って生まれてきました。
全く同じ個性の人など誰一人いないでしょう。その個性が、自分の好みを探求するカギであり、自分で好みの何かを作る原動力でもあるのです。
そういう力がなければ、我々はまだ、貝塚を作っていたでしょう。
自分の個性に忠実な人が、自分の満足しうる何かを作り
（わたしはそれをアーティストというのではないかと思うのですが）誰かがそれを見て新たな発見をする。
それはおそらく、有史以前から繰り返してきたことであります。」（川上氏　「スケラボ　となりのアーティストプロジェクト 2018-2020」、p37）

「アートがあることで人は自由でいられる。ものごとを多数決だけで決めてしまうのは危険性がある。大多数の人が言っていることが正しいとは限らない。行かなければいけない道に、少数派の意見が入ることが大事。アートは少数の意見も表現することができる。」（川上氏インタビューより）
「人をワクワクさせる力、こどもたちがかかわれるということでいえば、スポーツもアートも同じ。スポーツと同じように、アートを通じて仲間をつくる、うまくなる、発表して自己肯定感を得ていく。」
（中心メンバー　住氏インタビューより）
「学校も自治体も町内会も、PTA も、地域では前例がないことをやれるチャンスがなかなかない。でも、アートであれば前例のないものをつくっていける。新しいことをやりたいと思っている人がスケラボに声をかけてもらえれば、一緒にやれる可能性もある。」（同上）

■アーティストが活動できる静岡東部に

スケラボが主に活動する静岡東部では、本格的なアートに触れる機会も限られており、創造産業が発達していないため、アート人材が地域で生業を成り立たせるのは容易ではない。アーティストが暮らすことができ、アートのある地域を創っていきたい。

「静岡県東部ではアート関係のイベントをやることが少ない。見る人も少ない。」
（中心メンバー　辻村氏インタビューより）
「静岡県の中で最も首都圏に近い伊豆地方は、プロとして作家活動をしている人や小さな芸術グループは数多くありますが、それらを牽引し、中心的な役割を果たすホールや美術館、団体が存在せず、それぞれの活動を知ることや、地域やジャンルを超えて協力し合うことが充分できているとは言えません。
また、静岡県中部・西部地区に比べ、マスコミや出版、映像制作などの創造産業の需要が少なく、そのような技能を持つ人材を地域が抱えきれないという問題もあります。
中心メンバーのほとんどが創造産業に関わるプロフェッショナルであるスケラボは、活動を通じ、伊豆地域を高レベルなクリエイティブ人材の“地産地消”地域にしていきたいと考えています。
この活動は、自分たちがこの素晴らしい伊豆に住み続けるための居場所づくりでもあるし、より多くのプロ、プロの卵たちに伊豆に来て欲しい、居続けて欲しいという種まきでもあります。
一番大切なアートの中身やスキルを地域外に頼っていては、『ひとりでも多くの人が、生活と地続きに無理なく芸術を楽しめるローカル』は実現しないと考えるからです。」（スケラボ WEB ページより）

2-6.セオリーオブチェンジ

スケラボは「事業戦略」や「ミッションステートメント」等明文化された方法でセオリーオブチェンジ（変化の道筋）を打ち出していないが、中心メンバーのインタビューやスケラボの発行物から得た評価情報から、「あるべき姿」に至る共通イメージがあることが伺われた。

図 3：Scale Laboratory の中心メンバーが考える変化の道筋

■投入

人	中心メンバー
人	ゲスト・アーティスト、講師
人	地域の協働者・協力者
場所	公演場所
資金	静岡県文化プログラム助成金、自主財源（事業実施により回収）
人	静岡県文化プログラム　プログラムコーディネーター

■活動

公演	自主公演 ジャンル横断と即興、世界で活躍するパフォーマーと地元アーティストの掛け合わせ、様々な表現に触れることを目的とした自主企画。
	招待・共催公演 一流の表現者たちを招いて行う企画。公演と共にワークショップやアフタートークを開催する。
公演（ストリート）	
ワークショップ	カフェの空き時間や閉店後の商店などを借りて行う、アートとの距離を縮める講座。スケラボスタッフが各自の得意分野で講師やコーディネーターを務める。
アートトーク	美術本などの読み回しを行い、感想を話し合う
アウトリーチ	スケラボの特性を活かした幼児、児童、生徒向けのアウトリーチ活動
協力	他団体の依頼で企画協力したもの。

■あるべき姿

地域の人	こどもからおとなまで良質なアートを体験できる 個性にあわせて自由に生きられる
地域のアーティスト	地域で活動できる クリエイティブな仕事を生業として成り立たせられる ジャンルを超えて協力し合う
地域社会	アートにより楽しいこと、わくわくすることが地域に増える アートを通じて新しいことにチャンレジできる社会になる 希望がもてる社会になる

3.活動の軌跡（2015 年 12 月～2020 年 3 月）

スケラボは活動を重ねる中で次々に新しい取り組みに挑み、活動の幅を広げてきた。活動の特徴の変遷に基づき、評価者のほうで便宜的に 3 つのフェーズに別けて概観する。

■草創期　（2015 年 12 月～8 月）

立ち上げ時はデッサン会や、紹介された熱海の空き家スペースで実験的な公演活動を主に友人を起点とする人脈を通じて比較的少人数の参加者を得て行っていた。

■拡大期　（2016 年 8 月～2018 年 9 月）

2016 年 8 月に沼津駅前のビル「沼津 RAKUUN」の 8F の空きスペースに出会う。施設管理者がスケラボの趣旨に賛同して安価な会場使用料でスペースを貸し、搬入・搬出や人の出入り含めて全面的に協力を得ることが可能となり、2016 年 10 月に決定した静岡県文化プログラムの助成金と相まって、この場所で数々の公演やアートにかかわるワークショップ、トークイベントを開催するとともに、アートに限らず地域で新しい取り組みをしたいと考える人をスピーカーに招く妄想相談会・相談所をスタートした。この時期には、草創期の友人の人脈を超えて、スケラボの活動に共感する多様な層へのアプローチが深化した。

■協働期　（2018 年 9 月～）

やがてスケラボはイベントに来る人だけではなく、来ない人、来れない人にも目をむけるようになる。また、妄想相談会や相談所で発露された地域の人たちとの協働の取り組みを実現していく。地域に深く入っていくことで、新たな視点が養われ、スケラボの企画が更に多様化した。スケラボが保育園や学童保育、学校に赴いてアートワークショップを行う「アウトリーチ」活動が始まり、スケラボの公演を観に来ない人たちも含めて楽しめるストリートの公演も行った。

図 4：スケラボの企画の種類の多様化（イベント回数）

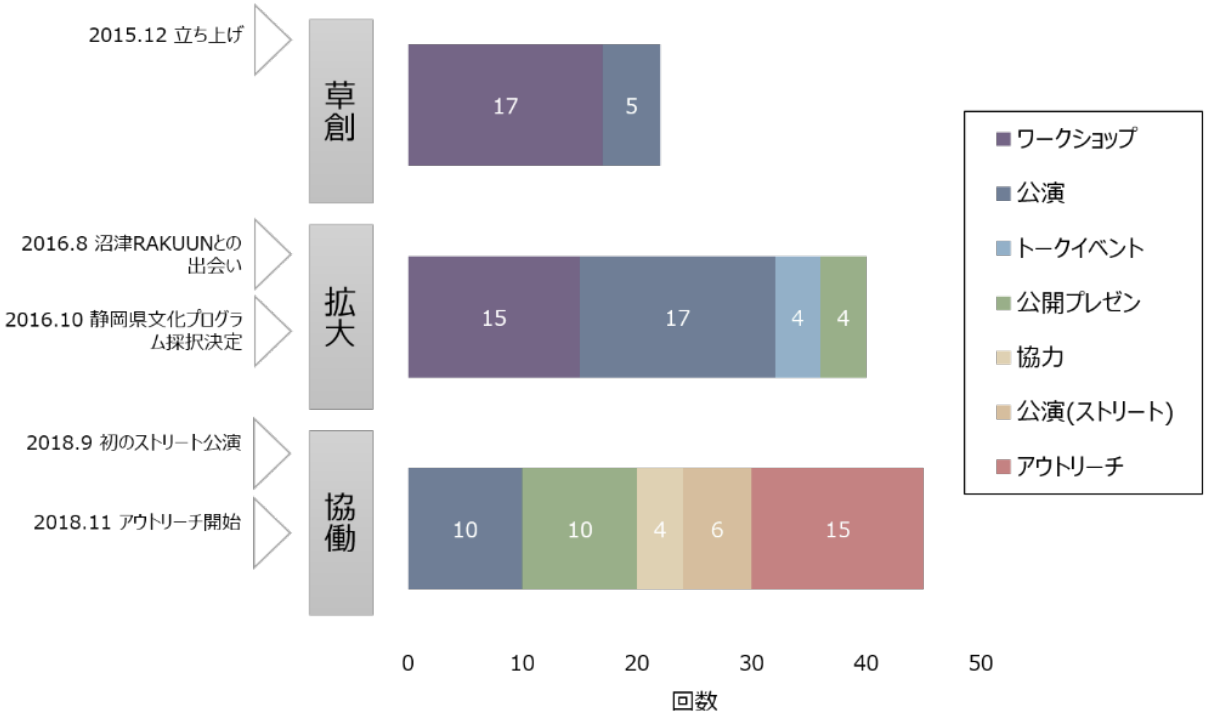
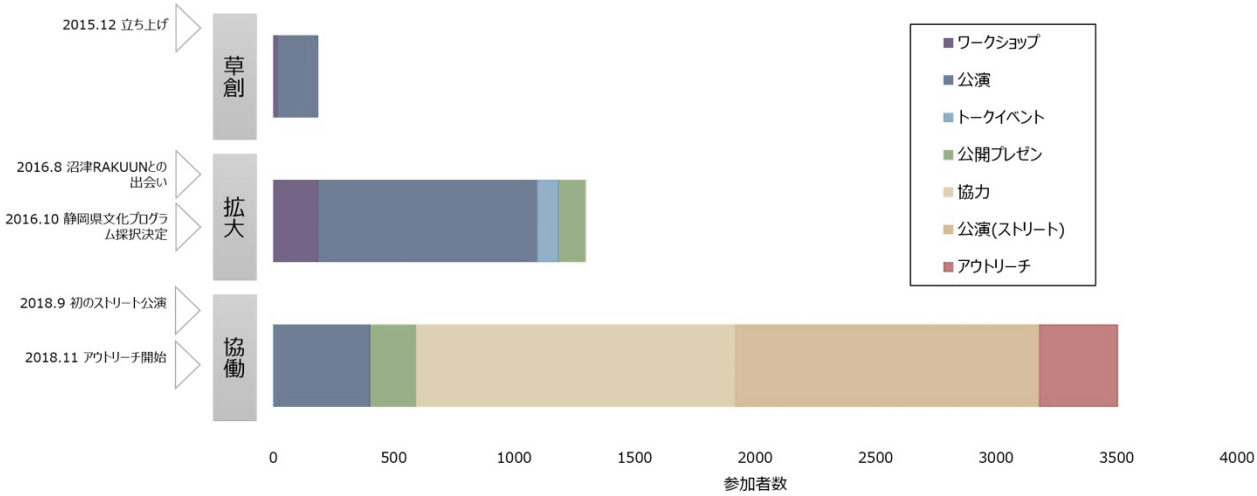


図 5：スケラボの企画の種類の多様化（参加者数）



	ワークショップ	公演	トークイベント	公開プレゼン	協力	公演(ストリート)	アウトリーチ	**計**
草創期	18	170						**188**
拡大期	186	909	90	113				**1,298**
協働期		403 (うちチェコ共和国60)		189	1,323	1,262 (うちチェコ共和国800)	328	**3,505**
計	**204**	**1,482** (うちチェコ共和国60)	**90**	**302**	**1,323**	**1,262** (うちチェコ共和国800)	**328**	**4,991** (うちチェコ共和国860)

4.評価結果

4-1.評価目的

本評価はスケラボにかかわる多様なステークホルダーから評価情報を得て、スケラボの活動によって生まれた変化と創出された価値につい見える化すること、及び価値の創出に対する貢献要因を抽出することを目的とする。評価結果は、今後のスケラボが活動方針を検討する際の参考情報として、またスケラボの活動の価値を静岡県文化プログラムやその他スケラボをサポートする関係者への発信に活用されることが期待される。

4-2.アートのニーズ

スケラボが最も多くの活動を行う沼津市は、静岡市や浜松市と並ぶ静岡県東部の拠点都市として発展してきた。かつて沼津駅前には百貨店が並び、文化の発信地にもなっていたが、近年は人口減少が続き、2014 年の西武百貨店を最後に全ての駅前の百貨店が閉店した。
公的な文化施設としては、文化財の管理や普及啓発を行う「沼津市文化財センター」と、ホールやリハーサル室、会議質等を備える「沼津市民文化センター」があるものの、アーティストの育成を行ったり、地域に本格的なアートを頻繁に提供したりするようなアートセンターに類する拠点は無い。

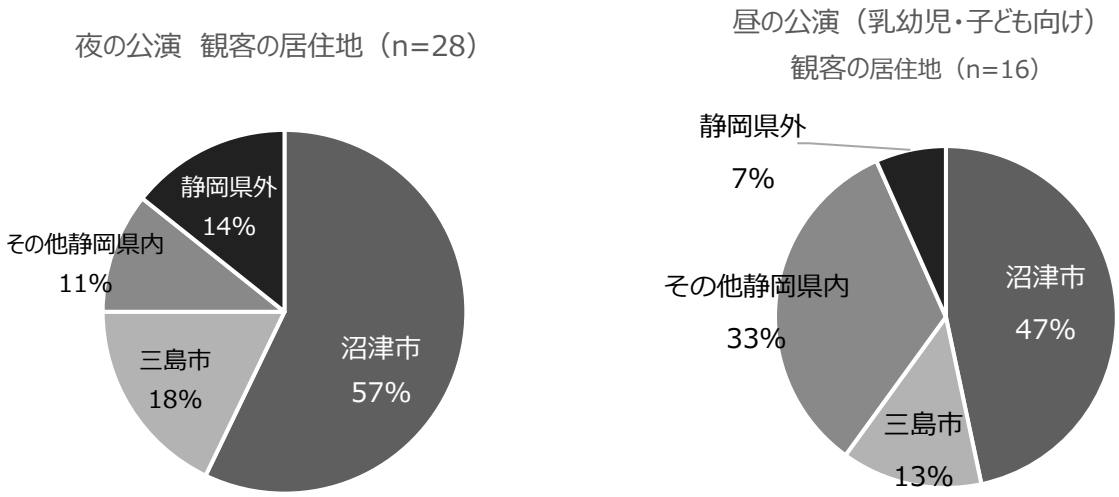
インタビューでは沼津出身・在住者（複数）から次のような意見が聞かれた。

> 静岡県東部ではアート関係のイベントをやることが少ない。
> 沼津は不便がなく、暮らしやすいが、とびっきりの刺激は求められない。
> 東京の通勤圏であり、そこにアートを見に行けることから、地域でアートが育たなかったのではないか。

> 沼津には何にもないと感じていた。舞台を見たいと思っても、SPAC のある静岡や東京まで行かなければならないが、学生にとってはお金をかけていくというのがハードル。東京にはお店もたくさんあり、アートや文化に触れるために、高校生のときは、はやく東京に出たくてたまらなかった。

2019 年の空中音楽会で収集したアンケートでは、観客の 7 割以上が沼津・三島から来場していた（図 6）。今まで 100 回に上るアートの企画を実施し、延べ 4000 人以上の観客・参加者を得ており、設立から 4 年以上経た今でも参加者の足は途絶えないことから、スケラボの提供するアートのニーズが高いことが伺える。

図 6：2019 年 12 月 20･21 日　空中音楽祭　参加者アンケート（回収分のみ）



4-3.スケラボの活動によって生まれた価値

本評価からスケラボの活動によって幅広いポジティブな変化がもたらされ、ステークホルダーごとに多様な価値が創出されていたことが明らかになった。

こうした変化や価値の中には、スケラボが意図していたもの、いなかったもの双方が含まれる。それぞれの変化や価値は相互に作用しあっており、また変化の方向もひとつではないが、変化の詳細を見ていくために次表で個人のレベルと地域化にわけて、類型化した（図 7）

図 7：スケラボの活動によって生まれた価値

■個人・組織のレベル

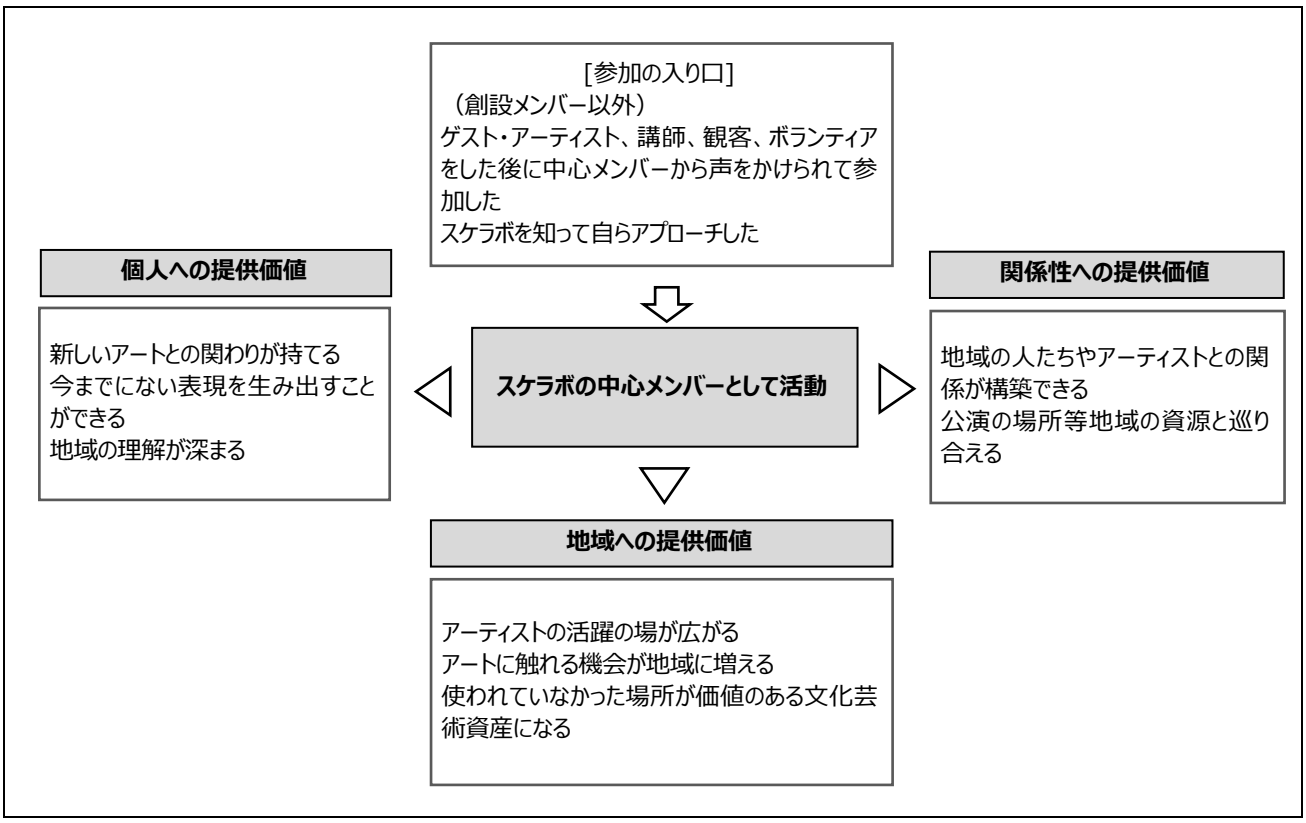
ステークホルダー	個人への提供価値	関係性への提供価値
アーティスト	■新しいアートとのかかわりが持てる ■今までにない表現を生み出すことができる ■コミュニティの理解が深まる	■新たなアートを共創できる ■地域の人たちやアーティスト、公演の場所等地域の資源と巡り合える ■活躍の場が広がる
観客・参加者、サポーター	■良質のアートを楽しむ機会を得ている ■生活の質が向上する	■同じ関心や感性を持つ人が出会える
乳幼児・子ども	<こどもたち> ■良質のアートに触れられる ■表現することを楽しめる <教育者> ■こどもたちに体験して欲しいことをスケラボの力で実現できる	<保育園スタッフ> ■保育園外の人と共に活動する体験が持てる
地域のためにアートの力で取り組みをしたい人	■地域でやりたいことの想いを共有できる、具体化できる。 ■（特に商店街や事業者）商店街や商業施設など、普段は生活の場、モノとお金が交換される場で、スケラボがパフォーマンスを展開することで、賑わいのある場所、幸せを感じる場所にしたいと思う事業者の想いを実現する一助を得る。	■まちに想いを持つ人とアーティストのコラボが実現する

■地域社会のレベル

項目	地域への提供価値
文化芸術資源	■アーティストの活躍の場が広がる ■アートに触れる機会が地域に増える ■使われていなかった場所が価値のある文化芸術資源になる
社会関係資本	■スケラボがなければこの場が無ければ会うことの無かった人が出会う ■地域のアーティストやアートに関心の高い人たちのコミュニティが形成され、さらにその周辺の人につながり、スケラボの企画への参加や協力を通じて多様な人たちの間で社会関係資本が築かれる。 ■人のつながりとアートの力によって想いを実現できる体験をする人が増える ■スケラボがきっかけで地域の人がアートにかかわる活動を行う
地域の価値	■アートの力によって地域の価値が発見される ■地域に愛着を抱く人が増える

以下、創出された価値のうち相関性が高いと思われるものをグループ化し、詳細を述べる。

（1）アーティストの活躍と地域の文化芸術資源の開発



（2）街の中にアート空間を出現させる

スケラボは既存の舞台がある施設ではなく、街の中でアートの舞台として、普段なら想像もつかない場所を公演やワークショップ等の場にしつらえる。今までカフェや保育園、学童保育、ショッピングモール、商店街で活動してきたが、最も多くの活動を行ったのは沼津駅前にある商業ビル「沼津 RAKUUN」の 8F である。

沼津の文化発信地だった西武百貨店が 2014 年に撤退した後に残された新館ビルを浜友観光株式会社が複合商業施設として改修した「沼津 RAKUUN」にはパチンコやカラオケ店、飲食店等が入っているが、かつてガラス窓に覆われ沼津市が見渡せるレストランだった最上階だけは長い間テナントが入らなかった。

公演場所を探していたスケラボが沼津 RAKUUN の 3F にコミュニティスペースがあることを聞いて見学したときに、きれいに整った 3F ではなく、天井に配管がむき出しになり、空調さえなく、物置状態の 8F に川上氏が惹かれ、「ここで公演したい」と聞いたときには、施設管理を担当していた E 氏は驚いたという。

施設管理会社の承諾を得て訪問から 1 ケ月後の真夏に公演することが決定、スケラボがボランティアとともに 8F のフロアを掃除し公演会場に作り替えた。一方、施設管理者は各フロアのテナントに説明をしたり、大きな扇風機を運び込んだりするむなど、多くの人が準備を進めて当日を迎えた。

廃墟感を活かした幻想的な舞台美術とパフォーミングアーツ、ステージと客席が一体になったよう

な空間で、50 人の観客を迎えて公演は成功した。その後 8F と 3F のコミュニティスペースで 2020 年 3 月末までに 40 近いイベントが実施され、延べ 1500 人以上が参加、沼津 RAKUUN が地域のアートセンターのような役割を果たしてきた。
沼津 RAKUUN の 8F は現在、スケラボの公演の他にも、現在移動式映画館の上映会場として、また別のアーティストの演奏場所としても使われている。
この他にも、スケラボが初期に公演の舞台とした熱海市内の廃屋スペースや、カフェや商店街等、それまで使われていなかったスペース、またはアートイベントの実施を目的としてないスペース等が、スケラボの手によってアートの舞台となり、地域の文化芸術資源の開発が促進されてきた。

(3) アーティストの活躍

「場所」に加えて重要な資源はアートを提供する「人」の存在である。
川上氏ら立ち上げメンバーが積極的に地域のアーティストを中心に声がけをするなか、スケラボの存在を知って自らアプローチするアーティストも出てきて、アーティストやアートを専門的に学んだ中心メンバーが集まった。
スケラボの中心メンバーへのインタビューから、個人の変化と地域への貢献の相乗効果が生まれた 3 人のケースを以下の通り紹介する。

ケース 1：パーカッショニスト・鈴木彩氏
【主なポイント】 パーカッショニストとして各地で演奏を行っていた鈴木氏が、スケラボと出会い、はじめて自らプロデュースを手掛けたことで、アーティストとしての幅を広げた。 スケラボではこどもたちを対象にしたコンサートを企画・実施した。
・鈴木氏は沼津出身で現在ベルギーに在住し、国内外で演奏を行うパーカッショニストである。沼津に住んでいた 2016 年 2 月にスケラボの中心メンバーに声をかけられた。もともとシャイな性格だが思い切ってスケラボに参加。その 1 か月後に「廃墟感」を活かした熱海の空店舗で、舞踏家と即興の演奏によるパフォーミングアーツを行った。 ・打楽器を専攻していた大学の研究科在学中に、恩師の影響を受けて以来、クラシック音楽の演奏だけではなく、いつか即興演奏やコンテンポラリー音楽の作品づくりをしたいと思っていたものの機会は無かった。スケラボに出会うことで、舞踏家や舞台芸術等別分野のアーティストとコラボする機会に恵まれ、鈴木氏の学生時代の夢がスケラボで実現することとなった。 ・通常の演奏は楽譜に忠実であるということが前提であり、パーカッショニストには演奏以外の役割は求められないが、スケラボでの取り組みは全く違っていた。パフォーミングアーツは舞台にあがった瞬間から最後までがひとつの作品であり、自身や共演者の身体表現も作品の一部となる。団体の自由で自主性を重んじる雰囲気のなかでメンバーとともに照明、ビジュアルデザインまでこだわることができる。そのような中、誰も見たこともないもの、自分が見たいものを届けたい、という思いに忠実に、鈴木氏はスケラボで様々な取り組みを行っている。 ・こうして創り出された表現の一つが「360°マリンバ」だった。川上代表から「何かの楽器でお客さんを囲むような形を作れないか」と発案があり、そこから着想を得て、ステージや演奏内容、共同演奏者とのパフォーマンス等をプロデュースし、公演した。現在、360°マリンバは鈴木氏の代表作のひとつとなっている。 ・「360°マリンバ」を携えて地域に入り、スケラボが美術の専門指導を依頼されている保育園のために行

ったコンサートでは、通園するこどもたちと保護者、そして、地域の特別支援学校に通う視覚障がいのこどもたちに演奏を届けた。視覚障がいのこどもたちはマリンバの輪の中に入り、360°から聞こえてくる音を体験した。

・鈴木氏が現在暮らすベルギーでは、子ども向けコンサートであっても、おとなが聞くような多様な音楽を聞かせる。鈴木氏はかねてより、日本では子どもの音楽の選択肢は少ないと感じていた。例えばおとなには、クラシックやジャズなど音楽の選択肢はあるが、日本の子ども向けコンサートでは、童謡を大きな音で演奏することが大半である。かねてから「これからおとなになっていく人のために何かしたい」という思いを持っていた鈴木氏はスケラボの企画として小さなこども向けのコンサートをプロデュースし、2019 年 12 月の公演「空中音楽祭」のなかで、乳幼児・児童向けのコンサートを 3 度にわたり行った。映像と空間芸術、演奏と楽器に触れる機会を組み合わせ公演は、イラストレーター、映像作家、舞台芸術、イベント運営等、スケラボの他の中心メンバーの力によって実現した。

・鈴木氏は「スケラボでの企画は共同作業でなければ生まれない。視点の提供、問いかけ、イラスト作成や舞踏、映像制作、イベント運営をするすべてのメンバーの存在があって作品が成り立つ。」と語る。

ケース 2：制作支援/マネジメント・辻村聡子氏

【主なポイント】

大学・大学院で芸術を学んだ後、芸術関係の就職は狭き門で一度断念。スケラボ立ち上げ後、最初は観客として、その後中心メンバーとして活動。

本業の印章専門店の勤務の傍ら、スケラボの活動に欠かせない運営や制作支援を行い、地域にアートを届けている。

・辻村氏は沼津在住。親の影響で子どものときから絵画に親しんでいた。高校卒業後は北陸の芸術系の大学に進み、その後同大大学院で美術館や美術史、能舞台の研究を行う傍ら、現代美術館に通った。現在、沼津市内の印章専門店を経営しながら、中心メンバーとしてスケラボの活動にかかわっている。

・大学入学後間もなく、教諭から美術館や博物館の学芸員は募集人数が少ないので、就職は難しいと言われ、ショックを受けた。当時は学んだことを活かせる場は美術館、博物館、文化財団以外想像がつかなかった。

・大学卒業後は静岡で観光の仕事に就き、その後家業の印章専門店で勤務を開始した。忙しい仕事の傍ら、SNS を通じて三島市のアーティストにつながり、スケラボの存在を知ることとなった。

・当初は沼津市内で行う公演やワークショップに観客として足を運び、アートを楽しんでいたが、運営の人手が不足していた様子を見て、また、スケラボに魅力に感じていたこともあって、川上氏の声がけを受けた後、中心メンバーになった。

・辻村氏は「来た人にいかに楽しんでもらうのか」を常に考えて、公演やイベントの運営を行う。活動内容は広報、名簿の管理、イベント当日の受付や案内、公演の制作支援その他事務方の業務等多岐にわたる。スケラボ初の海外公演となったチェコ共和国の公演にも全行程参加し、出演者をアシストした。

・大学卒業後アートを創る側、届ける側としての活動を一度断念したものの、スケラボの中心メンバーとして参加することで、地域にアートを届けるうえで欠かせない役割を担っている。

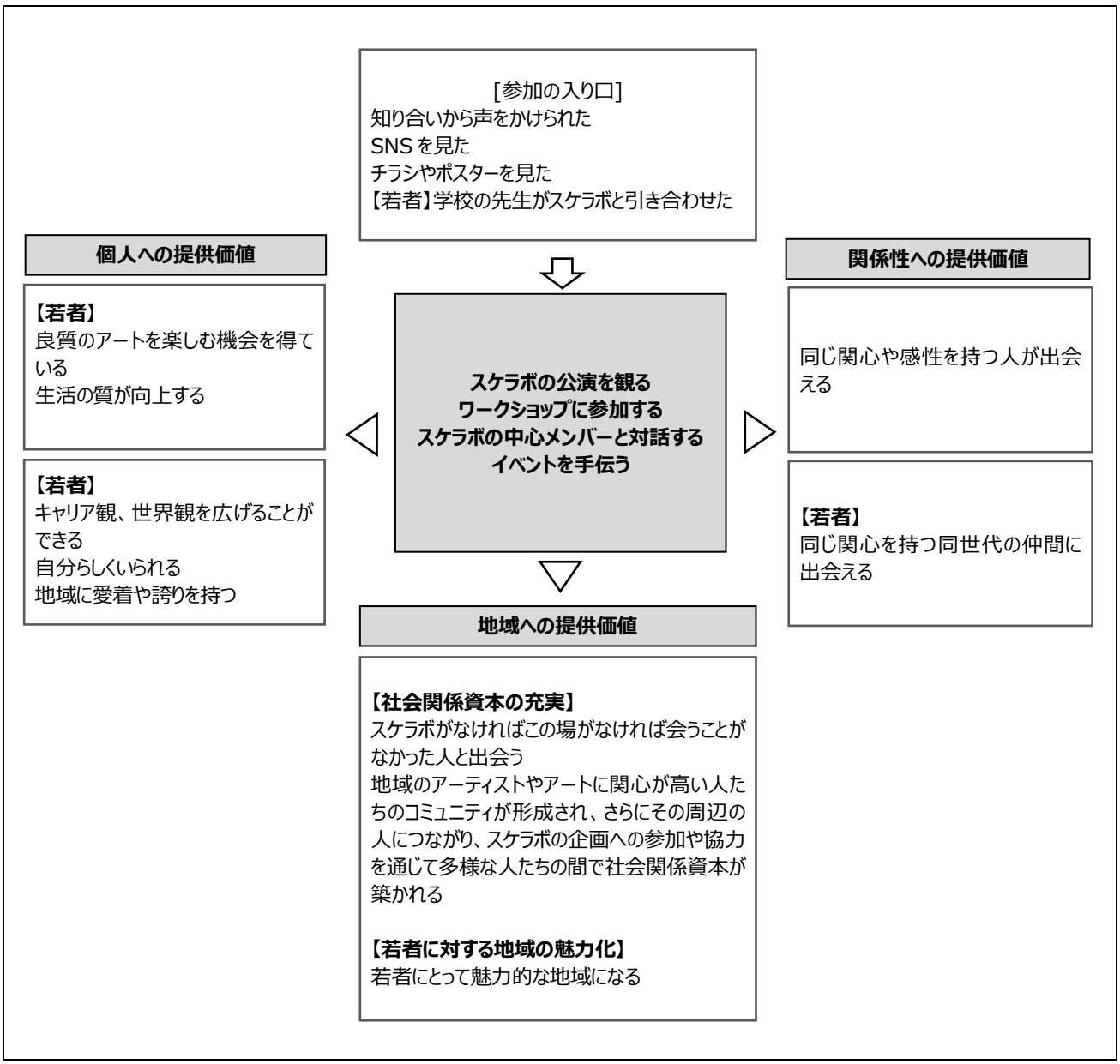
・辻村氏は「スケラボに出会わなかったら、趣味に美術館に行ったり、舞台公演に行ったりしたことは続いていたかもしれないが、ずっとお客さんのままだったと思う。アートにかかわるという道は十人十色でいろいろあると今は思っている。今はいろいろな形でアートにかかわることができて楽しい。本業でも、商品の魅力をアピールするなど、人に伝えることを意識するようになった。」と語る。

ケース３：映像制作・磯村拓也氏
【主なポイント】 大学の芸術学部でグラフィックや WEB デザイン等を学び、卒業後はアートから離れていたが、スケラボへの参加により再びアートの世界に。 スケラボの活動を動画で発信するほか、アウトリーチのワークショップで子どもたちに映像を取ることの楽しさを伝えた。また、映像作家として活躍の場を広げている。
・磯村氏は沼津出身、沼津在住。大学の芸術学部でグラフィックや WEB デザイン等を学び、卒業後はアートから離れていた。 ・スケラボの立ち上げの半年後に「遊びに来なよ、ついでに映像もとってよ」と知り合いに声をかけられて沼津の RAKUUN におけるスケラボの公演を観に行った。それまで静岡では大道芸やバレー教室の公演等しか見たことなかった磯村氏にとって非常に印象的なスケラボとの出会いとなった。廃墟感が魅力的に演出された舞台、観客と舞台の境目がほぼ無く、一つのステージのなかにみんながいる感覚等、初めて見る光景に衝撃を受けて夢中で映像をとった。 ・もともとインドア派で、声がけがあってはじめて出かけるタイプだったが、その後数回の声がけを経てスケラボの中心メンバーとなった。現在は公演の記録をアーカイブしたり、PR 動画を制作したりするほか、自らが講師となってアウトリーチ活動も行っている。2019 年には、障がいのある子どもたちの学童保育（放課後デーサービス）で映像制作のワークショップを行った。こどもたちにカメラを渡しての施設の紹介を撮影してもらい、子どもたちが撮影した動画をその場で編集、同日上映会をした。子どもたちがカメラマン、照明係、ナレーター等、好きな役割を担い、先生を追い掛け回すなど、楽しい動画を皆で楽しんだ。 ・川上氏の後押しもあり、磯村氏が撮影したスケラボの公演や PR 動画を Youtube で見た人たちから映像の仕事の依頼が来るようになった。ダンスや音楽イベント、現代サーカス等アート系のドキュメンタリー動画や、職人の PR 動画などを制作した。現在 NPO の勤務と映像制作の二足の草鞋を履いて活動している。 ・スケラボのアートの企画に映像をプラスすることでファンが増えたり、魅力が増したりすることをうれしく思い、パフォーマー自身がなかなかできない撮影を通してアートにかかわれていると感じている。

上記３ケースの共通点として、①スケラボのメンバーになったことで、ジャンルを超えたアーティストとの協働や、求められた役割によって、メンバーの力が引き出されたこと、②各人の得意分野が組み合わさり、グループ総体として新しい表現やアートの機会を地域に創出したことが見て取れ、いわばスケラボがエンパワメントの装置として働き、ひいては地域の人々がアートに触れる機会を増やしたといえる。

また、スケラボは地域に密着して活動するため、地域のアートのニーズの理解や地域で実践していくためのノウハウが蓄積されてきた。川上氏自身、それまで長いこと全国各地で仕事をしてきたものの、その地域の困りごとにかかわることがなかったが、スケラボで活動し始めてから、まちをもっとよくしたいと思っている人たちとのかかわりが増え、その人たちをどうアートを通じて手伝えるかを深く考えるようになったという。上記の３ケースでも、それぞれが地域の子どもたちがアートに親しんで欲しい、地域にアートの楽しみを提供したい、沼津のアートを発信したい等、地域に対するそれぞれの思いを持ち、スケラボでその想いを実現する機会を得ている。

（4）観客・参加者、サポーターと社会関係資本の充実・地域の価値向上



（5）良質なアートの提供と生活の質の向上

スケラボはアーティストも、観客・参加者も一緒になって良質のアートを楽しむことを大切にしている。アーティストが地域に提供する作品は、冒険心にあふれ、必ずしも「万人が広く欲するアート」とは限らないが、公演に足を運んだ参加者の満足度は高い（表 2）。

表 2: 2019 年 12 月 20･21 日　空中音楽祭　夜の部参加者アンケート（回収分のみ）

	公演を楽しんだ（回答無し 1）	スケラボとの対話を楽しんだ（回答無し 2）	また公演を観たい	舞台芸術により興味をもった（回答無し 2）
そう思う	26	16	24	16
まあまあそう思う	1	9	4	10
あまりそう思わない	0	1	0	0
そう思う思わない	0	0	0	0

公演では観客とのアフタートークを必ず実施し、参加者同士で感想を言い合ったり、出演者や演出者に質問したりして対話を楽しむ。またワークショップでは参加者自らが手を動かすなど主体的にアートにかかわる機会を提供する。インタビューを通じて、以下の通り、スケラボのイベントに参加してアートの楽しみを見出した人たちのコメントを得た。

・「学生のときにモダンダンスをしていた。現在社会人２年目だが、満員列車でのきつい通勤をしながら、会社では感情を押し殺して仕事をしている。そのようななか、スケラボの公演を観に行っている。音楽やダンスは言語化しきれない部分も表現できる。スケラボのアートに触れていることで、一瞬を通り過ぎないで考えて行くことができる。流されずにそのときの感情を動かして言葉にしてく。答えがないから考えないといけない。アートを見ることで心のバランスがとれている。」

・「子どもの頃から絵を描くのが好きだったが、まわりに上手い人が多く絵を書くことが苦痛になり、それ以来離れていた。スケラボの『おえかきの時間ですよ』というイラストのワークショップに参加し、とても楽しい時間を過ごした。講師が自由に絵を描くのを見て、誰かに褒められるのではなくて、自分が元気になるのであれば描きたいという気持ちになった。今では家族や友人のイベント時にウェルカムボードを書くなど、日常生活の中で絵を描くことを楽しんでいる。」

・「ソーイング・ワークショップに参加した。講師が気さくで、アート感覚にあふれたワークショップだった。縫うだけではなく、色をつけたり装飾したりして『こうじゃなきゃいけない』、というのが取り払われて自由につくれた。ワークショップでは否定が全くなく、自分で自由に表現できることにより、自分が『できる』という感覚が得られる。作ったものをみんなで褒め合い、できあった作品を着てフォトグラファーが写真をとってくれた。本当に楽しく、また写真のクオリティがすばらしかった。ワークショップに参加した人の中にはソーイングの自由な楽しみ方を知った人も多かったと思う。」

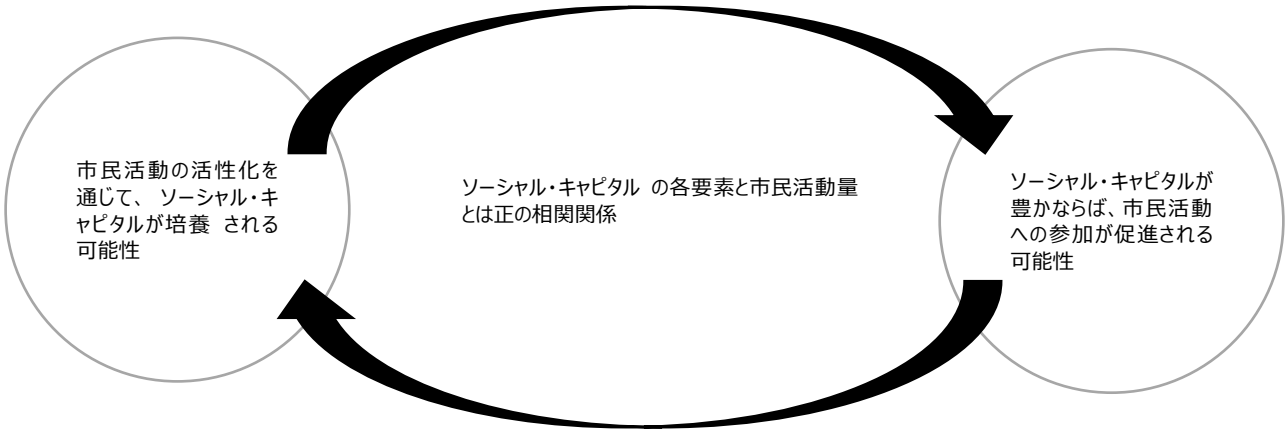
上記の通り、イベントでアートを楽しむことに加え、自分が自分らしくいられる、ストレスを軽減できる、自己効力感が得られる、日常生活を豊かにする、といった生活の質の向上に寄与していることが見て取れる。

（6）アートにかかわる社会関係資本の構築

社会関係資本（Social Capital）とは、人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴を指す。物的資本

（Physical Capital） や人的資本 （Human Capital） などと並ぶ社会にとって重要な資本とみなされており、2005 年の内閣府経済社会総合研究所の調査によれば、社会関係資本と市民活動量とは正の相関関係があることが確認されている（図 7）。

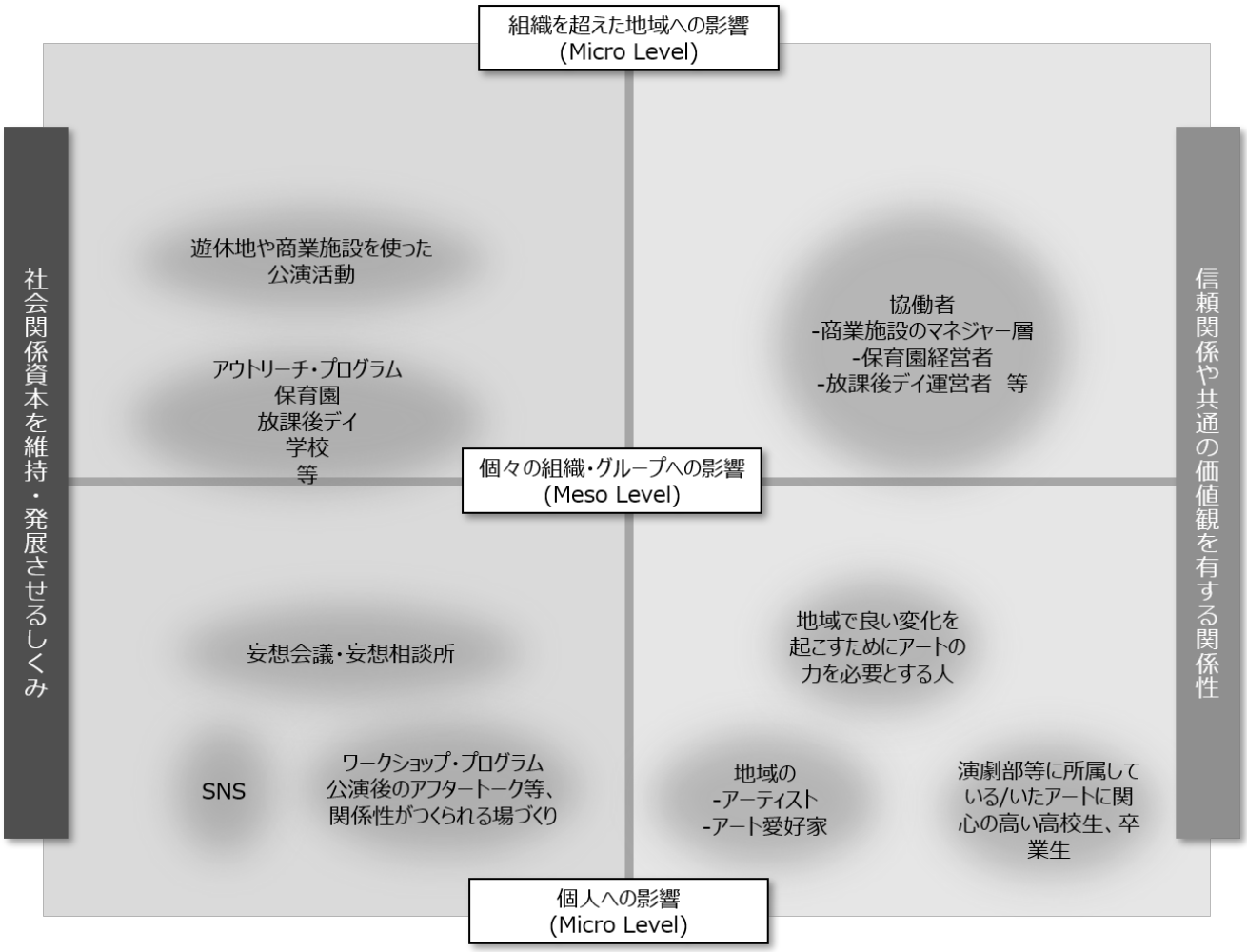
図 7：ソーシャルキャピタルと市民活動の量の関係



出典：コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書
（内閣府経済社会総合研究所編 2005 年 8 月）

スケラボの活動は地域の人たちにより支えられ、地域の人たちはスケラボが提供するアートの機会を楽しみ、交友関係を広げ同じ関心を持つ仲間に出会うことができている。
スケラボの立ち上げ時は、川上氏とその友人を起点とした人脈から、アーティストやアートに関心のある人たちがつながり、デッサン会や読書会、美術史の連続講座、小規模な公演等のスケラボのイベント時にさらに人の輪が広まり親交を深めていった。スケラボが行う公開プレゼンテーション「妄想会議」「妄想相談会」により、地域で様々な取り組みをする人たちも含む、多様な関心を持ち、様々な背景を持つ人たちのつながりが形作られ、発足から 1 年後にそれまで関わった方々への感謝の意を込めて開催した「妄想感謝祭」には 83 人が集うまでになった。アートを生活の一部としてとらえ、敷居を低くしていること、ジャンルを超えたアートの取り組みを行っていること、中心メンバーも、地域の人も一緒に楽しむことを大切にしていること、アフタートークやワークショップ等で参加者や中心メンバーがたくさんの対話をすることなど、スケラボの中心メンバーやそこに集まる他の参加者と距離が縮まり、下記のケースのように、参加者としてアートを鑑賞するだけではなく、感想を言い合ったり、イベントの手伝いをしたりする関係性が創られてきた。
スケラボの活動に寄って築かれた社会関係資本の概念図を、「関係性」と「しくみ」に分けて図 8 に示した。

図 8： Scale Laboratory の社会関係資本の概念図



スケラボを起点とする社会関係資本の構築には、「つなげる人」の存在が欠かせない。そのひと、山崎氏のケースを紹介する。

ケース 4：スケラボのサポーター・Yoko 山崎氏
【主なポイント】 清水町でファッション雑貨の店舗を経営。スケラボのワークショップへの参加をきっかけに、スケラボのサポーターになった。 スケラボのアートの捉え方に深く共感している。
・山崎氏は友人のスケラボの中心メンバーから声をかけられて「妄想会議」に参加、「なんて面白い人たちなんだろう」と思い、その後様々な企画に参加した。ワークショップではそこで出会った人たちと交流を深めた。将来アート方面を目指している女子高校生がいて、彼女の書道展を見に行ったり、スケラボのイラストレーションのワークショップにも声をかけたりした。 ・スケラボの企画への参加を重ねていくなかでスケラボの「ぶれないアート感覚」、「すべての生活の中にアート的なものが潜んでいるというメッセージ」を感じ取ってきた。好きな服を着ることも含めて、感性をゆさぶれること全てをアートとしてとらえていた山崎氏にとって共感する部分が多く、また皆でアートを楽しむというスケラボの姿勢に賛同した。 ・スケラボの企画に多くの人に参加して欲しいと思い、店舗でスケラボのイベントの広報を行っている。

スケラボの企画はチラシを見ただけで、どんなものかわからないため、山崎氏からセンスが良い、楽しいイベントであることを伝えている。お店に来る人はファッションに興味がある人が多いため「センスがいい」という言葉は響くという。
・山崎氏は「人集めは私の役目。チラシやポスターを掲示するだけでなく、このように声をかけてつなげることが大事だと思う」と話す。

山崎氏はスケラボのファンであるとともに、スケラボのアートへの姿勢に共感し、周囲の人にスケラボの活動を発信してきた。これにより、スケラボの中心メンバーだけではコンタクトし得ない人たちをスケラボの企画にいざなうことができた。山崎氏のようにスケラボへの共感と行動力により、社会関係資本を築くカギとなった人物に、若者とのつながりをつくった加藤氏がいる。

スケラボの活動には高校生を含む若い世代が参加しており、若い世代とのコラボ公演も行ってきた。こうした若者たちをスケラボに引き合わせたのが、静岡東部で活動する演劇人であり、当時高校の講師でもあった加藤剛史氏であった。スケラボと出会ってから 3 日後に沼津 RAKUUN で開催された「妄想会議」に登壇、「面白い場所に、面白い人が集まり、面白いことが発露する、その現場にただ胸踊った」と語る加藤氏は、それ以降、「地元で唯一無二のアートが生まれている」と演劇部の生徒や、ダンスを行っている生徒たちに声をかけてスケラボの公演に引率していった。そうしたなか、自ら参加を重ねる生徒も出てきた。
加藤氏は学生時代から演劇に打ち込んできた。同世代の演劇仲間が就職や生活の変化に伴い演劇から引いていく中、好きなことに蓋をしない、どこからどこまでが自分の趣味で、どこからどこが自分の生き方なのかを決めない人生を送ろうと決め、自ら演劇を続ける一方、正解・不正解が無い演劇は人間に向き合う力を高めることができるとの考えから、高校で勤務を始めてからは演劇部の顧問として生徒たちに向き合ってきた。仕事は忙しく、学校でできることも限られているなか、地域でアートを実践しているスケラボと生徒たちを引き合わせることができたことで、生徒たちの世界観が更に広がっていった。

山崎氏や加藤氏のような「つなげる人」の存在や、スケラボ自身が地域に出て行き積極的に関係性を築いていったことにより、短期間でアートにかかわる豊かな社会関係資本が構築され、スケラボの企画の幅も広がっていった。賑わいを求める商店街とともにストリートの公演を実施したり、本格的なアートをこどもたちに触れさせたいと思う保育園や学童保育でアウトリーチ活動を行ったり等、より深く地域の中に入り込んでいくことが可能となった。

（7）若者の変化

アートに関心のある高校生がスケラボの公演に通い、中心メンバーと対話をしていくなかで、彼ら自身の世界観が広がっていった。
スケラボに惹かれる若者たちは、時として同世代のこどもたちと好きなアートの話を共有できていない。スケラボと接点のある若者のインタビューからは、「高校までは係るおとなが学校の先生と近所のおばさんしかいない。人間関係ができたところで、同年代のこどもくらい。」と人間関係が

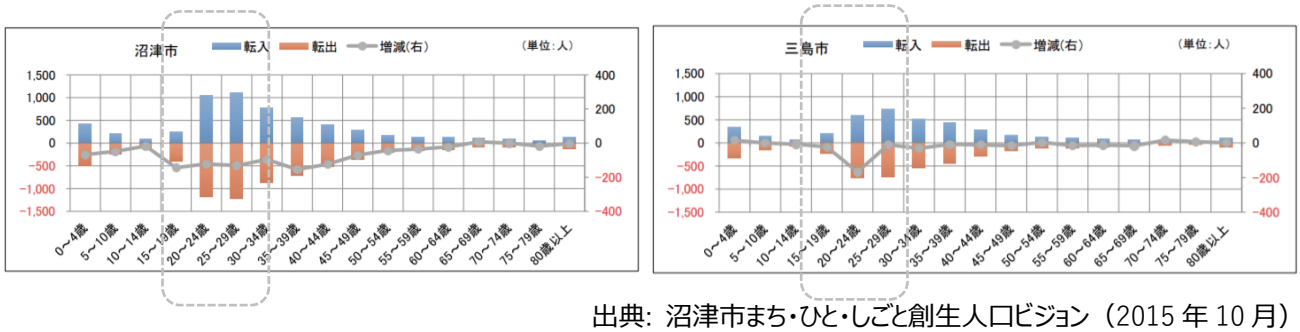
狭いこと、「おとなとは話が弾まない。」「進学校に通ったが、同世代の子どもたちと話が合わない。」といった自分の想いを共感できる人がいないジレンマを抱えていた。
スケラボの公演を観に行き、それまで出会ったことのないアートを人生の中心に置くおとなと対話したことで、若者の世界観が大きく広がった学生のインタビューからは「対等に話してくれる」「話すことで思っていたことが言語化できる」「いろいろな生き方があることを知った」等の声が聴かれた。
その中で、スケラボが若者の成長と地域の魅力化に寄与したケースを紹介する。

ケース５：高校時代にスケラボと出会い、大きく影響を受けたＴ氏
【主なポイント】 沼津市で息苦しさを感じていた高校時代にスケラボに出会い、視野が広がった。 同じ関心を持つ仲間やアーティストとの出会いを通じて、地方だからできることがあることを知り、沼津で暮らすことに魅力を感じている。
・T 氏は 20 代女性。高校まで沼津で育ち、現在東京都内の大学に通う。 ・中学卒業後、地元の進学校に進学したが、周囲には、「自分の偏差値に見合った東京の大学に行って大きな会社に就職にする」という考えの同級生が多く、将来の夢を語っても「実現できるの？大丈夫なの？」という反応が大半だった。生徒会や所属する演劇部でも前例や決まり事に従うことが当たり前になっており、新しい提案をしても受け入れてもらえず周囲に合わせることに息苦しさを感じていた。 ・他校の演劇部の顧問だった加藤氏に紹介されて、沼津 RAKUUN にスケラボの公演を観に行った。廃墟的なスペースを使っているところ、好きな場所に座れること、アフタートークでアーティストと話ができることに驚いた。毎回違うものをみせるスケラボに魅せられ「今度行ったらどんなものが見られるんだろう」とわくわくしながらスケラボの公演に足を運ぶようになり、やがて手伝いをしながら中心メンバーと話しをしたりするようになった。 ・最初は、自分はまだ子どもだから、真剣に話を聞いてくれないのでは、と感じ、中心メンバーから「どうだった？」と聞かれても、「楽しかった」、とだけ話していたが、耳を傾けてくれる姿勢を見て、感じたことをそのまま伝えることにしたところ、どんなことを話しても、同じ目線で反応が返ってくる体験をした。T 氏は「おとなと素直に話せる体験があそこでできたことは大きい。自分の意見は絶対に伝えた方が良い、と思えるようになった」と話す。 ・スケラボに集まる同世代の若者は皆アートが好きで、T 氏自身の「アートが好き」という思いを存分に共有でき、学校だけでは得られない友人関係を築くことができた。 ・スケラボと出会ったことで柔軟な発想を持てるようになった。それまでに将来やりたいことに迷いながら息苦しさから逃れるために東京に行くことを考えていたが、自分を表現できる方法はいろいろあるし、地元を離れることが唯一の道ではないと感じるようになってきた。 ・また、スケラボの廃墟的空間や商店街でのパフォーマンスを見たことで、空間利用についての視点が養われた。現在通う東京の大学の実習で地方に行ったときに「スケラボだったらこの空間をこうやって活用するのではないか」「ここはこのように活用できるのではないか」という目線で観られるようになり、人が多く、地縁的なつながりが薄い東京ではできないことが、地方だからこそできる、物質では測れない地方の豊かさと可能性を感じている。今は大学卒業後沼津に帰りたいという思いが強い。

T 氏のケースは、一度都市部に出た若者が地元に戻ることを決断する要因について示唆を与えている。

日本全国の地方都市と同じく、スケラボが活動する沼津市や隣の三島市でも人口減少が進んでおり、自治体の社会保障関連費の増大や利用者減による公共交通の縮小、生産年齢人口の減少に伴う労働力不足、地域コミュニティの機能低下等が懸念されている。
人口減少の原因は少子化に加えて若者の転出超過にある（図 9）。
※沼津市はららぽーとの開設もあり、2019 年は 37 年ぶりに転入者が転出者を上回った。

図 9：2013 年（平成 25 年）の転出入状況（沼津市･三島市）

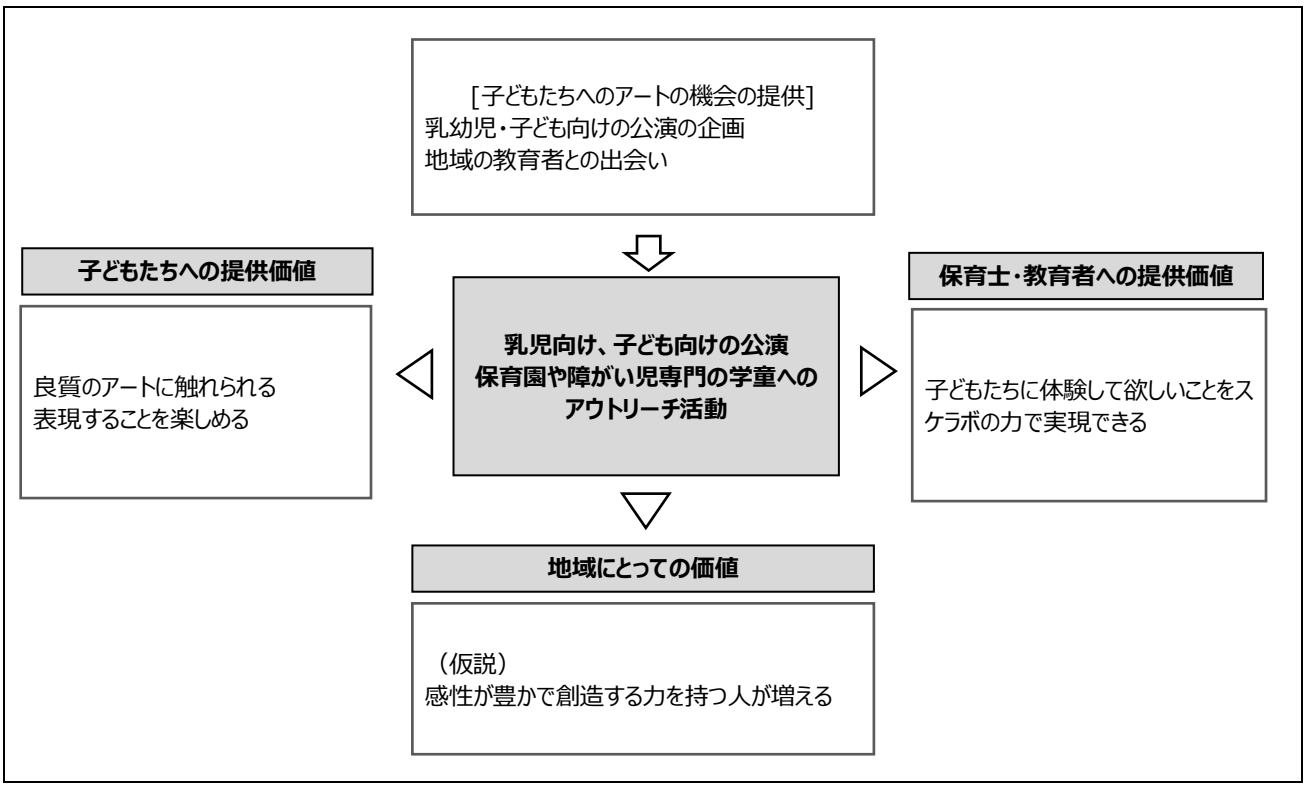


出典: 沼津市まち･ひと･しごと創生人口ビジョン（2015 年 10 月）

各自治体は今後の人口減少を抑制する施策として若者を対象に定住支援や企業誘致、果ては成婚支援まで行っている。沼津市が無作為で抽出した 20 代前半の沼津市民 1000 人の定住に関する意識調査によれば、今後沼津市内で就職・転職・勤務したいと思う理由（複数回答）で最も高い割合を示したのは「家族や友人が沼津周辺にいる」45.6％で、次いで「自宅（実家）から通いやすい」44.4％、「沼津に愛着や関心がある」35.7％の順だった。一方で、今後沼津市内で就職・転職・勤務したくないと思う理由は「楽しいと思えることや場所がない」38.3％が一位で、「自分が勤めたい企業が市内にない」37.7％、「自分が希望する仕事に就けない」29.2％と続き、自分の希望する仕事や就職先がないことに加え、沼津に楽しいと思えることや場所がないという理由が上位を占めている。この意識調査の結果を受け止めるのであれば、勤務面の利便性を除き、若い世代が地域に残るカギは、①つながり続けたい人間関係があること、②地域に愛着や関心があること、③楽しいと思えることがあることとなる。

前出の T 氏も「婚活支援や仕事があるということだけで自分は惹かれない。自分が好きなものがあるからそこに住みたいと思うし、好きであれば長くその土地に居続けるのではないか」と話す。

（8）子どもたちへのアートの提供



（9）個人の成長とコミュニティの成熟に寄与するアート

子どもたちがアートに触れることによる個人の成長と社会への貢献に関しては数多くの研究成果がある。国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）は芸術教育は個人の認知、感情、心理的成長を促し、創造的な思考と批判精神、対人スキルを向上させ、コミュニティの多様性と持続性に寄与するとし、諸外国の中には芸術教育に力を入れているところも多い。

（10）保育園の理念と合致するプログラムの提供

スケラボは 2018 年秋から保育園や障がい児専門の学童保育にアーティストが出向いてワークショップを行うアウトリーチ活動を開始し、保育園や学童保育内のリソースだけでは難しい、良質なアート教育がスケラボによって実現されてきた。子どもたちの様子を見てから保育士や指導者と話し合いながら提供する内容を考えるというオーダーメイドのプログラムは、保育士や教育者から高く評価をされている。

施設のニーズとスケラボの活動が合致した事例として以下保育園のケースを紹介する。

ケース 6: スケラボにアート専門の指導を依頼した「ぽんぽん保育園」
【主なポイント】 スケラボのアウトリーチ活動によって保育園が目指す姿を実現するための活動が可能になった。
・沼津市、清水町、静岡市で 4 つの保育園の経営を行う大澤豊氏は、子どもたちが自分自身と周りを幸せにする力を育むことを目指し、子どもたちにルールを押し付けるのではなく、こどもが様々な体験をし、自ら解決策を導き出すことを大切にしている。 ・そのためには子どもたちが表現をすること、良質なアートに触れることが重要と考え 2018 年 4 月以来スケラボにアート専門の指導を依頼している。 ・スケラボは一方的に「何をすべき」と決めることはなく、こどもたちを遊んで子どもたちを知ってからプログラムを提案する。そのうえで企画を準備してきても、子どもたちの様子を見て一日遊ぶこともある。子どもたちと同じ目線を持つことで、子どもに必要なものを引きだす。これまでに、スケラボは、子どもたちが創意工夫をして様々な用途で使えるウッドクラフトの箱の制作や、体でいろいろな音を出すワークショップ、子どもたちの四季の写真が貼れる大きな曼陀羅の絵の提供等を行ってきた。 ・本格的なアートに触れられる機会は地域にはあまり無く、出かけたとしても美術館やコンサート会場等、静かに見ることが前提の場所に限られる。スケラボが地域に出向き、保育園でアートを提供してくれることに大澤氏は感謝をしている。

また、スケラボは中心メンバーのパーカッショニスト、鈴木氏のプロデュースで 2019 年 12 月には、スケラボの自主公演としては初となる乳児・子ども向けコンサートを実施した。ステージ上で子ども向け音楽を演奏する一般的な子ども向けコンサートとは異なり、たくさんの打楽器が置かれた幻想的な空間で床に座りながら、イラストの動画とともに小さな楽器音を楽しむ企画だったが、参加者から高い評価を得た。

表 3：2019 年 12 月 20,21 日　乳児･子ども向けコンサート　夜の部参加者アンケート（回収分のみ）

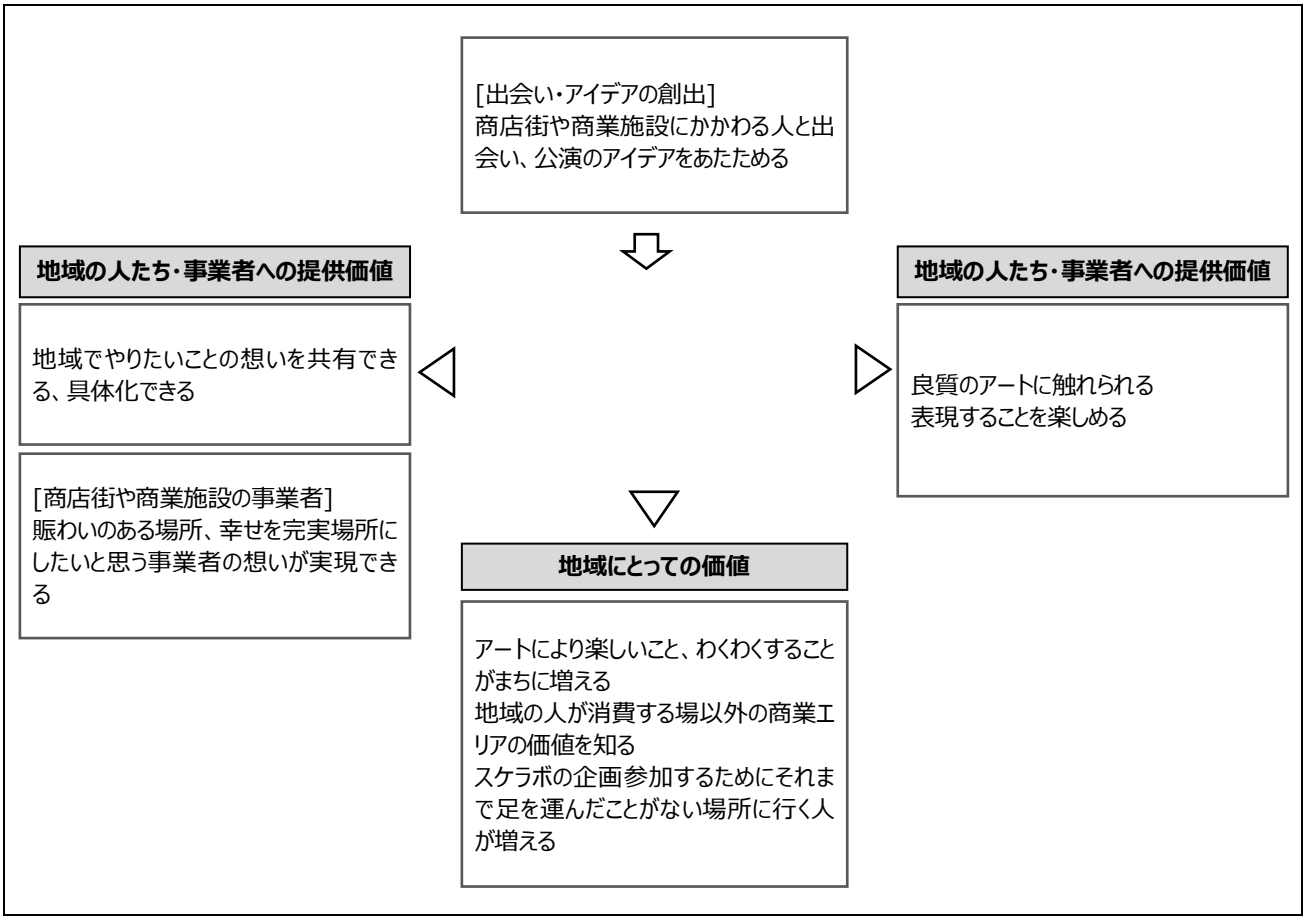
	公演を楽しんだ	アーティストとの対話を楽しんだ	子どもに体験させてよかった	また公演を観たい
そう思う	15	12	12	15
まあまあそう思う	1	4	1	1
あまりそう思わない	0	0	0	0
そう思う思わない	0	0	0	0

自由記述欄

・スピーカーを通さない生の音と映像のコラボが素敵でした。孫も聞き入って音の世界を楽しんでいました
・子どもが集中して聴いている様子が印象的でした
・色々な音を楽しめて良かったです
・こういう公演には初めて来ました。面白かったです。子どもも興味深そうにしていました。
・小さな子どもが身体で音楽を吸収している感じがした。赤ちゃんがずっと静かにしているのがビックリ！！

・色んな音をきけて、子どもにきかせられてよかったです。またこのような機会があれば是非参加したいです
・音と映像のコラボがステキでした
・楽器にさわらせてもらえて楽しそうでした。普段耳にしない音の中で心地よく過ごせました。
・子どもが無意識に触れる音にアーティストが入ることでリズムができ、子ども&アーティストセッションが自然の流れでできたことが印象づけられました
・絵を観ながら音楽を聴き、子どもが色々想像しながら楽しんでいる様子で、私も楽しかったです。終わってから楽器を触らせてもらったり、説明を聞いたり良い体験ができました
・大きな音が苦手な子なので反応が心配でしたが、とても楽しんでいて良かったです。映像との組み合わせも子どもにとっては飽きることなく良かったと思います。これからもっと音楽のイベントにも連れて行きたいなと思いました
・子どもも一緒に楽しめてよかった
・普段近くにない楽器にふれる事ができて、私自身も楽しかったし子どもにも良い刺激になりました。ありがとうございます

（11）まちの賑わいへの寄与



（12）想いを実現するプロセスを創る

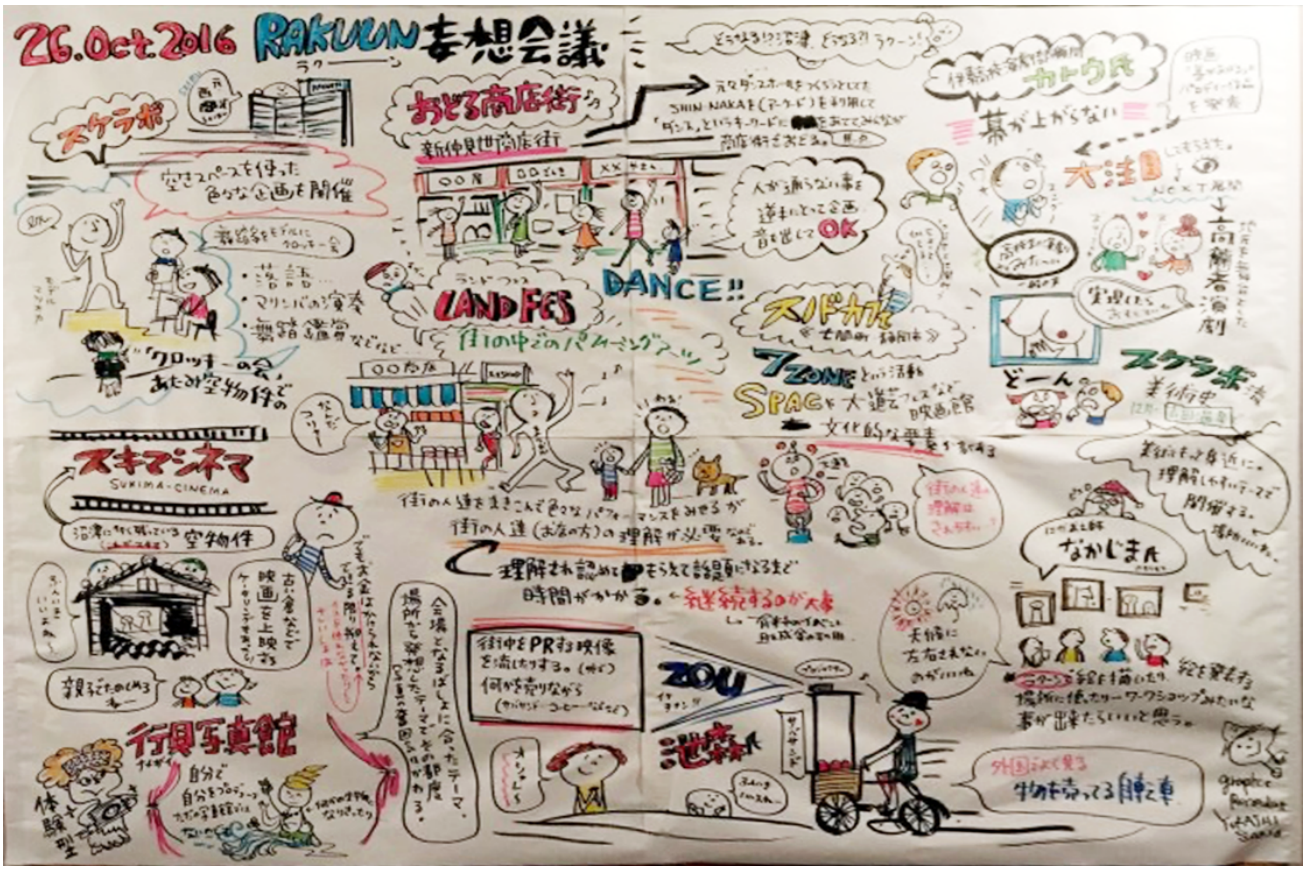
スケラボ発足当初はアートを愛好する人たちを中心とした活動を行っていたが、発足半年から地域においてアートの力で新しいことをしたいと思う人たちとつながる機会として、地域の人が思いを

語る公開プレゼンテーションの機会を設けて行った。公開プレゼンーテーションは 2016 年 10 月から 2019 年 11 月までに「妄想会議」「妄想相談所」等の名前で計 14 回開催された（表 4）。

表 4：妄想会議･妄想相談所一覧

イベント名	実施日	会場	開催自治体
ラクーン妄想会議	2016/10/26	沼津 RAKUUN	沼津市
妄想会議@熱海	2017/12/22	naedoco（熱海市）	熱海市
妄想相談所　テーマ：こども目線	2018/8/21	大社の杜みしま	三島市
妄想相談所　テーマ：松崎の未来	2018/8/29	ふれあいとーふや（松崎町）	松崎町
グラフィックレコーディング講座	2018/9/28	沼津 RAKUUN	沼津市
妄想相談所　テーマ：身近さの編集	2018/10/16	大社の杜みしま	三島市
妄想相談所　テーマ：アートで街をどうしたい？	2018/11/2	壺中天の本と珈琲（伊東市）	伊東市
プレゼンテーション講座	2018/11/28	沼津 RAKUUN	沼津市
妄想相談所　テーマ：街の余白	2018/12/15	みしま未来研究所	三島市
-インプロ（即興劇）講座	2019/1/20	沼津 RAKUUN	伊東市
妄想相談所　テーマ：地元を愉しむ	2019/2/16	ジオリア（伊豆市）	伊豆市
妄想相談所　テーマ：誇大妄想大会	2019/3/8	みしま未来研究所	三島市
スケラボチェコツアー報告会	2019/9/23	dilettante cafe（三島市）	三島市
スケラボ相談所 R25	2019/11/7	みしま未来研究所	三島市

図 10：第一回妄想会議（2016 年 10 月）のグラフィック･レコーディング



（記録：スケラボ中心メンバーのサノユカシ氏）

公開プレゼンテーションでは、登壇者が自分ややりたいことを「妄想」として発表し、他の参加者が質問したりコメントしたりする。これによりアイデアがブラッシュアップされ、時には協力者を得られることもある。今までストリートでパフォーマンスを行う「ランドフェス」が沼津駅前の商店街とスケラボのコラボにより実現されたほか、先のケースで登場した演劇人の加藤氏、保育園経営の大澤氏も妄想会議に登壇し、その後スケラボとのコラボを深めていった。
その他移動式ミニシアター「スキマ cinema」も実現し、沼津 RAKUUN や、商店街、古民家等で映画上映を行っている。

（13）街の賑わいづくりへの寄与

スケラボが主な公演場所とする沼津 RAKUUN が、スケラボと施設管理者の手によって、地域の文化芸術資源として開発されたことは先に述べたが、この背景には沼津駅前の賑わいを創りたいと考える施設管理者の想いがあった。施設管理の E 氏は、場所を提供することは短期的な経済的収益こそ生み出さないが、別の点で大きな価値があると次のように話す。

> パチンコ、飲食店、お笑い劇場、カラオケ店、キッズランドが入る沼津 RAKUUN は駅前にあり、地域の多くの人にとって、名前も場所も知っているが、行ったことない場所である。
> 商業施設はその地域が元気じゃないと成立しない。沼津 RAKUUN を含めた駅前地域は、人が行き交う場所にならなければならないし、沼津駅前で館を構えている以上、周辺の商店街も含めて「あの辺で面

白いことやっている」というようにしたい。
スケラボやスキマ cinema の企画によって、それまで RAKUUN に足を運んだことの無い層が訪れるようになった。年齢幅が広く、おとなが思いっきり楽しんでいることを若者に間近で見せられることもできている。
スケラボの取り組みは新聞にも取り上げられ、こちらが販売促進の予算を使わずに RAKUUN のことを知ってもらえる。
商業施設は消費するだけの場所ではない。経済的なものと、文化的なものを、気軽にクロスオーバーしていきたいと思っている。

E 氏は商業施設にとって消費だけではない、別の目的で人が訪れるようになること、人が行き交う場所になることが、イベント毎の収益だけで測れない価値があるとしている。同様の考えは、スケラボが商業施設内を練り歩く「ENGI-MON」の公演をした清水町のショッピングモール「サントムーン柿田川」の運営者、N 氏からも述べられた。

サントムーン柿田川は、モノとお金の交換だけでなく、地域とつながり、幸せを創発する場所になることを目指している。
ひとつひとつアートイベント開催を続けていくと、売り上げに換算されない価値が積み上げられていく。モノが増えたり減ったりの一喜一憂ではなく、興味関心の連鎖で新しい世界が広がる。
スケラボの「ENGI-MON」が店内を歩くと、はじめはびっくりして遠巻きに見ていた買い物客も最後は一緒に踊っていたのには驚いた。スケラボのアートは観客が見るだけではなく、参加することのできる「関わり代（しろ）」が大きく、幸せの創発というサントムーンのコンセプトに合致している。

その後サントムーンでは新年のイベントや新館の開館に合わせてスケラボに制作やパフォーマンスを依頼している。

5. 価値を生み出した貢献要素

スケラボの評価情報を分析していくなかで、スケラボが地域に変化をもたらし価値を生み出した理由がステークホルダーのインタビューで触れられていた。本章ではスケラボの価値創造を可能にした貢献要素についてステークホルダーへのインタビューを中心に抽出する。

アートを楽しむことを何よりも大切にする姿勢

「まず僕ら自身が『すごく楽しいことやっているぜ』といつも思い、そこにいろいろな人が呼応していくことが大事。強制ではなく、そこに乗っていきやすいしかけを創る。」
「いつだって楽しい時間をつくれるし、自分で楽しみを見つけられたら良い。そういう思考ができるお手伝いができたらと思っている。」―スケラボ代表・川上氏

スケラボはアートで地域の人が楽しむことを何より大切にしている。小さな子どもを対象にするイベントを開催することが決まれば、その対象のことをアーティストたちが深く考えてオーダーメイドの企画を練る、商店街の公演であれば、その空間を利用したパフォーミングアーツを展開する。

このように、その対象、その場に合った新しいアートの企画を徹底的に考える、良質なアートを体験する機会を提供することにより、結果として観客による公演自体の高い評価につながる。また参加者が手を動かすワークショップでは、技術を高めたり、画一的な成果物を作ったりすることを目的とせず、参加者が作品を作る過程を楽しむことを重視し、講師はその過程をサポートする。何かの手段としてアートを「活用」するのではなく、専門性の高いアーティストたちが、純粋に地域にアートを提供することを追求していくことで、参加者は普段の生活の質を上げ、また、地域の価値を発見するなど、様々な価値創出に寄与した。

「アートを提供する側」「される側」の境目を無くす試み

「通常の劇場であれば、観客は決まった席に座り、公演中は静かに集中して観ることを求められる。スケラボが既存の劇場ではないところで公演をすることを魅力に感じる。絵画は美術館で見るもの、ステージ公演は劇場で見るものという思い込みがあったが、スケラボを見て、どんな場所だって音楽ができるし、ダンスもできるし、演劇もできるし、そこにいる人が一体となって皆で楽しめると今では思っている。またお客さんかと思いきや、どこかのポイントで、アートを提供する側になることもある。」―中心メンバーに　辻村氏

スケラボは「アートを提供する側」「される側」の境目を無くし、そこにいる人たちが主体的に関与することを目指している。ショッピングモールの公演では、買い物客が踊りだし、チェコ共和国のアートフェスティバルでは国籍や年齢を超えた観客数百人が一体となって踊り、最後お互いがハイタッチをするような場を創りだしてきた。
スケラボの公演でも演者と観客の物理的な境を感じさせない空間利用が行われ、演者や制作側と観客と語らう行うアフタートークも公演の一部として双方が楽しむほか、スケラボの中心メンバー自身、出会った人たちの想いを聞き、対話をすることを大切にしてきた。
こうした姿勢により人同士の距離が狭まり、観客として訪れた人のなかから、イベントの手伝いをしたり、広報に協力したり、中には中心メンバーになったり、というように、豊かな社会関係資本が築かれていった。

共創を促進するリーダーシップと中心メンバーが共有する価値観

「大二郎さん（川上氏）がアートをかかわる仕事をしながら演者ではなく、舞台監督であることが大きい。」―中心メンバーの鈴木氏

「スケラボはグループで活動しているが、ひとりひとりの考え方は独立している。こうしたつながりで新しいものを生み出し続けられるのは、スケラボはメンバーの見ている方向が同じだからではないか。スケラボと話したわけではないが、私がスケラボから受け取っているメッセージは『自分のなかのアーティスト性を忘れないでくれ。もっとアートは身近なんだよ』ということ。」―スケラボを支援する山崎氏

長年舞台監督を仕事としてきた川上氏は、チームで作品を創り上げてきた。良いものをつくっていくために言われたことだけをするのではなく、ひとりひとりができることを考えることが重要であ

ると同時に、チームメンバーが本音を言える環境をつくるリーダーシップが必要と考えてきた。スケラボでも各企画は中心メンバーがプロデュースを務めることも多く、どう企画を発展させていくかは各々に任されている。一方で、良質なアートを届けるために、各中心メンバーがマネジメントや渉外、広報、記録等、それぞれの役割を合わせて力を合わせている。
また、スケラボのビジョンやミッションや明文化されてはいないものの、中心メンバー及び山崎氏のようにスケラボの活動を近くで支える人たちの間でスケラボが大事にしてきた想いやアートや地域に向き合う姿勢が共有されていることがインタビューから伺えた。それぞれの力を引きだすリーダーシップと、共有する価値観が多様な人たちの協働を可能にしていると考えられる。

地域の人脈の豊富さ

「地元で暮らしているからこそ会って話せることが大きい。」―スケラボの中心メンバーの住麻紀氏

スケラボの中心メンバーの多くは静岡東部在住または出身であり、スケラボと出会う前から地元の人たちとのつながりを持っている。例えば中心メンバーの一人、住氏は三島市の佐野美術館の学芸員を務めた後に、三島市の委託を受けて地域のアートを紹介する仕事をしたり、フリーランスのアーティストの集まりに参加したりしてアートにかかわるひととのつながりを構築していた。さらに、出産後、平日日中に地域で過ごす時間が長くなったことで、異業種でありながら自由な発想で地域で取り組みを行っている人との人脈を築いていた。
アーティストに限らず、地域で様々な取り組みをしている人、またしたいと思っている人を招いて行った公開プレゼンは、住氏をはじめとするメンバーの豊富な地元の人脈と積極的な声がけによって実現した。
地域のつながりを通じて、様々な取り組みとアートを融合させていく活動は、外部から一時的の地域を訪問する団体にはできない。スケラボだからこそ、地域の人たちとの協働による企画を生み出し、また公演会場を飛び出して保育園や学童保育、学校など地域の中に出向いて活動することができているといえる。

6.今後に向けて

4 章「評価結果」で概観した通り、スケラボ自身が意図していなかった変化も含めて様々な価値が生み出されていた。
スケラボは友人関係を起点とし、その後口コミを中心として観客やサポーターとしてかかわる人のつながりを増やしていった。このつながりはスケラボの財産であり、これからも維持し関係性を発展させていくことも大事であるが、今後スケラボのファンやサポーター層を厚くしたり、新たな協働先を開拓したりするのであれば、まだコンタクトが無い「コールド・マーケット」にもアプローチしていくことも必要かもしれない。
そこで本章では、今まで築き上げた関係やスケラボの生み出した価値を基盤として、新しいつながりを得ていき、ひいては地域でスケラボの活動を求める人を増やしていく方策について検討する。

■スケラボの生み出す価値の発信

観客が高く評価するスケラボのアートそのものの価値に加えて、本評価ではスケラボが個人や地域に対して与える様々な価値が抽出された。スケラボの活動そのものに加えてこれらの価値と併せて、アウトリーチやストリートでの公演等、価値を生み出すために提供できる活動メニューを発信していくことで、地域でニーズを持つ人たちとの協働につながる可能性が増すかもしれない。
発信先としては、今まで関係を築いてきた地域の方々に加え、アウトリーチの潜在的ターゲット（学校、保育園等）、行政、企業等からニーズを持つ可能性のあるところを見出して個別の働きかけをしたり、地元紙を通じて広い層に伝えたりといったことが考えられる。

■公演を軸に協力者を獲得

スケラボの自主公演を行う準備のなかで、地域の協力者を募り、それぞれができることを実施してもらうという過程を含めることで、その後も続く協力関係を築けるかもしれない。例えば、公演を行う際には自治体の後援名義をとり、市の広報誌で宣伝をしてもらう、駅前商店街の協賛を得てチラシの配布やポスターの掲示を依頼し、イベント時には商店街の広報物を配るような互酬性のある方法を提案する等、様々なメニューを用意する等、実現可能な方法について地元の事業者と意見交換しながらメニューを提示していくことについては一考の価値がある。

付録.評価実施概要

■評価実施期間

2019 年 11 月　評価設計
2019 年 9 月～3 月　評価情報の収集と分析
2020 年 3 月～4 月　評価報告書作成

■評価情報の収集

本評価は、主として下記の情報源に対するヒアリング、これら情報源から提供を受けた資料とアンケートへの回答、イベントの参与観察を元に行っている。

【本評価のための主な情報提供者】
（1）Scale Laboratory　（インタビュー、資料提供）
（2）Scale Laboratory 協働者・サポーター　（インタビュー）
（3）Scale Laboratory 公演参加者（アンケート）

■評価者と本評価の問い合わせ先

インクルラボ　代表　高橋聖子
kiyokicat@gmail.com

静岡県文化プログラム推進委員会委託事業

Ⅶ 個別事業の詳細評価（濃い評価）

UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川 2020

— 目次 —

評価概要（エグゼクティブ・サマリー）.....116
1.団体概要　特定非営利活動法人　クロスメディアしまだ.....116
2.事業概要（評価対象）　UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川.....116
3.事業評価の概要.....116
3-1.アーティストが、地域住民が気づかない視点の提示、地域の魅力の発掘している.....117
3-2.地域住民が、地域の魅力・価値を再発見する.....117
3-3.地域外からの芸術祭参加者やアーティストが、“地域のおもてなし”を受ける.....117
1.対象事業.....118
1-1.事業の背景・経緯.....118
1-2.事業の特徴.....119
1-3.事業の実施体制.....120
1-4.事業の実施プロセス.....121
1-5.芸術祭の内容　～巡り方～.....122
2.事業評価.....123
2-1.評価結果の活用イメージ.....123
2-2.評価目的.....123
2-3.評価設問　～評価で知りたいこと～.....124
2-4.評価実施体制.....124
2-5.評価の実施スケジュール.....125
2-6.評価結果.....125
2-6.1.UNMANNED の価値の整理.....126
2-6.2.UNMANNED の成功の姿.....128
2-6.3 セオリー・オブ・チェンジ.....129
2-6.4.評価グリッド　～価値を測定するための計画表～.....129
2-6.5.ルーブリックと価値判断　～アウトカム評価を行う～.....130
2-6.6.UNMANNED の参加者情報.....138
2-6.7.UNMANNED の参加者アンケート分析.....139
2-6.8.事業の持続発展性に向けての教訓抽出.....141
3.まとめ・今後の提言.....143
3-1.まとめ.....143
3-2 今後の提言.....143

評価概要（エグゼクティブ・サマリー）

1.団体概要　特定非営利活動法人　クロスメディアしまだ

2016 年に設立されたクロスメディアしまだ（代表理事：大石歩真）は、静岡県島田市に拠点を持つ非営利団体で、「スキだらけのマチづくり」をビジョンに、地域情報の発信、地域活性化に対する取り組み、地域コミュニティの構築に向けた取り組みなどを行なっている。

2.事業概要（評価対象）　UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川

評価対象は「UNMANNED（アン・マンド）　無人駅の芸術祭/大井川」である。2017 年から静岡県文化プログラム（以下、ブンプロ）等の助成を受けて毎年開催されており、今年は 3 年目である。特に今年度開催のものに主に焦点を当てているが、大井川鐵道の無人駅周辺　（静岡県島田市・川根本町）を舞台として、地域で残された交通手段として大切な資源である一方で、地域で忘れられつつある存在でもある「無人駅」を舞台に繰り広げる芸術祭である。今年は 2020 年 3 月 6 日（金）- 22 日（日）の 17 日間の開催であり、12 名のアーティスト（＋学生団体 1 組）が参加した。来訪者は推計 4,275 名（主催者報告）であった。

主な活動内容	大井川鐵道の無人駅を舞台にした地域の魅力をアーティスト達が多彩に表現する芸術祭
主な活動領域	大井川鐵道無人駅周辺　（静岡県島田市・川根本町）

3.事業評価の概要

本事業評価は「UNMANNED の価値を整理して、持続的な展開の可能性を模索する」ことを目的として行なった。来訪者や経済効果以外の芸術祭の価値を示していく必要がある、という主催側の強い意識からである。はじめに、本芸術祭の重要な関係者である地域住民やアーティスト、大井川鐵道や行政が感じている価値はどのようなものか、その価値を生み出す源泉を把握するためのリサーチを行なった。行政（島田市）からは、「地域の人が、地域の魅力に気がつくための事業であり、地元に対する誇りを取り戻すことができる事業である」とコメントが挙げられた。

次に UNMANNED の活動の成果を把握するために、リサーチに基づいて価値を生み出すセオリー（何がどのようになって価値が生まれるのかを示した体系図）を整理して、それに基づいて成果測定と価値判断を行なった。UNMANNED のキー・メッセージは、「無人駅が開くと、地域が開く」である。UNMANNED によって「地域がどのくらい開かれたのか」が成果であり、それを以下の 3 点と下図ように整理した。

3-1.アーティストが、地域住民が気づかない視点の提示、地域の魅力の発掘している

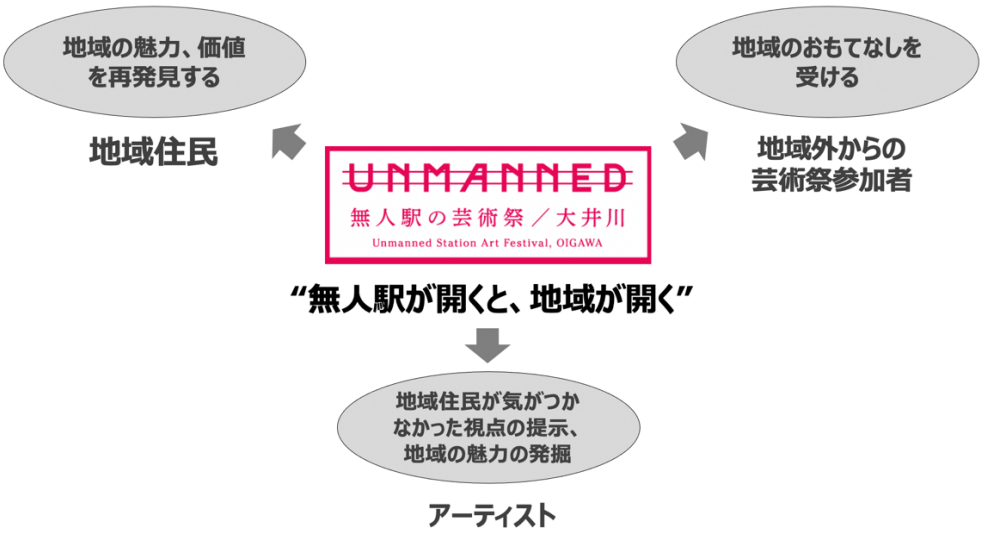
住民が地域を見るためのアートだからこその視点の提示が多くあり、参加アーティストたちが様々なアプローチで地域の魅力を発掘しているということが分かった。アーティストの高い感性と、入念なリサーチ、または地域住民との信頼関係やコミュニケーションを積み重ねることにより作品が生まれており、それが住民に新しい視点を提示している様子が多く見受けられた。主催側からは、「できればさらに一歩踏み込んで、地域のマイナス部分も取り扱うことを期待したい」というコメントが挙げられた。これはアートを活用して地域のネガティヴな側面にもうまく触れることで、地域内の関係性が前向きに発展するのではないかという期待が込められている。

3-2.地域住民が、地域の魅力・価値を再発見する

本芸術祭を通して、地域住民にとって「オラが作品」（地域の風景も住民である自分たちもひっくるめて、作品の一部である）という主体性の意識の高まりが生まれている。アーティストは地域住民を第一に考えて彼らの目線で作品を仕上げており、開催期間中は外からの芸術祭参加者よりも地域の人の鑑賞や利用が多かった作品も少なくなかった。また地域住民たちが自分たちで身にまとうことで完成する作品もあった。このようなアートの仕掛けや観点によって、多くの地域の魅力・価値の再発見につながっていると考えられる。無人駅ではあるが、過疎ではなくそこに確かに人はいるのである。

3-3.地域外からの芸術祭参加者やアーティストが、“地域のおもてなし”を受ける

本芸術祭は、地域住民がいないと成り立たないものである。地域住民からは「この芸術祭をきっかけに足を運んでもらって、そこに暮らす我々のことを知ってもらって、また何かあれば来てもらいたい」と話していた。地域住民や“妖精”たち（芸術祭の運営サポート全般を行う地域の人たち）の魅力を伝える。



1.対象事業

1-1.事業の背景・経緯

今回の評価対象は、「UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川」である。大井川鐵道無人駅周辺 （静岡県島田市・川根本町）を舞台として、地域で忘れられた「無人駅」を舞台に繰り広げる芸術祭である。2017 年度から毎年開催されており、今年は 3 年目である。今回は 12 名のアーティスト（+学生団体 1 組）が参加した。2020 年は、3 月 6 日（金） - 22 日（日）の 17 日間開催して、4,275 名が訪れた。総来場者数について、パブリックスペースであるため、来訪者数の計測が困難である。来場者数のカウントは、各駅及びエリアに作品が分散しており、屋外展示作品もあることから、芸術祭のために訪れた実人数をすべての作品ごとに把握することができないため、下表の備考に示す形で推計した。

年度	日程	総来場数	備考
2017 年度	2018/3/9-3/25	3,840 名	作品キャプションを持ち帰りできるようにし、来場者数測定の一助とした。3 人に 1 人が持ち帰ったと想定すると、のび来訪者数想定 3,840 人＋鉄道利用者及び住人と推測した。
2018 年度	2019/3/8-3/24	1,576 名	総回遊数：9,967 名
2019 年度	2018/3/6-3/22	4,725 名	総回遊数：18,575 名。入場者数を計測可能なインフォメーション センターを基準として設置し、主要 3 駅及びエリアへの来訪者を想定うえで、主要 3 駅及びエリアへの来場者数を合計したものを芸術祭全体の来場者数とした。回遊数は、インフォメーションセンターでの作品を基準とし、来場者が各作品鑑賞を回遊した数を想定したものとした。

2016 年 11 月に静岡県文化プログラムの採択が決まり、その後連続して助成を受けたことにより、活動の幅が厚みを増してきた。主催者によると、「地域の方が、地域の見たことないところを見てほしい」という興味喚起の想いがスタートであったという。大井川鐵道は歴史ある鐵道であり、大井川本線の他に、有名な SL や機関車トーマスも走っている。大井川本線は合計 19 駅があり、うち 15 駅が無人駅である。無人駅に 1 駅あたりに電車が来る回数は 1 日概ね 10 本未満である。一方で、観光客が多く集まる SL や機関車トーマスの停車駅は 4 駅のみであり、多くの観光客は素通りしてしまうのが無人駅の特徴である。普段の観光では決して知られることのない無人駅という場所を、地域内外の人に発見して、体験してもらう。これまで地域づくりを行なってきた NPO であるクロスメディアしまだが、地域づくりの一環として芸術祭の企画・開催に乗り出したことが活動の経緯である。

1-2.事業の特徴

「UNMANNED」の特徴を以下に示す。

1.「無人駅」を舞台にしていること
2.「文化・芸術」を活用することで、「地域のありのまま」を表現すること
3. 地域住民とアーティストの「関係性」

1 は、「無人駅」は地域資源であるが、地域の人にとっては当たり前であり、ある意味忘れられたものであるものを芸術の舞台、資源としていることである。大井川鐵道からは「SL やトーマスになくて UNMANNED にあるものは、普段見落とされており光が当たらない無人駅にスポットライトがあたることが魅力である」とのコメントがあった。2 は、パンフレットや SNS などでは伝えられない地域の人の生き方や土地の魅力、地域の課題などを含めた「地域のありのままの姿」を中立的な姿勢で表現することができるのが「文化・芸術」という手法・アプローチの強みである。芸術祭やアートの活用により、地域の魅力を様々に切り取れる。3 は、地域住民が芸術祭の立役者であり、彼らがアーティストに協力することによって「地域のありのままの姿」が作品に映し出される。地域住民がアーティストを支える関係性ができており、地域住民と共創することで作品が成り立つ。地域住民抜きには、「UNMANNED」は成り立たないのである。無人駅の先には地域があり、そこで暮らす人たちの魅力やありのままを伝えるきっかけとしてのアートであり、それを引き

出すアーティストという関係性が特徴である。吉田（2019）[1]の「芸術祭による地域づくりへの影響の整理」によると UNMANNED は、作品の性格＝「サイトスペシフィック型」（その場所の特性を生かした作品展示）×地域の受け入れ態勢＝「既存の拠点連携・発展型」に分類されるだろう。

2019 年度「UNMANNED」の展示作品とアーティスト（パンフレットより）

1-3.事業の実施体制

クロスメディアしまだに加えて、地域のコアスタッフ（県内の NPO 関係者が中心）、地域住民、参加アーティストらによって「UNMANNED 無人駅の芸術祭」が展開されてきた。主催側は NPO だけでやることのリソース面や広報面の限界を感じて、3 年目の今年度は、より持続可能な運営体制の構築を志向して地域のステークホルダーに関わってもらうために「推進会議」形式をとって進めた。以下に実施体制を示す。

1	クロスメディア しまだ	「UNMANNED 無人駅の芸術祭」の企画から運営までの全てを担当。推進委員会の運営を取り仕切る。
2	地域のサポーター ・コア・スタッフ ・地域住民	本芸術祭の運営に欠かせないのが地域のサポーターの存在である。今年は“妖精たち”と呼ばれる地域の住民が 20 名ほど関わっており、アーティストへの支援や作品制作への協力など、幅広く行なった。この地域サポーターの人数は年々増えている。
3	アーティスト	本芸術祭への参加アーティストであり、今年度は 12 名のアーティスト（＋学生団体 1 組）が参加した。作品の制作過程で地域住民にヒアリングをしたり、材料の運搬や運営を手伝ってもらったりするなど、多くが地域と共に作品を作り上げた。
4	推進委員会	大井川鐵道、行政（島田市）、町内会など、
5	その他	静岡県文化プログラム

[1] 「芸術祭と地域づくり」（吉田隆之、水曜社, 2019）

1-4.事業の実施プロセス

助成決定後から、以下のような流れで企画・準備・本番を行なった（実施計画書より抜粋）。制作期間からアーティストが地域に住み込んで入念なリサーチを行なったり、数ヶ月かけて制作を行ったりするケースもあった。この期間中、ブンプロのプログラム・コーディネーター（PC）が適宜相談に乗って進めた。

電車で巡るおすすめコース

時刻表は予告なくダイヤ改正する場合がございます。大井川鉄道公式HPをご確認ください。

1日ダイジェストコース

「金谷駅」発　9:01 ⇒⇒
9:45 着「塩郷駅」発 11:17 ⇒⇒
11:29 着「抜里駅」発 13:23 ⇒⇒
13:35 着「福用駅」発 15:23 ⇒⇒ 15:47 着「金谷駅」

じっくり巡りコース

「金谷駅」発　9:01 ⇒⇒
9:45 着「塩郷駅」発 13:13 ⇒⇒
13:23 着「抜里駅」～［ガイドツアー参加（※開催日）］～ 発 15:12 ⇒⇒
15:23 着「福用駅」（※鑑賞16時迄）発 17:39 ⇒⇒ 18:02 着「金谷駅」

ゆっくり2駅&温泉コース

「金谷駅」発 11:09 ⇒⇒
11:40 着「抜里駅」発 12:53 ⇒⇒
13:03 着「塩郷駅」～［ガイドツアー参加（※開催日）］～ 発 15:01 ⇒⇒
15:09 着「川根温泉笹間渡」～［入浴］～ 発 17:25 ⇒⇒ 18:02 着「金谷駅」

大井川鉄道の乗車や作品鑑賞をより楽しむための心得

その① 作品鑑賞は無人駅エリア。乗り降りする電車に注意して
無人駅で乗車できるのは普通（ワンマン）電車のみ。SLや急行列車の一部は無人駅に止まりません。

その② 電車の本数が少ないよ! 時刻表を見て効率的に回る工夫を
単線の鉄道のため、1時間に1本のペースでしか電車が来ません。ツアーへの参加や自家用車と電車を組み合わせた回り方など工夫を。

その③ トイレは目についたら必ず済ませるのがポイント
普通電車にはトイレがついていません。無人駅も全ての駅にトイレが設置されているわけではありません。トイレは見かけたらこまめに済ませましょう。

その④ 無人駅での運賃の支払い方法は?
無人駅から乗車する際は、乗車口で「ワンマン整理券」をお取りいただき、下車の際に車両一番前の運賃箱にてご清算ください。

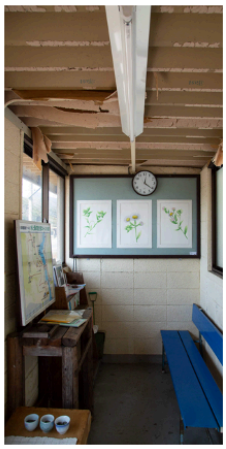
その⑤ 車の場合、駐車場所に配慮しよう
単線の鉄道のため、1時間に1本のペースでしか電車が来ません。ツアーへの参加や自家用車と電車を組み合わせた回り方など工夫を。

その⑥ 挨拶が鑑賞&旅の基本です
地域住民の方や他の来場者とはぜひ挨拶を。気持ちの良い挨拶は旅を何倍も豊かなものにしてくれます。

時期	事業内容	
6月～ 7月	**<全体スケジュール決定及び関係機関との打合せによる実施体制のすり合わせ>**	
	・大井川鐵道との打合せ （実施駅、回遊施策、期間等） ・島田市及び川根本町との打合せ （実施体制等）	・アーティスト選定方法について打合せ ・アーティスト用資料作成 ・アーティストの選定、依頼 （県外アーティスト）
8月～ 9月	**<アーティスト選定及び会場決定>**	
	・ボランティアスタッフ及びサポーターの募集（募集後定期的な会議の開催） ・滞在場所候補の洗い出し ・回遊施策についての打合せ	・アーティスト募集（県内アーティスト） ・回遊ツアー開催（アーティスト向け） ・フィールド選定（大井川鐵道交渉・調整）
10 月・ 11月	**<開催告知関係及び回遊性の仕組み作り>**	
	・作品プラン決定及び作品制作 （各アーティスト毎） ・周辺住民への関わりの呼びかけ及び プラン説明 ・関係機関への協力依頼	・協賛、協力依頼 ・回遊施策等（交通機関等）の依頼 ・告知パンフレット製作及び掲出 ・公式サイト制作・公式 facebook ページ、 公式インスタグラム制作
12月 ～ 2月	**<プレスリリース及び作品制作>**	
	・ワークショップ内容決定 ・プレスリリース（計２回）	・アーティスト滞在場所の借上げ開始 （12月～） ・回遊施策（交通機関、モデルコース等）の決定 ・回遊施策（モデルコース）プレツアーの実施
3月	**<イベント開催>**	**<撤収>**
	・作品管理 ・アートワークショップの開催 ・アートツアー等の開催 ・取材対応 ・記録集様素材撮影	・作品撤収 ・会場撤収 ・報告資料作成 ・記録集の制作

1-5.芸術祭の内容　～巡り方～

以下のようなコースで、鑑賞者が UNMANNED に参加できる。尚、閲覧料については、以前は有料パスポートを発行していたが、パブリックスペースを利用するという特性を考慮して今年度は無料である。これまでの開催経験を踏まえて、地域の芸術祭に参加するときのマナーや楽しむための心得も紹介している。



2.事業評価

2-1.評価結果の活用イメージ

クロスメディアしまだと相談の結果、「UNMANNED」運営上の課題は「重要なステークホルダー（特に行政、大井川鐵道）の巻き込み」と「持続可能な運営の仕組み（事業モデル）の構築」という 2 点に集約された。今回の事業評価で「UNMANNED」の本質的な価値を整理することで、今後以下の課題への活用に役立てていただくことを見据えて評価を行なった。

・重要なステークホルダー（行政、大井川鐵道等）に、活動の価値・意義を理解してもらう
・持続可能な運営の仕組み（事業モデル）を考える素材とする

2-2.評価目的

クロスメディアしまだと評価者で本事業評価に取り組む目的を整理した。その結果、「UNMANNED 無人駅の芸術祭」が「誰に対してどんな価値を生み出しているか」を明らかにすること、その成果を定義・測定して、今後の持続的な展開につなげていくために関係者にどのようなメッセージを伝えればよいかが整理されることが有用であるということになった。以上を踏まえて、評価目的を以下のように設定した。

UNMANNED の価値を整理して、持続的な展開の可能性を模索すること

2-3.評価設問　～評価で知りたいこと～

また、2-2 で設定した評価目的を達成するために、どのような問いに答えれば良いのだろうか。以下の３つの評価設問を作成した。

1. UNMANNED に対して、それぞれのステークホルダーが感じている価値はどのようなものか？
2. UNMANNED によって、どのくらい“地域が開かれる”ようになったと言えるのか？
3. UNMANNED の価値を持続的に生み出すために、どのような運営体制を作ることが効果的か？

尚、静岡県文化プログラムの評価基準のうち、UNMANNED と親和性のあると思われるものは、以下の通りである。本事業評価において上記の評価設問に答えることにより、これらへの貢献も見ていく。

評価基準	内容	理由
1	多様性と包摂生	当該事業が、アーティストと地域住民、来訪者、サポーター等、多様な人の化学反応を起こすことを目指し進められているため。
3c	企画運営面での自立発展性	今年から推進委員会形式の運営体制構築に取り組んでおり、企画運営面での自立発展性を高めることを意図しているため。
4	地域資源の発掘・社会課題への対応	UNMANNED は「無人駅が開くと地域が開く」といっており、この「地域が開く」度合いを見られるようになりたい、と団体側から要望あり。

2-4.評価実施体制

本事業評価は、以下の体制で実施した。また本芸術祭を題材に研究を行っている佐野直哉氏（ブンプロ PC）より、本芸術祭に関するデータを提供いただいた。

事業評価担当者	千葉 直紀（一般財団法人 CSO ネットワーク　評価事業コーディネーター）

地域住民参加型の「顔の家」の制作の様子

「顔の家」の展示の様子

2-5.評価の実施スケジュール

本事業評価は、以下のスケジュールで実施した。

日程	内容
10/28	キックオフ mtg（クロスメディアしまだ、ブンプロ立石氏 mtg） - 評価目的・活用イメージ設定、情報収集計画づくり
11 月	アーティストへのヒアリング（オンライン、2 名）
12/12	地域の人たちへのヒアリング（対面、2- 3 名） コアサポーターへのヒアリング（対面、3-4 名）
12 月中旬- 1 月上旬	中間レビュー（クロスメディアしまだ、ブンプロ立石氏 mtg） - ヒアリング結果を踏まえて、評価設問と評価グリッド作成
1 月	行政、大井川鐵道、その他関係者へのインタビュー
1 月	データ収集（アーティスト制作現場同行、地域の人へのインタビューを含む）
1 月下旬 - 2 月上旬	芸術祭のアンケート項目提案 評価結果の活用の相談（クロスメディアしまだ、ブンプロ立石氏 mtg）
3 月上旬- 3 月中旬	無人駅芸術祭開催、データ取得
3 月下旬	終了時 mtg、データの解釈（クロスメディアしまだ、ブンプロ立石氏 mtg）、 評価報告書作成

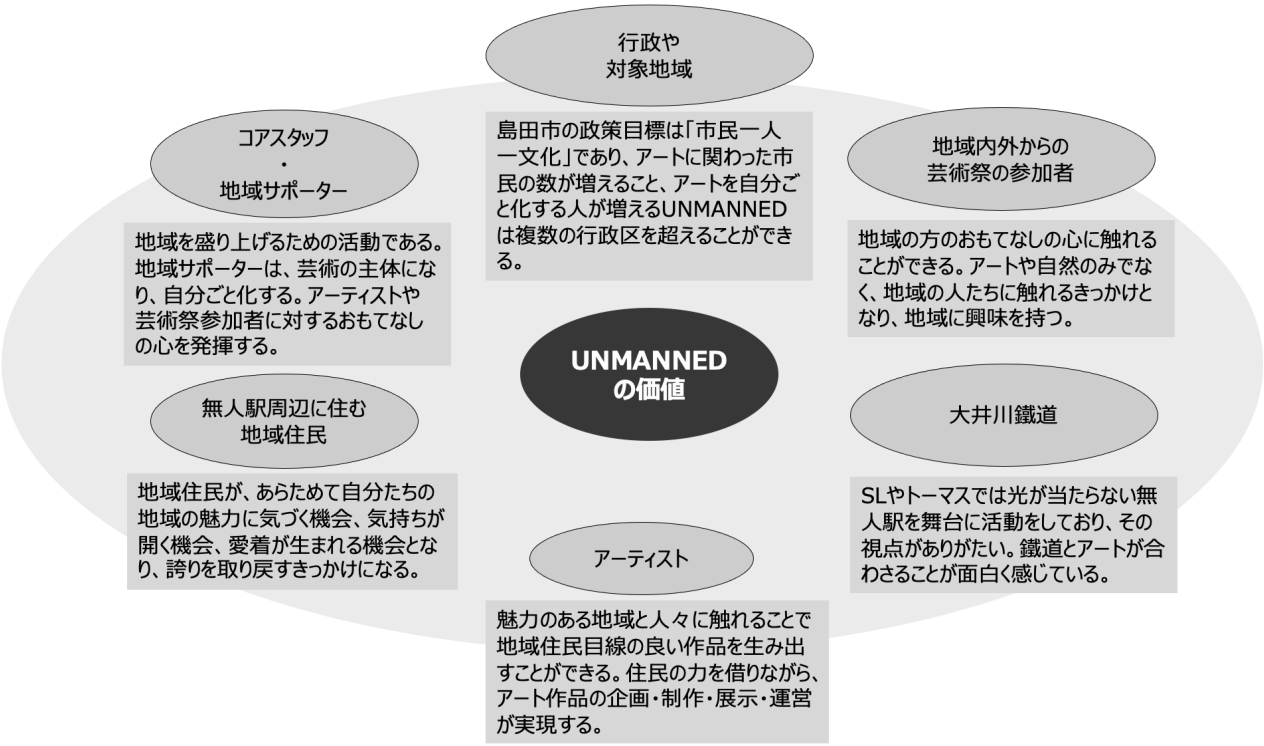
2-6.評価結果

以下に、関係者へのヒアリング・ディスカッションによって明らかになった「UNMANNED の価値の整理」と「UNMANNED の成功の姿」、その価値を生み出す「セオリー・オブ・チェンジ」、「評価グリッド」、「アウトカムを測定するためのルーブリックとアウトカムの達成度」をそれぞれ示す。

2-6.1.UNMANNED の価値の整理

（1）ステークホルダーにとっての価値

評価設問 1 に関して、UNMANNED のコア・スタッフや地域住民とのグループディスカッションや行政（島田市）と大井川鐵道へのヒアリングを通じて、以下のような価値が見えてきた。価値の整理を下図に示す。地域外からの芸術祭参加者だけでなく、地域住民や運営に関わるボランティア、アーティスト、大井川鐵道、そして行政まで、広く価値を与えていることが示唆された。UNMANNED は、“無人駅が開くと、地域が開く”をキー・メッセージにしているが、これは“無人駅の芸術祭を通して地域住民の心や視点が開いていくことで、地域内外の関係性を豊かにしていく”ことにつながるものである。本芸術祭を媒介にして、地域住民、アーティスト、地域外の人（芸術祭参加者）、行政や大井川鐵道など、普段交わらない地域内外の関係者たちが交流することができる“地域が混ざり合う”機会なのである。



「2-1.評価結果の活用イメージ」に、重要なステークホルダー（行政、大井川鐵道等）に、活動の価値・意義を理解してもらう、ということを掲げていることもあり、大井川鐵道と島田市へのヒアリング結果の概要を紹介する。

■大井川鐵道　企画運営事業部　課長　伊藤さま、次長・施設課長　滝山さま
・UNMANNED の魅力は、無人駅ということの着眼点、そして鐵道とアートが合わさることが面白い。
・SL やトーマスになくて UNMANNED にあるものは、普段見落とされており光が当たらない無人駅にスポットライトがあたることが魅力である。

■島田市　社会教育課長　南條さま、新間さま
・UNMANNED の市内の他の活動と比べた特徴は、この土地ならではの特徴や魅力について、市民が気づかないところをアーティストの視点から形づくることである。地域の人が、地域の魅力に気がつくための事業であり、地元に対する誇りを取り戻すことができると考えている。
・島田市としては、市民の素晴らしい声を拾って、発信していきたい。市民が気づくことが増えたら良いと思う。さとうりささんの作品の里親希望が、今年は８軒と増えていることも、その意味では成果だと思う。
・市民もアートに関われるようになること、アートを自分ごと化してくれること、UNMANNED の活動は究極のアウトリーチ活動であると思う。島田市の政策目標は「市民一人一文化」なので、関わった市民の数が増えること、頭数を増やすことが重要。アートの恩恵をこうむる人数を増やしていきたい。

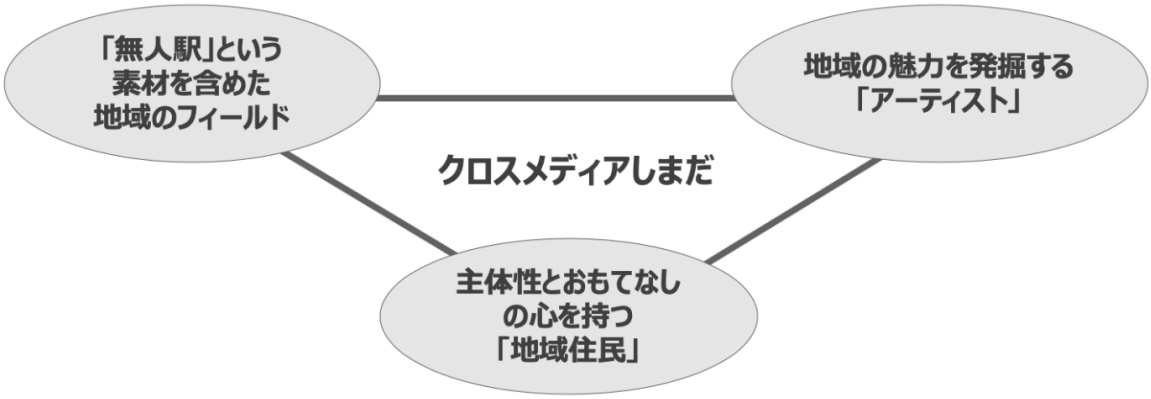
「福用レインボーハット」の展示の様子

「黒いオッパイ」の展示の様子

（２）価値を生み出す源泉

評価設問 3 にも関連して、（1）のような多様な価値を生み出す源泉についても、グループディスカッションをもとに整理した。「無人駅」という素材を含めた地域のフィールドと、地域の魅力を発掘する「アーティスト」という外部者の存在、そしてそれを成立させているのが主体性とおもてなしの心を持つ「地域住民」という大きく 3 つの要素があり、クロスメディアしまだが、これらをつなぐことで価値が生まれている。
UNMANNED の活動プロセスの中で、まずアーティストが「無人駅」という素材やそれがある地域のフィールドに惹かれていた。アーティストが地域に入り込んでリサーチを行い様々な地域との関わりの中で魅力を切り取っていく。アーティストへのヒアリング結果によると、参加経験が長いア

ーティストの方が、地域との関係性ができていたり、リサーチによって十分な情報を得ていたりしており、より地域目線で作品を提案できたという実感値があったようである。主催側が、そのプロセスの中に、地域住民の関わり方の補助線を用意することによって、地域住民が「芸術祭を自分ごと化」していくこと、それがアーティストの作品に大いに影響を与えていたり、活動の継続性が高まっていたりする様子が明らかになった。地域住民がアートという壁を意識しないうちにその境界を行き来することにより、地域にとって良い作品が生まれている様子であった。



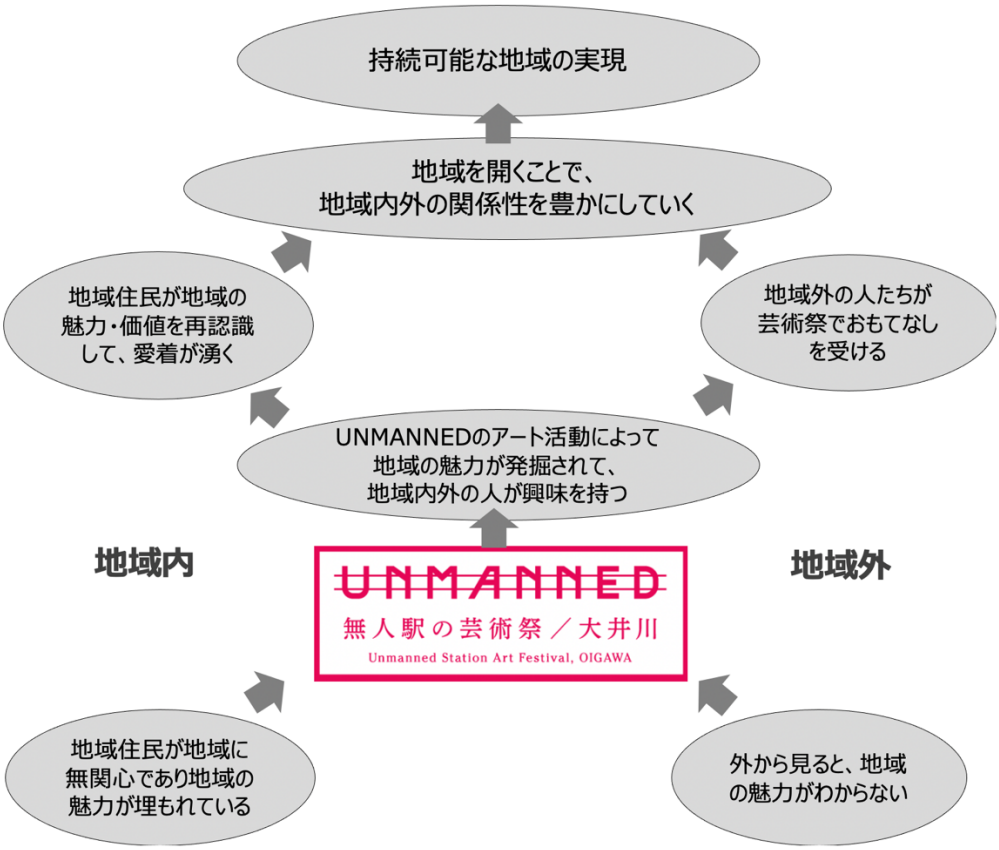
2-6.2.UNMANNED の成功の姿

関係者のグループ・ディスカッションを通して、UNMANNED の“成功の姿”を探った。これを知ることで、評価で得るべきデータを明らかにするためである。“成功の姿”は「持続可能な地域の実現」であり、そのために地域住民の心や視点が開いていくことで、地域内外の関係性を豊かにしていくということが必要である。具体的には、地域の人たちが知らず知らずのうちにアートについて議論したりと、自分とアートが近くなっていたりすることである。はじめに、このような地域内の変化が起こることで地域内の関係性が豊かになり、それが芸術祭を通じて外に波及する。それを説明したのが、次の図表の①～④である。これは、UNMANNED のキー・メッセージである“無人駅が開くと、地域が開く”ということである。

地域内	地域住民が、自分たちの地域の魅力に気づくこと（地域の魅力の再発見・再認識） 地域住民が、芸術祭を通して、おもてなしの心で外の人間（アーティストや芸術祭参加者など）とコミュニケーションを取れるようになること
▼	
地域外	アーティストが、地域で安心して制作活動に取り組めること 芸術祭参加者が、地域の魅力を見つけられること

2-6.3 セオリー・オブ・チェンジ

UNMANNED の活動によって、どのように“持続可能な地域を実現”するのだろうか。コアスタッフでのグループディスカッションを踏まえて、セオリー・オブ・チェンジ2の整理を行なった。結果を図表 XX に示す。無人駅の地域は、表面的には人が少なく衰退している、いわゆる“お荷物エリア”のように見られがちであるが、実際はそうではないと地域住民が再認識することが持続可能な地域の実現に向けての一歩目である。図表 XX に示したように、地元の人たちが地域の魅力に気づき、価値を再認識して誇りを取り戻すこと、それが芸術祭を通して外の人に波及するのである。地域で意識が変わった人たちが芸術祭などでおもてなしの心を発揮して観光案内人になる。その変化のトリガー・媒介役となるのが、地域で感じたことを表現できるアーティストであり、彼らの作品なのである。



2-6.4.評価グリッド　～価値を測定するための計画表～

UNMANNED の価値を測定るための計画を示した評価グリッドを下表に示す。そのうち「価値」の部分は 2-6.1 で整理をした通りである。「アウトカム」の①～③はセオリー・オブ・チェンジに対応している。「アウトカム」の④は、文プロの別調査で実施した。

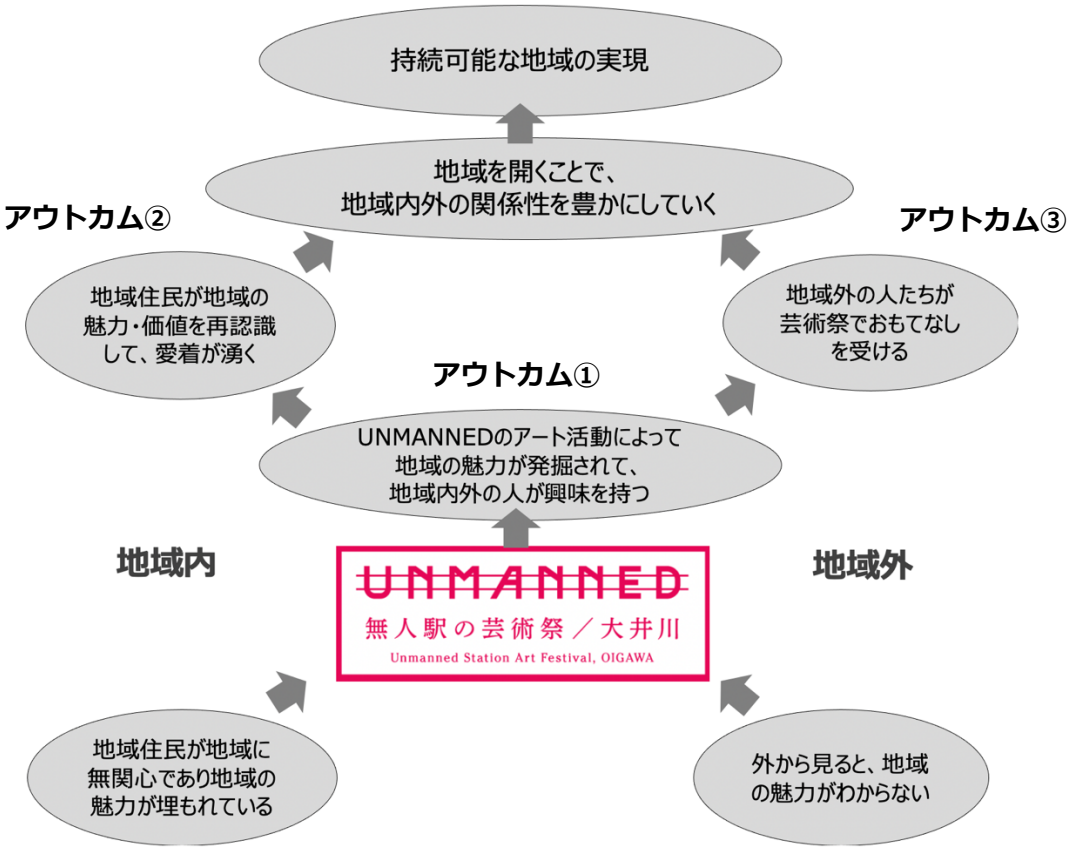
---

[2] 事業設計を整理する際に使う手法の一つであり、一般的により包括的に、課題が解決された望ましい状態を実現するための複数の手段を図示したもの。複数の事業から構成したり、解決に正負の影響を及ぼす条件も含めて図示する場合もある。セオリー・オブ・チェンジは定型の図式がなく、ロジック・モデルよりもより自由な形で様々な図式案が提案されている。

評価設問		評価基準 ／必要なデータ	情報収集手段	スケジュール
大項目	小項目			
【価値】 UNMANNEDの活動に対して、それぞれの関係者（アーティスト、地域住民等）が感じている価値は何か？	地域住民が感じている価値	ステークホルダーが感じている価値について把握する	コアスタッフの グループディスカッション	１２月
	アーティストが感じている価値		コアスタッフの グループディスカッション	１２月
	行政（島田市）にとっての価値		島田市へのヒアリング	第2回推進委員会
	大井川鐵道にとっての価値		大井川鐵道へのヒアリング	第2回推進委員会
	その他のステークホルダーとっての価値		コアスタッフの グループディスカッション	１２月
【アウトカム】 UNMANNEDによって、どのくらい地域が開／拓かれるようになったと言えるのか？	①アーティストが、どのくらい地域の魅力を発掘できたか？	アーティストが発掘した地域の魅力の深さと量に関するデータ	アーティスト、地域住民へのヒアリング	3月
	②地域住民が、どのくらい自分たちの地域の 魅力に気がついたか？ （内面的な意識の変容）	地域住民の内面的な意識の変容とその人数に関するデータ	アーティスト、地域住民へのヒアリング	3月
	③地域住民が、どのくらいおもてなしの心を持って、外部者とコミュニケーションが取れるようになったか？（外在的な行動の変化）	地域住民の外在的な行動の変容とその人数に関するデータ	アーティスト、地域住民へのヒアリング	3月
	④芸術祭参加者が、どのくらい地域の魅力を感じることができたか？	参加者が感じた地域の魅力に関するデータ	芸術祭参加者へのアンケート	3月
UNMANNEDの効果を持続的に生み出すために、どのような運営体制を作ることが効果的か？	(A)効果を生み出すための体制はどのようなものか？	効果を生み出すための体制面について整理する	コアスタッフや推進委員会での議論の整理	3月
	(B)効果を生み出すためのプロセスはどのようなものか？	効果を生み出すためのプロセスについて整理する	コアスタッフや推進委員会での議論の整理	3月
	(C)企画運営面での自立発展性はどのくらいあるか？	効果を生み出すための自立発展性について整理する	コアスタッフや推進委員会での議論の整理	3月

2-6.5.ルーブリックと価値判断　～アウトカム評価を行う～

UNMANNED によって生まれたアウトカムと評価基準をクロスメディアしまだと評価者で相談の上、定義して、ヒアリング等によって情報収集を行い把握した。アウトカムの達成度を測るために、独自に４段階のルーブリックを作成して、これを活用して価値判断を行った。ルーブリックはこれまでの議論を通して評価者が作成を行い、クロスメディアしまだの大石氏、兒玉氏に自己評価を行ってもらった。



評価設問	調査対象・方法
①アーティストが、どのくらい地域の魅力を発掘できたか？	・アーティストへのヒアリング ・地域住民（運営側）への ヒアリング
②地域住民が、どのくらい自分たちの地域の魅力に気がついたか？ また、その人数は？	・アーティストへのヒアリング ・地域住民（運営側）への ヒアリング
③地域住民が、どのくらいおもてなしの心を持って、外部者（芸術祭参加者・アーティスト）とコミュニケーションが取れるようになったか？ また、その人数は？	・アーティストへのヒアリング ・地域住民（運営側）への ヒアリング

アウトカム①について

▶評価設問：アーティストが、どのくらい地域の魅力を発掘できたか？

▶評価基準：地域の魅力の発掘の度合いと広がり

▶評価結果（ルーブリック）：

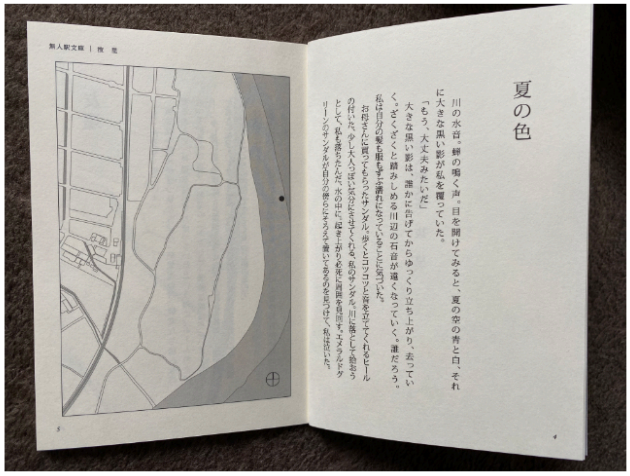
	1	2	3	4
深度	地域住民が感じる地域の魅力は変わっていない 【魅力の発掘度：無】	地域住民が気がつかなかった視点を提示して、魅力を少し発掘した 【魅力の発掘度：小】	地域住民が気がつかなかった視点を提示して、魅力をある程度発掘した 【魅力の発掘度：中】	地域住民が気がつかなかった視点を提示して、魅力を十分に発掘した 【魅力の発掘度：大】

	1	2	3	4
広がり	アーティストが発掘した地域の魅力はない。 【発掘した魅力の広がり：無】	アーティストが発掘した地域の魅力は少ない。 【発掘した魅力の広がり：少】	アーティストが発掘した地域の魅力は中程度である。 【発掘した魅力の広がり：中】	アーティストが発掘した地域の魅力は多い。 【発掘した魅力の広がり：多】

主催側と協議の結果、アーティストによる地域の魅力の発掘の度合い（深さ）は「3（中程度)」、その広がりは「4（多い)」とした。発掘の度合いを「3」としたのは、この３年間で参加アーティストが様々なアプローチで地域の魅力を発掘していることである。中には思いもよらぬ方法で地域住民に焦点を当てたり、作品を共創することで、地域の魅力を引き出した。「4」にしなかった理由は、できればさらに一歩踏み込んで地域のネガティヴな側面にも踏み込むことを期待したいからという。これは芸術という手法を用いるアーティストという外部者で高い感性を持つ者だからこそできることであり、地域のネガティヴな側面にうまく触れることで地域内の関係性が前向きに発展するのではないかという期待が込められている。魅力の広がりを「4」としたのは、この３年間の開催で、アーティストのプランが年を重ねるにつれて地域住民に寄ってきたという認識を主催側が持っているためである。制作活動の中で「アーティストありき」で作品を創るではなく、「地域ありき」で作品を創るという風に地域の潜在的な文化資源の掘り起こしが、多く行われている。

例を挙げると、北川 貴好氏の作品「茶屋せんべや」は、地域の誰もが知っていた「せんべや」と呼ばれる元工場について、住民のインタビューを行い人々の記憶を紡ぎ出す映像を制作した。「せんべや」の上映には、取材をされたおばあちゃんが地域のおばあちゃんを連れてくる光景が見られたという。木村 健世氏の「無人駅文庫」は、地域の人たちを丹念に取材して無人駅に関する物語を集めて文庫にしている。取材を進める中で、取材対象のおばあさんの話を聞いて遠方（四国）に暮らす息子さんにも会いに行ったという。「無人駅文庫」で取材をされた住民たちは嬉しそうに木村氏に取材をされたことを語っており、たくさん地域の人に自分の物語が掲載された文庫本を配ったという。木村氏は「これを制作するために、１週間くらい連続で地域に泊まり込んで、事前のアポイントを取らずに突撃インタビューを繰り返す」という。事前のアポイントをとらないのは、地域住民の素の姿に触れて自然に記憶を引き出すためだという。インタビュー相手が、次の住民を紹介してくれることもあるそうだ。これらの事例を見るだけでも、地域の魅力がアーティストによって発掘されて、それが地域内で波及していることがわかるだろう。

「無人駅文庫」



「せんべや」の一コマ。地域住民が巨人になって登場する 「せんべや」の会場は、
「せんべや」と呼ばれる地域の工場跡である

アウトカム②について

▶評価設問：地域住民が、どのくらい自分たちの地域の魅力に気がついたか？　また、その人数はどのくらいか？

▶評価の基準：地域住民の内面的な意識の変容度合い、地域で文化・芸術に関わった人数

▶評価結果（ルーブリック）：

	1	2	3	4
変容	地域住民の地域の見方は全く変わっていない 【内面的な意識の変容：無】	地域住民の地域の見方が少し変わり、地域の魅力、価値を再認識した 【内面的な意識の変容：小】	地域住民の地域の見方が変わり、地域の魅力、価値を再認識した 【内面的な意識の変容：中】	地域住民が思いも寄らない地域の魅力、価値に気がついた（再発見した） 【内面的な意識の変容：大】

	1	2	3	4
規模	文化・芸術に関わった人数は、地域全体に対して少ない。	文化・芸術に関わった人数は地域全体に対してやや少ない。	文化・芸術に関わった人数は、地域全体に対してやや多い。	文化・芸術に関わった人数は、地域全体に対して多い。

地域住民が地域の魅力を再発見することは、本事業の目的のひとつである。主催者と協議の結果、地域住民の内的な変容の度合いは「4（大きい）」、その人数は「3（やや多い）」とした。UNMMANED3年間の開催の積み重ねを通して、地域住民からは、「オラが作品」（自分の作品、地域の作品）という意識の高まりを感じるという。主催側によると、特に地域の中でターゲットとしたい住民は、“妖精”と呼ばれる芸術祭の運営サポート全般を行う地域の人たちたちである。例えば抜里という人口約500名の地域において、今年はおよそ20名が運営に参加したそうである。彼らの意識や価値観の変化は大きく、“妖精”たちが自らのアート論を語るようになる例も多くあったという。3年目の“妖精”20名は地域の全人口に対しても影響力のある人数であり、さらに彼らの口コミにより影響を受ける人たち（家族やご近所など）も多いそうである。“妖精”たちの人数は口コミなどで年々増えており、さらに地域の中には“妖精”の予備軍も多くいるという。UNMMANED を始める前は、文化・芸術に関わりを持たなかった地域の人たちが、今や制作活動や創作活動に普通にかかわっている。さらに“妖精”のような人たちが出てくるエリアも増えたという。

今年の作品の中には、地域住民がいないと成り立たないものが多かったことも、この内面的な意識の変容につながったようである。例えば、江頭 誠氏の作品「間にあるもの」は、地域住民に着せることで作品として完成するものであった。アーティストとの関わりの中で、自分たち自身が作品になるという意識の芽生えがあり、それが魅力に気がつくことにつながった。推進委員である町内会長の原木氏からは、「アーティトという人たちの存在自体が希望だね。自分のやりたいことを突き詰めて良いという人たち、そういう人たちが進んでよいという場を作っている、それが自分たちに対する再認識につながる」というコメントが寄せられた。
またヒデミニシダ氏の作品「境界のあそび場／うかぶ縁側」は、ニシダ氏が2017年に本芸術祭に関わった際に地域の歴史などを徹底的にリサーチしたことから着想を得たという。大海原に浮かぶ縁側のイメージが湧いて、地元の人を舞台に上げたいという思いがあったそうである。この「浮かぶ縁側」の制作過程には材料の運び込みなどに地域住民たちが関わるなど、彼らなしでは作品制作ができなかったという。また出来上がった際には地域住民たちが毎日ここに登り、普段見ている風景の変化を楽しんでいたそうである。主催者によると、外部の芸術祭参加者よりも地域の人の利用が多かったという。補足であるが、主催者によると、ニシダ氏の作品は地元からの強い要望により、次年度に向けた保存を決めた。

「間にあるもの」の展示風景

「間のあるもの」は地域住民が着ることで成り立つ

「浮かぶ縁側」

“妖精”たちが「浮かぶ縁側」でくつろぐ一コマ

アウトカム③について

▶評価設問：地域住民が、どのくらいおもてなしの心を持って、外部者（芸術祭参加者・アーティスト）とコミュニケーションが取れるようになったか？　また、その人数はどのくらいか？

▶評価の基準：地域住民からのおもてなしを感じた外部者（芸術祭参加者・アーティスト）の割合

▶評価結果（ルーブリック）：

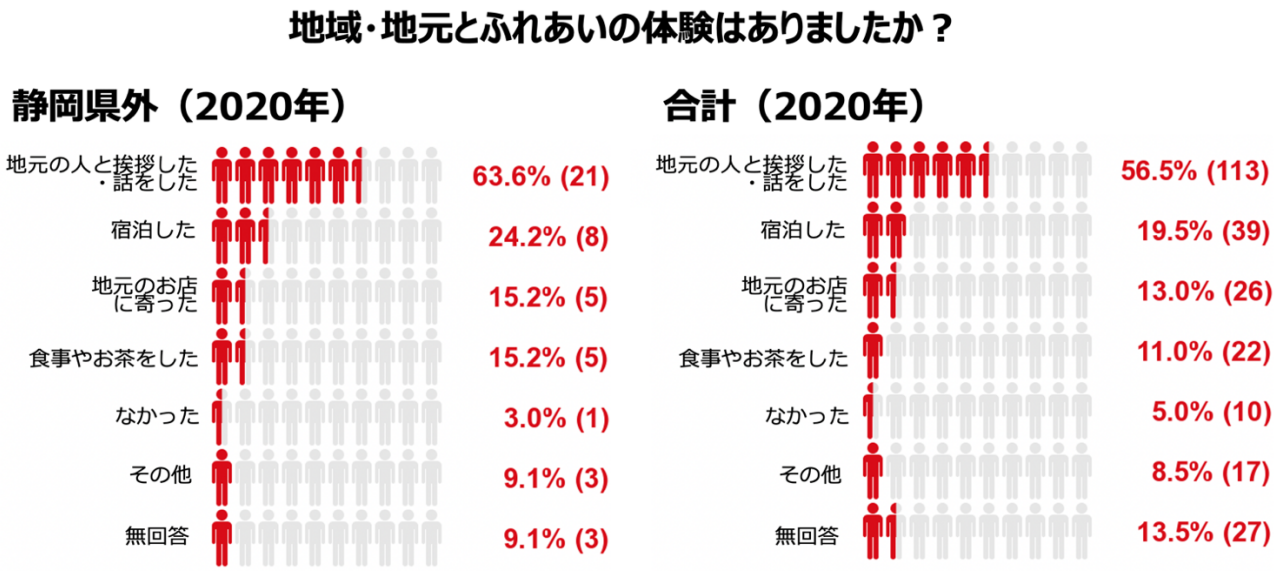
	1	2	3	4
芸術祭参加者	地域住民からのおもてなしを受けた芸術祭参加者はいない	地域住民からのおもてなしを受けた芸術祭参加者はある程度いた	地域住民からのおもてなしを受けた芸術祭参加者は多くいた	地域住民からのおもてなしを受けた芸術祭参加者は非常に多くいた

	1	2	3	4
アーティスト	地域住民からのおもてなしを受けたアーティストはいない	地域住民からのおもてなしを受けたアーティストはある程度いた	地域住民からのおもてなしを受けたアーティストは多くいた	地域住民からのおもてなしを受けたアーティストは非常に多くいた

地域住民がおもてなしの心を持って外部者とコミュニケーションが取れるようになった程度は、芸術祭参加者とアーティスト経由でエピソードを収集して価値判断を行なった。今回は調査の制約上、芸術祭参加者の声はアンケートで集めるのみとなったが、主催者からの情報提供を踏まえて協議の結果、芸術祭参加者が感じたおもてなしの程度は「3（多い）」、アーティストが感じたおもてなしの程度は「4（非常に多い）」とした。対芸術祭参加者について、主催者からの報告によると、地域住民の中には芸術祭参加者に対してお茶をもてなしたり、無人駅にお客さんが電車で到着すると旗を持って出迎えたり、進んで自分の敷地の駐車場を貸し出す住民が現れたり、地域住民が芸術祭とは関係のないお地蔵さんを勝手に設置したり、本数の少ない電車での移動が不便だからといって率先して車で送迎する住民まで現れたという。前述のニシダ氏の「浮かぶ縁側」では、地域住民たちが自身でお茶をふるまうサービスを自主的にはじめてくれており、「こんなにたくさんの人が見に来てくれるのだから、もっとお客さんとふれあいたい、おもてなししたい」という気持ちからだったようである。主催側からは、「この（自主的にお茶を振る舞う）動きが妖精たちの心の変化の最たるものだと感じた」というコメントが挙げられた。地域住民によるおもてなしの方法は様々であるが、芸術祭開催期間はこのような動きが多く見られるなど、地域の芸術熱の高まりがあったそうだ。以下に

示す参加者アンケート結果では、「地域・地元とふれあいの体験はありましたか？」という設問に対して、半数以上の参加者が「地元の人と挨拶した・話をした」と回答している。他の芸術祭とのデータの比較はできないが、高い割合であると思われる。そしてこれは静岡県外からの参加者の割合が高く、来訪者のうち 24.2%が宿泊をしていることがわかる。
対アーティストについて、地域住民の方がアーティストに「何かあったらいつでも言ってくれ」と声をかけていたそうで、そのような姿勢がアーティストにとっても心強かったであろう。アーティストについては、「地域住民の協力なしでは作品制作や作品の着想を得ることすら出来なかった」と語るアーティストが多くおり、評価者が参加アーティスト全員の話を聞けてはいないが、地域住民からのおもてなしの心を感じたアーティストは大多数を占めたことは容易に想像ができる。

参加アーティストの栗原 亜也子氏は「アーティスト側が準備しきれなかったところを、村人がフォローしてくれた。一方的に与えるのではなくて、住民が裏方として楽しんでくれる」と作品制作過程の感想を話していた。主催者は、このようなことができる土壌がこの 3 年間の UNMANNED で出来上がったという。自治会長の原木氏は、「外からの参加者、ここに来たときの気持ち良さ、無償の愛を受けることを感じたと思う」と感想を話していた。さとうりさ氏は 3 年連続の参加だが、年数を重ねるたびに地域住民との関係性が深まった実感があったそうである。島田市からは「さとうりさ氏の作品の里親希望が 6 名と増えていることも、市民が文化・芸術に関わる上での成果だと思う。市民がアートを自分ごと化してくれること、UNMANNED の活動は究極のアウトリーチ活動であると思う」と話していた。



「浮かぶ縁側」で　お茶を振る舞う地域住民たち

「かみさまたちのまちじかん」の一コマ

無人駅の抜里駅で、地域住民が自主的に運営している休憩所

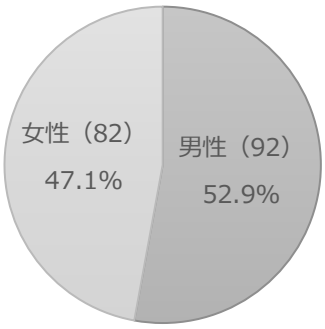
「地蔵まえ 3　サトゴシガン」の展示の様子

2-6.6.UNMANNED の参加者情報

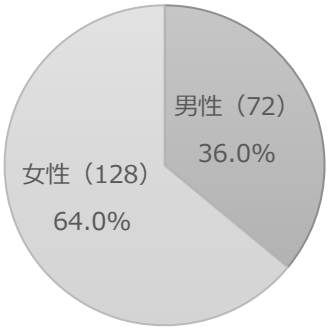
2019 年-2020 年の 2 年間にブンプロ PC の佐野氏がクロスメディアしまだの協力を得て、UNMANNED 参加者情報の調査を行った。以下に、UNMANNED の参加者情報として、性別、居住地、誰と来訪したか、期待値の達成度を示す。参加者の性別は、2020 年は女性が増加して一般的な芸術祭の割合に近づいている。居住地は、大井川近辺及び島田市内からの割合が 26.5%から 34%に増加しており、県内を併せると 78.2% から 81%に増加している。また家族との訪問が増加している。満足度は両年共に高く、特に 20 年は「期待とは違った」の回答が大きく減っていることがわかる。

参加者の性別の年比較

2019 年

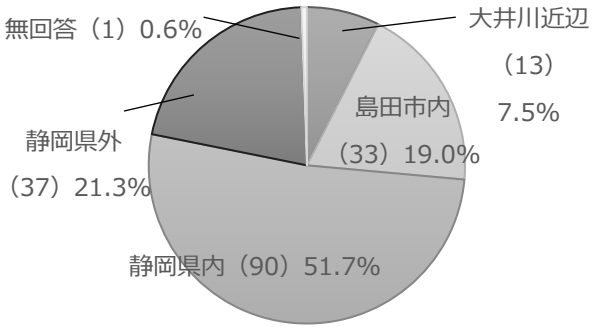


2020 年

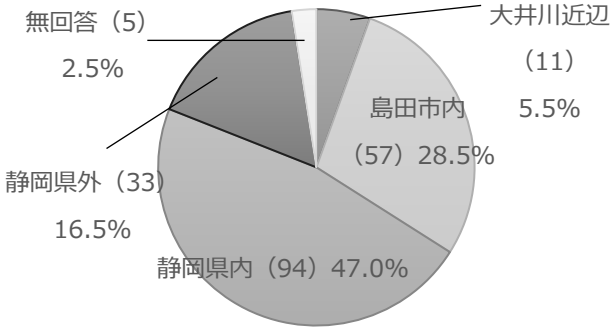


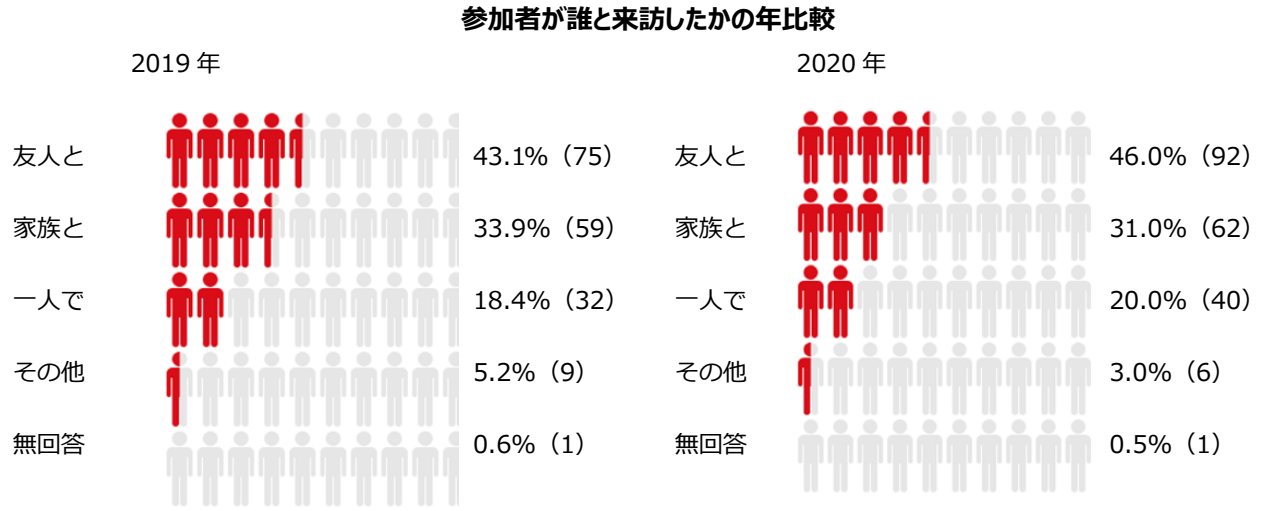
参加者の居住地の年比較

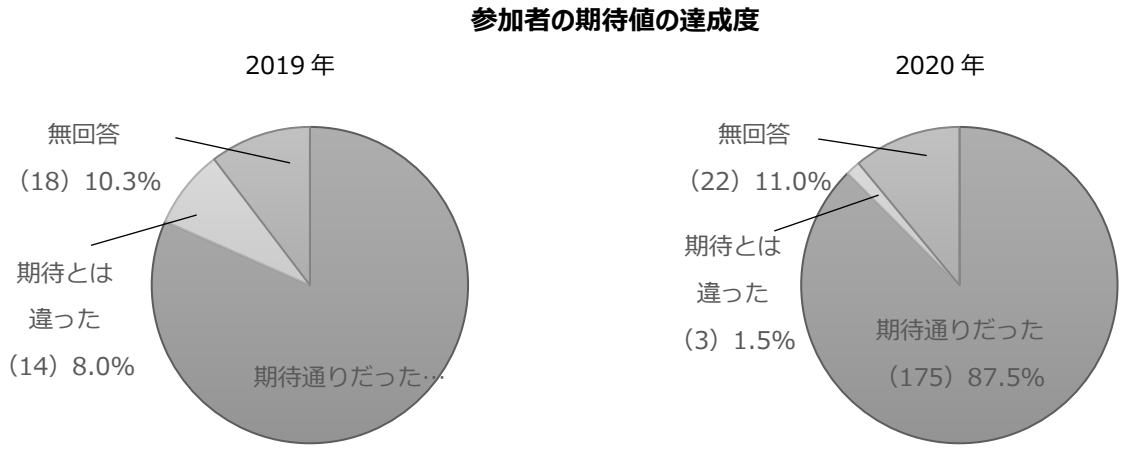
2019 年



2020 年







2-6.7.UNMANNED の参加者アンケート分析

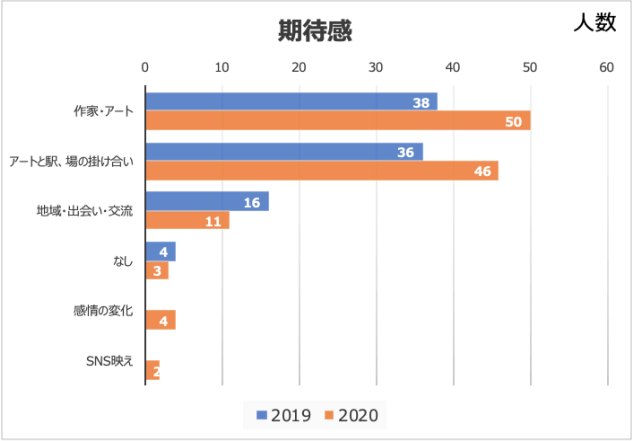
以下に、2019 年-2020 年の 2 年間に実施したアンケート結果の分析を示す。「事前の期待感」、「無人駅の先のワンダーランドとは何か」、「次年度の改善点」の 3 項目について、それぞれ結果を示す。アンケート分析は、それぞれフリーアンサーを KJ 法[3]で分類したものと、テキストマイニングによる分析を合わせて示す。テキストマイニングは、WEB ソフトの「ユーザーローカル」[4]を使用して実施した。（データおよび分析結果提供：ブンプロ PC 佐野氏）

（1）事前の期待感

テキストマイニング分析結果を基に全てのコメントを KJ 法で整理した。その結果、「アートと駅、場の掛け合い」、「作家・アート」に対する期待が高く、両年共に傾向に顕著な変化はないが、テキストマイニング 2019/2020 よく出る単語を比較すると 2019 年は駅周辺の興味に留まっていたが、2020 年は「自然」「風景」「景色」など広がりが見られた。

3 文化人類学者の川喜田二郎（東京工業大学名誉教授）がデータをまとめるために考案した手法である。
4 https://textmining.userlocal.jp/

KJ 法による整理と結果



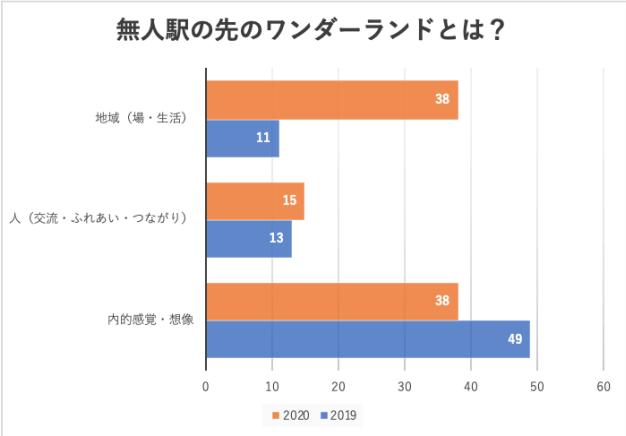
テキストマイニング分析結果

2020にだけ出現	2020によく出る	両方によく出る	2019によく出る	2019にだけ出現
できる めぐる 面白い 白い 縁側 いく おどろく くれる とれる のる ひなびる ふれる みれる 伺う 出す 出会える 回る 広める 感じる 映える 楽しむ 気づく 知る 考える 聞く 行く おおい 丸い 楽しい 素晴らしい	触れる 自然 風景 融合 コラボ 景色 田舎 変化	新しい 作品 アート 思う いい 出逢う 楽しめる 駅 根ざす 鉄道 地域 芸術 江頭	無人駅 展示 期待 アーティスト 興味 交流	たのしい ほしい 古い 珍しい 良い 若い 増える からむ しでかす しる ふれあう 咲く 待つ 撮る 暮らす 溶け込む 生かす 異なる 結びつく 見せる 見る 見れる 桜 芸術性 駅舎 さとうりさ マッチ 世界 大井川鐵道 好き

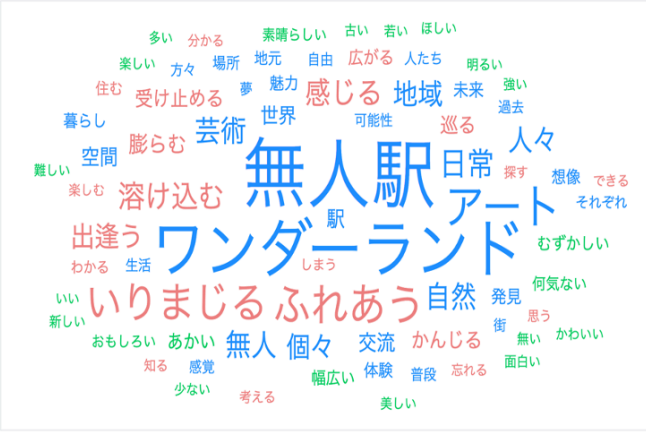
（2）無人駅の先のワンダーランドとは何か

「無人駅の先のワンダーランド」という文言は、本芸術祭のキー・メッセージである。この質問に対する答えを見ることで、そのメッセージがどのように参加者に伝わっているのかを知ることができると考える。KJ 法で整理すると、鑑賞者の興味の先が「自身の内的感覚の変化や想像の世界」が主であったが、2020 年は大幅に「地域、場、日常」が増えていることがわかる。これは期待感の項目でも同様の結果が出ており、芸術祭をきっかけに興味の先が確実に地域への広がりを見せている。テキストマイニング分析結果を見ると、「無人駅の世界」から「アートと地域」へ、また品詞は形容詞から動詞へと変化しており、範囲の広がりとアクティブワード（自分も参加する気持ち）の傾向が見られる結果となった。

KJ 法による整理と結果



テキストマイニング分析結果



名詞

2020	単語	2019
27	無人駅	73
34	日常	66
23	世界	77
30	ワンダーランド	70
80	アート	20
64	自然	36
32	駅	68
84	地域	16
0	感覚	100
23	人々	77
60	場所	40
55	想像	45
55	芸術	45
29	未来	71
29	空間	71

動詞

2020	単語	2019
50	感じる	50
68	思う	32
100	分かる	0
100	受け止める	0
100	探す	0
100	膨らむ	0
86	考える	14
30	できる	70
30	わかる	70
68	ふれあう	32
81	かんじる	19
100	いく	0
100	おく	0
100	たどりつく	0
100	でる	0

形容詞

2020	単語	2019
0	無い	100
75	いい	25
0	おもしろい	100
100	楽しい	0
66	素晴らしい	34
0	あかい	100
0	かわいい	100
0	すごい	100
100	ほしい	0
0	むずかしい	100
100	よい	0
0	何気ない	100
0	古い	100
100	多い	0
100	少ない	0

2-6.8.事業の持続発展性に向けての教訓抽出

以上のような UNMANNED の効果を持続的に生み出すために、どのような運営体制を作ることが効果的だろうか、今後の運営のために教訓を抽出して、まとめておく。運営体制やプロセスを振り返るために、次の 3 つの問いを立てていた（評価グリッドより）。

（A） 効果を生み出すための運営体制はどのようなものか？
（B） 効果を生み出すための運営プロセスはどのようなものか？
（C） 企画運営面での自立発展性はどのくらいあるか？

（A）効果を生み出すための運営体制

この 3 年間はほぼ主催のクロスメディアしまだが主導をして運営を行なった。文化・芸術分野の専門性はないが、自分たちで、アートディレクター・アートプロデューサーの役割も担ったとのことである。専門性がない分、アーティストへの一方的な依頼や指示ではなく、どのようにすれば良いのかを地域目線で一緒に考えたそうである。アーティストとの信頼関係があり、あとはアーティストが協力的な地域住民とコミュニケーションをとって、どんどん物事が進んでいったそうだ。ただし主催側は、運営体制を強化してより持続可能なものしていくことを課題と感じており、3 年目である 2019 年度にはじめて推進委員会形式を導入した。また去年からコアサポーター制度を導入して、協力者が増えているそうである。ブンプロ PC の立石氏からは「芸術祭の魅力を生み出す源泉は、クロスメディアしまだの大石氏と兒玉氏の人間的な魅力である」というコメントがあった。行政や大井川鐵道、自治会などを巻き込む持続的な運営体制を構築しながら、今年度明らかにした効果を生み出すために、上記のアーティストとの信頼関係や地域住民の主体性をいかに発揮していけるかが大事なポイントとなるだろう。

（B）効果を生み出すための運営プロセス

今年度の事業評価によって、運営プロセスにおいて、アーティストと地域住民の交わりの深さが、効果の発現に大きく関わっていることがわかった。ヒデミニシダ氏の作品「境界のあそび場／うかぶ縁側」や北川氏の作品「せんべや」の制作過程においては、アーティストが地域住民に相談したところ、あっと言う間に倉庫から原材料が運び込まれたり、展示スペースの片付けが完了したという。また作品の価値を高めるためにはアーティストの地域に対する理解度が大きく起因しており、アーティストが地域のことを知るためのリサーチ時間や、地域住民との信頼関係構築のための時間が重要であることが、複数のアーティストへのヒアリングから示唆された。またアーティストが心地よく芸術祭に関わり創作活動を行えることも UNMANNED の大きな魅力と特徴である。アーティストへのヒアリングでは、「他の芸術祭ではアーティストがもやっとすることや嫌な思いをすることが少なからずあるが、UNMANNED ではそれが一切ない。主催者の気配り・心配りが素晴らしい」ということを話していた。これからもより良いアーティストと地域住民の共創を生み出していくためにも、上記を意識した運営プロセスに配慮していく必要があるだろう。

地域住民のサポーターたち

（C）企画運営面での自立発展性

大井川鐵道の沿線は島田市と川根本町の 2 つの行政区域にまたがっており、企画運営面での自立発展性を高めていくには、市町村単位だけではなく県域として本芸術祭を捉えていくことが必要であろう。静岡県という視点で本芸術祭を見たときに、継続的な財源獲得可能性以外にも様々な資源の巻き込みの可能性があるのではないか。主催者によると、3 年目は様々な属性の人たちが交流できる機会が増えたようで、地元と学生の交流をしたり学生を交えたアートプランができてきたり、アートの制作過程には地域の障害者が通う特別支援学校からも自然に声がけがあったという。このように多様な市民の参加が増えてきていることは、ブンプロの目標のひとつである「多様性と包摂性」に貢献するであろう。自立発展性を高めていくためにも、このように多様な人々が関われる間口や余白を設けておくことが重要になるであろう。

3.まとめ・今後の提言

以下に、まとめと今後の提言を記載する。

3-1.まとめ

今回の事業評価では、関係者とのディスカッションを通して UNMANNED の価値とそれが生まれるメカニズムを模式化した。次にそれぞれのステークホルダーに実際にどのような効果が生まれたのかの仮説を立てた上で、実際にデータを集めて検証した。その中で特にキー・メッセージである「無人駅が開くと、地域が開く」というアウトカムを以下の 1～3 のように定義して、達成度を測るためにルーブリックを構築した。そして地域住民やアーティストなどへのヒアリングによってデータを集めて、その達成度の測定を実施した。

1. **アーティストが、地域住民が気づかない視点の提示、地域の魅力の発掘している**
2. **地域住民が、地域の魅力・価値を再発見する**
3. **地域外からの芸術祭参加者やアーティストが、“地域のおもてなし”を感じる**

達成度のアセスメントは、UNMANNED 2018 開始前はすべて「1」で、UNMANNED2020 終了後が 1～3 ともに 4 段階中「3」～「4」であり、この 3 年間の芸術祭によってアーティストの魅力の発掘の度合い、それによって地域住民が自分たちの地域の魅力・価値を再発見する度合い、そして地域外からの参加者である芸術祭参加者やアーティストが、“地域のおもてなし”を感じる度合いが大きくなってきていること、つまり「無人駅を開くことで、地域が開かれた度合い」がわかるであろう。効果を生み出すための運営体制、運営プロセスの整理をおこなったので、それも参考にしながら自立発展的な成長を期待したい。

評価設問	評価基準	ルーブリック（4段階）	
		事業開始前（2017年４月）	3年間の事業実施後（2020年3月）
１．アーティストが、どのくらい地域の魅力を発掘できたか？	地域の魅力の発掘の度合い	1	3
	地域の魅力の広がり	1	4
２．地域住民が、どのくらい自分たちの地域の魅力に気がついたか？　また、その人数はどのくらいか？	地域住民の内面的な意識の変容度合い	1	4
	地域で文化・芸術に関わった人数	1	3
３．地域住民が、どのくらいおもてなしの心を持って、外部者（芸術祭参加者・アーティスト）とコミュニケーションが取れるようになったか？　また、その人数はどのくらいか？	地域住民からのおもてなしを感じた芸術祭参加者の割合	1	3
	地域住民からのおもてなしを感じたアーティストの割合	1	4

3-2 今後の提言

今後の提言として、以下 4 点をまとめる。

１）重要なステークホルダーが合意するアウトカム指標の設定

UNMANNED が継続的な運営をおこなっていく上で重要なステークホルダーである行政や大井川鐵道等に、より一層活動の価値・意義を理解し行動してもらうために、今後関係者の納得感の高いアウトカム指標を設定することを提言したい。関係者で共通の成果、つまりアウトカム指標の認識を持つことで、目標の確認と合意ができるだろう。重要なステークホルダーとこのような共通価値の認識を深めることが、持続可能な運営の仕組み・事業モデルづくりを行う上で土台となる。

２）ルーブリックの精緻化

上記のアウトカム指標に関連するが、アウトカム指標にあわせて測定の精度を高めていくために今回作ったルーブリックを重要な関係者とともに見直すことを勧めたい。ルーブリックが合意できると、それを継続的にモニタリングしながら成果の達成度の把握を行い、関係者と進捗の確認だけでなく、成果を高めるためのコミュニケーションを取っていくことができるようになる。

３）芸術祭参加者に対する価値の測定

今回は制約上、芸術祭参加者に対する調査は限定的に行なった。今後、実際に芸術祭に参加した地域外の人がどのような価値をどの程度感じたのかを拾うために、芸術祭参加者に対する調査のアプローチを考えることが必要かもしれない。芸術祭の時に取っているアンケートに設問を加える、またはリピーターにインタビューを行うなどで情報が拾えるだろう。

４）参加型評価[5]のアプローチ

今後、より関係者を巻き込んで彼らが納得しやすい形で評価を進めていくことが、運営体制の強化にもつながり、さらに高い成果を生み出していくことにつながるであろう。本事業は多様なステークホルダーが参加して成り立つ事業であるので、参加型評価やエンパワーメント評価といった評価の手法を活用することは一案であると考える。これによって、事業を担う主体の学習と事業改善に活用されやすく、主体性を高めることにつながると考えられる。また関係者にとって納得感のある説明責任を果たすこともできる。

■評価者と本評価の問い合わせ先

一般財団法人ＣＳＯネットワーク
担当：千葉 直紀
eval@csonj.org（TEL：03-3202-8188）

[5] 受益者を含めた利害関係者（ステークホルダー）が、評価プロセスに参加することで、プロジェクト理解、当事者意識高揚、能力開発などを通じてエンパワーメントや事業・組織の改善に貢献することができる評価アプローチである（田中）。

静岡県文化プログラム推進委員会委託事業

Ⅶ 個別事業の詳細評価（濃い評価）

認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ　表現未満、プロジェクト

― 目次 ―

本報告書のあらすじ 149
評価概要（エグゼクティブ・サマリー） 150
1.団体概要 150
2.事業概要 150
3.事業の背景にある課題意識 151
4.評価の目的と評価設問 151
5.評価結果 151
1.概要 154
1-1.団体の特徴 154
1-2.団体の課題意識 154
1-3.団体のもつ変化の理論 155
2.事業概要・実績 156
2-1.事業概要　「表現未満、プロジェクト」 156
2-2.事業実績 157
3. 事業評価 158
3-1.評価目的 158
3-2.評価設問 158
3-3.調査対象及び調査項目 159
3-4.調査結果 160
4.評価結果と今後に向けた提言 170
4-1.評価結果 170
4-２.評価の総括 175
4-3.今後に向けた提言 176
資料編：インタビュー記録集ほか 179
その１　浜松市障害保健福祉課　深谷さんの話 179
その２　ロビンスさんの話 184
その３　すずやカメラさんの話 187
その４　あすなろ作業所　五味さんの話 194
その５　グループホームすてっぷ施設長 大橋さんの話 198
その６　佐鳴台小学校校長　鈴木先生 207
（参考資料）グループホームで独自作成した「職員自己評価表 裏面」 215
（参考資料）観光体験者の振り返りメモ 1～4 216

本評価について

この報告書は、「創造性」と「社会包摂」を切り口に文化事業の価値に関して把握を試みたものである。評価対象は「文化事業」の参加者や関係者にもたらされた影響や価値に着眼している点に特徴がある。また、「誰のための評価か」という点について、当初は「団体のため」に行うことを計画していた。しかし、活動に知っていくなかで見えてきたのは、事業の PDCA を回し、その中身を常にブラッシュアップし続けるシステムを、団体独自で既に有しているという事実であった（※)。そこで、評価結果の主な届け先を次のように想定することとした。

1.評価業務の発注元であり、文化事業の実施主体である静岡県
2.障害者福祉施設を有し、文化事業に関心をもつ福祉活動団体
3.社会包摂につながる文化事業の実践に関心をもつ文化芸術活動団体

（※）分野を横断した実践者をゲストとして招くトークイベントやしえんかいぎは、ピア・レビューの要素を併せ持つ。また、各事業で事業担当ではないスタッフや外部の関係者・専門家を交えた振り返りの会の実施や、報告書の制作を通して参加者アンケートの意見や関係者へのインタビュー・執筆依頼等により事業を多面的にレビューしている。

本報告書のあらすじ

【背景にある課題意識】

●人権の問題　　誰もが「そこにただいる」ことが人の在り方として認められるために何が必要か

●周縁化の問題　　一人ひとりの存在を隠したり、排除されることのない社会にいかに向かっていけるか

●閉鎖性の問題　　「その人の在り方」を、ともに守り合う関係性を広げる手段とは何か

表現未満、プロジェクト：とるに足らない、無駄、役に立たないと切り捨てるのではなく、その人を表す行為として尊重し合うことを目的とした体験型事業（5 つのアプローチ）

- 拠点・居場所づくり
- ひとインれじでんす
- しえんかいぎ
- スタ☆タン!!
- 観光

創　造　性　×　社 会 包 摂
〈民主主義〉　〈共生社会〉

評価目的

本評価は、「表現未満、プロジェクトの影響や価値を把握し、文化事業を通じて市民サイドから社会包摂の社会づくりをすすめる打ち手を整理する」ことを目的とした。

評価設問

上記の評価目的に基づき、３つの評価設問を設定し、調査を行った。

①福祉の現場における文化事業について、事業参加者にもたらされている価値・変化とは何か

②福祉や地域の関係者が抱える課題に対し、認識の捉え直しや打ち手を導くきっかけとなっているか

③県が目指すインクルーシブな社会づくりを市民サイドから推進するための回路とは何か

【分析結果】　※上記評価設問①～③と対応

① 他者とともに過ごすなかで、自己を見つめ、他者を尊重するなどの「観」が養われていた

② 本来のあり方を問い直し、創造性を活かした実践を主体的に展開している例がみられた

③ 利用者と訪問者との創造性を介した関わり合いの先に社会包摂を位置づけること

本事業は、当事者本人に変化を求めず、周りの他者が想像力を持って、いかに存在を肯定しうるか

を問いた。そして、対話や表現の交換を通じて、“人間が幸せに生きるとはどういうことなのか”と自問しながら創造的行為を行う主体を増やすことが、社会包摂へのアプローチとなることを示唆した。

評価概要（エグゼクティブ・サマリー）

1.団体概要

2000 年に設立された認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ（以下、「レッツ」という。）は、現在、静岡県浜松市の中心市街地に「たけし文化センター連尺町」という拠点を構える。障害福祉施設でありながら、地域の文化創造発信拠点となることを目指し、「障害や国籍、性差、年齢などあらゆる「ちがい」を乗り越えて、人間が本来もっている「生きる力」「自分を表現する力」を見つめていく場を提供し、全ての人々が互いに理解し、分かち合い、共生することのできる社会づくりを行う」団体である[1]。

2.事業概要

「表現未満、」という言葉は、レッツがこれまでの活動を通じて見出したコンセプトである。それは、「特別な人がつくる『表現』ではなく、誰もが持つ自分を表す力、行為を『表現未満、』と評して大切にしていこうとする文化活動」である。差別や排除は知らない、交わらないことによって起きている。そこでレッツでは、「とるに足らない、無駄、役に立たないと切り捨てるのではなく、その人を表す行為」として受け止め、尊重し合う体験の場を社会に開く取り組みとして、以下のプロジェクトを進行中である。

A 拠点・居場所づくり：障害者を核とし、さまざまな人が集う文化センターを運営し、障害を顕在化する
B ひとインれじでんす：福祉、アート、文化政策等の各分野の専門家が拠点に滞在し、対話を行う
C しえんかいぎ：業務で行う「支援会議」を福祉従事者に限らず他者と共有し、当事者のありようを考える
D スタ☆タン!!：オーディション形式の雑多な音楽の祭典。施設の日常的な音の表現を「音楽」として発信
E 観光：気軽で自由な観光的態度で福祉施設を訪れ、交わるなかで社会の分断を越えていく手法

[1] 認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ HP より（http://cslets.net/introduction）

3.事業の背景にある課題意識

事業の背景には、「人権」への意識がある。代表の久保田さんは「障害者の世界には、無自覚の排除の構造がある。（中略）その根底には「隠す」という行為が根強くある」と指摘する。また、こうした状況を変えていくためには、人の在り方を変え、誰もが「そこにただいる」ことを認め合うことが重要だと述べている。これを、大澤寅雄氏が提唱する文化事業の「生態系サービス（図 1)」になぞらえてみると、レッツは「そこに生きる権利」等の「生息・生育地サービス」を保証するために、「調整サービス」の機能として文化事業を実施していると考えられる。

図１：文化事業の価値として見落とされがちなサービス（赤線内）

2020/3/5 アーツアカデミー2019 第 7 回レポートより

4.評価の目的と評価設問

本事業評価は、表現未満、プロジェクトによる影響や価値を把握し、文化事業を通じて市民サイドから社会包摂[2]の社会づくりをすすめる打ち手を整理することを目的とし、以下の評価設問を設定した。

①福祉の現場における文化事業について、事業参加者にもたらされている価値・変化とは何か
②福祉や地域の関係者が抱える課題に対し、認識の捉え直しや打ち手を導くきっかけとなっているか
③県が目指すインクルーシブな社会づくりを市民サイドから推進するための回路とは何か

5.評価結果

①福祉の現場における文化事業について、事業参加者にもたらされている価値・変化とは何か
→他者とともに過ごすなかで、自己を見つめ、他者を尊重するなどの「観」が養われていた

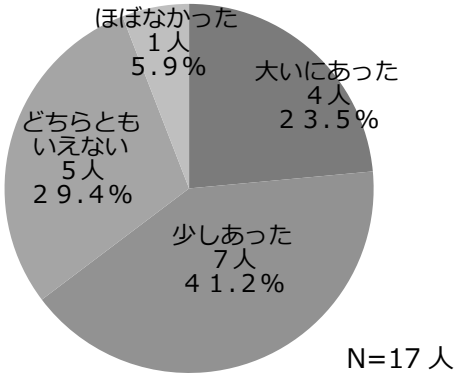
観光参加者への事後アンケートでは、回答者の 6 割強に自己や他者へのまなざしの変化がみられた。

[2] 「社会包摂」とは、社会的に弱い立場にいる人が社会から排除されたり、孤立したりするのではなく、共に支え合う社会を作ること

グラフ１･グラフ２　：観光参加者への事後アンケート

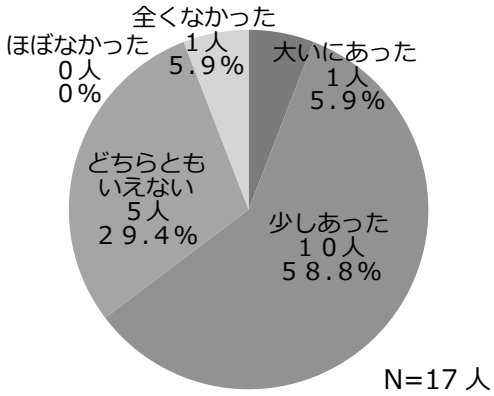
観光に参加したことで自分自身に対する意識の変化はありましたか？

【自己へのまなざし】



観光に参加したことで他者の見方や関わり方に変化はありましたか？

【他者へのまなざし】



※自由記述のなかには、「自分の内部から突如湧き上がる衝動がたとえ理解しがたいものでも、決して無視をしてはいけないなぁと思うようになった。」や「障害がある、なしにかかわらず、自分とは違う他者に対して寛容になった。」という内容がみられた。

②福祉や地域の関係者が抱える課題に対し、認識の捉え直しや打ち手を導くきっかけとなっているか
→本来のあり方を問い直し、創造性を活かした実践を主体的に展開している例がみられた

事例１：グループホームすてっぷ施設長　大橋さん（浜松市）

① 課題意識	② 関わりによる変化	③ 創造性を活かした実践
✓ 福祉が制度化されるにつれ、職員はあるべき姿を求められ、利用者に対しても均一的なシステム化が進行することに懸念があった。「自閉症の人にはこう対応すべき」と、決めて対応しないといけないという認識が福祉業界に広がっていた。	✓ レッツと関わるなかで、支援はもっと自由で創造的で幅広くていいんだ、ということに気づいた。 ✓ レッツの価値観が自分たちの中に入っていくことで、関わり方や捉え方の自由度が増した。	✓ スタッフ会議の目的が「問題の解決」から、「エピソード（出来事）の共有」や「問題の新たな捉え方や視点を補う」ことに変化した。 ✓ しえんかいぎを参考とした「哲学カフェ」を開始。その後、偶発性を取り入れたレク企画（哲学カフェ実践編）に発展。 ✓ 職員自己評価表の裏面を職員間で共有された価値観に基づき独自に作成。（本報告書・資料編に添付）

事例２：佐鳴台小学校校長　鈴木先生（浜松市）

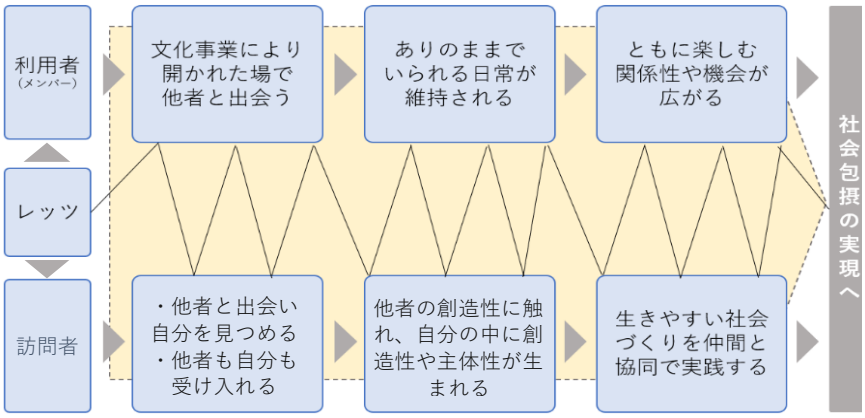
① 課題意識	② 関わりによる変化	③ 創造性を活かした実践
✓ どの学校の中にも、まだまだ「○○でなければならない枠」がある。しかし、その枠には、はまりきれない部分も出てきている。それらは悪いものばかりではないので、枠組みを緩める見直しができないか。	✓ レッツのスタッフと出会って、「ありのままをまず見る」ことを原点として、そこからスタートすることの大切さに気づかされた。 ✓ 小学校の経営方針に盛り込んだ多文化共生社会の実現に向けた取り組みとして、レッツとの協働事業が記載された。（2019.3）	✓ レッツスタッフと施設利用者メンバーがお昼休みに小学校に訪問し滞在する「ミニミニアルス・ノヴァ」という企画を継続的に実施。 ✓ 「総合的な学習の時間」に児童が「たけし文化センター」をクラス単位で訪問する企画を実現。

※本サマリーでは２事例を抜粋している

③県が目指すインクルーシブな社会づくりを市民サイドから推進するための回路とは何か
→利用者と訪問者との創造性を介した関わり合いの先に社会包摂を位置づけること

調査結果を踏まえ、社会包摂に向けた回路を図 2 のとおり整理したところ、３つの観点が見えてきた。1 つは、「他者」の存在の重要性である。通常、福祉施設への訪問者は限定的であるのに対し、団体は障害者施設で文化事業を行うことで、多様な他者との出会いを生み出した。それは「知らない」ことによる差別を防止するだけでなく、訪問者に他者を通じて自己を見つめる機会を提供することで、寛容な「観」を養う役割を担っていた。２つ目は、ありのままの存在を肯定する「場づくり」である。表現未満、は利用者に宿る創造性を「文化」として肯定する試みである。それは同時に、訪問者自身にとっての創造性や主体性を生み出す装置になっていた。そして最後は、その場づくりを担う「スタッフ」の振る舞いである。スタッフは図２のように、利用者と訪問者双方向の自由で多様な関わりを生み出していた。スタッフが、時に支援員として、また時に、友人としての身のこなしをすることによって、利用者と訪問者の関係をフラットに接続する役割を果たした。このように、利用者と訪問者との創造性を介した関わり合いの先に社会包摂を位置づけるアプローチは、文化事業ならではの具体的な打ち手となっていることがわかった。

図２：表現未満、プロジェクトを通じた社会包摂の回路のイメージ



1.概要

1-1.団体の特徴

レッツは、全ての人々が互いに理解し、分かち合い、共生することのできる社会づくりを行う団体である。この団体の特徴については、さまざまな表し方ができるが、ここでは、①運営する障害福祉施設を「文化センター」と位置づけながら、多様な文化事業を展開していること、②文化事業により、福祉の現場を他者や社会に広く開いていること、③障害のある人たちのケアについて考え続けることをあきらめないこと、をあげたい。別の言葉では、表現未満、プロジェクトの記録集のなかで岸井大輔氏（劇作家）が「日常の支援や利用者の活動といった現場を大切にするという思いと、対外的に伝えたいという気持ちもある。両方やることにこだわるのがレッツの特徴」と述べている[3]。
団体立ち上げの経緯としては、団体代表の久保田翠さんの長男壮さんが重い障害をもって生まれてきたことが契機となり、2000 年に任意団体として活動を開始。当時は、「障害のある子どもと家族が安心して“ありのまま”で居ることができる居場所づくりを、アートを通して実現する」活動を行っていた。その後、2004 年に NPO 法人化し、「障害、性差、年齢、国籍などあらゆる違いを越えて、さまざまな立場の人がともに生きる社会の実現」をミッションに掲げ、アートによる社会包摂に向けた事業を展開してきた。

1-2.団体の課題意識

団体は、これまでの活動のなかでさまざまな課題に意識を向けて取り組んできた。その中心にあるのは、「排除」の問題である。

> 障害者の世界には無自覚の排除の構造がある。社会が障害者や家族を排除し、親が彼らを排除し、それを受け入れた施設職員が排除する。その根底には「隠す」という行為が根強くある。無自覚に隠してしまう、それが排除につながる。排除は常に弱いものに向けられる。そしていつか、あなたもわたしも排除の対象になりうる。
> これらを解決していくには人の在り方を変えていくしかない。役に立つ人だけが社会にいていいのではない。だれもが「そこにただいる」ことを認めることだ。そしてお互いがそれを守り合う。
> 久保田翠（2020.3.23 山梨日日新聞「時標」より一部抜粋）

レッツスタッフへのインタビューや資料から、「排除」の問題に関する問いを以下に列記した。

●人権の問題	誰もが「そこにただいる」ことが人の在り方として認められるために何が必要か
●周縁化の問題	一人ひとりの存在を隠したり、排除されたりすることがない社会にいかに向かっていけるか
●閉鎖性の問題	「その人の在り方」を、ともに守り合う関係性を広げる手段とは何か

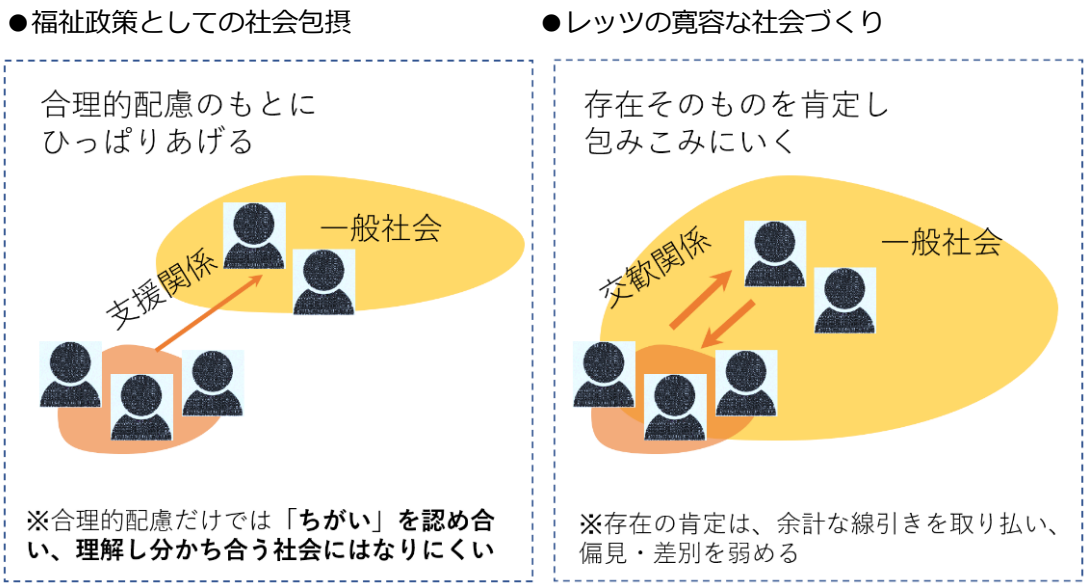
[3] 認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ「表現未満、プロジェクト」記録集 p.72

このような排除に関する課題意識が、今回の評価対象事業である「表現未満、プロジェクト」の背景にある。その課題への打ち手としてレッツは、寛容な社会づくり（社会包摂）に取り組んできた。近年、文化政策で注目されているこの「社会包摂」は 1990 年代、ヨーロッパで「社会的排除」と相対する概念として立ち上がった。それまで知られていたノーマライゼーションが結果として、障害のある人を無理に一般の基準に当てはめる方へ働いてしまったことに対し、社会包摂は「違いのある人たちの違いを尊重したまま受け入れる社会を目指そうとする考え方」として提唱された概念である。

日本では 2000 年に厚生労働省の「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会報告書」で「今日的な『つながり』の再構築を図り、全ての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合う（ソーシャル・インクルージョン）ための社会福祉を模索する必要がある。」と取り上げられた。また、文化庁では 2011 年に「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第 3 次）」において社会包摂に言及し、その後、施策が講じられるようになった。

福祉政策としての社会包摂とレッツの寛容な社会づくりは、課題意識が重なる一方で、アプローチに違いがあるように感じられる。それは、政策では、生きづらさを抱えた一人ひとりを合理的配慮のもとに社会の側へ引っ張り上げる社会参加的発想に基づくイメージであるのに対し、レッツの実践では、課題の解決を本人の変化に求めず、互いの存在を肯定し、交歓関係を生むことで偏見や差別を乗り越えていく発想がある（図 3）。レッツは、NPO 法人化した 2004 年以降、こうした寛容な社会づくりとしての打ち手を見出すことに意識を向け、試行錯誤を繰り返している。

図 3：福祉政策とレッツの打ち手の違い

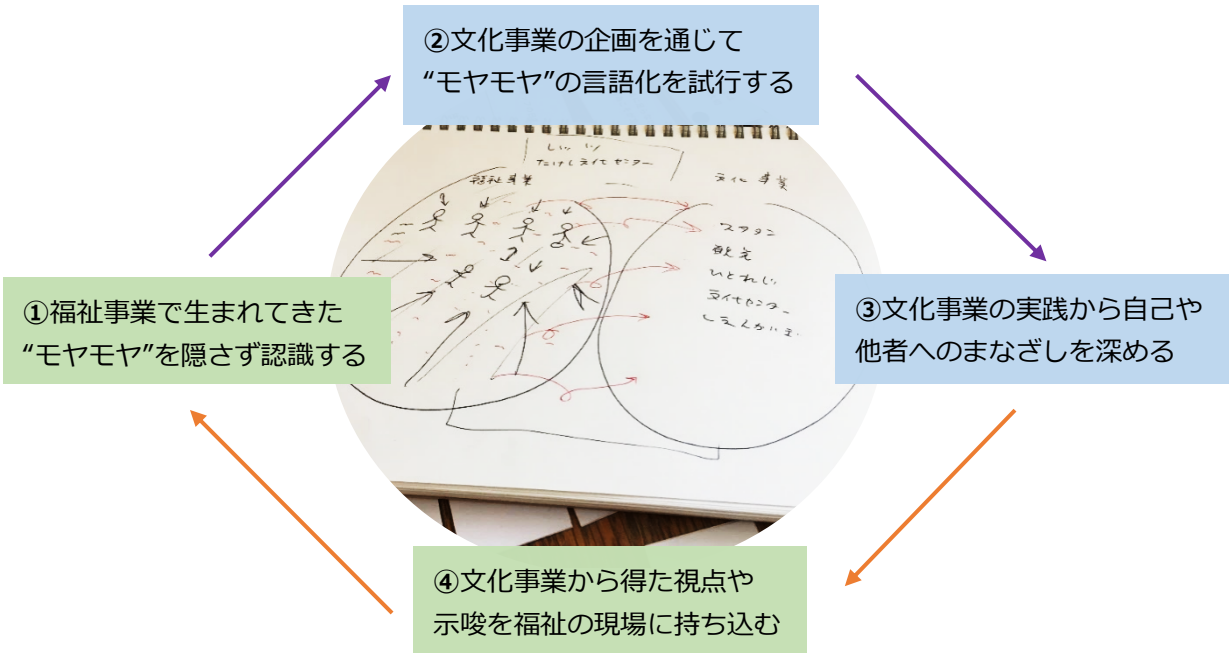


1-3.団体のもつ変化の理論

レッツスタッフへのインタビューから、2 つの「変化の理論」を把握することができた。1 つ目は、「福祉事業」と「文化事業」を地続きに捉え、スタッフ自身も両事業に循環のイメージを持っている

ことについてである。福祉現場で誰もが対峙するさまざまな出来事から生じる“自身だけではどうしようもないモヤモヤ“は、一般的な福祉施設では他者や社会に声を上げることが難しい。一方レッツでは、文化事業を通じてそれらのモヤモヤを他者や社会に開き、さまざまな角度から対象をみる機会を装置として持つことで、目の前の一人を通して社会のあり方を考えていく「観」が養われていることがわかった（図 4）。

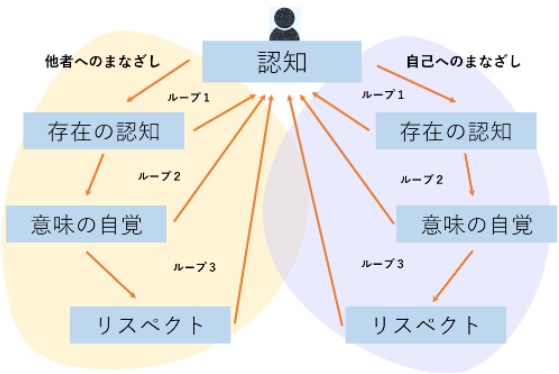
図 4：福祉事業と文化事業の循環



※中央のノートのイラストはレッツスタッフ夏目さんによる図解

二つ目の変化の理論は、過去の報告書やスタッフインタビューのなかから見えてきた事業参加者個人の変化に関するものである。それは、文化事業が福祉施設において行われることで、ひとつの「場」がつくられ、一般的な福祉施設と異なる機能（他者を理解し、自分自身を見つめ直す）を持たせることが可能になっていた。右記では、レッツに訪れた一人ひとりが「自己へのまなざし」と「他者へのまなざし」の両方を深めていくプロセスを図式化した（図 5）。

図 5：他者と自己へのまなざしの段階



2.事業概要・実績

2-1.事業概要　「表現未満、プロジェクト」

「表現未満、」という言葉は、レッツがこれまでの活動を通じて見出したコンセプトである。それは、

「特別な人がつくる『表現』ではなく、誰もが持つ自分を表す力、行為を『表現未満、』と評して大切にしていこうとする文化活動」である。差別や排除は、知らない、交わらないことによって起きている。来てみて、知って、つながることで、「とるに足らない、無駄、役に立たないと切り捨てるのではなく、その人を表す行為」として受け止め、尊重し合う体験の場を社会に開く取り組みとして、以下のプロジェクトを進行中である。

A 拠点・居場所づくり：障害者を核とし、さまざまな人が集う文化センターを運営し、障害を顕在化する
B ひとインれじでんす：福祉、アート、文化政策等の各分野の専門家が拠点に滞在し、対話を行う
C しえんかいぎ：業務で行う「支援会議」を福祉従事者に限らず他者と共有し、当事者のありようを考える
D スタ☆タン!!：オーディション形式の雑多な音楽の祭典。施設の日常的な音の表現を「音楽」として発信
E 観光：気軽で自由な観光的態度で福祉施設を訪れ、交わるなかで社会の分断を越えていく手法

2-2.事業実績

「表現未満、プロジェクト」のうち、静岡県文化プログラム（以下、ブンプロという。）が助成した事業の実績を以下に整理した（表１）。

表１　表現未満、プロジェクト事業実績（一部抜粋）

事業の柱	目的	時期	ブンプロ助成時期	実績（延べ人数）	運営（延べ人数）
1．拠点・居場所づくり（A） 〈表現未満が生まれる現場〉	障害者を核とし、さまざまな人が集い、学び、交流する文化センター。障害のある人の存在を顕在化し、さまざまな価値観を提示する対話の場であるとともに、商業だけではない新たな賑わい創出の社会実験の場となり、新しい街のコンセプトを構築していく場。	年中	2016 2017 2018	★2,160 － ☆600	約 540 約 140 約 60
2．ひとインれじでんす（B） 〈ソーシャル・インクルージョンX街〉	福祉、アート、哲学、文化政策、評論、編集等の各分野の専門家がレッツの場に滞在し、現場を目撃後、トークやスタッフとの対話を行う事業。	随時	2016 2018	－ －	2 2 （３回） ※滞在ゲスト人数

3．しえんかいぎ（C） 〈福祉の中の表現未満〉	障害福祉の「支援」を見える化する。通常、業務で行われる「支援会議」を福祉従事者に限らない他者と共有し、当事者のありようを探り考える場を通じ、個人の生きづらさ、社会の問題、根源的な人が生きることの豊かさや困難さをみつめる事業。	定例	2016 2017 2018	年５回 約 200 年３回 非公開 年８回 非公開	約 100 約 60 約 160 ※福祉関係者等の人数
4．スタ☆タン!!（D） 〈表現未満なパフォーマンス〉	オーディション形式の音楽ライブイベント。障害福祉施設の日常的な音の表現を「音楽」として発信するとともに全国の未知のジャンルを発掘することが目的。審査員がその場で講評を述べることで多面的な捉え方を体感する事業。	年1回	2019	約 200	約 20 ※出演者以外の人数
5．観光（E） 2016-タイムトラベル 100 時間ツアー 2017-かしだしたけし 2017 展覧会「レッツ観光局」☆ 2017-観光サミット★ 〈光を観る観光とプラットフォーム〉	「観光」は与えられたものを見に行くのではなく、自らそこに「光を観る」旅。気楽で自由な観光的態度が社会の分断を越えて緩やかにつながっていくための手法となることを目指す事業。	不定期	2017 2018	年７回 36 名 ☆300 名 ★70 名 10 回 74 名	約 14 約 20

3. 事業評価

3-1.評価目的

本評価は、「表現未満、プロジェクトによる影響や価値を把握し、文化事業を通じて市民サイドから社会包摂の社会づくりをすすめる打ち手を整理する」ことを目的に実施した。

3-2.評価設問

上記の評価目的に基づき、３つの評価設問を設定し、調査を行った。

①福祉の現場における文化事業について、事業参加者にもたらされている価値・変化とは何か

②福祉や地域の関係者が抱える課題に対し、認識の捉え直しや打ち手を導くきっかけとなっているか

③県が目指すインクルーシブな社会づくりを市民サイドから推進するための回路とは何か

3-3.調査対象及び調査項目

調査対象は、レッツと協議の下、スタ☆タン!!３及び観光参加者へのアンケート並びに福祉や地域の関係者６名へのインタビュー調査を実施した。以下に調査対象及び調査項目を示す（表２・3）。

表２：アンケート調査対象

調査対象	スタ☆タン!!３参加者 14 名	観光参加者 17 名
評価設問	②、③	②、③
調査項目	【スタ☆タン!!当日アンケート】 1.これまでのスタ☆タン!!参加経験回数 2.普段の関心分野 3.参加した理由 4.スタ☆タン!!に参加した感想 5.今日をきっかけに取り組みたいこと 6.あなたの思う雑多な音楽とは何か	【事後フォローアップアンケート】 1.観光への参加動機 2.他の観光と比較しどのくらい特別（非日常的）な体験だったか 3.観光はどのくらい有益な体験だったか 4.観光が今後も継続され、体験者が増えることは必要だと思うか 5.観光に参加したことで「自分自身」に対する意識の変化はあったか 6.他者の見方や関わり方に変化はあったか 7.あなたにとって観光でみた「光」とは何か

表３　インタビュー調査対象

カテゴリー	福祉関係者	地域関係者
評価設問	①、②、③	①、②、③
調査対象者（県内）	●近隣の福祉施設：グループホームすてっぷ施設長　大橋さん ●近隣の福祉施設：細江あすなろ作業所（生活介護等）職員　五味さん	●市内　佐鳴台小学校校長　鈴木先生 ●市内在住の母親　ロビンスさん ●市障害保健福祉課　深谷さん ●袋井市カメラ屋店主　すずやさん
調査項目	1.レッツと関わったきっかけ 2.レッツと関わり続ける理由（地域や福祉現場、自身の抱える課題を踏まえて） 3.事業が与えた影響（意識・行動） 4.レッツが地域に存在している意味 5.レッツの事業に対する以下の観点での評価とその理由 （1）地域への誇りを高めているか （2）多様なつながりを生んでいるか （3）障害理解を促しているか （4）自らの日常や人生を豊かにしているか	

※インタビューは、予め用意した上記質問を軸に脱線した質問も交えながら、一人１時間～2 時間半程度で実施した。

※インタビュー記録は、本報告書《資料編》に掲載しているので、参照されたい。

※インタビュー候補先には、県外の関係者の名前も多くあげられたが、今回は県内の関係者にしぼり調査を実施した。

3-4.調査結果

評価設問：①福祉の現場における文化事業について、事業参加者にもたらされている価値・変化とは何か

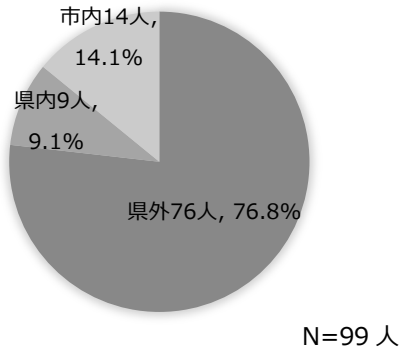
表現未満、プロジェクトのうち、参加者の層が比較的広いと考えられる観光とスタ☆タン!!の事業について調査を行った。調査では、事業にはどのような参加者が参加し、事業をどのように捉え、どのような影響を受けたのか、把握を試みた。

◯参加者プロフィール

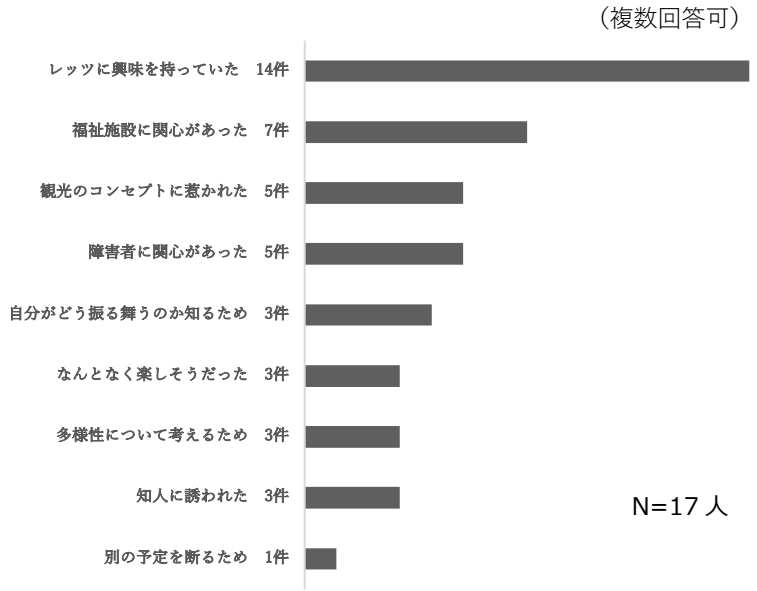
【観光】

過去 2 年間の観光への参加者は、県外在住者が多い傾向がみられた。また、参加動機として、「レッツの取り組みに興味を持っていたから」が 82.4%を占めた。次に多かったのは、「福祉施設という場に関心があったから」41.2%であった。一方、「未知の世界に踏み入れたとき、自分はどう振る舞うのか知りたかった」23.5%、「ただなんとなく、楽しそうだったから」17.6%等、自己への変化や満足に関する動機は少なかった。このことから、参加者は、レッツの取り組みへの関心層が、福祉施設に滞在して体感するという事業の特徴について期待を抱いていることが伺える（グラフ 3・4)。

グラフ 3：観光参加者居住地（名簿より）



グラフ 4：観光参加動機（F-up アンケートより）

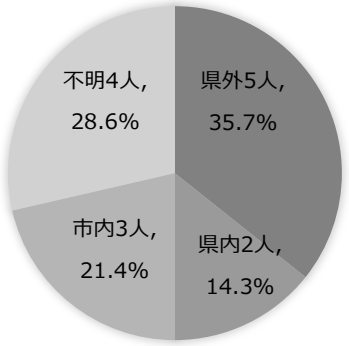


【スタ☆タン!!３】

スタ☆タン!!３への参加者アンケート回答者の居住地は、県外の割合が高かった。また、過去の参加状況を確認した項目では 83%が「初参加」であった。参加動機は、「スタ☆タン!!のコンセプトに惹かれた」、「レッツの事業に前から興味があった」という理由が多くみられた。一方で、「福祉の実践としての学びを深める」動機は１名のみであった（グラフ 5・グラフ 6)。

グラフ５：スタ☆タン!!３参加者居住地（アンケートより）

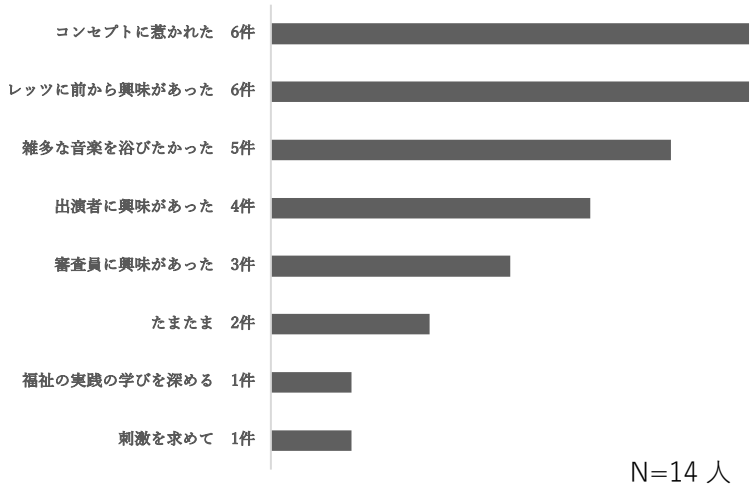
（アンケート回答者のみ）



N=14 人

グラフ６：スタ☆タン!!３参加動機（アンケートより）

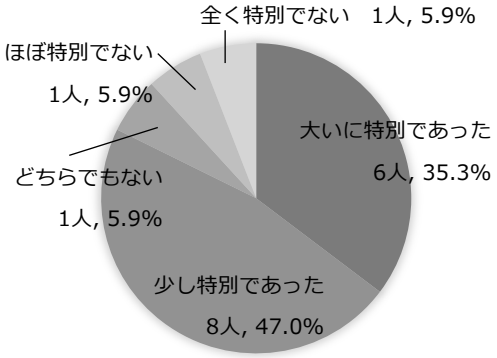
（複数回答可）

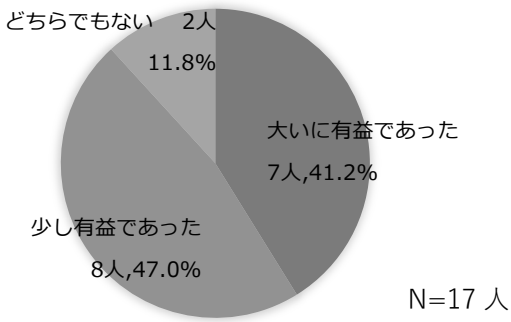
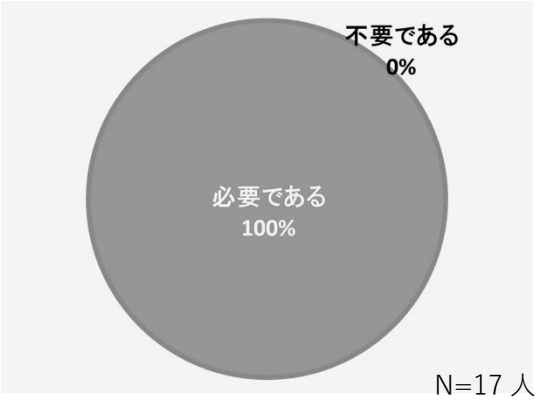


N=14 人

○**【観光】：事業の捉え方（特別性、有益性、必要性）**

観光参加者は、事業の「特別性」や「有益性」について、回答者の８割以上が肯定的に捉えた。また「必要性」についても、「今後も観光が継続され、体験者が増えることは必要だと思うか」と尋ねた項目で、17 名全員が「必要である」と回答した。回答の選択理由は次のとおりである（グラフ 7～9）。

グラフ 7～9：アンケートの質問項目と結果	**自由回答コメント**
特別性：他の観光体験と比較し、観光はあなたにとってどのくらい特別（非日常的）な体験でしたか？  N=17 人	【特別性】 ＊その状況をどう扱ったら良いか分からないまま、特に何かを求められず、また詳細な案内があるわけでもなく、ひとまず障害のある人たちの只中に居続ける。そのこと自体が非日常でした。 ＊福祉施設で慰問でも賃労働でもボランティアでも家族友人でも無く、何時間も利用者たちに接することができる機会はほかに無い特別な体験。 ＊見るべきものが用意された型通りの体験と全く違い、”圧倒的な他者”の存在に静かに驚いた。彼らが生きている世界と、自分の生きている世界は別物なのか、重なるのか、色々と感じるものがあった。

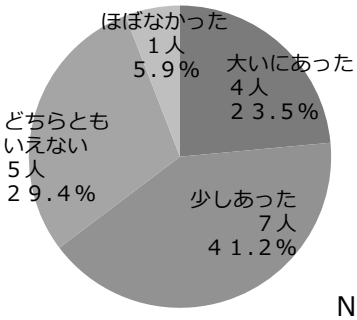
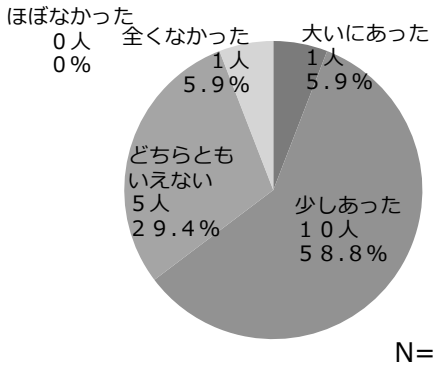
<table>
<tr>
<td>有益性：観光はあなたにとってどのくらい有益でしたか？
 
</td>
<td rowspan="2">【有益性】
＊その場にいる人と接して考えたことが、現在の自分にとても影響を与えていると思うから。
＊障害のある方と時間を過ごすという経験ができたから。また、その経験を通して障害のある人とともに生きることについて考える時間が得られたから。
＊これが普通と思える世の中になればと強く思える体験になったから。
＊「障害者」という言葉があることによって、健常者と障害者に線が引かれる、ということがあるように、言葉によって自らの感じ方やモノの見方が規定されることに意識的になった。
＊頭での理解でなく、その場に居続けることで、それまで直視する事がはばかられると感じていた障害者の発する声や独特の行動に慣れたと言えば良いでしょうか。その人がただそうあるだけの事実として、行動や声を受け取ることが出来るようになってきた。
＊友人・知人を作る場所となったから。
＊それがきっかけで職員になったから。</td>
</tr>
<tr>
<td>必要性：今後も観光が継続され、体験者が増えることは必要だと思いますか？（回答理由の記載欄設定無し）
 
</td>
</tr>
</table>

特別性・有益性スケール：1 全く（特別・有益）でなかった←→5 大いに（特別・有益）であった

必要性スケール：必要ないと思う←→必要だと思う

○【観光】：事業の影響（自己へのまなざし、他者へのまなざしの変化）

「影響」に関する項目として、「自己へのまなざし（自己への意識）」と「他者へのまなざし（他者の見方や関わり方）」の変化を確認したところ、事業参加者の約 6 割が「変化があった（大いにあった、少しあった）」と回答した（グラフ 10・11）。

グラフ 10･11：アンケートの質問項目と結果	自由回答コメント
自己へのまなざし：観光に参加したことで自分自身に対する意識の変化はありましたか？  N=17 人	＊自分の内部から突如湧き上がる衝動がたとえ理解しがたいものでも、決して無視をしてはいけないなぁとなぜか思うようになった。 ＊障害がある人と接する機会を持つことで、自分が”知っている”と思い込んでいるのとは別の世界が広がっているように感じ、自分の住んでいる地域でガイドヘルパーの講座を受講してたまに外出支援をするようになった。 ＊なんとなくいやだなと感じている自分がよくないような気がしていたが、いやなものはほっといて楽しいものは楽しんでいればいいと思うようになった。
他者へのまなざし：観光に参加したことで他者の見方や関わり方に変化はありましたか？  N=17 人	＊障害がある、なしにかかわらず、自分とは違う他者に対して寛容になった。 ＊ひとの在り様を今までより広いグラデーションの中で考える事が出来るようになった。特に障害のある人たちを見る解像力が少し上がり、その一人一人を見る方法が分かった。 ＊相手に対し、なにかをしなくても、その関係は成り立つのだと思えた。 ＊幅広いタイプの人が自分の意識に入るようになった。素通りしていた他人に目を留めるようになった。

自己へのまなざし・他者へのまなざしスケール：１全く（変化が）なかった←→５大いに（変化が）あった

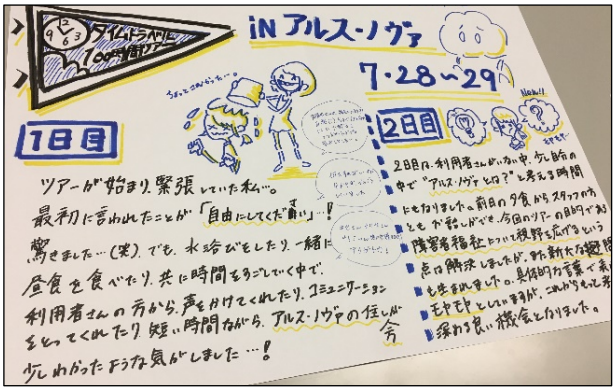
○【観光】：参加者にとって観光にみた光（事業の価値や可能性、立ち上がってきた何か）

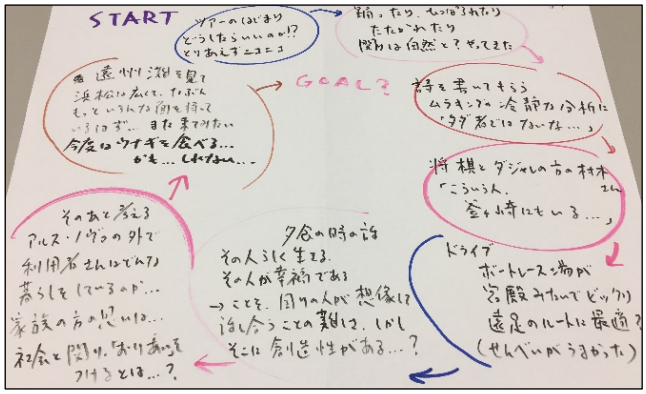
観光参加者への事後アンケートにおいて、観光体験から見えてきた光（価値や可能性等）を尋ねた。以下に抜粋した意見から、参加者が他者へのまなざしと自己へのまなざしをさまざまに深めたことがわかる。

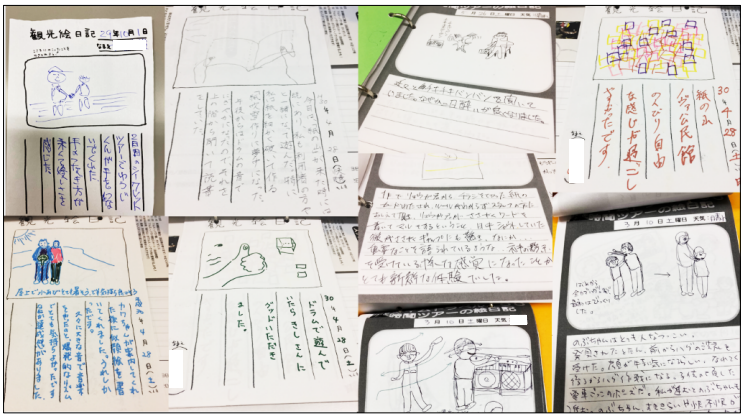
図 6：事業参加者が観光にみた光（事業の価値や可能性等）

○【観光】：当日の参加者の制作物（一部抜粋）

以下の記録は、観光当日に参加者が振り返りの時間に制作したものの例である。「自由にしてください」とのスタッフの姿勢に戸惑いながらも、いかに滞在するか、参加者自身が考え、他者と交わり、そのなかで感じたことを言語化したり、スタッフ等と対話を行ったりする時間が確保されていた。記録の特徴としては、時系列で参加者自身がみたもの、体験したことを記載し、そのなかで湧き出てきた問いや感情を紙面に書き加えている内容が多くみられた。



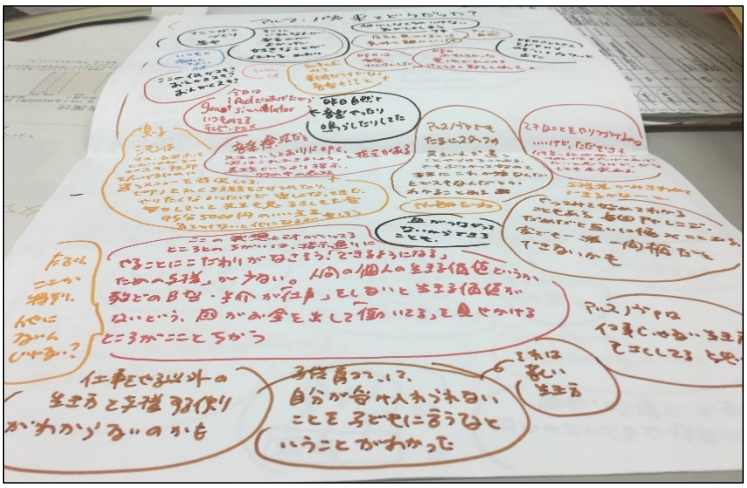




観光（日帰り）ver.とある一日の
タイムスケジュール（例）

10:30　参加者が駅に集合
10:45　アルス・ノヴァ到着・受付
11:00　自由行動（１時間）
12:00　昼食
13:00　自由行動（３時間）

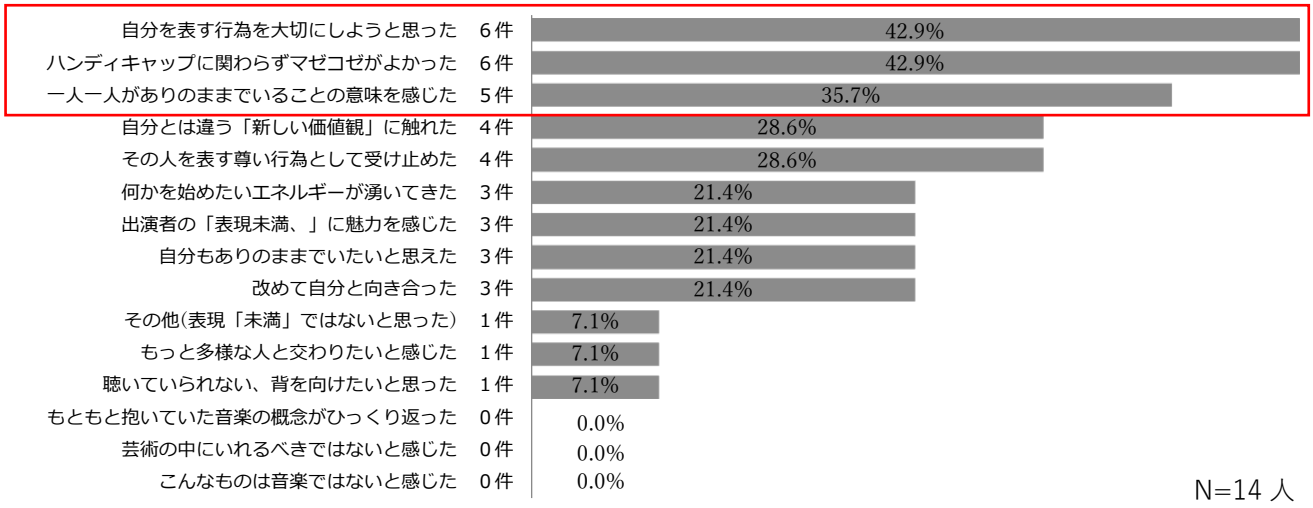
16:00　参加者はしばし休憩
16:30　参加者と振り返り
　　振り返りシート記入
17:00　代表 久保田さんとの
トークタイム
18:00　夕食
19:00　かたりのヴぁ
21:00　参加者帰宅



○【スタ☆タン!!３】：事業の影響（参加しての感想）

アンケート回答者の感想では、「自分を表す行為を大切にしようと思った」、「ハイディキャップに関わらずマゼコゼがよかった」、「一人一人がありのままでいることの意味を感じた」が上位 3 位を占めた。多様な他者の音楽や演出に触れることで、他者を受け止めながら、自身を見つめるきっかけとなったことがわかる。

グラフ 12：第３回スタ☆タン!!事業参加者の感想



また、一例としてアンケート回答者のうち、【関心分野】に「福祉」や「生活」をあげた 4 人の回答を以下に抜粋する。「感想」や「今後取り組みたいこと」の内容は、さまざまな受け止め方となっていたが、他者への関心が開くと同時に、自己への内省や意欲につながっている例も一部みられた（図 7）。

図 7：スタ☆タン!!3 アンケート

A さん（初参加）
1.生活・子ども・旅
2.・レッツに前から興味があった
・たまたま通りかかった
3.改めて自分と向き合った
4.遠慮しない／思い立つ／思い切る／正直になる／大切にする／丁寧に／そして何もしない

回答者事例
1.関心分野（選択式）
2.参加理由（選択式）
3.感想（選択式）
4.今後取り組みたいこと（自由）

B さん（初参加）
1.アート・福祉・障害
2.レッツに前から興味があった
2.審査員に興味があった
2.「雑多な音楽」を浴びたかった
3.ハンディキャップに関わらずマゼコゼよかった
4.カラオケに行きたくなりました

D さん（2 回目）
1.福祉・ソーシャルインクルージョン
2.レッツに前から興味があった／2.コンセプト
3.その人を表す尊い行為として受け止めた
3.一人一人がありのままでいることの意味を感じた
4.いつも通り、様々雑多な人（存在・表れ）に、どう感じるか、どう受け止めていくのか

C さん（初参加）
1.福祉
2.出演者に興味があった
3.聴いていられない、背を向けたいと思った
4.審査員をやってみたい

○【スタ☆タン!! 3】：出場者と審査員

スタ☆タン!! 3 の出演者の題目は実に多様である。それらは、鶴見俊輔氏が、「人の行為や振る舞い、身振り、祭りやデモ、労働のリズムや合いの手」と定義する『限界芸術』の要素とも重なる内容である[4]。

●出場者（計 14 組）	●審査員（計 7 名）※全員、立候補
№01　はっぱオールスターズ（ヒップホップ） №02　村木多津男（数え歌） №04　ひさし（木魚） №05　中村円（？）　―欠場― №09　THE KENTY DONUTS №13　とびうお（うた） №14　木の葉パレット（iPhone 打ち込み曲） №15　男組「静と動」不器用（シャイ）な男たち（オペレッタ） №17　タムラムラ（支援系パンクロック） №18　よしさんズ（口頭伝承） №20　さとみとふきこ～略して 25 歳～（体操） №23　泰日友好合唱団（童謡） №27　堤亮賀（声） №29　竹内家（うた） コラボレーション出場者（2 組を 1 組に合併） №10　西村よしひろ（パーカッション童謡）＆№25 正義の使者三浦悠也と、グレース軍団（ロックから、動揺まで） ゲスト出場者（計 1 組） №06　横村雄輝（むしむし暑い日）	安野太郎（現代音楽作曲家） 村木多津男（詩人、日本将棋連盟浜松支部メンバー） 哲太陽（自立生活リングリングスタッフ） 渡辺勇士（ワークショップデザイナー） テンギョウ・クラ（ヴァガボンド） 佐藤啓太（スタタンプロディーサー） 松島京太（新聞記者） 「スタ☆タン!! 3」開催概要 2019 年 11 月 3 日（日）文化の日 13 時～19 時（6 時間） @たけし文化センター連尺町 入場無料

[4] 鶴見俊輔「限界芸術論」ちくま学芸文庫（1999）

評価設問：②福祉や地域の関係者が抱える課題に対し、認識の捉え直しや打ち手を導くきっかけとなっているか

○福祉関係者（施設運営者や職員）の抱える課題、アウトカム及び波及効果

福祉関係者へのインタビューでは、さまざまな課題に対し、レッツと交流をもつことによって認識の捉え直しや新たな打ち手を見出す様子がみられた。以下インタビューから得た回答のポイントを列記する。

〈福祉関係者の抱える課題〉

✓ **スタッフにとって現場は常に評価される場**

職員は職場で常に評価され、こうあらねばならないという支援員の服を着ていなければならない

✓ **制度によるサービス化**

福祉はどんどん制度化され、職員は職員としてあるべき姿が求められ、利用者をお客様扱いし、サービス化されている。「あなた」と「私」という個人間の関係性が築きづらい

✓ **名付けることで、楽にはなるが、個々人が見えなくなってしまう**

例えば、アスペルガーと名付けられると本人も一瞬は楽になるが、こういう支援／施設／働き方にすべきと一律に外部者に決められてしまうとすればそれは窮屈。支援者も名付けることで楽にはなるが、個人が見えなくなってしまう

✓ **利用者自身も「障害者」という服（レッテル）を脱ぎ捨てられる場・関係が少ない**

支援が閉じている。日頃接している支援員以外の第３者的な関わりが持てる場が必要

✓ **就労支援の仕事で「教育」や「指導」として支援者の狭い価値観に当てはめることへの違和感**

社会生活に適応する必要は感じるが、果たして個性を潰してしまうのはどうなのか

✓ **ある枠の中で生活するほうが本人のためという決めつけが福祉の考え方にある**

〈福祉関係者の認識の捉え直し〉

✓ **自由度が増し、現場が楽しくなった**

マニュアル化されたことからの逸脱行為を批判する世間に挑むレッツを目撃し、自身や同僚のなかの支援の自由度が増していった。「自閉症の人はこうって支援方法を決定するのでなく、もっと自由で創造的で、幅広に捉えていいと思えて、仕事が楽しくなった。レッツ滞在時だけでなく、自身の現場にレッツでの視点や体験を持ち帰ることで現場も楽しくなった」と話していた職員もいた。

✓ **ただ一緒にいる意味を実感**

支援者として上質なサービスを届けるよりも、ただ一緒にいること自体に意味がある、という個人的な感覚と結びつく部分が多くあり、自信につながった。

✓ **話し合いの内容が「問題」から「エピソード」に変化**

以前は、「利用者 A さんのあの行動を変えるためにはどうすべきか」ということばかり話し合っていたが、今は「こんなことがあったよ」、「面白かった、ぐっときた」というエピソードや、「そもそも、それって問題なのかな？」、「僕らがつい、問題行動って呼ぶだけで、本人は構わないことかも？」、「その人の生き様だよね」など、本人らしさを尊重する意見も出てくるようになった。

✓ **自施設の利用者にとって、レッツのスタッフ（や利用者）を「友人」と思える関係となった**

✓ **自分自身の支援を、問い続けることが大切だと思うようになった**

✓ **レッツや利用者との関わりを通じて、「人間って自由でいいんだ」と思えるようになった**

〈福祉関係者の新たな打ち手の展開〉

✓ **新たな打ち手として「哲学カフェ〈実行編〉」を企画**

レッツの「しえんかいぎ」を参考に、自身の施設で取り組んできた「哲学カフェ」の新たな形（実行編）が立ち上がった。これにより、障害者のレクリエーションや余暇の幅が広がった。（例えば、駅まで利用者と出かけ、足の向く方へ新幹線に乗って向かい、なんとなく下車した街で歩き、何気なく入ったお店でご飯を食べるなど）。レクに決まっていない要素や偶発性を持ち込むことで、「こんなトラブルがあった。でも○○さんの熱意はすごかった。」など体験を共有する機会が増え、支援員の対応力の向上やスタッフ間の関係性の質を高めていた。

✓ **市の補助金を獲得し、独自のワークショップを企画**

「やったことないをやってみる 2019」という試みが「平成 31 年度浜松市創造都市推進事業補助金補助事業」として採択。専門・非専門の関係や支援―被支援関係にアーティストが加わり、両者を混ぜ合い「境界」を取り払う方法を確立。「福祉現場には、無意識的にどうすべきか、ということばかりに視点がいきがちで、曖昧かつ名付けようのないことは扱われないことも多い」という気づきに基づき、「曖昧さを楽しむ認識」が団体内に根付いた。

✓ **職員自己評価表「裏面」を新たに作成**

職員間で共有された価値観に基づき評価表「裏面」の内容を独自に作成。（本報告書資料編に添付）

○地域の関係者（市職員、小学校校長、中学生の母親、個人店店主）の抱える課題、アウトカム

地域の関係者について、インタビュー結果から抱える課題及びアウトカムの整理を行ったところ、福祉関係者と同様、さまざまな課題に対し、認識を捉え直したり、新たな打ち手を見出したりする様子がみられた。

表 4：地域の関係者の抱える課題とレッツから受けた影響

	〈地域の関係者の抱える課題〉	〈地域の関係者がレッツから受けた影響〉
市職員	✓ 福祉施設におけるさまざまな背景を持った多分野からの人材確保が難しい状況がある ✓ 市内の NPO が福祉事業をはじめると福祉事業色が強くなってしまい、自由な活動や制度にない活動が弱まってしまうケースがある	✓ レッツのように文化事業を営み、福祉分野を越えて多様な人と交わりを持つことが多分野からの人材確保の打ち手の一つになると考えるようになった ✓ レッツとの関わりを通じて、事業母体がどのような目的や属性を持っているかを意識し、助言のレベルを調整するようになった。助言することが適切と思われる NPO に対しては、たとえ制度になっていない領域でも「これが必要」と思う活動を、応援者の協力を得て取り組んでいく重要性を伝えるようになった

小学校校長	✓ 小学校という社会のなかにも「○○でなければならない」という考え方の枠や制限があること ✓ 地域に開かれた学校づくりに向けて「校外学習」を形骸化させず根付かせるにはどうすればいいか	✓ レッツ利用者やスタッフとの関わりから、学校は問題を起こさない場所ではなく、問題が起こったときにどうするかを学ぶ場でもある、という寛容さが児童に浸透していると感じるようになった ✓ 学校の理念である「多文化共生社会づくり」を体感する機会としてレッツとの協働が継続している
市内在住の母親	✓ 子どもを通じて関わる学校社会が「ちがい」に敏感で、息苦しさを感じる。子ども（中学１年）が学校に馴染めていない ✓ 学校が地域住民と対話し、協力関係を築くことが必要と思うが、なかなか教員と連携することができない	✓ レッツと関わることで、自身も「ちがいは、いい悪いではない。人は色んな面があっていい」と捉え直せるようになった。レッツが子どもの居場所となった ✓ コミュニティ・スクールの総合学習としてレッツとの関わりをさらに加えられないか企て中。学校や社会は簡単に変わらないが、「身近にあること、できることからすればいい」と感じるようになった
県内個人店主	✓ 知的障害のある人との関わりを持つ機会が全くなかった ✓ 日常生活での人とのつながりは限定的である	✓ 今では、知的障害のある人達と一緒に何かをする関係性ができ、事業に参加したり手伝うこともある ✓ レッツ主催のイベントに参加して「面白い」と思える人や他の NPO 活動と出会い、自分の社会（人とのつながり）が広がった。地域でつながった人とチームを結成し、スタ☆タン!! 3 に出演することもできた

○福祉や地域の関係者の評価

インタビューを実施した 6 名による「表現未満、プロジェクト」の評価は以下の結果となった。

表 5：表現未満、プロジェクトに対する福祉や地域の関係者の評価

	A	B	C	D	E	F	平均
（1）地域への誇りを高めている（地域の魅力や文化的価値向上に資する）	4	5	5	5	4	4	4.5
（2）地域における多様な人とつながるきっかけを生んでいる	4	4	5	4	5	4+	4.3
（3）福祉分野の現場や当事者への理解を促進している	5	5	5	4	4	4-	4.5
（4）自らの日常や人生を豊かにしている（見つめ直し、捉え直す機会として）	5	4	5	5	5	5	4.8

スケール：１全く評価しない／２ほぼ評価していない／３どちらともいえない／
４少し評価している／５大いに評価している

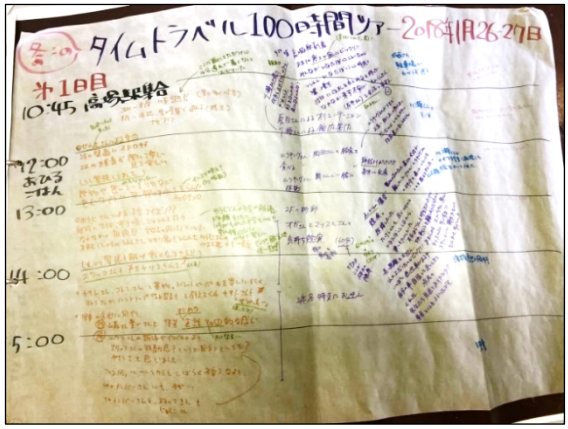
4.評価結果と今後に向けた提言

4-1.評価結果

以上、評価設問に沿って調査結果を眺めてきたが、改めて「表現未満、プロジェクトによる影響や価値を把握し、文化事業を通じて市民サイドから社会包摂の社会づくりをすすめる打ち手を整理する」という評価の目的について、各評価設問に照らし、結果をみながら総括していきたい。

① <u>福祉の現場における文化事業について、事業参加者にもたらされている価値や変化とはなにか</u>
⇒他者とともに過ごすなかで、自己を見つめ、他者を尊重するなどの「観」が養われていた

表現未満、プロジェクトでは、普段、障害のある人との交わりを持たない個人に多様な形で関わり代（訪問した人がさまざまな関わり方ができる場）を用意していた。他者が一定時間（期間）滞在することに特徴のある「観光」では、他者とともに過ごすなかで、観察・関与・対話などの方法を参加者自身が考え、試し、考察する時間が、「自由時間」や「振り返りの時間」、「スタッフとの対話の時間」としてプログラム化されており、それが参加者の自己や他者へのまなざしを深める要因となっていた。中でも、特徴的であったのは、複数の参加者の観光体験をともに時系列にまとめていく方法である（写真）。これは「しえんかいぎ」の技法を応用したものと見受けられるが、まるで文化人類学の探検やフィールドワーク後のアウトプット手法のように、事実の特定（体験・見聞きしたこと）を記述し、その隣に、「その時感じ、考えたこと」を書き出した制作物が存在した。



また、記述には、自身のなかで解決されていない「問い」が改めて可視化され、それを自ら肯定・否定を繰り返す内容も複数人の振り返りからみられた。こうした思考する状態は、川喜田二郎氏が創造的行為の出発点であるとした「渾沌」の状態と類似する[5]。渾沌の状態を切り抜けるために意志や関心が発生する。その過程で自己と他者の存在が「渾沌」のなかから分かれ出てくることで、自己や他者の捉え直しや多様性を尊重する「観」のようなものが生まれている様子が伺えた。
こうした現象は、単に場を開いただけでは起こりにくく、障害のある人にはありのままでいることを保障し、訪問者には自由な過ごし方を保障することで、訪問者自らが障害のある人等との過ごし方、関わり方を探求し、自ら発見していく過程が必要となる。このような外部の人の関わり方を、地域活動家で外部者として表現未満、の現場を定期的に訪ねてきた小松理虔氏は「共事」と表した[6]。そこにあふれていたのは「親しみ」であり、「安心感」であった。他者を知らないがゆえに無自覚に排除するような関係ではなく、また、支援―非支援関係のようなどちらか一方が優位な関係でもなく、友人のようなフラットな交歓的関係性がそこに生

---

[5] 川喜田二郎「創造性とは何か」祥伝社新書（2010）

[6] 「ただ、そこにいる人たち－小松理虔さん 表現未満、の旅」認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ（2020）

まれていた。

②福祉や地域の関係者が抱える課題に対し、認識の捉え直しや打ち手を導くきっかけとなっていたか

⇒　本来のあり方を問い直し、創造性を活かした実践を主体的に展開している例がみられた

関係者へのインタビューから、レッツの文化事業に参加した後も継続的に関わることで、課題意識が明確になるとともに、認識の捉え直しや打ち手が具体化されている様子が伺えた。その打ち手となる実践（以下表５③）の内容も創造性に富んだものがみられた。

表５：インタビュー結果からみられた課題意識や変化、創造性を活かした実践の例

	① 課題意識	② 関わりによる変化	③ 創造性を活かした実践
ロビンスさん	✓ 子どもが学校に馴染めず、学校生活に不安があった。「彼女は彼女のままでいいじゃないか」と思う反面、「今変わっておかないと一生この子は苦労するんじゃないか」と。どちらも幸せを願ってのことだけど、どうしたらいいかわからなかった。	✓ でも、レッツと関わるなかで、「彼女は彼女のままでいいんだ」という気持ちを自分の中に取り戻した。	✓ コミュニティ・スクールの動きが市内で始まることになり、「学校のあり方を変えていくチャンス」と思い、関わるようにした。 ✓ 昨年、その活動の一環でレッツのメンバーを中学校に招いた。 ✓ 生徒が地域を調べる「総合学習」をよりよくするため、提案予定。
あすなろ作業所五味さん	✓ 利用者さんも家族も、枠の中で生活されてきたと思うんです。枠からちょっと出ると、「出ちゃだめ」って枠の中に戻される。確かに社会生活に適応するってことは大切かもしれない。でも果たしてそれがその人の個性まで潰してしまったらどうなのかな。	✓ そうした問いに応えてくれる実践がレッツにあった。枠から出てもその人の個性と捉え、徹底的に本人のしたいことを伸ばしていく。一見それが問題行動にみえることもあるけど、徹底的に寄り添えば彼らも気持ちが安定してきてメチャクチャなことにはならないんじゃないか、という観が身についた。	✓ レッツのスタ☆タン!!等の影響を受けて、彼ら（自施設の利用者さん）の表現したいことを発散できる舞台や音楽祭を施設として開催。 ✓ シャイな男性利用者さんとともに、今後もスタ☆タン!!に連続応募予定。

グループホームすてっぷ大橋さん	✔ 福祉が制度化されるにつれ、職員はあるべき姿を求められ、利用者に対しても均一的なシステム化が進行することに懸念があった。「自閉症の人にはこう対応すべき」と、決めて対応しないといけないという認識が福祉業界に広がっていた。	✔ レッツと関わるなかで、支援はもっと自由で創造的で幅広くていいんだ、ということに気づいた。 ✔ レッツの価値観が自分たちの中に入っていくことで、関わり方や捉え方の自由度が増した。	✔ スタッフ会議の目的が「問題解決」から、「エピソード（出来事）の共有」や「問題の新たな捉え方や視点を補う」ことに変化した。 ✔ しえんかいぎを参考とした「哲学カフェ」を開始。その後、偶発性を取り入れたレク企画（哲学カフェ実践編）に発展。 ✔ 職員自己評価表の裏面を職員間で共有された価値観に基づき独自に作成。（資料編に添付）
佐鳴台小学校鈴木校長	✔ どの学校の中にも、まだまだ「○○でなければならない枠」がある。しかし、その枠には、はまりきれない部分も出てきている。それらは悪いものばかりではないので、枠組みを緩める見直しができないか。	✔ レッツのスタッフと出会って、「ありのままをまず見る」ことを原点として、そこからスタートすることの大切さに気づかされた。 ✔ 小学校の経営方針に、多文化共生社会の実現に向けた取り組みとして、レッツとの協働事業が記載された。（2019.3）	✔ レッツスタッフとメンバーがお昼休みに小学校に訪問し滞在する「ミニミニアルス・ノヴァ」という企画を継続的に実施 ✔ 「総合学習」の時間に児童が「たけし文化センター」をクラス単位で訪問する企画を実現。

③ 県が目指すインクルーシブな社会づくりを市民サイドから推進するための回路とは何か

⇒ 利用者と訪問者との創造性を介した関わり合いの先に社会包摂を位置づけること

レッツが 2016 年に静岡県ブンプロの事業の一環で取りまとめた「文化芸術による障害のある人などのソーシャル・インクルージョン推進調査報告」の書き出しにはこのような一節がある。

> 「障害者の芸術活動に対する注目が高まるなか、彼らの絵画や造形、パフォーマンスを文化資源としてとらえるのではなく、彼らの存在そのもの、既成概念にとらわれない創造性を文化資源と捉えた。また、その創造性を活かすことができる周りの人との関係性や、その関係性を成り立たせる環境を含め文化資源とした。また、これらを文化プログラムとして、どのように発信できるか調査・実践・検証を行った」[7]

[7] 「文化芸術による障害のある人などのソーシャル・インクルージョン推進調査報告」認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ（2016）

表現未満、プロジェクトは、こうした調査・実践・検証のうえに文化資源を増幅させていく装置として展開されていることが伺える。なかでも注目したのは、「文化資源」の範疇に、障害のある人による既成概念にとらわれない創造性という点に加えて、「その創造性を活かすことができる周りの人との関係性や、その関係性を成り立たせる環境」を含めている点である。「創造性を活かすことができる周りの人」には、スタッフをはじめ、ともに施設に通う利用者メンバー、そして外部からさまざまな理由で施設を訪れる外部者が想定される。それらの人が、互いの創造性を活かし合える関係性を成り立たせる場としても、表現未満、プロジェクトは機能した。

静岡県は、「ふじのくに文化振興基本計画（2018 年度から 2021 年度まで）において、重点施策 5「地域・社会のさまざまな課題への文化力の活用」を定めている。その重点施策を進める上での考え方として、「社会包摂」を据えている。

ふじのくに文化振興基本計画（2018 年度から 2021 年度まで）一部抜粋

重点施策 5「地域・社会のさまざまな課題への文化力の活用」

◆重点施策を進める上での考え方

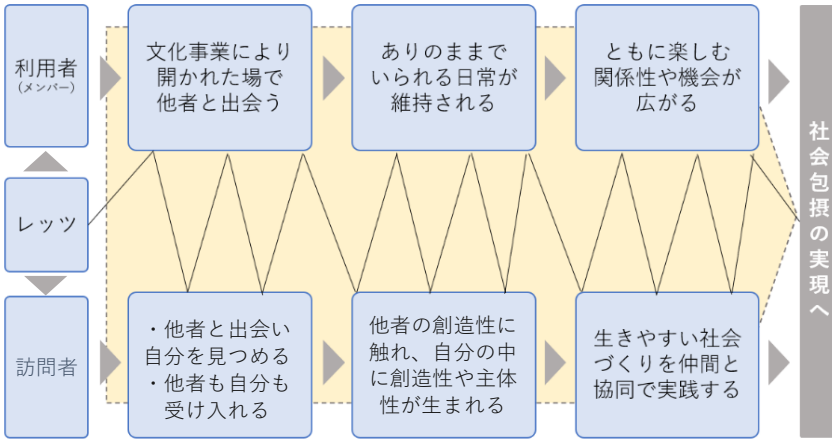
・県は、文化政策の実施を通して、寛容の精神に基づき社会のあらゆる人々の多様な価値観を互いに認め合う、ソーシャル・インクルージョン（社会的包摂）の実現を目指します。

・社会の幅広い分野（教育、医療・福祉、まちづくり、産業など）において、文化の価値や力は、従来の課題・問題を解決するヒントや糸口となることがあります。また、文化がそうした役割を果たし、存在感を発揮することで、継続的な文化振興を図るうえで重要な文化を「支える」人や団体の活動の場を広げていくことにもなります。

今回の調査で見えてきたことは、文化政策（文化事業）はいかに社会包摂の実現に寄与しているのか、という点である。そして、社会包摂の実現に寄与している点とは、「創造性を活かし合える関係性」をさまざまな主体間に生み出す装置としての役割であることがわかった。

つまり、評価設問 3「県が目指すインクルーシブな社会づくりを市民サイドから推進するための回路とは何か」について、一言で表すとすれば、「利用者と訪問者との創造性を介した関わり合いの先に社会包摂を位置づけること」が重要ということになる。以下はそれを図解したものである（図 8）。

図８：表現未満、プロジェクトを通じた社会包摂の回路

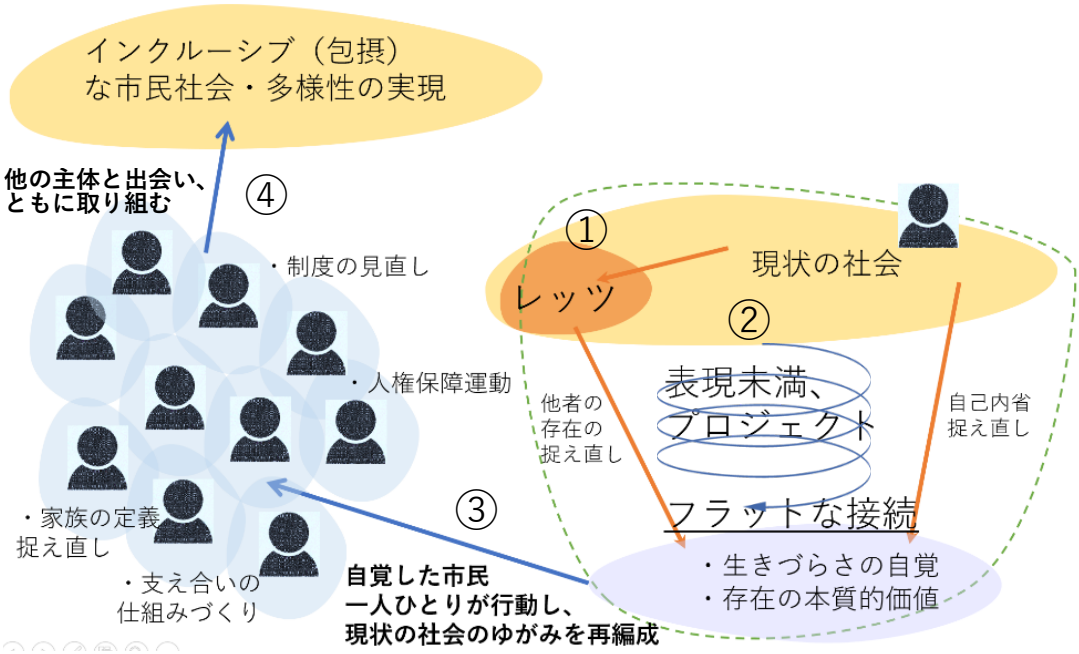


ここで改めて、この回路のポイントをあげておきたい。

１つ目は、「他者」の存在の重要性である。通常、福祉施設への訪問者は限定的であるのに対し、団体は障害者施設で文化事業を行うことで、多様な他者との出会いを生み出した。それは「知らない」ことによる差別を防止するだけでなく、訪問者に他者を通じて自己を見つめる機会を提供することで、寛容な「観」を養う役割を担っていた。

２つ目は、ありのままの存在を肯定する「場づくり」である。表現未満、は利用者に宿る創造性を「文化」として肯定する試みである。それは同時に、訪問者自身にとっての創造性や主体性を生み出す装置になっていた。
そして最後は、その場づくりを担う「スタッフ」の振る舞いについてである。スタッフは図のように、利用者と訪問者に接しながら、双方向の自由で多様な関わりを生み出していた。それは、時に支援員としてであり、また時に友人のような身のこなしをすることによって、利用者と訪問者の関係をフラットに接続する役割を果たした。このように、利用者と訪問者との創造性を介した関わり合いの先に社会包摂を位置づけるアプローチは、文化事業ならではの具体的な打ち手となっていることがわかった。
なお、社会包摂を市民サイドから推進する回路の全体イメージは以下のとおりとなる（図 9）。

図 9：社会包摂を市民サイドから推進する回路のイメージ図



4-２.評価の総括

最後に総括として、レッツの事業を大澤寅雄氏が提唱する“文化生態系“の概念になぞらえて考えてみたい。大澤氏は、「生態系サービス」という概念を文化へと適用した「文化の生態系サービス」を右図のように示したうえで，４つの生態系サービスのうち、真ん中の「調整サービス」と「生息・生育地サービス」が見落とされがちであると述べている[8]（図 10）。

改めて、見落とされがちな２つのサービスをみると、まさにレッツの「表現未満、プロジェクト」の各事業はこれらと合致する事業であることがわかる。「目的よりも現場が先にある。」これは、打ち合わせ時に久保田瑛さんから発せられた言葉であるが、レッツの文化事業は、単に娯楽や癒やしを与える価値とは別に、人が日常を生きる場（福祉施設）を通じて生まれてくる渾沌としたものが事業の種になる。それはすぐには解決できるものではなく、また解決することが必要かどうかもわからない。だからこそ他者とともに眺め、言葉を交わし、問い直す。そして、多面的にその対象を捉えていく。

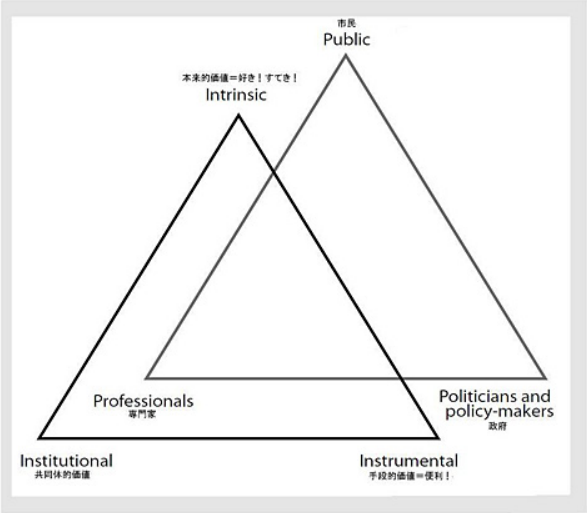
こうしたアプローチは、2001 年に北海道の浦河べてるの会ではじまったとされる「当事者研究」にも重なるものがある。表現未満、プロジェクトは、まだ始まったばかりであり、今後もさまざまな主体と交わる中で変化していく事業であるが、こうした事業の価値を育てていくためには、長い目で事業を見守っていく専門機関の体制整備等が不可欠である。

右の図 11 は、英国の文化政策専門家であるジョン・ホールデン氏のものである。この三角形は文化に関わる主体を市民・政府・専門家とし、各々の主体が文化のどの価値を最も重視しているかを表している。その中では、専門家たちによって構成される価値は、施政者が求める短期的な社会的価値や市民が求める主観的･直観的価値を抱合しつつ社会全体を文化によって動かして行こうとする長期的スパンの「共同体的価

図 10：文化の「生態系サービス」

2020/3/5 アーツアカデミー2019 第７回レポートより

図 11：文化の「生態系サービス」



出典　ジョン・ホールデン『文化の価値とその正当性の危機―なぜ文化に市民からの負託が必要なのか』（John Holden, "Cultural Value and the Crisis of Legitimacy：Why culture needs a democratic mandate"）、2006 年。http://www.demos.co.uk/people/johnholden

[8] 「アーツアカデミー2019 第７回レポート：「芸術と社会の関わり方を磨く」―社会とのつながりを捉え、「接続」を考える―」アーツカウンシル東京（2020） https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/blog/41862/

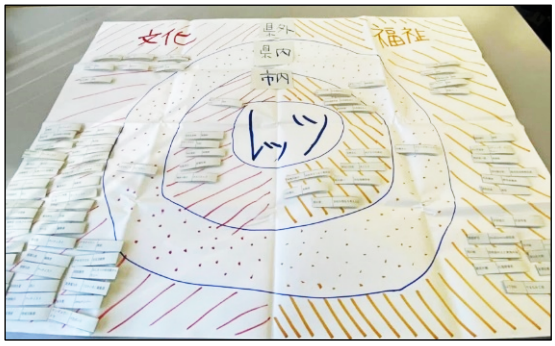
値」あるいは「公共的価値」と位置づけられる。[9]
この、「共同体的価値」は、前述の文化の生態系サービスで取り上げた 2 つのサービスに重なるものである。この価値は専門家たちによって構成される価値とされるが、専門家は、レッツのような市民団体とともに手を合わせながら、文化を掘り起こす主体を形成していくことが期待される。

4-3.今後に向けた提言

ここでは、調査結果や評価業務全体から感じられた点を 3 つ取り上げてみたい。

（1）参加者・協力者の輪を広げる

スタ☆タン!!や観光参加者へのアンケート結果では、参加者には県外の個人の割合が高かった。これは、「表現未満、」という独創的なコンセプトを積極的に発信し続けてきたレッツの実績の現れである。まだ少数ではあるが、福祉関係者や学校関係者の参加もみられ、そうした参加者も事業の価値を感じている様子が伺えた。参加者の他に、「認知している者」については、今回は、調査対象に含めていないが、メディアへの露出や SNS での広報に加え、映像配信や報告書の制作・配布など積極的に事業の普及に取り組んでいることからも、幅広い層へリーチしていることが見込まれる。



また、文化事業の協力者について把握するため、表現未満、プロジェクト広報資料や報告書、レッツ HP で紹介されていた関係者のマッピングを行った。左半分は「文化芸術の関係者」、右半分は「福祉の関係者」であり、「レッツ」と書かれた中央から「市内」、「県内」、「県外」で分類した。あくまで外に発せられたデータでの整理ではあるが、傾向として、県外の文化関係者（個人）の名が最も多かった。また、市内においても数名の名前が上がっている一方で、県域においては、関係者は少なかった。

2019 年 11 月 13 日に行われたスタ☆タン!! 3 の振り返りの会において、スタッフから「レッツは孤軍奮闘状態にある」という発言があったことも踏まえると、今後は、県内において共通のビジョンを掲げる仲間をつくり、ともに事業を実施していく段階に来ているように感じられた。その点についても、同振り返り会において、「運営プロセスを開き、実行委員会形式を導入する」や「協力者にハンター（スカウトマン）として表現未満、を見つけてきてもらう」など、今後の方向性について、適切な意見が出されていた[10]。

---

[9] 熊倉純子「文化の 3 つの価値と、専門機関の役割 ―これからの国際交流機関に期待すること」（https://www.wochikochi.jp/special/2010/08/post.php）

[10] 英国の医療機関では、地域活動と市民のニーズのマッチングを役割とする非専門職の「リンクワーカー」という職種が活躍している。

仮に、スタ☆タン!!の運営プロセスを開き、実行委員会形式で取り組むとすれば、以下の各運営プロセスにおいて現在取り組んでいる内容を、まずは開いて他者や他団体とともに実行していくことになる。今後、協同的実践について、具体的な検討が進むことを期待したい（図 12）。

図 12：スタ☆タン!!の運営プロセス（現在の取り組みの主体･分担）

企画	募集	審査	開催・座談会	振り返り会	感想収集	関係者取材	総括	記録集発行
レのみ	レのみ	レ・審	レ・審・出・来	レ・審・他	レのみ	レのみ	レのみ	レのみ

レ：レッツ　審：審査員　出：出演者　来：来場者　他：その他専門家・関係者

（2）変化を前提とした創発的な人材育成手法の開発

これまでレッツの試みの多くは、助成金等を活用し、多様な領域の専門家とつながりながら高い水準で実施されてきた。単に資金を投入しただけでなく、必ず濃密な振り返りの実施や報告書の執筆を実施プロセスに位置づけ、成果や事業の価値を整理してきた。その積み重ねにより、レッツスタッフは、障害のある人の既成概念にとらわれない創造性を活かすことができる「観」を養い、また、創造性を活かす関係性を成り立たせる環境をつくる主体となっていることは、先に述べたとおりである。今回、提示した「社会包摂を市民サイドから推進する回路」についても、レッツのスタッフのような人材なくしては成り立たない。文化事業を実施することで人材はいかに育ちうるのか、これは、文化政策のなかでも重要なテーマであり、これまでの知見や経験をそうした人材の観点から整理し、ノウハウを伝承していく役割が期待される。
しかしそれは、単に「マニュアルを制作する」といった類のものではない。

「小松理虔さんがレッツに滞在して小松さん独自の目線から紐解いていく伝え方は面白かった。レッツはこれまでコンテンツを自分たちでつくってきたけど、今後は「素材」に徹したらいいのかもしれない、といった新たな道も見えてきた。」

これは、2019 年 12 月の電話での打ち合わせ時にレッツ代表の久保田さんが発していた言葉だが、このようにレッツが「素材」に徹することで、外部の一人ひとりとともに学び合っていくアプローチなども発展の余地が大いにあると感じられる。単細胞のアメーバは、仮足により移動する原生生物だが、その語源はギリシャ語で「変化」を意味する αμοιβη（amoibē） に由来する。レッツも、レッツに関わる外部の個人も、ともに学び、アメーバのように変化することを前提とした創発的な人材育成手法の開発を期待する。

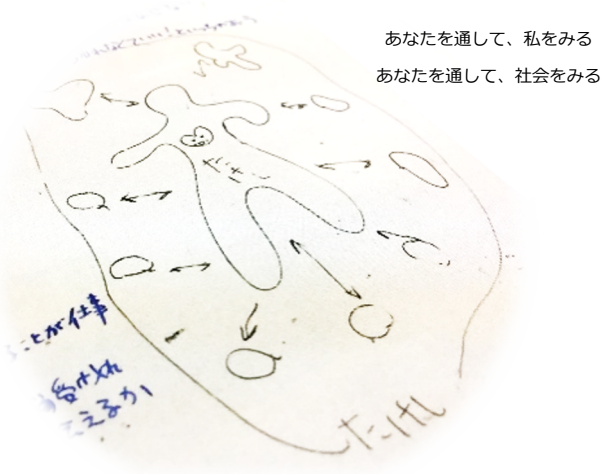
（3）重度の知的障害当事者本人にとっての意味の測定

社会包摂をテーマとした評価では、「事業を実施したことで当事者のエンパワーにどの程度つながっていたか」という観点も測定対象とすることがある[11]。本件では、この点は評価の枠組みに位置づけなかった。

重度の障害があり、本人の意思を周りが確認することが困難な場合に、どのような方法でそれを測定し、判断に活かすのか。他者による一方的な決めつけではない判断の保障のためにも、測定手段の開発が必要であると感じた。それは、「更新を前提とした指標」や「個々に異なる手段となるかもしれない。

福祉が「本人を幸せに近づけていく技術」であるとすれば、文化は「本人の幸せとは何かを問い続ける技術」である。その人がその人らしく生きていくための支援には、そのいずれもが必要である。しかし、福祉の世界では、戦後制度化が進み、そうした文化のもつ技術が一部の支援現場では失われつつある。それは、その人の幸せとはなにか、という問いが発せられず、個人が、ある集団の一人として扱われたり、支え手の一方的な価値観を投影した歪んだ支援の形を引き起こす事態につながりかねないことを意味する。

「本人の幸せは親ですらわからない。親一人で決めるより、気の合う仲間が話し合って決めたほうがよいのではないか。」 レッツ代表の久保田さんの言葉である。障害当事者本人にとっての意味、この点については、既に取り組みを開始している“障害のある人と一般の人がともに暮らす実験”や「たけしと生活研究会」等の場での模索を期待したい。その模索の対象には、「障害当事者の親」も含まれる。親が持つ記憶を他者とともに引き継ぎ、いくつものまなざしによって眺め合うこともまた、その人の幸せとは何かを問い続ける文化芸術の重要な役割であるといえる。



■評価者と本評価の問い合わせ先

一般財団法人ＣＳＯネットワーク
担当：渡真利紘一、島田拓都
tekuteku84@yahoo.co.jp

[11] 「評価からみる“社会包摂×文化芸術”ハンドブック」九州大学大学院芸術工学研究院　ソーシャルアートラボ事務局（2020）（http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/publications.html#handbook2019）」

資料編：インタビュー記録集ほか

※所属は 2020 年 1 月現在
※今次評価では扱いきれなかった重要な点には下線を引いている（評価者による）

その１　浜松市障害保健福祉課　深谷さんの話

きっかけ
レッツを知ったのは平成２０年頃、「たけし文化センター」の取り組みを旧文泉堂書店跡地で始めたときに、お客さんとして見に行ったのが最初です。当時のスタッフの一人の鈴木一朗太さんとコーヒーを飲みながら話したのですが、照明が暗めであることを話題にしたときに、「ちょっと薄暗い方がいい。明るすぎると見えなくていいものまで見えちゃうんで。」と言って写真を撮っていたことが、印象的でした。

ただそこに居るだけの仕事
現在の部署に異動してきたのは平成 24 年度。それから 4 年間就労支援の担当をして、平成 28 年度から事業所の指定や施設整備を担当しました。就労担当の時も、レッツ代表の久保田さんは、「ただそこに居るだけで仕事になる」という新しい仕事の形がある、っていうお話を熱心にされていて、それもあって、「どういうところに付加価値を見いだし、理解してもらっていくのかが大事だなぁ」と思っていました。僕も就労支援を担当していたから、障害がある人が今よりもっとお金を稼ぐ方法ってどういう方法があるかな、とよく考えていました。例えば、高度な技術や難しい特殊な作業だと一部の人しかできないですからね。そういう中で、就労支援担当の 4 年間は、障害のある人の強みになるもの、変な言い方ですが、持っているものでどうやって楽をしてお金を儲けることができるか、ということをよく漠然と考えていました。

物から人の魅力へ
ほかにも、当事者の社会参加関係の担当職員と、啓発事業でレッツと関わることがありました。そのときに作成したのが、『ほとんど知らなかったグッズと人に出会える本』という本です。はじめからレッツに委託したわけでなく、企画競争でいくつかの事業者が提案した中から、レッツの提案に対する評価が最もユニークだということで選ばれました。この本の面白いところは、物から人へ視点がシフトしていくところです。一見、雑貨本のように「物」の紹介をしているので手に取りやすい。そこから、お店などの「場所」に変わって、終盤は、その「場所」にいる「人」を紹介していくんです。商品をとっかかりにして、その背景にこういう魅力的な人がいるっていう見せ方です。
読み進めていくと、自然に障害に関する人たちに目が向いていく。障害というキーワードでなく、人としての魅力に目を向ける姿勢が僕も気に入っています。現在も浜松市のホームページにデータを掲載していますので良かったらご覧ください。
（https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/syoghuku/welfare/obstacle/syogai_siori/sassihonn.html）

適正な事業運営、加算に関する助言

レッツは、生活介護や就労継続支援 B 型、放課後等デイサービスなど、福祉制度上の障害福祉サービスをしていますが、その管理する担当になったのが平成 28 年度からです。浜松市では各事業所が適正な事業運営ができるように、2 年に 1 回の頻度で全ての事業所を回って、実地指導を行っています。その中で、事業所の状況を聞き取っていますが、基準の断片的な理解から備えるべき記録が煩雑になっていたり、加算要件を間違えている事業者に出会うこともあります。なぜその記録や書類が必要なのかや、報酬が加算されるのは、通常の支援にプラスアルファの支援が提供されていることを評価しているからなど、その本質を理解しきれていないことがほとんどです。そういう時は、「この基準はこういうことを求めているんですよ。」とか、「こうすれば、こういう加算だってとれたはずですよ。」と、間違った解釈で運営している点について正しい解釈を説明します。それが利用者へ質の高い支援を提供することに繋がるからです。レッツともそういうやり取りをしてきました。

関わり続ける理由

障害福祉に関係する法人は、障害に関わる人の自己実現や、みんなが幸せになれることを目的に活動していて、お金儲けでやっているわけではないですよね。レッツに対してもそういう思いがあること感じています。

また、久保田さん自身が、壮さんの幸せも大事だけれど、親としての自分たちの幸せや、そういった同じ境遇にある家族の幸せな未来を視野に入れて活動をしている。その前向きな思いに、僕も共感するところがあって、応援したいという気持ちが続いているのだと思います。

レッツらしさ

過去（平成 28 年）には、「レッツのスタイルをより良い運営につなげるにはどうしたらいいか」という点でお話をしたことがあります。それが今の「しえんかいぎ」につながっていったと、後にスタッフの方からお聞きしました。

当時、実地指導の際にレッツの個別支援会議の記録を見せてもらったのですが、「全然レッツらしさがない」と感じ、それを伝えたんです。とにかく、形式ばったものになっちゃっていました。あらかじめ備えられている様式に、項目を埋めるための差し障りない言葉が並んでいるような、「その人」が見えてこない記録でした。レッツのスタッフも、福祉事業をする上でそういう「書類」がなければいけない。だから「書類」を作ったといった感じで、なぜその書類を作る作業が必要なのか、その本質の部分に本人の幸せという目的が込められていることが理解しきれていなかったのです。制度もレッツも目的は同じ方向のはずなのに、材料であるはずのツールに振り回されて、支援内容の見える化という点ではレッツの良さが発揮できていませんでした。

でも、レッツには強烈な個性があって、関わるその人のことを知ろうと思いを深めていくし、福祉をやってきた人だと、「ここまでやっていいかな」と躊躇するようなことまで、（利用者本人が望んでいる場合は）踏み込んでいくところがありますよね。

個別支援として、ほんとにその人のニーズへの対応が個別過ぎじゃないか、と思えるようなことが時々起きますが、支援者としては、一般的には一緒にやらないかもしれないこと、例えば、「物を壊してみよう」というようなことを、「本人はやりたいのではないか」と捉えて実行する。その事象だ

けで判断するんじゃなくて、その事象の先にある本人の思いに目を向けるような。表現未満、もそうですよね。「そこに、その人の熱意がある。じゃあ、それを大事にしよう」、「それを認めて、一緒にやっていく先に何があるのかな」というのに目を向けて価値を見出していく試みなのだと思っています。それだけその人に向き合っているのに、それが伝わってこないなんてもったいないと思ったんです。それで「レッツが感じている本人がやりたいことっていうのはこういうものなんだ」というものを大事にして、そこへ制度として必要なもの、やらなければならないものを取り入れて支援を組み立てればいいと話しました。フォーマットは、あくまでも目的を標準的に整理しやすくするためのツールですから、使いにくいなら改良して、足りないものがあれば付け足していき、必要な部分を必要なところに落とし込めばいいんです。その後、かなりの試行錯誤を繰り返したようで、今はもう凄い！イラストがいろいろ入ったり、まさに、「しえんかいぎ」の報告書に出ているような形に。全然ちがうじゃないですか、支援者はもちろん、障害のある人やご家族にもちゃんと伝えたいことが伝わるというか、こっちの方が「レッツらしい」と思っています。

専門性を背負う

僕が言うのも変な感じですけれど、市の担当者って基準を拠り所に「あっている、あってない」のチェックをします。事務職員なので、原則的な判断が主で、それ以上にはあまり踏み込まないというのがあると思うんです。当然ながら、そのベースとしての知識や経験も、福祉をやってきた人ばかりではないですから。その業務担当として可もなく不可もなくとなりがちだったと思うんです。でも、そういう状況に問題意識を持っていた上席者がいたものですから、行政事務としての制度管理に専門職の専門性の視点も加えたより良い制度運営を目指しました。僕がこの業務を担当することになった時、そう言われました。行政に携わるソーシャルワーカーとして、その「専門性」の視点を持って事業者の「専門性」の部分をいかに引き出すか、それに基づくコメント、助言がどうできるか、ということが専門職である自分の使命だと今も思っているので、「レッツらしくない」という話ができたんだと思います。でなければ、型にはまった様式を見て、「必要事項は記入されていますね」で流れてしまった話だったと思うので。

レッツならではの特徴　「固定観念を抜け出す」

まず、レッツはストレートな福祉事業とは別の事業をしていますね。福祉事業以外の催しがすごく多い。「スタ☆タン!!」もそうですし。文化事業は、福祉だけのものじゃないから、福祉分野でない、色んな分野の人が関わりますよね。それって、他の分野に福祉を発信する役割にもなっているのかなぁ、と思っています。それに他からも色んな意見が入ってくる。だから、固定観念の中の福祉というのではなく、もっと福祉とは違う分野の目からすると、「こういう当たり前がある」、といった部分を取り入れた事業運営になっている、というのは、他にはないレッツの強みであり、他の福祉団体の運営との違いなんだろうな、という気はしますね。

福祉の専門職はいない

レッツの職員に、もともと福祉をベースとした専門職であった人はいないと聞いています。福祉の専門職だからではなくて、みんなアーティストなど別の分野にベースがあるけど、レッツのこうい

う試みに賛同して協働している人たち。そういう、基本的な熱意がある人たちがやっているから、というのも違いがあるし、楽しいんだろうな、という気はしますね。福祉施設にいる人でも、何となく福祉を職業として選んで生活のために働いている人だとか、ビジネスで何かやっている人だと、お金にならないことは、あんまりやりたくないと思いますし、必要以上のことをやろうとか、発展させよう、まではいかないと思うんです。レッツのスタッフは、今やっていることに面白さを見出して、もっとこうしたら面白い、もっとこうしたら楽しいんじゃないかっていう、障害がある人もない人も関係なく、「楽しい」っていうところを軸に、みんなで一緒に事業を行っている、という感覚がありますね。一見、奇抜に見える部分もありますが、ちゃんと理由や思いが込められていて、一人一人を人として尊重していることがわかります。そこには全く悪意はないと感じています。もちろん、逸脱しすぎないとか、ルールは守ってもらうようには伝え続けていかないといけないとも思っていますが。

福祉業界全体の課題とレッツ

運営の仕方（姿勢）は、一般的な施設だと、福祉という業界の中での当たり前が浸透していて、こんなことしたら、こんな危ないことがあるかもしれん、っていう、ネガティブな可能性を先回りで排除しようっていう思考が強くなりがちです。確かに、その利用者さんを大事にしているとは思うんです。けれど、大事にし過ぎてしまうというか。経験する機会を取り払ってしまうが故に、「何の浮き沈みもない生活」になってはいないだろうかと。それがその人の人生にとって、本当にいいことなのかどうかという疑問にも通じていきます。安心安全が当然で、行政の立場からすると危険を排除するのは良いことで、もちろん事故はあってはいけないんですけど。

80 点なら無しにしてしまえという社会の圧力

近頃の社会は、ちょっと極端な感じがします。「80 点なら無しにしてしまえ」みたいな圧力で、100 点でなきゃダメみたいな感じになりがち。でも、その 20 点足りない部分を責める世の中で、責められるんだったらやらない方がいい、って判断になってしまうのもわかるんです。守りに入ってしまう気持ちも。

「楽しいこと」に視点を置く

一方で、レッツは、「楽しいこと」に視点を置いているような気がするんです。危ないかもしれない、っていうのはあるかもしれないけれども、その方が本人が楽しいよねっていうところで、踏み切っちゃうと思うんですよね。攻めてるというか。

もちろん、最低限の危機管理はしているし、試行錯誤を繰り返しているのですけど。

人の部分でいえば、今はもう福祉だけでなく、全業界的に人がいない人材難ですよね。その中で、本当にストレートに「福祉事業所の職員」っていう見え方だと福祉職希望の人しか集まらないですけど、レッツみたいな福祉っていう観点だったり、アートや文化っていう観点だったり、多面的な見え方をする法人だと、その分多くの人の目に留まるのかもしれません。また、個性的な取り組みをしているからこそ、「そこで一緒にやりたい」という人は、はじめからモチベーションが高い人の可能性も高くてそれが、レッツの強みになっていて、そういうところは、確保した人材の熱意に違い

が現れることもあるのかなと思います。

表現未満、の前と後

「表現未満、の前後で、レッツ自体が変わっているか」という点について言えば、レッツ本体は、あまり変わっているっていう感じはないと思いますね。その時、その時、これが必要じゃないか、これをやったら楽しいんじゃないかという、その素直な発想を活動の種にしているから。だから、細かい点でいうと、5 年前、10 年前で、レッツの主張した部分に、「こういうのがあった方がいいんじゃないか」っていうものが足されて、多少変わっていっている部分があるかもしれないけれど、それはレッツの動きの中で、達成されてきたことでもあるし、もっと掘り下げていったら、こっちの方が大事なんじゃないかっていう風に優先順位が変わっていった、っていう部分もあるのかもしれない。でも変わっているようで根底の部分は一緒。そういうことで、レッツ自体は、軸の部分は変わっていないと思いますね。「表現未満」を始めて、続けてきたことによって、一番変わったのはやっぱり、協力者が増えているっていうことだと思いますね。

協力者の広がり

協力者の広がりが感じられるのは、それこそ文化関係であったり、レッツの知名度も当初は、まだその狭い範疇で、浜松や広くても静岡県くらいの範囲だったと思うんです。でも、だんだんそれが波及していって、全国のいろんな所に呼ばれたり、いろんな人を呼んでいます。全国各地の関りを持った人たちも、レッツのやっていることを面白いと思って協力してくれるから広がっているんですよね。けれど、正直、僕、知らない人ばっかりです。

自分のアンテナも高く

でも、だからこそ、別の機会に、レッツを訪れていた人の名前を見ると、「前にレッツのイベントに来ていた人だ」と初めてちゃんと認識する。レッツを通じてでなかったら、全然、知り得なかった人は沢山います。

レッツで目にしていた人だったから、その人の分野での活動や訴えているような部分を、その後も意識しますので、自分自身のアンテナも高くなった気がします。それこそ、レッツの人たちが色んな所へ行って、活動の種を撒いているとも感じます。

福祉事業色が強くなってしまうことを憂う

レッツのような団体は、「自分たちらしさ」に行き着きやすいと思うんですが、僕が憂いているのは、NPO で福祉事業を始めると、福祉事業色が強くなってしまうことです。社会福祉法人がやっている福祉事業と、NPO がやっている福祉事業が、事業内容でいうと提供されるサービスは変わらない。当然、変わっちゃいけない部分もあるから、当たり前なんですけれど、そうなると、なぜこの団体は NPO なのだろう、っていう気もしてしまう。今の制度になくて、営利活動でもなくて、目的を達成するためにもっと自由な活動をするために NPO が設立されたはずなのに、社会福祉法人でもできることをやっているって、それこそ、「らしさ」が無くなってしまうように感じるんです。

制度にない活動を呼びかける

なので、僕はそうしたNPOに「福祉制度にない活動を！」と、伝えています。法人の方々が必要だと思う、こういうのが大事、というのを聞き取って、改めて投げかけるんです。それをどうしたら形に出来るのか、未だ無いものを作るから、NPO活動なんじゃないかな？と。もともと、設立したときはそういう思いがあったはずなので。だから、制度をやろうとするんじゃなくて、制度にないことをやりましょうよ、と、そうした「これが大事」って熱い思いを話してくれるところには、期待を込めて言っています。

応援者とともに

そういう、今までにないものをやろうとすると、見てくれている人もいて、応援してくれる人もいるから。「これだけイイコトをするんだ！」っていうのをアピールして、それに賛同してくれる人から協力を募ればいいと思っています。今はクラウドファンディングとかSNSなどで支援を求めて発信する手段はたくさんあるので。よく「市が補助金を」と、行政の支援を求められたりしますが、すごくハードルが高くなるんですよね。行政も財源が潤沢なわけじゃないですし。

NPOとのこれまでの関わり

僕は前職、精神科病院に勤務していて、その関係で精神障害に関する普及啓発をしているNPOの活動に協力していました。当時、プライベートな時間を費やしての活動は大変なこともたくさんありましたが、同じ志を持った仲間と積み重ねた時間はとても充実していて、ひとつひとつ形にしていった経験は忘れ難い思い出になりました。ですので、NPOの方々の活動に当時の自分たちのような思いを見るようで、他の人よりも期待が大きいのかもしれませんね。

それにしても、しゃべりだすと、言いたいことはいっぱいありますね。

（インタビュー：令和２年１月２３日午前@浜松市役所）

その２　ロビンスさんの話

きっかけ

2011年頃、子どもといろんなことをしたいと思っていて、いろいろな場所へ連れて歩いているなかでレッツが「アルス・ノヴァ強化月間」をやっていることを知って、来てみたのが最初の出会いでした。福祉事業所がなぜ強化月間をやるのかと。利用者さんの特徴をドラクエのカードみたいに紹介が書いてあり、そこにスタッフも混ざっていて、「何だここは、面白そうだな」と思いました。

福祉について

それまで福祉に全く興味はありませんでした。施設は行ってはいけない場所のような気がしていた

のです。誰かにそうやって言われたのかわかりませんが、見ちゃいけない、触れてはいけない人たちという意識がずっとありました。レッツに通う間に「そうではなかった」と捉え直しました。今では子どもに「どうしてあの人は車椅子に乗っているの？」と街で聞かれたら、「私に聞いてもわからないからご本人に聞いてきたら」と言えます。それでいいと思っています。

レッツとの関わり

いま、上の子が中学１年生で、学校に馴染めない子で、学校生活を通してこれでいいのか、と思わされています。彼女は彼女のままでいいじゃないか、と思う反面、今変わっておかないと一生この子は苦労するんじゃないかと不安もあって、どちらも幸せを願ってのことだけど、どっちがいいかわからなくて。でもレッツに来れば振り戻せるんです。「彼女は彼女のままでいい」って思えるんです。周りで子どものことで悩んでいる友人にもレッツを勧めていて、もちろん、解決はしないんだけど、なんか「まぁいっか」って思ったり、「大したことではなかったな」、と思えたりしているようです。うちの子、小さい頃からレッツに連れてきていて、すごい自分勝手なんですけど、なんか優しいところは優しくて。教室にポツンとしている子がいたりすると気付くんです。自分より浮いている子の席が決まらないときも「別に隣でいいよ」と言えたりとか。気にしない。別に優しくしようとしているとかっていう訳ではないのだろうけれど、みんなが嫌がっていることが彼女にとって嫌じゃないってことが多いようです。

表現未満、プロジェクトに関わり感じていること

石をカラカラする行為を楽しむとか、普通に生活していたらそんなこと考えも及ばないし、やろうとも思わなかったです。そうしたことに出会えたのはラッキーでした。私は学校でできないことをなるべく家でしたい！と思っていて“くだらんピック”というのをやったんですよ。その話をしたら、レッツのスタッフから「表現未満、でくだらんピックやりませんか。」と、お誘いがあって、やったんですね。体積を同じにした粘土に爪楊枝をどれだけ刺せるか競ったり。小学校１～４年生まで連れてきて、レッツの利用者さんと一緒にやったんですけど、うちわでティッシュを滞空させる企画は面白かった。企画への熱量がすごいんですよ、利用者の方たちが。明らかにできてないのに、うぉーーって盛り上がっていて、小学生が引いてて（笑）。その構図が面白かった。小学生の彼らを圧倒させる人たち。ああいう子どもたちを見ることってなかなかない。大人は普段は目線が高いんですね、子どもたちに対して。知的障害のある人たちと街で出会わないから未知との遭遇の連続だったと思います。

ロビンスさんのレッツとの関わりを通じた変化

若い頃は人と違う考えを持っていても全然苦にならなかったんですけど、子どもを育てるようになって、学校社会では人と違うことを考えるのは苦しい。自分がおかしいのかな、こんな母に育てられたら子どもたちは不幸じゃないかな、と考えてしまう。そうしたときレッツにくるとそんなことないな、って思えました。

地域の中での役割と打ち手

浜松でコミュニティ・スクールが始まることになって、学校の在り方を変えていくチャンスだと思って関わることにしたのですが、なかなかうまくいかない。教員のなかには保護者の言うことは面倒という認識があったり、関係性も学校側がやってほしいことを一方的に地域に求める感じでした。そうすると地域も疲弊しちゃうんですね。「これをやってほしいという話があったけど得意な人がいないから、別のことだったらできるよ。」みたいな双方向の対話が必要だと感じていました。そこで昨年、コミュニティ・スクールの活動の一環として、私の企画でレッツメンバーに中学校に来てもらったんですよ。
どんなことをしたかというと、久保田さんとレッツメンバー10 名ほどを学校に呼んだんです。久保田さんが中学生に「みんな笑っていいからね、触ってもいいし、何を聞いてもいいよ。障害のある人達になにかしてあげたいって思わなくていいから、話したいと思えば話せばいいし、汚いと思えば汚いからやめてって言っていいよ。」という話や、「この人達はルールに縛られていない幸せな人達なんだよ」というようなことを伝えていたそうです。子どもたちの反応をみると、「私も縛られるの、やめよう」って書かれていたりと、とてもよい機会になったと思いました。表現未満、の観点と結びつけるとすれば、「それぞれが大事にしていること、そこに向かう情熱はすごい。その点は尊敬できるんじゃないか。」というメッセージが根底にはあったと思う。だから、無駄だと言われることをやっている人たちで、でも存在しているし幸せだし。私の夢は世界平和なんですけど、この総合学習の企画は世界平和の一環だなと思えました。子どもたちにとって、レッツのような存在との出会いは大きな意味があると思います。レッツのときも母親たちが喜んでたし。

ハブになる人が必要

「レッツは地域のつながりを作っているか」という点は、トライをしていると思うんですけど、なんせとんがっているんで届く人にしか届かないというのがあると思います。
例えば、私のようにレッツに居心地や拠り所を感じている人がワンクッション入って、「いいから行こうよ」という形できっかけをつくるといいのかもしれません。来たことのない人は、やっぱり目的をはっきりさせたがるんですよね。ここは◯◯をするところとか。でも、レッツは「別に何もしなくていいんだよ」とはっきりという。するとわからないから、より得体のしれない場所になり、余計に怖がられてしまう。そこで「じゃあ、私がいるから行こう。行けば分かるさ。」と誘う。つまり、ハブとなる人が必要なんだと思います。

来て触れて考える

「福祉業界の人に理解を促進しているか」この点、すごく頑張っていると思うんですけれど、レッツはそもそもその福祉業界で大事にしていることを覆すことをやってるんじゃないですか。例えば、福祉業界では、生活できるように特訓みたいなことをする。レッツのやり方はそういうのとはちょっと違いますよね。福祉業界で、もやもやしている人たちがレッツを訪れているようなので理解促進については頑張っているとは思いますが、地道にやっていく部分かなと。発信の仕方がわかりやすくはない。でもやっぱり、来て触れて考えるっていうことを大事にポリシーとしてやっていると思うので、それでいいと思います。

今後に向けて

この春に子どもたちが地域に出かけて現場を訪ねる企画をしたのですが、先生がアポを取っちゃうんですよ。すると先生も負担なので沢山の場所へアポは取れない。「あなたとあなたはテーマ一緒だから市役所へ行ってね」となる。そこに私が入れば、もっと面白い場所に連れていけるし、子どもたちだって、本当は自分でアポを取って、「うわ、こんなところきちゃった」って場所でもいいし、怒られちゃってもいい。そうした経験が大事なんじゃないかと思っています。地域の母親側は協力するよと伝えていても、学校の先生は心配なんですよね。だから子どもを放つことができない。責任問題にもなる可能性があるから。でも来年度こそやろうと今言っておかないと動けなくなるから、近々言いに行こうかな。課題を抱えている場所を訪問するのもいい。これからの子どもたちは課題をどう発見して解決していくかってことが大事になってくると思うので。

（インタビュー：令和２年１月３１日午前@たけ文）

その３　すずやカメラさんの話

きっかけ

2008 年頃、袋井市内にある「どまん中センター」って名前がついた個人所有の建物で行われたナデガタ・インスタント・パーテイーっていうグループのアートイベントに行ったんです。ナデガタ・インスタント・パーテイーは、人と人を結びつけて関係を作るとか、アートとして触媒みたいな役割をしてみるんですね。その時そこにレッツスタッフが来ていて、そこで僕は初めて知ったんじゃないかな、浜松でレッツがアルス・ノヴァって場所をやっていること。知り合った後も「今度は何々をやるよ。」って誘ってくれて、面白そうって思って行ってみたりした。当時はまだ拠点が入野にあった。イベントに行きながら、徐々にレッツが何をやっていて、どんな人がいて、ということを知っていった。福祉事業というよりはアートイベントの事業を通じてつながったんですね。

自分の生活範囲では繋がれない人との出会い

それで浜松方面にも知り合いができて、浜松が僕にとっての遊び場になっていく。ちょうど SNS も流行りはじめたころで、知り合いを作りやすかった。僕はみんなでワンチームを作って、という雰囲気は苦手で、でも自分の生活範囲だけでは繋がれないような 100 人に 1 人いるみたいな人と出会える感じがあった。だからレッツについても、まずアート＋福祉分野でもあるって感覚で。あの頃は、知的障害のある方々のアートも施設の大多数が実践している時期ではなかったので、レッツがやっていることが面白くて惹きつけられて。ちょうどハマったんだよね。

レッツとの関わり

レッツの方たちは僕が写真屋であることは知ってくれていると思います。ただ別にそれはレッツで

写真の仕事をしているわけでは全然なくて、なにか一緒に関わってやることになったときに「じゃあ僕、記録係をしましょうか。写真撮りますし。」という感じで関わる。あとは福祉に興味がないわけでもなくて。でも、レッツのイベントに行く理由は、理念とか使命感とかでは全くなくて、やっていることが面白そうだからいく。福祉は後付っぽい。それと、面白そうなことやってると思って出かけたら、おまけに自分燃やさせてもらえるっていうのも楽しくてね。

施設を開くこと

最近、拠点の玄関でやってるライブによく行くんですよ。利用者がアーティストとして演奏する。それが面白くて。そうすると利用者さんたちと知り合ってお互いが顔を覚えて「こんにちは！」と挨拶してくれる。知っている人がいるので行こう！って感じですね。もう最近は何もイベントやっていなくても行ける場所になった。レッツは開くってことをとにかく使命のようにやっておられるので。なかなか一般的な福祉施設、例えば老人ホームに「ちょっと遊びに来ましたー！」っていって関われないもんね。慰問として歌を唄いに、とかいう受け入れならあるけれど。ただ、開くってそこへ行きたい人がいて、開いてくれているところがあるっていう両方の補完関係にある。施設も本来はそういう形になっていることが当たり前であってほしいですけどね。

意識のパラダイムが変わっていく仕掛けを期待

浜松にサルーテの会っていう団体があって、日本の精神科医療の現状を柔らかく考えようという活動をしてる。その根っこはイタリアの劇団。イタリアには精神科病棟ってもうないんですよ。精神科の患者はいるけれど地域が受け入れている。日本はそういう面では後発で福祉の中の閉鎖性をどうブレイクしていくか。治療の効率だけでは限界で、今の認識を変えていくって言う時に「アート」だとか、受け入れる人々のなかの「文化」を揺さぶっていく作業が絶対に必要ですよね。僕がレッツや文プロに求めているものはエンターテイメントの提供ではなくて、そこら辺の人々の意識のパラダイムがちょっと変わっていく仕掛けになることを期待している。そういうものは、大きな塊から変えることは難しくて、福祉もアートもはじめから人に受け入れられるものではなく、だんだん受け入れられていく感じ。その点、アートと福祉は割と同じ目標を持っていると思う。
少数から始めて、ひいては全体の意識のパラダイムを変換していくやり方が共通しているかもしれない。

スタ☆タン!!に参加して

v は、他人にとって面白いかどうかは別として、「どうだい、面白いかい？」って自分たちが言う側になれる。見ている側にもやっている側にも立てるってところも良いと思うんだよね。文化って人の意識や常識が変えていく、人づくりや人の変革ということだとするならば、レッツがやっている多様なイベントという作業は、福祉事業所としてのレッツがやっていることにやっぱり価値があると思う。

レッツと関わって影響を受けたこと

関わったことによって、広げてもらった世界は結構あって。例えば知的障害のある人達とのふれあ

いなんてそれまでなかったですし、そうした人たちと一緒に何かをしていくという発想そのものもなかった。なので、僕が割とレッツに純粋に遊びに行って、利用者ともお友達付き合いをしていけるっていうのは、レッツとの関わりだったからだろうなと。「なんかやってくれ」って言われるわけじゃないし、何々をやらせてくださいってわけでもない。やっぱり開くほうが開いてさえくれていれば、「こういうのできるよ」と乗りやすい。レッツのやり方に影響を受けている協働学舎さんのイベントにも行ったことがありますが、そういうふうに僕らみたいなのを受け入れるやり方が広がっていく、それこそ一つの文化のようにできているので、こちらも入っていきやすくなる。

レッツと関わり続ける理由

あと、先程面白いからレッツに関わり続けていると言ったけれど、それだけだと飽きてしまう。レッツの場合は、彼らがやっていることの意味や社会的な必要性を後から自分で掴んでいける場もつくってくれるから自分の中で継続できるって感じがあって。そういう意味で、なかなか飽きないんですよね。単純に惹かれてるんですよね、こうしたことを 10 年以上続けていることに。

惹かれている

僕にとっての居場所なんだと思います。でも、それだけではなくて。自分が居心地がいいだけだと、もしかしたら好き嫌いが出てきて飽きるかもしれない。でもずっと関わり続けているのは、惹かれていることだったり、あとはやはり、後からでもいいから、とにかく、やっている意味とか、やったことによる変化とか、そういうのをちゃんとこう、自分の中でも咀嚼することができるところがいいんだと思う。

そう、きっと。年齢も年齢だし、ある意味純粋に楽しいっていうことだけをやっているっていう風な感じだったら、なんかもっと、乃木坂のコンサートとか行った方が楽しい、ってなる。でもやっぱり、嫁さんだとか娘とかの目が怖いじゃん（笑）。だけど、レッツや、オモケン、サルーテの会には、わりと胸張って行けるのは、僕は楽しいから行っているんだけれども、そういう風にするとなんか言い訳のような感じになっちゃうけれど、「意味のあることをやっているぞ」っていうような、いちおう僕の中では、それが一本こう、筋が通っているという印象はあるんだよね。そうじゃないと、やっぱり、関わり続けることに 3 次元的に自分の中で、保っていけない感は、ありますものね。

関わる場所が広がっていく

レッツの活動を知った他施設の人も、関わりがある人達がいるじゃないですか。浜松の社会福祉法人光の園の人達も、レッツのやり方に影響を受けている施設長さんがいらして、同じようなイベントをやったときに行きましたよ。そういうふうに、「このレッツのやったイベントをここでもやりたい」って言ってやっていく人たちが現れて、僕らみたいなのを受け入れていく。そうした積み重ねが、それこそ一つの「文化」のように感じられているので、周辺の企画にも入っていきやすくなる。自分の中では、そんな広がり方を感じています。結果的にですが、さっき言った浜松サルーテの会や、「おもしろ教育研究所（メンタルヘルスや性教育など健康教育をちゃんと聞いてもらえるように「面白く」することを熱心に追求している）」もそうした広がりのなかで出会った活動なんです。

楽しいことからつなげていく

具体的に直接聞いたわけじゃないですけれど、福祉関係の人に聞くと、「補助金のとりかた、上手よねー」ってレッツに対してやっかみみたいのがあるそうで。やっていることは、福祉としてはうちの方が社会的に意義があるのにって。例えば、何人の人の面倒をみているか、といった基準で言えば、大きな施設なんかは、「役に立っているはずなのはうちの方なのに、なのにあそこは、アートをもち出したから、すごく注目されて、結果、補助金も取りやすいわよね」っていうやっかみ。

その人たちのそういう話を聞いていて、「やっかみだろ、バカヤロー」っていうばかりでもなくてね。彼ら自身もスタッフも大変な思いをして沢山の人を収容する施設を運営しているのに、レッツはなんかこう、遊び半分みたいに見えるって気持ちになること自体は、理解できないこともないんです。そういう風な形になること自体はね。だけど、専門的に見て、例えば、それ衛生上よくないと言われるようなことも、全く無いわけではないかもしれないけれど、こういう僕らみたいな、専門家ではないような人間と福祉を、こんなに使命感とかだけではなくて、「楽しいということから繋げていく」っていうのはレッツの他にはないなと。

それから、「人権」についても僕はわりと興味があるんです。「人権」を大事にしたいと思っているし、「人権」が蹂躙(じゅうりん)されているのは、それが自分のことであれ、他人のことであれ、人と関わる上では、最大に気を付けなくてはいけないことであろう、と思うので。そういうことも考えさせてくれる場を開いてくれるレッツの場があることは、こんなに幸福なことはないだろうと思います。

具体的な支援には関わっていない

繰り返しになるけど、レッツは福祉施設ではあっても、手伝わされることがないんですよ。手伝わされたとしても、福祉としてスタッフがやっているような仕事、例えば、利用者さんの下の世話をするかといったら、そうはしないわけで。ご飯食べることとか、困りごとがあった時の相談に応じることもない。

「しえんかいぎ」くらいかな、関われるのって。昨年度にやっていた「表現未満、」の一環で一度出たことがあるだけで、ほんと具体的な支援について、僕らは知らないんですよね。そんな感じで、レッツには純然たる福祉事業もあるわけだけど、むしろ「いいよ、それは、僕らに任せてくれれば」になっている。素人が変な介入をすることでもないから、まあそういうことなんだろうと思うけれど。だから、レッツは「福祉分野のことの関わりを広めていくぞ」、ってスタンスじゃないと思う。じゃあ、どうしたらいいの？というのは、わからないけれど。

福祉のボランティア的な関わりはしていない

普段、福祉ボランティア的な役割を特段レッツから求められることはないですね。イベントの片付けをするとか、暇なときに手伝いはするけれど、それ以上でもそれ以下でもない。今思えば、福祉事業所としてのアルス・ノヴァを理解するとか、ないしは、実際に障害を抱えている人の具体的な日常での困りごとを、僕らがわかっているか、といえば、「そんなことはない」。良いか悪いかは別として。

壮君（レッツ代表の久保田さんの息子さん）が今のような 24 時間介護付きになったときに、「マン

ツーマンの介護をやれる人になったらどう？」って、久保田さんに勧められたことはある。それ自体に僕も興味がないわけでもないのだけれど。そこは、なかなかガッツリした関わりになるのでね。

地域の魅力を高めている？

私にとってレッツの取り組みはすごく魅力的です。他県でもいくつかありますよね、北海道のベテルの家とか。そういう有名なところと同じように、「福祉＋アート」分野としてレッツは、有名ですよね。だけど、例えば、浜松市民のどれだけが、それを知っているかというと、知らないと思うんですよね。その意味では、浜松、袋井もそうだけれど、ここらへんの西部の人が、「浜松と言えば」と言って、鰻とか楽器とかオートバイとかと並んで、福祉や、「福祉＋アート」というものとして出てきてほしい。今、街でアンケートをとったとしても、きっと「福祉＋アート」のことは、なかなか出てこないじゃないですか。

音楽でさえ、「浜松は『楽器の街』であって、『音楽の街』ではない」と揶揄する言い方があるくらいだから、福祉の街になることは難しいことかもしれないけれど、知っている人にとっては、一つのブランドになるような感じはしますよね。それがあるんだよーっていう。地方の人とそんな話をしていても、そうした話ができる感じはあるのかな。もっと、そうした感じが広がってもいいなと思う。そうしたら自分も早くから知れていたかもしれない。

束になって動き出す感じへ

同じ浜松市内だけれど、北部地域の施設の人が来て、「ほんとに良い」と言っているし、小学校の校長先生をしている人が来て、「うちの学校でもぜひこういうのをやりたい」と言っている。それだけでも、すごいことなんだけど、まだ、それが『束になって動きだす』という感じまではいっていない。浜松の方では、こういう先進的な事例があって、東京や全国で、専門誌ではないところで特集に出てくるような感じになってくるとか、それを目指して移住してくる人がいるって感じになったらすごいよね。

多様な人とつながるきっかけを生んでいる

僕にとっては、多様な人とつながるきっかけを生んでいる側面はもちろんある。最近の僕の人間関係の 7〜8 割は、レッツのつながりから生まれている感じはあります。仕事も含めて。鴨江のアートセンターも、鈴木一朗太さんたちのやっている「黒板とキッチン」とか。それから、「オモケン（おもしろ健康教育研究所）」さんとの付き合いや「浜松サルーテの会」との関わりもそこから生まれている。

スタ☆タン!! 3 の出演経緯

演劇とか映画が好きなもんで、浜松の付き合いとは別に、池田千尋さんっていう商業映画の映画監督をしている人が、僕が住んでいる袋井市出身でね。その人が、袋井の文化施設で、「映画を作ろう」というワークショップをやったとき、そこに行ったりしていたんです。

その時に、映画好きな人たちと知り合ってね。すぐに何か作るわけではないし、何か特別なことするわけじゃないけれど、中には、自主映画を作っている人もいるから、「こんなことできる人とか暇

だからいける人とか声を掛け合える連絡網を作ろう」って話になって、この一年、２週間にいっぺんずつ来られる人で集まってたんです。2 人とか 3 人だったりするんですけれど。
その人たちで、朗読劇みたいなものをやってみたり。
それで、スタ☆タン!!が近づいたときに、毎回私はとりあえずやれそうなものを 4 つ、5 つ出してみるんですね。その中のひとつに、あの人たちとの企画があって。あれは、5 人いたのかな。一組は、夫婦なんです。タイの「象さん」を歌っていてくれた彼女とカメラをずっと抱えていた子は夫婦で。旦那の方が映画好きで自主映画を作るというのが趣味を持っていて。
もう一人の出演者も、映画がすごく好きな男の子で。その子は、最近、調べてみたら、「僕、発達障害がありましたわ」って言うの。　検査してみたら、そうだってことがわかったって。計算とか数字とかずっと苦手だったって。けど映画のことは、ものすごい詳しいの。昔の映画の細かい情報とか含めて。1 回見ただけでそんなに語れる？っていうぐらい詳しかったりするんだけれど。その子は、それが高じて、「俳優になりたい」という夢を持っていたりもして、今は働きながら、映画好きを続けているんだけれど。
あともう一人は、別に声を掛けていた人が来れない、って言ったもんだから、ムラキングっていう、詩を作る人がレッツメンバーにいて。彼とはもうお友達になっているんで。人が来ないとコーラスが一人だとカッコ悪いんで、「ンバンバ」っていうだけだからといって誘いました。
実は、自分の持ち歌の歌曲等をそれぞれ 3 つ、別々に出していたんです。そしたら審査員から「混ぜてやってみては？」と言われたもんで。だから、別にもともと組んでいる仲間ではなくて、やれと言われたので、ハイ、っていう話になった、っていう。
（※スタ☆タン!!3 には「エントリー№23　泰日友好合唱団（童謡）」として出演）

スタ☆タン!!のその後

もちろん彼らとの付き合いは今でも普通に続いています。レッツ代表の久保田さんに、「面白かったからまたなんかやってよ」と言ってもらったのでまた何かをやりたいと思っています。既にプランがあることはあるんです。たけ文で、その子たちも誘って。これも 1 回、スタ☆タン!!で何かのために行く、っていうことをしていればできる。あそこでお芝居は、僕らにはちゃんとできないかもしれないけれども、それの真似事みたいなことをやるために、何回かあそこに稽古のために通って、本番をやって、利用者さんがいる時間にね。そんなことを、やってみたいなーと思っているんです。スタ☆タン!!に出演した本人たちは、すごく楽しんでましたね。あんなことも、どこもやらしてくれないですしね！自分たちのような企画を求められる、っていうのはなかなかないんで。ちょっと公民館で、というのはないだろうし。逆にちゃんとした芝居をやるところで、っていうものでもないでしょうから。場所によっては、みんながみんな面白がってくれるわけじゃない。だから波長が合うっていうことが割と大切だろうと思っていますね。

観客の意味

スタ☆タン!!当日、普通に緊張するぐらいの観客はいたんですよね。それも、僕が見ても、知らない人だわ、っていう人も結構会場にいた。これが別のちっちゃくて、身内の催しだったとしたら、無いですもんね。そう、なかなか、知らない人がああやって何十人か居てくれて、司会が、ハイどうぞ、

って言ってくれるような場は他にないですよ。レッツのスタッフ水越さんの司会もよかったよね、ああやって敢えてグダグダやるわけじゃないですか。でも、どんなにグダグダ、フレンドリーに、ラフな感じでやろうとしても、やっぱり緊張はするんだよね。でも、さっきの、発達障害だってわかった彼なんかには特に「やりたい」っていう気持ちがあってね。俳優になりたいわけだし。なので、「観客の存在」っていうのは、大きな意味があると思うんですよ。
義理で、業務で座っている人もいるけれど。そればっかりでない、家族とかだけでもない場。

純粋に楽しい

まぁ、閉じた仲間内でやることも意味があるとは思うんだけど、「開いた」ところで、やれるっていいよね。あれでも一応、稽古っていうほどではないけれど、何回かみんなで合わせてみたりしたわけで、それ自体も楽しいわけじゃないですか。好きな人にとっては。そこには、さすがに、社会的使命みたいな位置づけは、なくて。僕も彼らもそこには、純粋に楽しんで尚且つ、「一緒になって楽しんでください」っていう、こちらはそういう気持ちでやっている感じでしたね。

客体にもなれるし主体にもなれる

「客体にもなれるし主体にもなれる。」まさしく、そういう感じですよね。その一方で審査もあるので、敷居が必ずしも低いとは言いたくはないんだけれども、でも、やっぱり、割と低い意識で参加させてもらえる。
スタ☆タン!!は、敷居が高くなくてもいいと思っているんです。選ぶ基準は難しくて、沢山の人が応募するようになったら、みんな、エンターテイメントとしてやって上手なものばかりになりがち。でもスタ☆タン!!は「そういうふうにはしない」って信頼しているけど。出演者を観てみると、知り合いばっかりというのでもなくて、厳しいのは、たけし君も落ちるんだよね、タケシ文化センターでやるのにね。入れてやればいいじゃないか、って思うんだけど、まあ、落ちるんだよね。で、ジャンプの彼見た？あの子は、ジャンプするわけじゃないですか。そのジャンプと、たけし君のカチャカチャと、別に、俺は一緒だと思うんだけど。それこそ「表現未満、」っていうやつだよね。けれど、なぜか厳しいんだよね、身内に。そういう風だけれど、審査員も面白い人達がちゃんと組んでくれているから、続けて欲しいと思うんですけどね。一回一回、主催の佐藤さんが、スゲー疲弊するんですよね。あれはさ、なんかこう、働き方改革の逆行を、絶対そこではしているから。続けてくれ、って言いにくい感じはあるんだよ、本当に疲弊するから。廃人になるからさ、しばらく。

（※ジャンプの彼は、スタ☆タン!!３に「エントリー№27　堤亮賀（声）」として出演）

関係性を開く役割

最近、人を連れてくることも僕の役割だと特にそう思います。
さっき言ったように、「開く」っていうのは、本当は開く側が、努力をして開いていかなくちゃいけないものではなくて、ちょっと開けば、後は、入れない地域の人とかが、ガーッ！って、こう、そちら側の圧が本当は強くて、「ここも開けよ、ここも開けよ」、っていうように外の人が思えるぐらいの方が、本当は良いような気がしているんですよね。だから、「参加 OK」という場がもしあったら、そこに、合いそうな人を見つけて、つないでみたい。そういうことをやりたいっていうのは、すごく思いますね。

多様性を受け入れることが文化の役割

僕、別に、自分が大好きっていうタイプでは全然ないんだけど、それこそレッツやナデガタ・インスタント・パーティーもそうだけれど、そういう場所に交わって、「こんなことをしてもいいんだ」っていう、自分の幅が広がった感じはすごいある。そうした経験から「多様性やソーシャル・インクルージョンみたいなことを受け入れることができるっていうことが、今の文化の役割だ」と、そこだって思うのです、なんかこう。

芸術と文化の役割

僕の定義なんだけれど、尖ったものを作ったり作らざるをえなくなっちゃったり、どうしても出来ちゃうのが「芸術」の役割で。一方、文化は、別に尖ったものを作っていくということに文化の役割があるわけじゃなくて、もっとどっちかというと、下支えで、そういう変なものを、変だけれど排除するのではなく、受け入れていきたいな、こいつ何か全体のところに入れていったら面白くならないかな、っていうのを、ひとりひとりの人間が考えられるような、社会的な、それこそさっきから言っているような、パラダイムみたいなものが出来ることが、文化の仕事のような気がするんですね。下支えの側っていうか、土壌の側っていうか。それが逆方向になっていくのが一番怖い。日本人じゃないと、同族じゃないと、仲間じゃないと、みたいな感じになってしまうとね。そうではなくて、それらを受け入れる、面白がる。役に立つとかっていうところまで行かなくても、面白がれるか、だったり、受け入れる素地を広げていくことが、今の文化の役割だと思うんです。

レッツをはじめとする、それらは、そういう場を広げてくれた、っていう感じはものすごくあります。

（インタビュー：令和２年１月２３日午前@すずやカメラ店内）

その４　あすなろ作業所　五味さんの話

きっかけ

2016 年頃、たまたま新聞でレッツの活動内容が紹介されているのをみて、「面白そうなところだな。一度、久保田さんと話してみたいな」という思いを私が抱いたのがきっかけです。うちの施設（あすなろ作業所）は少しずつ、就労支援から生活介護の事業に移行してきたんですけど、私、音楽が好きで、「いつかみんなでミュージカルをやってみたい」と思っていました。レッツが芸術の分野で活動しているのを拝見して、お話したいなと思ったわけです。すぐに電話したら、会っていただいて相談しました。その後、作業所で活動を見てもらったり、職員会議でお互いの意見を交換したり、レッツメンバーがきて、音楽に合わせて体を動かすワークショップを開いてもらったりもしました。レッツメンバーはひたすら楽器を叩き、踊り、その中に私たちの施設の利用者さんや職員も混ぜてもらったんですが、そのときはうちのメンバー、戸惑っていましたね、「何だこの世界は…」みたいな。初めて参加したらまぁそうだろうなと思いますが。

スタ☆タン!!出演のきっかけ

レッツの方から「こういうイベントやるんで」とお誘いがありました。自分たちも日常の活動で音楽を取り入れたり、色んな表現活動みたいなものはしていても、やっぱり中だけでやっているとつまらないですよね。発表する場といいますか、みんなに観てもらいたい。自分たちだけでやって自己満足で終わって、それはそれでいいかもしれないけれど、やっているうちに、「周りの人たちはどんな感じでこれを見るんだろう、どう評価するんだろう」ということが知りたくなって、それでスタ☆タン!!に応募してみたんです。1回目はなんと「審査員賞」を受賞。それで味をしめてしまって、第2回、3回と毎回応募しています。

（※スタ☆タン!!3には、「エントリー№15　男組「静と動」不器用(シャイ)な男たち（オペレッタ）」として出演）

同僚スタッフの感じ方

同僚スタッフにも最初は戸惑いがありました。いまもかな…。でも反対な訳ではないですね。それは、私がノリノリだからでしょうかね、アルス・ノヴァの活動に。私が突っ走ってやっているから、ついて行ってみようかなという感じ。スタッフはやることに対して案を出してくれたり、変わりつつ職員もいて、不快感よりむしろ心地よさみたいなものも感じてくれているような気がしています。

福祉のしごととは

利用者さんも家族も、今までやはり枠の中で生活されてきたと思うんですね。枠からちょっと出ると、「出ちゃだめだよ」って枠の中に入れられて、こっちへ出れば、戻される。こうする感じで枠の中で生活するいい子ちゃんじゃないですけど、それが良いって感じで。職員の中にもそういうふうに考えている方がいると思うんです。たしかに社会生活に適応するってことは大切かもしれない。でも果たしてそれがその人の個性まで潰してしまったらどうなのかなって思いもあって。一つ一つ検証していくと別にそれほど枠の外に出ても、社会に迷惑をかけていないんじゃないかと思える。私がこの仕事をし始めた頃、教育とか指導って言葉がよく使われていたんですが、自分のこの狭い思い込みに彼らたちを押し込めているんじゃないかなって疑問がずっとありました。その後、ある自閉症の利用者さんとの関わりから、「自分の狭い世界観にその人達を押し込めてはいけない、彼らたちが楽しくキラキラと輝くような人生を送ってもらえるような支援こそ、私たちの仕事かな」と思えるようになりました。自分の価値観を押し付けることはやめて、彼らたちに寄り添う。つい、「あれやりなさいよ、これやりなさいよ」となってしまう場面が、現場ではたくさんあると思うんですが、それは学校ならある程度社会適応のための訓練が必要かもしれませんが、それを卒業したらもういいんじゃないか、私たち自身だって自由に生きたいと思っているじゃないですか。なんで彼らたちはそれを否定されるのかなと。

レッツの影響

そうした問いに応えてくれる実践が、レッツにはたくさんありますよね。その人の個性と捉えて、そこを伸ばしていく。支援にはある程度2通りあるのかなと思っていて、一つは、枠があって、その枠からはみ出したら枠へ入れる。というやり方。もう一つはレッツの運営しているアルス・ノヴァ

みたいに、その人の個性と捉えて、徹底的に本人のやりたいことをしていく。レッツのやり方を見ていると利用者さんたちは自分のやりたいことを思う存分やっている。一見それが問題行動って感じにとらわれてしまうときもあるかもしれないけれど、それを徹底的にやったところで、彼らの気持ちが安定してくる。意外と人間、ある程度まで行けば落ち着いて、そんなメチャクチャなことはやらないんじゃないかな。みたいな観が身につきました。やはり、抱え込もうとするとどこかでこう、人間ってピューと出たくなったり、あるいは逆に諦めてペニャってなって、せっかく持っている芽を潰してしまったり、そういう部分があるかもしれない。だったら、うちの施設はレッツ方式で。彼らたちの人生なんだから、自分の人生の主人公としてキラキラしながら生きてもらいたい、という思いはずっとあります。それを提供するのが仕事。何をしたら彼らが光り輝くのかを探るのが自分たちの仕事かな、と思うんです。

利用者さんの変化

うちの利用者さんで、絵が好きな方がいらして。入所当時、高校を出ていたから 18 歳だったのかな。その頃は、典型的な自閉的な方で、何かあるとパニックになって、ヒーとかキャーとか声を発して怒りまくっていましたけど。今はもう、割と自由に、自分の好きなことをやって、絵も書いたりしているんです。この頃、言葉の量がすごい増えてきて。それで、このあいだ驚いたのは、自分が描いた絵を、「素晴らしいね」って表現したんですよ。すごいなー、って。そんな言葉が彼から出るんだ！って驚きました。

だから、「スタ☆タン!!」に参加させてもらって、自分たちの活動で日常的に音楽を使ったり、いろいろ表現活動をしていくなかで、やっぱり彼らたちが、あきらかに以前と比べて表現する能力が高くなったかな、というのを感じていますね。

言葉で発することができる人たちは、言葉で。紙に書いてくる人もいます。言葉の表現ができない人は、自分なりの方法を探してくる。そういうことが徐々に増えてきているので、活動をやってきて、よかったな、と。もし仮に単なる下請けの仕事をやっていたら、きっと、出てこなかった部分だろうなとは思います。

表現することの意味

就労作業所から生活介護に移行するなかで、程度区分の重い方たちが残りました。仕事の受注は難しくなり、何をしようかと。そこはもう、自分本意なんですけど、私が音楽が好きだからとりあえず音楽をやってみようかっていう形ではじめました。音楽の講師を呼んで音楽療法をしてみたり。皆、好きな音、嫌いな音はありますが、「音楽が嫌い」って方にお会いしたことはないですね。一人、目の不自由な方がいて、基本的には横になっているんですけど、その方が音楽が嫌いかというと、音楽を流していると足の先でリズムを取っているんですよね。他にヨガもしていて、その中で彼らの体に触れることがあるんですが、すごい硬いんですよね、カチカチで。なぜこんなに硬いのかなと思った時に、多分ストレスだなと思ったんです。彼らも表現したいことがいっぱいあるんだろうと思うんです。だけど言葉で表現できなかったり、表現方法がわからず、多分内の中にこもらせてしまっている部分がストレスとして彼らたちは持っているのかなと感じて。これを取るには外に自分たちの心の中の叫びを発散させる必要があるのかなと。それで、近頃は年に 1 回、施設の近くの場

所を借りて、舞台に立つ機会を持っているんです。よく「舞台は魔物」といいますけど、普段しゃべれない方が、マイクを向けると喋っちゃうんですね。いつも隅っこにいる人が舞台に立つと何故かセンターに立っているんですね。それってなんだろうと思うんです。やっぱりあるんですかね、主張したいことが。みんなに観てもらっているとなんかまた違う気持ちが沸き上がってくるんでしょうね。練習のときはみんなダレてますよ、どうでもいいや、みたいな感じで。

利用者さんとの関係性

私は、彼らと接するなかで人間は自由でいいと教わりました。意外と自分でしがらみを作って、みんなそれに縛られて生きている部分ってあったりするじゃないですか。彼らは、自分にとっては、人生の師匠ですね。色んな生き方を教えてくれる。

実際、自分が私生活で困ったことがあったとき、相談したことがあるんですね。「こういうことがあるんだけれど、どうかねー？」って語りかけて。ひとりの方に話しかけたとき、ただジーっと座っているだけなんですけれど、それでいいんですね。返事をしてくれるわけでもなく、でもただ、じっと側に居てくれただけで、自分としてはありがたかったですね。自分もそういう、彼らの側に寄り添って、じっとこう、良きパートナーとしてありたいと思っています。支援員だなんだって言葉はもう、私はいらないと思うんです。ただのおばちゃんでいいので、ただただ寄り添っていたい。

自分自身、本当に狭い世界で生きているので。その点、自分自身も勉強して、人間としての幅を広げていかなくちゃいけないという思いがあります。そして私も、彼らの心の声を聴きたいなと。一人のおばちゃんとして、彼らたちの本当の心の叫びを、「何したいのー？」って寄り添うなかで一生聴いていけたらいいなと思っています。よく思うのは、前世は逆だったのかもしれないし、自分がハンディを持っている。そして彼らはある日突然、言葉をいっぱい持つ人間に変わったとき、自分に対してなんて言うだろうか、と。それがすごい気になっているんですね。ひょっとしたら、「僕はそんなことはやりたくないよ」って言われるんじゃないかな？とか。

福祉の現場における文化の意味合い

うちのスタッフはどちらかというと枠を崩すことを怖がるタイプで。確かに、枠があったほうが安心という面もあると思うんですけどね。一方、私は枠を壊そうとするタイプだもんだから、スタッフはビビっていると思います。でもスタッフには色んなひとがいていいと思うんです。色んな考え方があって、それぞれがいいように影響して、一つのものを創り出していく。芸術や表現によって、色んな人の色んな意見がぶつかり合っていく過程が大事だと思うんです。「これでいいんだ」ってなっちゃうと、進歩が止まっちゃうじゃないですか。

スタ☆タン!!後の変化

レッツに影響を受けて、今年で 2 回目になるんですけれど、「細江 De 音楽祭」って催しを主催するようになりました。普段、自分たちがやっている表現活動を一般の方に観ていただく企画です。もちろん他からも、演奏家を呼んだり、近隣施設の方に参加していただきながら、発表の場をもっています。

活動していくと、だんだんとどこかで見たりとか聞いたりして、そこから話が広がってね。一方、女性もフラグループを持っていて。メンバーは、利用者さんだけじゃなく、一般の方や気持ちのある

在宅の障害を持った方たち向けに、フラを教えてくださる方に、ボランティアとして関わってもらって活動しています。つい最近では、県の芸術祭が菊川であり、それに声を掛けていただいて、舞台に立ちました。嬉しい出来事でしたね。

今後の「福祉」について

もっともっと色んな特色を持った福祉の事業所ができるといいな、と思うんですね。まだ世間は学校を出て、どこかの就労系の事業所に行って、お給料をもらって、というのがだいたいの流れなんだけど。でも、利用者さんたちは、必ずしもそれを望んでいるかっていうと、望んでいない利用者さんもいると思うんですよ。自分はこういうことが好きだとか、こういう方へ行きたいとかって、ひとりずつ聞けば、あると思うんです。その方たちが選択できる事業所が、もっともっとたくさんでてくると、自分はこういうことをしたいから、それをやっている「アルス・ノヴァ」に行きたいとか。うちの場合だと、やっぱり、踊りとか、そういう表現活動をしているから、そういう活動がしたいから、じゃあ、あすなろ行くよ、とか。あそこは音楽やっているから、体操やっているから、とか。そういうところが、色々出てきて、選択できるくらいになってくれれば、もっと、こういう方たちも幅が広がって、社会の人たちのその価値観、見方も、考え方も変わってくるのかな、と。それは、一般の方にも言えると思うんです。不登校で学校に行けない、その人たちを無理に、学校へ行かせる必要があるのかな？いまは、フリースクールも色々あって、選択肢もできてきていますけれど。必ずしもそこへ行かなくても、彼らたちが本当にやりたいことをそれこそ光り輝くような、そういう内容のものが見つかれば。それでいいんじゃないかな、と。

（インタビュー：令和２年１月３１日午後@たけ文）

その５　グループホームすてっぷ施設長 大橋さんの話

きっかけ

レッツの名前は、同じ市内にいるので知っていたんですけれど、当時は、「ぶっ飛んだことをしている」という印象でした。それで、ちょっとそういう変な先入観があって距離を置いていたんですけれど、６年ほど前にレッツが哲学者の鷲田清一さんを浜松に迎えた企画があって、「おーすごいな」、って思って見に行ったんです。その頃から「沼にはまる」っていうか。そこでなされる議論がものすごく深くて、面白い。それが、きっかけでした。その後は、鷲田さんのお弟子さんに当たる西川勝さんを招いた「語りの場」、いまの「かたりのヴぁ」ですね。それに職員たちと定期的に行きはじめました。行けるときには行く感じで。

同僚の職員さん、利用者さんと

同僚の職員もはじめは無理やり連れて行かれた感はあったかもしれないですね。レッツが運営するアルス・ノヴァの「場」は何をする「場」か決まっていなくて、カオスでしたから。それでも僕以外にハマっている職員も結構いて。最初は職員だけで行っていたのが、だんだんと利用者さんも連れ

てっちゃっても「ノヴァだからいいや、カオスだから。こちらの利用者さんがちょっと変なことしても、全然いいよ、って言ってくれるだろうし。利用者のみんなも、だからレッツっていう名前をしっかりわかっていて、僕が、「ちょっと出かけてくるよ」って言うと、「なに、レッツ？」って、必ず一言、そう、聞くんです。

関わり方の変化

初期の関わりとしては、そういう感じでしたが、「表現未満、」が始まったらそれに入り浸るようになり、頻度が、どんどんあがっていきましたね。3 ヶ月に 1 回だったのが月 1 になり、今は週 1 ペースでいるみたいな。ひどいときには週 1 を超えるペースで行きます。基本、文化センターという形でオープンなので、イベント以外でも立ち寄ったり、いまはトータルで全体に関わっていたい感覚もありますね。

レッツが惹きつけるもの

一つはその居心地の良さってこと。うちの職員が印象的なこと言っていたんですけど、「自分の職場にいるといつも何かこう、評価される。あと義務感とかね。何かしなければならないとか、職員として」。看護婦さんは白衣を着ている。僕らは僕らで支援者という服（立場）をずっと着ていなければいけない。でもレッツにいると、それが脱げる。何でもあり、みたいな感じ。

レッツでは、「あの人、職員なのに〇〇さんがこんなことしてた時に止めなかった」って一切言われない。利用者さんがお客さんのコーヒーのコップをさっきみたいに取りに来ても、だれも咎めない、この感じ。職員は、「これはいい」って。　そうした一つの居心地の良さと、もう一つは「自分がやりたかったことって、これに近いことじゃないか」っていう気持ち。支援者然として向き合うとか、上質なサービスをお届けするみたいなことよりも、もっと利用者さん一人ひとりと一緒にいるってこと自体に、意味がある。自分自身の話になるけれど、僕自身が入所施設の大規模なところがもともと好きで就職したけれど、2 年ぐらいで嫌になるんですね。やっぱり、これは人間の暮らし方としてどうかなって。大規模で 40 人が一緒に生活。これがやりたかったんじゃない。ここに一生居るのは、僕も嫌だし。「同世代の彼らたちも嫌じゃないか？」と思って、入所施設をやめるような形で、そこにいた利用者さんたちと一緒に、グループホームを出てきたんです。

でも、そうやって来ても壁に結局ぶち当たって。最初は良かったんですよ。何にもルールもない感じが。こういうのがしたかった、って感覚に近かったので。ですが、どんどん、福祉も制度化されて、世間から職員は職員としてあるべき姿が求められていく。

どんどんサービス化してきた。「これも違う」って思い始めていた時に出会ったのがレッツだった。「あ、そうだ！」みたいな感じ。ずっと言い訳していたんですね、世間がそういう風になってきちゃったから、福祉がそういう風になってきちゃったから、と。僕がしたくてもできないのは社会のせいだ、みたいな。でも、レッツみたいに関係なく、やっているところもある、衝撃でしたね。

表現未満、を通じた変化

表現未満、プロジェクトをやり始めてから、シリーズとしてイベントがある今と、無かった時と比べると、わかりやすさっていうか、伝えやすさが変わったんだと思うんです。例えば、「利用者さん

も連れて行きたい」って言った時に、やっぱりイベントチックじゃないと行きづらいんですよね。わかりづらいというか、いつ行ったらいいんだろうって。レッツの人たちは、イベント化することにきっと自己矛盾みたいなものを感じているかもしれないけれど、僕らとしては、表現未満、としてイベント化してくれることで、より行き易くなった。僕は、レッツみたいな感覚を自分の施設の中にも広げていきたいと思っていて、そうした自分の作戦として考えた場合も、自分の施設にわかってもらえやすくなったと思います。表現未満、は、活かしやすいです。普段来るとカオスそのままって感じが、イベント時には「見える化」されたりする。レッツのやっていることの理解度、浸透がイベントがあることによって、外のひとに早く入っていく感じがしています。

レッツとの関わりから得られたもの

そうですね。人は義務化されたり、マニュアル化されたりするなかで、「障害者」ってレッテルを貼る。そうした世間の常識みたいなことに、レッツは挑んでいる、っていうのがだんだんわかってくるっていう感じですね。単純にレッツのことを理解するだけでなく、レッツの価値観が自分の中に入っていく感じが僕にも職員にも起きている。そうすると、自分の中の自由度が増すっていうか。今までは、福祉はこう、自閉症の人にはこう、って思わないといけないと感じていたのが、そんなのなくていいんだ、って捉え直せたり。支援は、もっと自由で創造的で幅広くていいんだ、っていうことに気づいて、仕事が楽しくなった。

それは、レッツにいるときだけが楽しいんでなく、レッツでそういう視点を得たり、体感を通して、現場に持ち返ることで現場が楽しくなる。もちろん、職員全員じゃないと思うんですけどね。

表現未満、後の影響、はじめたこと

2 年前かな。文化プログラムでのレッツの影響を受けて、夜に開かれる「哲学カフェ」を始めました。いまはもう、施設長の僕はほとんど関与せず続いています。毎月やることを変えていくんですよ。もともと「かたりのヴぁ」みたいな、話しあうことがテーマの、どちらかというと脳内的な学び合いの時間。でもそればっかりだといけないってことで、レッツがやっていたのを僕らなりにアレンジして、行動的な実行編の企画を毎月やっています。

今までの障害者のレクリエーションや余暇って言ったら、何時にカラオケに行って、マクドナルドでご飯食べて帰ってくるのがパッケージ化されていたりなんかするんですけど、そういうんじゃないレクをやってみよう、といって、うちの職員が考えたんですけど面白かったですよ。新幹線の駅まで利用者さんを何人かのグループに分けて連れて行って。みんな言葉もしゃべれないけれど、方角も分からないかもしれないんだけれど。上りか下りか、足元がこっちに向いたら上りに行くとか、こっちに向いたら下りに乗ろう、って言って。何にも決めないで新幹線に乗って、目的地も決めずに、行った先で街中歩いて、利用者さんがなんとなく入った店でご飯食べちゃおう、って。カオスなレクみたいなものをしました。あれは、よく考えたなと。決まっていないことを楽しむとか、偶然を楽しむみたいな。カオスに身をゆだねるというか。僕もついていきたかったな、と思いました。それで、帰ってきたら、職員が生き生きしていて、こんなトラブルがあった、あんなトラブルもあった、でも、こんなことが面白かった、と。感謝しましたね、レッツにね。彼らの法人の名前にもあるように、まさにクリエイティブをサポートしてもらったような、感じですね。その日は僕、職員たちがそ

ういうこと企画してやってくれたっていうのが、嬉しくて嬉しくて。
まぁ、もちろん、職員のなかには、レッツを完全に受け付けない人もいますけどね。やっぱりこう、あれは福祉じゃない、っていう。でも、それはそれで全然ありだと思うんです。行ってみて感じてみて、自分には合わないって思う、それはありだなと。

文化事業の価値

福祉サービスって、サービスをする側と受ける側が明確化されてきていて。それって、対面式みたいで、こっちが売る側です、あなたはサービスをされる側です、みたいにすごく分断がされていると思います。それでサービスする側としては、それもすごくマニュアル化されて点数化されがちなんだけど、でも、レッツと関わって気づいたのは、対面式ではないんですよね。横並び的というか。たとえばこのコーヒー。二人で並んで見ると、対面して見た時と違って、同じ側面が見える。対面じゃなくて一緒に、共に見つめる感じ。その感じがそもそものケアとか、本質的なものと一致する。そういうことは、なかなか研修では、立ち戻れないですよね。
僕はこれまで、どんなアプローチをしてきたかと言うと、「哲学」だったんですよ。哲学の先生を毎月招いて、すごく内省的でアカデミックな会を、問題意識を持っている人の中で開く。それは今も大事に続けているんですけど、結局、脳内でしかなくて。現場を変えていったり、外とはつながりにくかったんですよね。その時、文化事業は、脳内だけじゃなくて、身体感覚で、という感覚があると感じました。なかなか言語化できない部分だけど、アートも「なんだこりゃ」っていうのを、一緒に触れれば職員同士でわかちあえる。僕らの法人でもワークショップをやりますが、「何だ、この戸惑いは」っていうのもみんなで共有できたりする。つまり、さっき言った対面（「あなたにはわからないでしょ、私にはわかる」っていう専門・非専門）じゃない世界にあるアートや文化は、脳でなく体で、僕らに訴えてくるという感覚。全てをひっくるめてくれるというか。「曖昧さを楽しむ」。普段はわけて考えがちなあれこれをアーティストがやってきて職員と利用者とを、みんなでワ一って分断を上手に取っ払ってくれる。この曖昧な時間こそ、一番贅沢な時間じゃないか、と思えるんです。そんな曖昧な時間で名付けようのないことなんて、普通、福祉の現場で話し合われることないですから。どうするべきか、ってことばっかりに視点が行きがちで。

スタッフの弱さの強さ

曖昧なところにいますよね、レッツのスタッフはけっこう。制度って揺るがなくなっちゃうじゃないですか。でも、揺らぐのって、すごく大事なんですよね。きっと、揺らいでいること自体が大事で。でも、その揺らぎって時に辛いじゃないですか。福祉現場にいると、「この人どうしてこんなことするんだろう」とか「この人にとって、いい支援ってなんだろう」みたいに揺らぐその葛藤に毎日付き合うことって、ものすごくしんどくて。どういうふうになるかっていうと、「じゃあ、何時にこういうことを言う、このタイミングでしましょうとか。この人のこういうことは自閉症のこういうこだわりと特性が合うからこうだ」、と。揺れないようにわかりやすさを導入していくと、職員は揺れなくなって、楽になっていくんです、ある意味、わかるから。わかるってことは揺らがなくていいから。でも、それ、強いっていう弱さだったり、弱いっていう強さだったり、裏表。揺らがなくなればなるほど、職員って、逆に弱くなっていく。レッツはその逆で、そういう揺らいでいることの弱さ

があるがゆえに強い、っていうか。どっちがいいとか悪いとかじゃないんですけどね。でも、本来やっぱり揺れているもんだって。それを揺らさないようにカチっとしようっていうことに無理がある。例えば、支援員が受けなければならない「強度行動障害者従事者養成研修」もそう。強度行動障害っていう、自傷したり、互いに暴力を振るったりする人の支援は「こうあるべき」、っていう研修で、これは今言ったように、職員による支援が揺れなくするためのものになっています。一瞬は楽になるんですよね、支援者も。この人のこうなる理由は、こうなんだって、わかった気になれるから。でも実際はそうじゃない。一人ひとりにとっての支援を、クリエイティブに解釈しようと思ったら、無限なんですよね、その人の行動の解釈も、その人の幸せも。
レッツなら、それを「表現未満」っていう風に言い換えられるのかもしれない。さっきの淡さや、曖昧さ、名付けようがない、作品でもなければ、作品じゃないとも言い切れない、そのアワサとか曖昧さっていうのが、福祉の世界では排除されがちです。「その曖昧さ、いいじゃん」って言ってくるのがレッツだったり、アートだったり、文化だったりする。私たちは、それを取り入れたいなぁ、と思うんです。

支援者する側とされる側の先なんて、取っ払ったほうが、お互いが楽。でもそう言うと、福祉の現場の公私混同っていうふうになるんですね。いけないことだって。

障害の捉え方次第

よく当事者さんの手記で、アスペルガーの方や、それこそ自閉症、と言われる方達が、子どもの頃、生きづらくて、生きづらくて、「友達となんで自分はこんなに違うんだろう」って思っていて、成人したときに、「あなたはアスペルガーですよ」って言われたときに、すごくホッとした、って話があったりします。アスペルガーだったので、だから自分はうまくできなかったんだ、と理解できる。こんな風に、名付けられ、曖昧さが取り払われ、ラベリングされることで楽になれる面もたしかにある。きっとそこから始まることもあると思うので、否定するのではないんですけれど。でも、そのラベルが一生、変わらなかったり、その意味がひとつだったりしたら。アスペルガーはこうだ、って。アスペルガーの人が生きやすくするためには、こういう風に支援すべきだ、って。そこまでラベルが及ぶと、その人はまた、生きづらくなってくるんですね。そうしたことも、色んな手記に書かれていますよね。名付けられた時は一瞬、楽になったけれど、そこからアスペルガーの人はこうで、こういう施設に行くべきで、仕事はこういう仕事に就くべきだ、っていうことで窮屈になってくる。その人を見ずに、アスペルガーの人、って風になってしまう。でも名付けたことから見えてくるものって、本当にその人の一部分でしかないですよね。名付け方としても。
北海道で当事者研究をしている「べてるの家」は、そのラベリングをすごく自由にしていますよね。その人に応じたラベルしか貼らない、みたいな。確か自分で名付けるんですよね。その分、面白いラベルになる。それも、気分が変わったら変えればいいっていう自由さがある。そういう意味では、レッツにも、「恋愛妄想詩人」と名がついている利用者さんがいますよね。彼も面白い。

レッツと関わることでのスタッフの影響、変化

モチベーションは、絶対に変化が見られましたね。色んなことを超えるのがアートや文化だって言

われ方をしますが、レッツと関わったり、ワークショップをやったりすることで法人の中で割れるというか。そういうことをやりたい人たちと。反アート、っていうか。「うちの文化とは違う、うちの法人にはうちの法人の文化がある」っていう。べつに仲が悪いわけではないんですけれど、そういうことは、生まれますよね、どうしても。うちでは、全員が集まる会議を結構やるんです。その会議の質っていうかな、会議の内容は、ものすごく変化がありましたね、レッツと知り合ってから。その質というのは、今、言っていた捉え方の自由さ。前は、どうするべきか、みたいな話し合いだったのが、レッツの「しえんかいぎ」のようなことを、繰り返し自分たちで取り組むようになると、話し合われる深さが変わるっていうか。「そもそもそれって、ここで問題にするようなことなのか？」みたいな問いが生まれたり。「僕らが、問題行動って呼んじゃうけれど、それって別に、よくない？」とか、「その人の生きざまだよね」とかね。
福祉現場の会議って、問題解決してしまいがちなんですよね、利用者さんのこういう行動を、なんか変えなきゃいけないもんだっていう雰囲気がある。でも、いまは、エピソード的に「こんなことがあったよ」、「面白かった、グッときた」みたいなね。録画しておけばよかったと思うほど、何年か前の会議とは全然違うと思いますね。最近なんて、会議の時間を延ばして、音楽をアイスブレイク的に実際に自分たち職員たちでやってみたりしています。会議の前に 30 分くらい時間を設けて取り入れると結構盛り上がって、会議の質も全然変わるんですよ。
それから、「問題」の捉え方にも変化がみられます。そもそも、利用者さんの問題を、問題として捉えているのは自分たち職員じゃないか、みたいな視点や論点が自然に根付いていく。根付いたり、深まったのは、ここの哲学カフェのおかげでもあるし、自分たちで始めたからでもあると思います。

変化がみられた、現場の支援会議

以前の利用者さんの支援会議は、「今までの A さんは、こういう問題がありました」、「B さんはこういう問題がありました」っていう、問題をあげつらうみたいな時間でした。でも今は、「A さんはこんなことがあった」と。問題としてじゃなくて、エピソード（出来事）として話し合う。それを、「それ、問題じゃん」っていう人もいれば、「いやー、ここが彼女のコアな部分なんですよ」みたいなことをいう人もいる。それが、結構、ぶつからずに。そうしたことを職員も体感しているんじゃないかと思います。
特に、現場のリーダーみたいな感じの人が、会議をまわしてくれるんですけれど。彼女がすごく変わりましたね。
以前よく気にしていた「〇〇さんの体重が先月より 1 キロ増えました。食事がうんたらこうたらで、もうちょっとご飯を減らして…」みたいな数字的なことを、今は一切言わなくなりました。「彼女、変わったなー」と。数字で表されるようなこと、ぜんぜん言わなくなった。その事に気がついたとき、「あっ、レッツ化してる」と思いましたね。

関係者の広がり

そうですね。レッツで知り合った人達のなかには仲良くさせていただいている人もいます。僕らがやっているワークショップや哲学カフェ、グループホーム見学ツアーをやっても、来てくれるのは、ほとんどレッツで知り合った人たちです。もっと広がっていくといいな、と思っていますが。一方

で、ものすごく、多種多様な人たちに来てもらいたい、とまでは思わないんです。自然に開いている状態でありたいっていうか。広がっていくといいなと思う先としては、僕はやっぱり、福祉関係者に来てもらい、わかってほしい。「もっと楽しいよ、この仕事」って。でもこうしたことを、うまく伝えることができなくて、歯がゆいところです。

施設利用者の変化

うちの利用者さんたち、アルス・ノヴァにしょっちゅう来るようになって、名前で覚えてもらっているんですね。「あー、けんちゃんだね」とか「ユーちゃん、よく来たね」とか、「ホリタ君、久しぶり」とか。みんな名前で呼ばれているし、お互いに名前でわかっている。するともう、グループホームの利用者さんってレッテルじゃなくて、「ユウコさん」とか「ホリタ君」でしかない。彼らにとって、すごく幅が広がったというか。それこそ僕らが「支援者っていう服」を脱ぎたいように、彼らもやっぱり、「障害者っていう服」を脱ぎたい。その時、一番近くの僕らは、彼らには「支援者」として写っているんだろうなと。でも、彼らアルス・ノヴァに来ると、もう、友人なんでしょうね、きっと。そうした意味でも、関係者は広げていきたいと思うんですよ、そのとき福祉施設なら友人になりやすい。

広げていきたい先は、同様の施設を運営している社会福祉法人だったり、近い領域の人たち。実際にはなかなか難しいものがあるかもしれませんが。それから、やっぱり、利用者さん自身が変わりましたね。前はカラオケとか、温泉とかって言っていたのが、レッツのイベントがあったらそっちに行きたいっていう感じ。何が満たされているのか。たぶん、「障害者っていう服」を脱げている感覚が彼らにもあるんじゃないかな。レッツが主催している真面目な研修じみたトークイベントにも、「行きたい！」って言う利用者さんがいれば連れて行くんですね。けっこう、自分が勉強したり、学んでするとか、ってのが自慢だったりするんですよね。障害のある人はそれを奪われているから。学ぶっていう機会を。うちの利用者さんはトークイベントに来ると、必ず最後に手を挙げて意味のわからない質問をする。僕は毎回すごい肩身が狭い思いをする。でも利用者さんはそんなことはお構いなしに張り切って手を挙げる。学ぶことの楽しさって、大人になっても気がついたりしますし。きっと、利用者さんにも、あるんじゃないかな。

それから、「表現未満」でいえば、うちの利用者さんが作った漬け物を、行き交う人たちにふるまう企画をしたことがあったんですが、それをやったときも、その利用者さんけっこう、生き生きしていて。その漬物、うんとしょっぱいんですけどね。とても、ご飯がないと食べられないレベルの塩分濃度のやつ。それを行き交う人に配るっていう。その企画は、「表現未満実験室」の時に、「なんかやってくれ」っていう漠然とした依頼が来て。それで、うちのスタッフが、「何やろう」、と考えて、それをしたんですよね。そんな感じで利用者さんへの支援内容とかメニューがもう、根源的に変わりましたね。みんなでワークショップをやるし、出かけたりもするし。明日もこの場所（たけし文化センター・アルス・ノヴァ）で開催される「玄関ライブ」にうちの利用者さんが、出演者でひとり呼ばれている。立ち姿がきれい、って、意味がわからない理由で。実は出演する利用者さんにとっては、かなりの背伸びで。「玄関ライブ」に出るって事自体、心配にもなるのだけれど。本人は張り切っているから、やれるって伝えて。うちの施設も、レッツに近くなったかな、と思いますね。

地域の人との関わりの変化

以前は、地域の方々との交流は全くなかったんですよね。それは自分たちも自覚していて、毎年、施設の自己採点のなかに「地域との交流」の項目があり、それは毎年法人の課題としてあったんですね。今も当然あるんですけど。これも、3,4 年前から「文化」を取り入れることによって初めて施設を「開けた」感があります。さきほど話したワークショップを地域の人に開いてやっているんですね。すると、近隣の赤ちゃんからお年寄りまで、もう本当に全世代が揃うぐらいの開かれ方になりました。イベントはまた日常の関係性とは異なるかもしれないけれど、「開き始めた感」は確実にあり、そのとっかかりを作ってくれたのが、「文化プログラム」でした。

利用者の家族の変化

利用者さんのご家族も最初は抵抗があったかなと思います。もともと、最初は、僕が Facebook をやったりとか、利用者さんの顔をああやってオープンにすることに、親の会の親御さんたちは総じて抵抗があったと思うんです。プライバシーへの配慮という観点で。「これは隠すようなことじゃない。オープンにしていいんだ」、っていうことを、最初の頃は僕が親御さんたちを説得して承諾してもらっていた感じでした。でも、自分たちが、繰り返し、繰り返し楽しいこととか、こんなところがグッとくる、みたいなことをやっていく中で変わっていきました。

親御さんとの会合って、施設から今年の所信表明や事業計画を話す場。ですから、ものすごく「閉じている感」があって。その理由の一つは、やまゆりの事件のこともある。施設側も慎重にならざるを得ない。でも、それこそ一昨日開かれた年に 1 度の会合では、親御さんの方から「全然、顔をだしてくれていい」、「名前隠すのはおかしい」って言ってくださる方が増えて。

僕らがやりたいことって「曖昧」だったり、「淡さ」だったりする。だから、事業説明しにくいんですよね。抽象的なことがしたいんです、とか、曖昧なところにいたいんです、って言うと、ふざけるな、ってなるじゃないですか。でも、これもなし崩し的にわかってもらえるようになった、っていう気がします。

でも、親御さんたちはうちのワークショップに参加するわけではなくて。さっき話した、行先を決めないで行った新幹線の旅も、来ているわけではないんです。だけど、報告の記事は読んでくれているし、そういうことに触れる機会がある。僕も抽象的なことを報告に書くし、その参加報告もかなり、ぶっ飛んだことを書いて毎月「通信」として出すんです。その報告がちょっと変わっていくのって、きっと親御さんもわかりますよね。前は、カラオケに行ってみんなで楽しかったっていうのが、最近よくわからないことやっているぞ、って。なんか新幹線で意味もなくどこか行ってきた、みたいな。どっかのアーティストとなにかやっているぞ、って。親御さんも最初は心配だったと思うんですよね。でも、一昨日は親御さんたちにも、そうしたことの大切さがすごく浸透している、っていう感じがして。どんどんやってください、って感じがあって。

グループホームの親御さんに関しては、特に理解があるんです。やっていることに。以前、親御さんと一緒に、プチ・ワークショップを一緒にやったことがあるんですが、「こういうことって、けっこう障害が重くても参加できるでしょ？」、「これならうちの子もできる」って声が聞けました。そのうえで、「それをみんなでやっているんですよ」っていうのを伝えられるようになりました。親御さんたちのまなざしも変わりました。前は意味不明なことやっているな、って思われていたと思うの

で、きっと。

自分たちの価値基準に基づく評価実践

社会福祉法人として、毎月職員個々の「自己評価」アンケートをしているんです。当然ながら、普通のアンケートです。出勤時間は守れていますか？携帯電話の使用は勤務中にはしていませんか？利用者さんは、さん付けで呼んでいますか？そうした、普通のオーソドックスな評価を「やっています」、「やっていません」って確認するんですが、やっぱり、違和感が生まれてくるんですよ、レッツのような事業に触れていると。で、「この項目だけが大事なんじゃない」、ってなる。表面だけじゃない、って職員たちとみんなで話し合って、今までなかった裏面をつくろう、って話になりました。「利用者さんと一緒に何もしない時間があったか」、とか。

（※「自己評価様式」は本報告書・資料編に掲載）

「自己評価」の裏面を作る過程も面白くて、すごく盛り上がりました。職員たちも、こういうことって大事だよね、一緒にご飯食べて、おいしい、とか。一緒にお月さんを見て、奇麗だね、とかって。一緒に何か共有することがあったか、とかね。あと、これはなかなか表には出しづらいんだけど、僕ら支援者は、いつも聖人君子みたいにイライラしないとか、って求められるんですね。でも本当はやっぱり「いいかげんにしろ」、って思うこともあるんですよ。そういう気持ちの時もあっていいじゃん、みたいな。だから「ある」方が点数が高く出るようにしてみたり。表面だけじゃやっぱり、語れない、っていうんで裏面を作って、一番最後の欄に今月の格言みたいなのを職員がそれぞれに書いて共有するんです。

よく、公私混同するな、って言われて、切り替えろ、ってされますけど。仕事終わったら仕事のこと考えないように、って言うけれど。無理なんですよ、そんなの。体調悪い人がいたら、家に帰ったって、彼女大丈夫かな、と考えてしまう。そういうことがあってもいい、と思うし。だから、帰りの車の中で、仕事のことを考えちゃうことがある・なし、って項目では、ある方が点数が高く出る。公私混同が絶対だめっていいきれないよね、みたいなことも、職員と共有しています。

今後に向けて

いま、施設でしていることを、今後は、組織内にいかに仕組み化できるかですね。現在も、取り組みとしては広がってきている感はあるんです。法人の中で、まずはひとつの児童の施設だけがやっていた「文化」ワークショップが、最近は、僕らの障害者の施設が加わって、今年から介護保険の施設もさらに加わる予定。本当に子どもからお年寄りまでみんなで作るワークショップみたいにしていく。そうしたことも視野に入っているから、法人の中で波及している感は、すごくあるんです。施設長クラスには、広がってきている感があるのでもうちょっとかなと。最終的には、そういう部署を作り、企画を担当する人を雇いたい。でも、仮に年間 500 万円の人件費の根拠ってなに？と問われたら、「曖昧さを楽しむためです」って経営層に言えないじゃないですか。もっと意味を見える化しないといけない。そこが難しい。

先行事例としては、品川の施設に、アサダワタルさんがディレクターとして配置されていて、うち

の法人もいつかそうできたらな、と思っています。

（インタビュー：令和２年１月３１日午後@たけ文）

その６　佐鳴台小学校校長　鈴木先生

レッツとの出会い

鈴木先生：たしか出会いは、7 年ほど前で、当時はアルス・ノヴァが入野にあった頃、私が近くの入野小学校の教頭をしていた時でした。当時の校長先生が、特別支援学校から入野小学校にお見えになった方で、レッツ代表の久保田さんともお知り合いで。それで、ご挨拶に来られたのを私もお受けして、というのが最初のきっかけでした。その後、「近くなので、利用者さんを連れて運動場に遊びに来てもいいですか？」と、お話があり、「もちろん OK」と。そのあと、半分は自分たちからの希望で、せっかく来てくださるなら、「何か一緒に出来ることはありませんか？」とお誘いしました。そこで、子どもたちが自分たちの力で、皆を喜ばせる企画をする児童会のお祭りのときに、その一角にブースを設けていただくとか、授業を利用者さんも一緒に交えてやってみるという試みをしました。

小学 1 年生の図工の時間でファッションショーをしました。ちょうど学校も障害のあるお子さんを受け入れており、「自然に関われるのはいいんじゃないか」ということでお付き合いがはじまりました。もちろん当時の校長は、特別支援学校の校長をなさった方なので、インクルーシブの考え方を持っておられたし、職員もそういう企画に共感してくれました。全校に対してではなかったけれど、子どもたちは喜んで参加していました。

それまで地域の福祉や文化の施設と連携して取り組むことはなかったので、レッツさんが初めてでした。本番の様子をみて、「子どもたちは本当に自然に関わるんだ」と実感しました。むしろ大人の方が、色々心配したりね。教員というより保護者の方や地域の人たちから、「どうなんだろう？」という声は 2、3 あったかもしれませんが、子どもたちは本当に楽しそうでした。

そのあと、私は萩丘っていう地域の小学校に赴任することになり、それから暫く 3 年ほどはレッツさんとの直接のお付き合いはなくなりましたが、レッツさんとの交流をきっかけに、障害のある方たちと交流するのは、いいものだなという実感があったので、近所の施設と交流して自閉症の利用者さんと一緒に折り染めをしたり、障害者雇用を推し進める農家さんの話を聞いたりしました。そういう芽が私自身に開いたんでしょうね。

音楽会を合同で企画

レッツさんとは、再び 2018 年に私が佐鳴台小学校に赴任してから、「何か交流ができないか」っていうお話をレッツスタッフの夏目さんからいただき、交流が再開しました。

前任校は、コミュニティ・スクールのモデル校だったので、佐鳴台小学校に来て、そういうのをこれから考えていきたいという時にレッツさんに再会して、「何か一緒にそういう機会を作ってできないか？」ということで、夏目さんにコーディネートしていただきました。それが、みんなで一緒に音楽

を楽しむ「佐鳴台みんなのコンサート」です。本当に「みんなで」なので、障害の有無も関わらず、やってみました。知り合いで浜松市出身のピアニストや生徒の保護者で声楽家の方、それにレッツメンバーによる「レディオ体操」など。
ある意味チャレンジだったんですよ。クラシックって静かに聴かなきゃいけないものだというのを、あえて「声を、出ちゃうのも有り！」みたいな感覚でやったので。色んな趣味の人もいるので、色々織り交ぜることで、ある程度「型のあるもの」と「自由なもの」とを織り交ぜてやったことで、子どもたちのなかに、その印象が残っていて、「またないの？」という反応もありました。

レッツメンバーでお昼休みに学校滞在

やってみると、目指す方向がみえてきて、今度は、レッツさん単独で、もう少し学校の中で交流できないか、という話になり、学校に昼休みに来ていただく企画をはじめました。近頃、学校が多忙化しているなかで、昼休みならそんなに束縛されるものじゃないし、子どもたちが希望で選べるものなので、レッツさんさえよければ、ぜひ来てください、ってお話しました。
私たちも、レッツメンバーに子どもがどう関わるのか、間近で見ていて、一つ一つ気づきがありました。例えば、太鼓とかがあると、そちらに行ってしまい、そこにいる利用者さんや人にはあまり興味が向かない。ちっちゃい子ですのでね。でも、それを無くして「マネッコしてみよう」っていう企画に変えてみたら、利用者さんとの関わりが生まれてきて、けっこう楽しんでるんですね。ぐるぐる描いている人の隣で、ぐるぐる描いていたりとか。
子どもたちは、関わる回数を重ねると、関わり方を学んでいくんですよね。次回は、自分の方から寄っていけるようになっていたり。基本、希望の子が行くのでね、怖がったりはしないです。
最近のエピソードでは、レッツメンバーの壮さんが来たときに、ちょうど眠かったようでスタッフさんと一緒にゴロンと横になっていたんですよ。その横で、その顔を眺めながら楽しそうにしている男の子がいて。その様子をじっと見ていて、「明日も来るでしょ？」なんて言うんです。子どもたちは、ちゃんと関わり方を見つけていく、ってことです。そこには、レッツのスタッフさんの絶妙な見守る目がある。そこが欠かせないんですよね。そこは安心してお任せできるので、私たちも受け入れられるのです。

レッツ夏目さん：やはりメンバーを連れて行くのは大変で、例えば、壮君は廊下を走り回るんですよ。廊下のような場所が大好きで。嬉しそうに走るんですけれど、その合間に、大事な掲示物が“ビリッ”て破れちゃったりもする。もう、ドッキドキです。破っちゃった子に謝ったり、とか。やはり事件は起きてしまう。けれども、それを含みつつの滞在なのかな、とも思います。

鈴木先生：でも、学校って、レッツのメンバーが来ないときでも、色々なことが起こりますよ。学校は本来、起こったときにどうするか、を学ぶ場でもある。もちろん、命に繋がっちゃいけないけれども、多少のことに関しては、当然に起こります。その後、謝るなら謝る、直すなら直す、など次から気を付ける。それがすごく大切だと思います。逆に、レッツメンバーが来てくれた時に、あまりそういう状況に子どもたちがキイキイ言わない様子を見て、意外と寛容さが育ってるなぁ、と感じるところはありますね。

教育現場の難しさ

学校も今、変わろうとしているんですけれど、やっぱり「枠」があるんですね。学校の中で色々「〇〇でなければならない枠」というのがあって。そこに、だんだんはまりきれない部分も出てきている。でも、それが悪いものばっかりではないので。特に芸術性などについてはどうしても「枠」を飛び越えるところがあるのだけれど、それを認められない。本来、「ありのままをまず見る」という部分からスタートするって、原点のはずで、子ども達は、意外とそういうのが分かっている。だからその大人が作ってしまった「枠組み」を、もう少し緩く見直していくことができないか、という思いがあります。レッツさんとの出会いでそうしたことに気づいて、子どもの姿から、じゃあ、どういう風にしていけるのか、っていう可能性を今探っている途中だと思っています。レッツのスタッフさんたちのような大人と出会えるというのも子どもたちにとって大きなことです。子どもたちもまた、社会に役に立つ何かをする、っていうことに対する視野が広がると思います。

レッツと関わり続ける理由

代表の久保田さんやスタッフのみなさんが、常に人が生きていくことと向かい合って考え続けている、ということ、そして考えているだけじゃなくて、実践し続けていることがすばらしいと思います。「やってみてどうだったか」って考えて、「変えるところは変える」。すべてそこですよね。パターン化されていない部分が、すごく良いなと思います。やっぱり、人なので喜んだり楽しんだり、悩んだり、悲しんだりっていうすべての感情がありますよね。その発露は、人によって違うけれども、そういうものを私は人間らしさだと思っています。レッツのみなさんは実践のなかでそれを失わず、ありのままに出されているんです。そういうことを大事にしているところが、人として一番大事なことだと思います。一緒に活動していると、それを見つけることができる。私たちも人間性を大事にできるし、「人」なんだって気づかせてくれる。感謝しています。

みんな一緒

それから、私は「みんな一緒」っていう感じがするんですね。みんな同じところに生きている人、という括りです。そんな感じでいられるというかね。昨日、聞いた講演の中では、「人はみんなグラデーションの帯の中にいる」という表現がありました。ここにいる人も、あそこにいる人もいるわけで、私たちもそこにいて、たまたま国の基準があって「障害」がある人、ない人って分けられているけれど、よく考えると、みんな同じところにいるんだと気付くんです。そこに夏目さんも、みんなもいて、私たちもそこの仲間、っていう感覚があります。

夏目さん：昨年は 7 月に、初めて佐鳴台小学校の 4 年生が全員、たけし文化センターに校外学習に見えたんです。もともと、浜松市内全域どこの小学校も、一度でいいからたけ文に来てくれたらいいね、っていう話をしていました。障害を発信するために。その話をたまたま陽子先生（鈴木校長）にお伝えしたら、「では、行きます。」と即答くださって。それで、ほんとに実現してびっくりしたんです。7 月、4 年生が 1 クラスずつ交代で来られました。その時に、担当したスタッフの竹内がいつも大切にしているのは、「ここは福祉施設です」とは言わないことなんです。「ここは、色々な人がい

るところです。」とたけし文化センターのことを紹介する。そこで、「探検していってください」と子どもたちに伝えて、『目撃シート』と『コレ、やったシート』を渡して、それにメモしながら探検を1時間してもらう、ってことをやっているんです。その狙いは、色々な人たちがいて、そのなかに自分たちもいるっていう感覚を、この場所で感じてもらえたらいいな、ということ。「その人たちと自分は違う」のではなくて、いろんな人たちがいて、自分もその中のひとりだな、って思ってもらえたらいいな、と思って取り組んでいます。
自分に対して「こんなんでよかったのかな」とか「自分はダメだ」という評価ではなくて、「自分はこれでいいんだな」と思える、自尊心をこの場所との関わりを通じて持ってもらえたらと思って、この企画をやっています。
鈴木先生：この企画は4年生の主任がその考えに共感して、いろいろな動きを作ってくれたんですが、まさしく子どもの姿がそうだったんですよ。子どもたちが「ありのままを受け入れられる」のを目撃して、自己肯定に繋がって、安心感があったので、子どもたちがとても穏やかないい表情でした。本当に、一緒にいることが心地よい、っていう感じでしたね。自分のなかに純粋な気持ちがあるんだっていうことに気付いた子もいましたし、それを見ていた先生たちも、そういう子どもの姿があるんだってことに気付いて、ホッとしたり、喜んだりと、とてもよい表情をしていました。一般的に行われる福祉施設での体験って、「体験させてあげている感」というのがあるように思うんです。でもレッツの皆さんにはそれが感じられませんでした。本当に、一緒に遊んでいるおともだち、みたいな感覚で受け入れてもらいました。こちら側もレッツを訪問して、「その人に声を掛けねば」っていう気持ちを全然持たないで自然に触れ合えました。ゲームをやっている人がいれば、すぐライバルになっちゃってたりしているわけですよ。それが、妙に新鮮な感じがして、そういう風に振る舞ってよさそうな空気を醸し出している、そういう空間なんですよ。

夏目さん：そこには、先生方が仕切り方というものが影響します。先生方はどうしても、つい、声掛けしたくなっちゃいますよね。「どぉ、交流してみたら？」と子どもたちに声掛けをしがちなんです。こちら側は「そうした声掛けは敢えて、しないでくださいね」と事前にお願いしていて、一般的な小学校だと、「せっかく来たんだから、あの人と一緒に何かやったらどう？」って児童に言ってしまいがちなんです。そうではなくて、やっぱり、この「場」はみんなのものなので。関わってもいいし、関わらなくてもいい。きっと佐鳴台小の先生方は、よくおわかりで、自由にさせた、というのが、成果の理由だと思うんですよね。

多文化共生とレッツ

鈴木先生：そもそもほんとうはね、色んな人がいるのが当たり前なんですが、そこを社会は色々と区分けしてきたわけです。でも、もう、そんな風にしていたら、社会は成り立たない状態まで来ている。
では、色んな人と幸せに生きていくためには、どうしたらよいのか。「この部分は共通に理解しなくてはいけなくて、あの部分は受け入れるのか」ということを、小さい時から、実感としてもって生きていかないといけないと思うんです。大人になってから理解しようと思っても、そこはなかなかできないんじゃないか、という思いは強く持っています。

外国籍の子を受け入れる際にも、そうした子がいない学校ですと、受け入れる際、最初は躊躇します。地域も躊躇しますよね。一方で、外国で暮した経験のある方たちは、それが当たり前なので、意外と自然な感覚なんです。そうした躊躇も、日本独自のものなのかもしれませんけれど、もうそんなことを言っていられない時代だと思いますし、「楽しいことも多いよ」という実感が、なるべく獲得されていくのが大切かな、と思っています。実際、会ってみると、皆が楽しんでくれている。そうした実感が得られる経験が何よりですよね。レッツさんとふれあう体験をすることには、ある程度、「そうなるだろう」ということは見当がついてやっていますけれど、実際見てみないとね、分からないところもあります。それでやってみて、「あーやっぱり、やってよかったね」と感じることばかりです。

不完全でいい

先ほど、保護者の考えとか、大人の考え、って話が出ましたが、やっぱり、人としてのありようって、本来、不完全でいいと思うんですよね。だけど、妙に、完成されたものが美しいとか、AI とか、完璧にやることが素晴らしいって価値観が出てきています。もちろん、それにも役目があるので、その役目の中では完璧にやってもらうことも大事なんですけれど、人もそうあらねばならないという、妙な誤解があるように思います。本当は、不完全だから、助け合うといういいところがあると思うんです。そこのところは、忘れちゃいけないと思うんです。「完璧が一番、と勘違いしないようにね」って。お互いの「それでいい」っていう気持ちも大事にしていきたいな、と思っていますね。

教員や子どもたちの変化

教員も、初めて障害のある人との関わりに直面する人がいるので、子どもと同じように徐々に関わりが始まっていく人も当然いますし、レッツさんの考え方を HP で知って「やっぱり大事ですね」と、すぐ分かる人もいます。うちの学校は、発達支援学級（県では特別支援学級と言います。）を持っている学校なので、その先生たちにとっては当たり前のことなんですけれど。レッツさんとの関わりが増えてきたので、子どもたちの意識のなかに、差別感が減ってきた気がします。「みんな違って、みんないい」という言葉がありますが、違っていると、奇異に見ちゃうところがあるじゃないですか。それが以前よりも少なくなり、ありのままを見るようになってきたという感じがします。それはなぜかというと、関わり方を覚えたから。関わると、相手が分かるんですよね。関わらないと、なんだかすごく怖いものに見えてしまうので、自己防衛として遠ざけてしまいがちですが、関わってみると、「いやー、一緒じゃん」とか、「〇〇って、優しいじゃん」とか、「面白いね」、となっていく。そんな変化が子どもから見られる瞬間があります。それは大人も同じですよ。子どもの方がむしろ、色々な先入観がない分、ほんとうに、人としてフラットに付き合っていますね。

夏目さん：いやー、子どもは本当にすごいですよね、見ていて思います。全然、「違う人」だと思っていない。

鈴木先生：その点は、子どもたちに学ぶところかな、と思っていますね。一緒に学ぼう、ってよく言っています。

今後に向けて

私たちの学校の課題は、「持続可能に」っていう部分をどう達成していくか。やっぱり、数年で終わってしまったりする部分もあるので。続けていきながら、きっと色々と変化はしていくと思うので、それらをずっと、みんなで見ていくためのなにかが必要だと感じています。続けていくためにどうしたらいいのか、というのをちゃんとみんなで考える。それを大事にしたいと思います。地域が学校との交流を続けながら、子どもの成長に合わせて変化をみていくのは、意味があると思いますし、学校側も色々と参加した方がいいと思っています。

私、今年初めて「スタ☆タン!!」を観たのですが、発表する人たちが本当に一生懸命用意しますよね。そうした熱意にも感動した部分がありましたが、公募の審査員の評価の言葉も素晴らしく、奥深かったです。私もそういう言葉を持ちたいと思いました。人への深い理解や、自分の専門分野とつなげて考える考え方がないと、そういう言葉って出てこないので、自分もそういう人になりたいって思うんです。

スタ☆タン!!参加後の変化

スタ☆タン!!に参加して私自身が変化したと思うんです。例えば、いま、特別支援学級の子どもたちが、「ゆるキャラ」を作るために、色々と絵を描いて、デザインを出しているんです。昨日、とりまとめている担任が絵を見せてくれました。面白い形で、何だろうと考えているうちに、そうしたものに、味わいみたいなものを感じている自分がいることに気付いたんです。

夏目さん：それ、「表現未満、」ですよ。カッチリしたものじゃないものを、愛でる気持ちになってくるんですよね。

鈴木先生：そうなんです。担任はね、見た感じ、ちょっとグロテスクなのでどうしようかな、って思ったというんですけれど、「じゃあ、どういう思いでそれを描いたのかコメントを書いてみようか」と言いました。その方が楽しんでみられるというか、思いを感じ取る手がかりになるのではないかと思ったんです。相手の表現未満、から相手の思いを想像できるように自分も変化したなぁ、と思いましたね。

長い見通しを持って

私たちも、「未来をどう生きていくか。その未来は子どもたちが創る」ってことを考えたとき、レッツさんは、長い見通しを持って、未来の幸福に向けての取り組みを色々してくれていると受け取っています。表現やアート、芸術と結び付けていく、という部分は、何百年も前から人の歴史と結びついてきたもので、これから先も、つながっていくことだと思います。私はそうした事業は価値があると思いますし、その部分をレッツさんが打ち出してくれていることに、生きる元気をいただくというか、今の時代を生き抜く強い力になっていると思います。

地域の核に

昔は学校が「地域の核」としてありました。それはこれからも求められるので、そういう学校になる

ように変わっていかなければいけないと思っています。そしてある意味、たけし文化センターが、そういう「地域の核」になるのも、新しい未来の街づくりかもしれないな、と思います。周りに人が集う場所として、とても楽しみな面があります。

続けていくために

レッツさんへの訪問企画は、繰り返し取り組んでいきたいと思っています。それが大事だと思うので。

夏目さん：佐鳴台小学校の皆さんがたけし文化センターに前回来訪されたときは、路線バスで来られているんですけれど、来年度は路線バスではなく、チャーターバスを使って来るという道筋を、一生懸命、創ろうと画策されている、と陽子先生から聞きました。その仕組みがつくれれば、その後、校長先生って代わっても、企画が残ってくれたらいい、そういうことまで考えてくれている、ということにびっくりしました。

鈴木先生：前回は、「やろう」となって、では、既存の校外学習の一環として取り組むことを、まず考えたんですね。主任がそれを考えてくれたんですけれど、やはり既存の方法のなかでは、滞在時間がギリギリで短かったんです。それで、もう少し長く滞在するように、それを単独のひとつの活動として、バスも貸し切りで行くっていうのがいいということになり、その方法だと予算がどのくらいかかるかも計算したりして、バス代もそんなに高くはならないということが分かりました。今後、そうした企画の意味を保護者にお話ししながら、理解を得ていくことになります。

保護者に理解を得るときに、単純にその企画について相談するのではなくて、いまは、コミュニティ・スクールの仕組みに関する会議があるので、そうした場で相談して「やっぱりそういうのが今の子には必要よ」、「これからの社会のためには大事だから、ぜひ。」と言ってもらえると、保護者にお伝えするときも、「バス代はちょっとは高くなるけれども、この企画はこういう風に良いですよ」、と伝わりやすくなると思っています。

また、やりながら、きっと変化は起こってくるんですよね。世界情勢も変わりますし。もしかしたら、ここで育った子がレッツさんに就職するかもしれないですし。そういうの、よくありますよ。外部から来た方のお話を聞いた中学生が同じ職業に就くようなこと。そういうのもありかな、と。それから、街づくりを考える人になるとか。夢は色々広がります。

夏目さん：レッツとしては、なかなかこういった校長先生や学校には出会えないので、本当にありがたかったと思うんです。もし、課題があるとしたら、出会い方ですね。今回の場合は、私たち自身が、低年齢の頃から色んな人と出会う機会を作って、寛容性のある社会づくりをしていきたいという目的を持っていて、それに加え、佐鳴台小の先生方の教育現場でのニーズとが、たまたま合致したことが大きかったのかなと。今回の出会いを経験して、異業種の方々との出会いは、とても大事と実感しました。これから広げて行かないと、いけないな、と思います。

鈴木先生：レッツのスタッフさんのなかには、同じぐらいのお子さんもお持ちで、子どもの発達段階にも理解がありますしね。竹内さんは、これから小学生になるお子さんをお持ちで、そういう視

点から適切な仕掛けやプログラムを作っていくというのは重要だと思っています。教員だけでは、ああいう風には発想できなかったと思うので、その点は、質の高い教育につながっていると言えるかな、と思っています。

夏目さん：その仲間に入れてもらえて嬉しいです。

鈴木先生：トラブルというか、色んな課題は、きっと何をやったとしても出ますよね。それは当然で、そうしたらまた、どうすればよいのか考える。それを繰り返せる人になる方がいいじゃないですか、っていうだけのことなんですけどね。
それを一緒にできる仲間がいることが幸せです。

（インタビュー：令和２年１月２３日午後＠佐鳴台小学校）

（参考資料）グループホームで独自作成した「職員自己評価表 裏面」

〈作成の経緯〉

・「職員自己評価表」は、社会福祉法人として毎月職員が個々に実施していた。

・内容は、「出勤時間は守れていますか？」、「携帯電話の使用は勤務中にはしていませんか？」、「利用者さんは、さん付けで呼んでいますか？」など一般的なものに「A できている」、「B 概ねできている」、「C できていない」をチェックして確認していた。

・しかし、レッツの事業等に触れていると、そのことに違和感が生まれてくる。「この項目だけが大事なのではないのではないか」、と。

・そこで、職員たちと話し合って、今までなかった「裏面」を作成した。

・作っていく過程において、チームでアイデアを出し合ったプロセスも重要だった。

・「一般の評価表には載らないけど、こういうことって大事だよね」、「割り切れない曖昧なことや矛盾も大事にしたい」、「ネガティブな気持ちだってアリじゃない？」、「『専門職としての服』を脱ぐ時間もあっていい」など、職員同士が本音をぶつけて何が大切かを議論することができた。

〈グループホームすてっぷ 職員自己評価表（独自に作成）〉

令和２年１月

グループホーム職員自己評価表　１月

基本的な業務について：　　A:できている　B:概ねできている　C:できていない

NO	項目	評価
1	利用者への対応、受け答え、挨拶等は丁寧に行うよう心掛けているか？	
2	利用者の人格を尊重し、接し方や呼称などに配慮しているか？	
3	利用者への説明は分かりやすい言葉で、丁寧に行い、威圧的態度や命令口調にならないようにしているか？	
4	個人情報や会議の資料の取り扱いには十分に留意しているか？	
5	プライバシーへの配慮は十分に行っているか？（見学者の来訪時の許可、訪室時のノックなども）	
6	利用者さんの意見や要望に対し、無視や否定的な態度をとらないようにしているか？	
7	利用者さんの嫌がることを強要していないか？	
8	危機回避や止むを得ない事情により行動を制限せざる得ないときは、慎重にチームで議論を重ね、ご本人、ご家族に同意を得るようにしているか？	
9	利用者さんが要望を言いやすい雰囲気作り、関係作りに留意しているか？	
10	職員同士で意見や要望を言いやすい雰囲気作り、関係作りに留意しているか？	
11	公私ともに安全運転に心掛けているか？	
12	施設の設備不備や故障、破損等を発見したら速やかに修理、補修、報告を行っているか？	
13	防災についての備え、意識を持つように心掛けているか？避難等のマニュアルは把握しているか？	
14	日々自分が向上していく努力をしているか？	
15	身だしなみ（髪型、爪、服装等）や清潔に留意して支援を行っているか？	
16	服薬時は声を出し、誤薬、飲み残しのないよう確認を丁寧に行っているか？	
17	利用者さんの安全や所在確認を丁寧に行っているか？（居室で過ごされているときも長時間放置していないか？）	
18	個別支援計画は理解しているか？	
19	仕事中の不要な私語、携帯電話などは謹んでいるか？	
20	施設以外の方たちと関わる機会や挨拶につとめているか？	
21	他の部署や施設に対しても協力的に取り組めているか？	
22	出勤時間を守れているか？	

言葉にできないこと・曖昧なことへの想い：

NO	項目	評価
1	いっしょに何か同じ感情を共有する時間があったか？（美味しいね、きれいだね、楽しみだね、月、星、風等自然なものも）	□ある □ない
2	利用者さんに恥ずかしいけど自分の気持ちを伝える機会があったか？（「あなたといると落ち着くな」「ありがとう」等）	□ある □ない
3	何をするわけでもなく利用者さんとただ座っている時間があったか？	□ある □ない
4	利用者さんの要望の多さに「いい加減にしてほしいな…」と思うことがあったか？（あっていい）	□ある □ない
5	矛盾や疑問、悩みなど日々感じたことを利用者さんや職員間で話ができたか。	□できた □できない
6	簡単に結論を出さずに、曖昧なことや、分からないことをそのまま受け止めるようにできているか？	□いる □いない
7	ひとりの人間としての気持ちと、支援者としての気持ちの間で葛藤することがあるか？（あっていい）	□ある □ない
8	朝起きて、仕事に行くのが嫌だな・・と思ったことがあるか？車中気持ちがモヤモヤすることがあるか？（あっていい）	□ある □ない
9	利用者さんや同僚の自分とは違う意見や価値観を受け入れることができているか？	□できる □できない
10	一日の業務を終えてから今日はこんな嬉しい事があった、嫌なことがあったと思い返すことはあるか？	□ある □ない
11	仕事に向いていないと思うことがある。（あっていい）	□ある □ない
12	今月の格言（加藤）「謙虚」ってやっぱり大事！！！	□はい

＊ほっこり癒されたエピソードがあれば。

＊カチンときたこと(利用者さん、職員にかぎらず)

↓ どうしたらいいと思いますか？

＊気がついたこと、相談したいこと、虐待と思えること、議論したいことなど自由にご記入下さい。

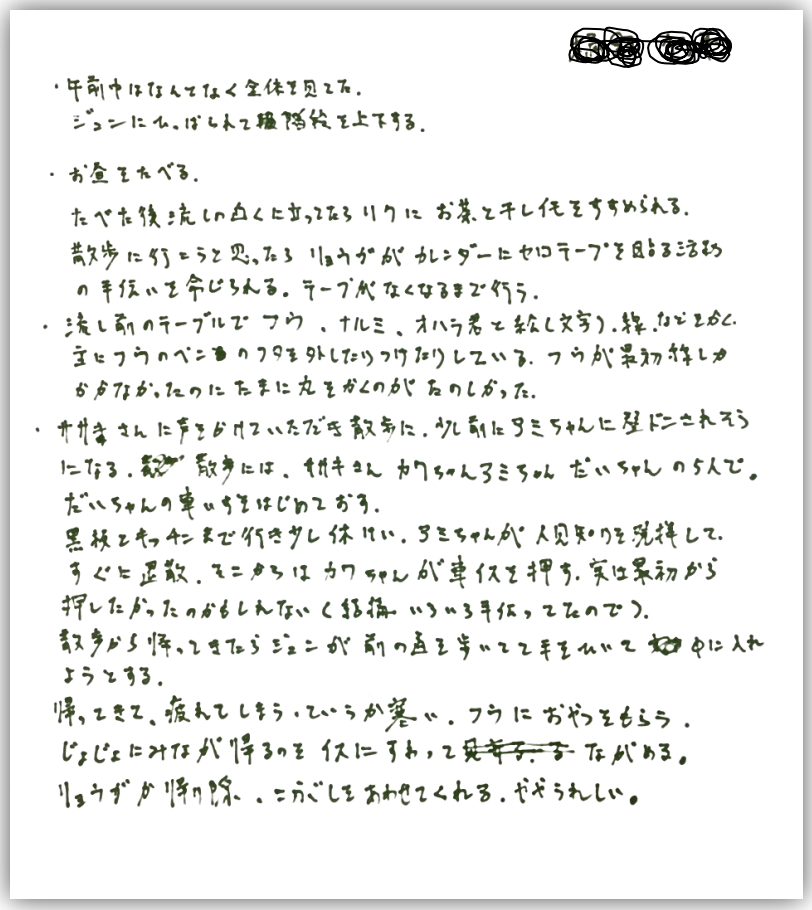
＊自分にできること

＊周囲にしてほしいこと

名前(　　)

（参考資料）観光体験者の振り返りメモ 1～4

（参考資料）観光体験者の振り返りメモ１



・午前中はなんとなく全体を見てた.
ジュンにひっぱられて階段を上下する.

・お昼をたべる.
たべた後 流しの近くに立ってたら リクにお茶と干しイモをすすめられる.
散歩に行こうと思ったら リョウガがカレンダーにセロテープを貼る活動の手伝いを命じられる. テープがなくなるまで行う.

・流し前のテーブルで フウ、ナルミ、オハラ君と絵(文字)、線、などをかく.
主にフウのペンのフタを外したりつけたりしている. フウが最初線しかかかなかったのにたまに丸をかくのがたのしかった.

・ササキさんに声をかけていただき散歩に. 少し前にアミちゃんに壁ドンされそうになる. 散歩には、ササキさん カクちゃん アミちゃん だいちゃんの5人で。
だいちゃんの車いすをはじめておす.
黒板とキッチンまで行き少し休けい. アミちゃんが人見知りを発祥して.
すぐに退散. そこからは カワちゃんが車イスを押す. 実は最初から押したかったのかもしれない(結構いろいろ手伝ってたので).
散歩から帰ってきたらジュンが前の道を歩いてて手をひいて中に入れようとする.
帰ってきて、疲れてしまう、というか寒い. フウにおやつをもらう.
じょじょにみなが帰るのを イスにすわってながめる.
リョウガが帰り際、こぶしをあわせてくれる. ややうれしい。

・午前中はなんとなく全体を見てた.
ジュンにひっぱられて階段を上下する.
・お昼をたべる.
たべた後 流しの近くに立ってたら リクにお茶と干しイモをすすめられる.
散歩に行こうと思ったら　リョウガがカレンダーにセロテープを貼る活動
の手伝いを命じられる. テープがなくなるまで行う.
・流し前のテーブルでフウ、ナルミ、オハラ君と絵（文字)、線、などをかく,
主にフウのペンのフタを外したりつけたりしている. フウが最初線しかかかなかったのに
たまに丸をかくのがたのしかった.
・ササキさんに声をかけていただき散歩に. 少し前にアミちゃんに壁ドンされそう
になる. 散歩には、ササキさん、カクちゃん、アミちゃん、だいちゃんの５人で.
だいちゃんの車いすをはじめております.
黒板とキッチンまで行き 少し休けい. アミちゃんが人見知りを発祥してすぐに退散.
そこからはカワちゃんが車イスを押す. 実は最初から押したかったのかもしれない
（結構いろいろ手伝ってたので）
散歩から帰ってきたらジュンが前の道を歩いてて手をひいて中に入れようとする.
帰ってきて、疲れてしまう、というか寒い. フウにおやつをもらう.
じょじょにみなが帰るのを　イスにすわってながめる.
リョウガが帰り際、こぶしをあわせてくれる. ややうれしい.

（参考資料）観光体験者の振り返りメモ２

・ユウゴくん、カワセさん、ジョウジくん、ヤマモリさんが駅まで迎えに来てくれる。

・オガタさんにリュックの中に入ってるものを見せてもらう。ノートにサインを求められる。
リュックの中にはCD、カセットテープ、ノート、3DS、アメなどたくさん入っている。
一回全部出して、また戻して、リュックの中を覗いて「（並びが）きれい～」と言っていた。

・お昼ごはん。オハラくんとオオタさんと同じテーブルで食べる。オオタさんがごはんを幸せそうな表情で食べようとするもおにぎりを落とす。でも別に気にしない。食べ終わったお弁当箱をお弁当を包んでいた布でふく。それからそれを口に入れる。

・タカハシさんはお昼ごはん後はガムテープでの作品づくりはせず。だるまにガムテを貼りたいのかな？ 来ていたおじさん（他の施設でボランティアをしていてタカハシさんと面識あり）に「だるまは？」と聞く。

・アミちゃんにまを引かれて2階へ。3階に行きたいらしく、何度か3階へ抜ける外階段の扉の前まで行ってガチャガチャするも開かず。楽器部屋にいくと爆音で「U.S.A」がかかっており、真ん中あたりにオガタさん、ケンさんあと2名くらい（顔見えず）、毛布にくるまってまどろんでいた。

・カワセさんに似顔絵を描いてもらう。描き終わったら「だれだと思う？」と聞かれる。
その後、絵の裏に好きな食べ物を描いてくれる。20個くらい出してネタとかれに。
ギョーザがなかなかよかった。

・風くんとお絵描きしていたヒノさんがお散歩に行ってしまったため、隣に座りつつ油性マジックのふたを取るアシストをする。でもあまり絵を描きたい気分ではなかったらしい。
ユウゴくんとコンタクトを取りたいっぽく、すごく気にしていたが残念ながらタイミングがことごとく合わず、目が合わない。その後色えんぴつをケースに出し入れする遊びにハマる。おやつのビスケットをくれる。他のスタッフさんにもあげていた。

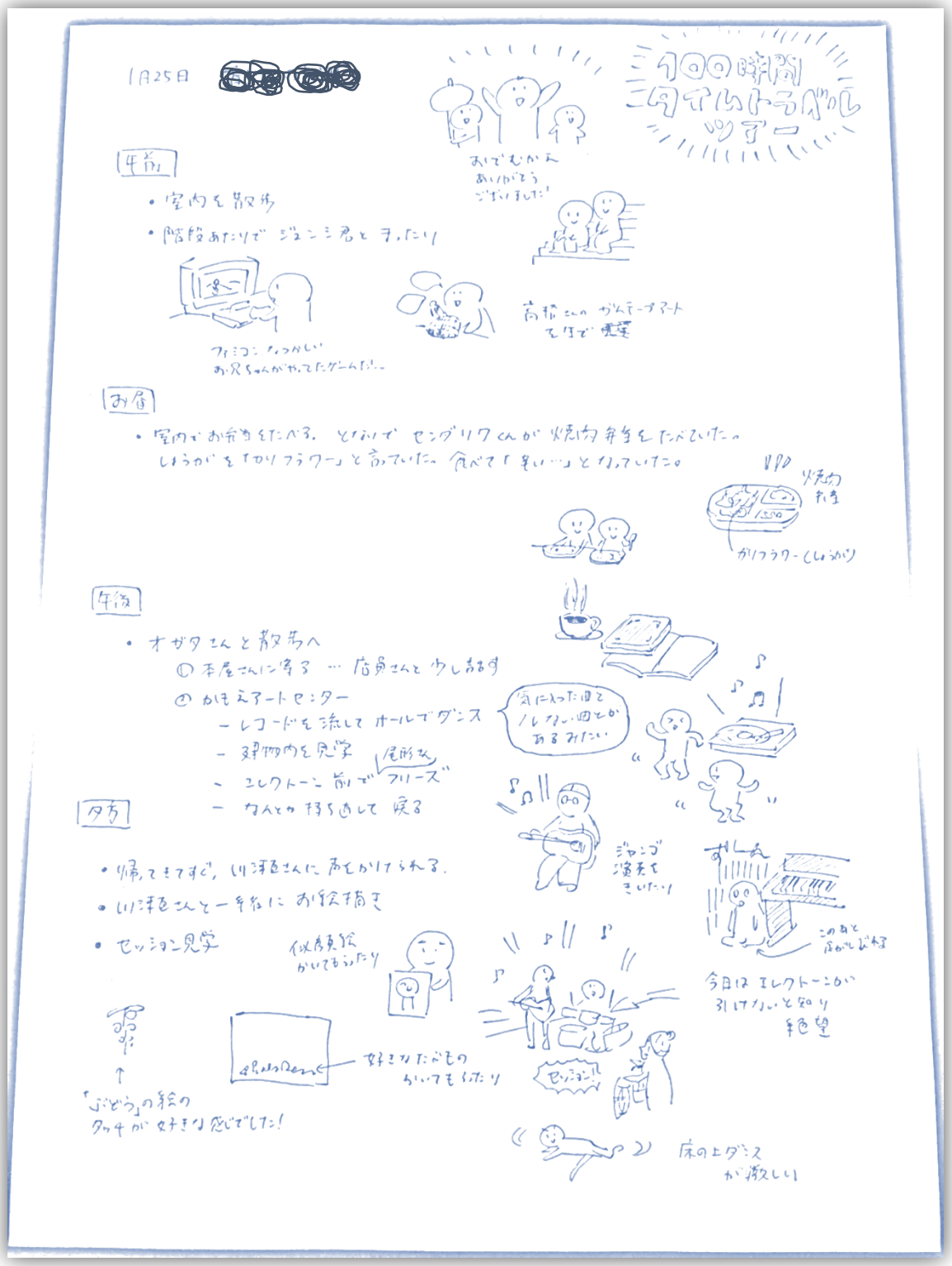
・オオイシさんの振り（揺れ）に合わせて揺れていると、オオイシさんもこちらのマネをしてくれる。

・カワセさんが帰り際に固まる。それまで何事もなく掃除を手伝ったり、他の方々とからんでじゃれていたので少々おどろく。

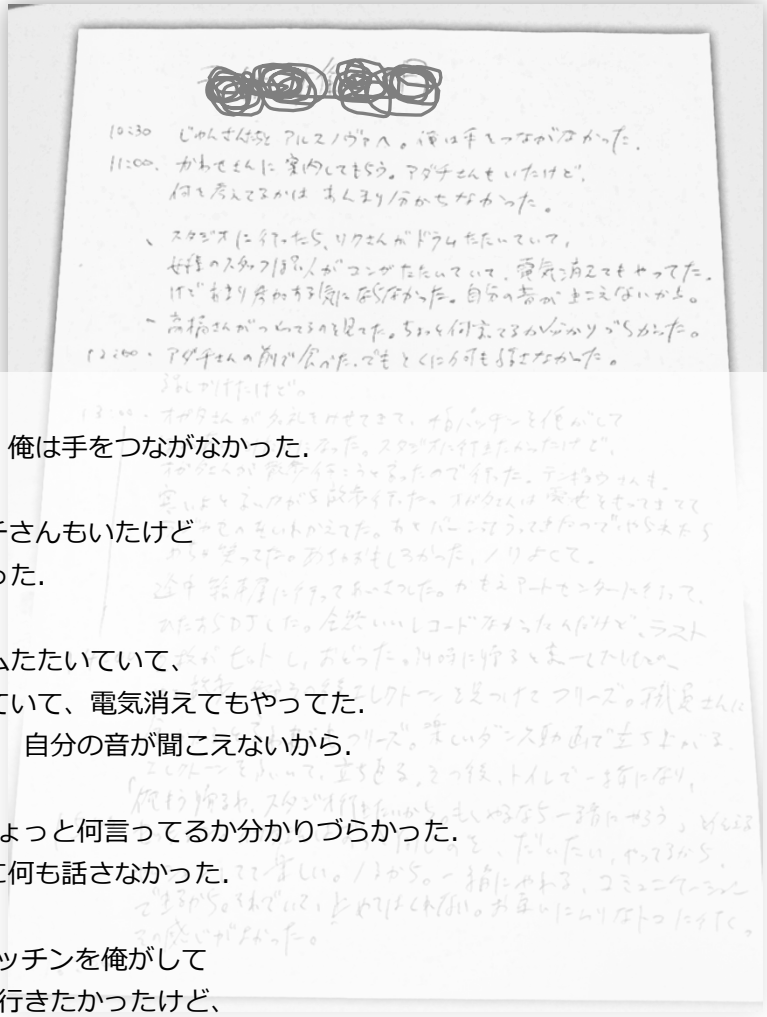
・ダイちゃんにコーヒーのポイントカードをもらう。土曜日限定でオープンしているそう。「今日、土曜日ですね」と言うと「今日はお休みなんです」と言われる。残念そう。

・タムラさんに「どこから来たの？障がい者支援の関係の人？」と聞かれ、しばし話す。三軌会の展覧会（三軌展）に出品したいしものこと。もう出そうと思ってる作品があるらしい。

（参考資料）観光体験者の振り返りメモ３



（参考資料）観光体験者の振り返りメモ４



10:30 ・じゅんさんたちとアルス・ノヴァへ．　俺は手をつながなかった．

11:00 ・かわせさんに案内してもらう．　アダチさんもいたけど
何を考えてるかはあんまりわからなかった．

・スタジオに行ったら、リクさんがドラムたたいていて、
女性のスタッフぽい人がコンガたたいていて、電気消えてもやってた．
けどあまり参加する気にならなかった．　自分の音が聞こえないから．

・高橋さんがつくってるのを見てた．　ちょっと何言ってるか分かりづらかった．

12:00 ・アダチさんの前で食べた．　でもとくに何も話さなかった．
話しかけたけど．

13:00 ・オガタさんが名札をみせてきて、指パッチンを俺がして
ほめあいみたいになった．　スタジオに行きたかったけど、
オガタさんが散歩行こうと言ったので行った．　テンギョウさんも．
寒いよと言いながら散歩行った．　オガタさんは電池をもってきてて
ラジカセのをいれかえてた．　あとバーンってうってきたのでやられたら
めちゃ笑ってた．　めちゃおもしろかった、ノリよくて．
途中絵本屋に行ってあいさつした．　かもえアートセンターに行って、
ひたすら DJ した．　全然いいレコードなかったんだけど、ラスト
２枚がヒットし、おどった．　14 時に帰ると、まってたけど、
中を散歩、その後エレクトーンを見つけてフリーズ．　職員さんに
金かかると言われるもフリーズ．　楽しいダンス動画で立ち上がる
エレクトーンをふいて、立ち直る．　その後、トイレで一緒になり、
「俺もう帰るわ、スタジオ行きたいから．　もしやるなら一緒にやろう」と伝える

15:00 ・セッション．　オガタさんはずっと同じのを、だいたい、やってるから、
セッションしてて楽しい．　ノるから．　一緒にやれる、コミュニケーション
できるから．　それでいて、止めてはくれない．　お互いにムリなトコに行く．
その感じがよかった．

16:00

発行：静岡県文化プログラム推進委員会
（静岡県スポーツ・文化観光部文化局文化政策課内）
〒420-8601 静岡県静岡市葵区追手町 9 番 6 号
電話 054-221-2252

アーツカウンシルしずおかは、静岡県文化プログラムで培った支援の仕組みを継承します

アーツカウンシルしずおか
（公益財団法人静岡県文化財団）
〒422-8019 静岡県静岡市駿河区東静岡 2 丁目 3 番 1 号 グランシップ 1 階
電話 054-204-0059